

**IBM Business Process Manager**  
バージョン 8 リリース 0

**IBM Business Process  
Manager Standard**  
インストール・ガイド

**IBM**



---

## PDF ブックおよびインフォメーション・センター

PDF ブックは、印刷およびオフラインでの参照用に提供されています。最新情報は、オンラインのインフォメーション・センターを参照してください。

セットとして、PDF ブックには、インフォメーション・センターと同一の内容が含まれます。PDF ブック内のリンクの中には、インフォメーション・センターで使用するよう調整されていて、正常に機能しないものがあります。

PDF 資料は、バージョン 7.0 またはバージョン 7.5 など、インフォメーション・センターのメジャー・リリースの後の四半期以内にご利用いただけます。

PDF 資料の更新頻度は、インフォメーション・センターより低いですが、Redbooks® よりも頻繁に更新されます。通常、PDF ブックはブックに十分な変更が累積されたときに更新されます。



# 目次

PDF ブックおよびインフォメーション・センター . . . . .	iii
------------------------------------	-----

<b>第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .</b>	<b>1</b>
---	----------

<b>第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル . . . . .</b>	<b>5</b>
--	----------

<b>第 3 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備 . . . . .</b>	<b>7</b>
--	----------

<b>第 4 章 IBM Business Process Manager の計画 . . . . .</b>	<b>9</b>
---	----------

インストール資料のパスの計画 . . . . .	9
インストールする構成の決定 . . . . .	9
オペレーティング・システムの選択 . . . . .	11
インストール・トポロジーの選択 . . . . .	11
既存の WebSphere Application Server インスタンスにインストールするかどうかの決定 . . . . .	11
インストールのタイプの選択 . . . . .	12
構成するプロファイルのタイプの決定 . . . . .	13
DB2 Express をインストールするかどうかの選択 . . . . .	13
configureNode を使用するかどうかの選択 . . . . .	14
プロファイルの作成にプロジェクト管理ツールとコマンドのどちらを使用するかを選択 . . . . .	14
Network Deployment を構成する方法の選択 . . . . .	15
要件の評価 . . . . .	15
プロセスおよび Process Application に関する考慮事項 . . . . .	16
リソースに関する考慮事項 . . . . .	17
開発およびデプロイメントのバージョン・レベル . . . . .	17
プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項 . . . . .	18
必要なセキュリティー許可の準備 . . . . .	23
製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー . . . . .	24
スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択 . . . . .	27
Network Deployment 環境の計画 . . . . .	30
概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン . . . . .	32
ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー . . . . .	37
単一クラスター・トポロジー・パターン . . . . .	37
リモート・メッセージング・トポロジー・パターン . . . . .	39
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン . . . . .	41

リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン . . . . .	44
カスタマイズされたトポロジー . . . . .	46
トポロジーを選択するための考慮事項 . . . . .	47
トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品 . . . . .	49
フィーチャー . . . . .	49
標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかを判断 . . . . .	52
IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー . . . . .	53
トポロジーの拡張 . . . . .	54
同じセル内の複数のデプロイメント環境に関する考慮事項 . . . . .	55
データベース構成の計画 . . . . .	57
データベースと IBM Business Process Manager トポロジー . . . . .	57
共通データベースを構成する方法とタイミングの選択 . . . . .	58
サポートされているデータベース・タイプ . . . . .	59
データベース命名の制約事項 . . . . .	61
データベース・タイム・ゾーンに関する考慮事項 . . . . .	62
JDBC ドライバーおよびロケーション . . . . .	63
非管理ユーザーの考慮事項 . . . . .	63
データベース特権 . . . . .	64
ユーザー ID またはスキーマ名特権 . . . . .	74
コンポーネントに固有のデータベース構成の計画 . . . . .	78
テーブルおよびスキーマの作成 . . . . .	81
共通データベース構成の計画 . . . . .	82
Common Event Infrastructure データベース構成の計画 . . . . .	87
メッセージング・エンジン・データベース構成の計画 . . . . .	88

<b>第 5 章 IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .</b>	<b>93</b>
---	-----------

ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .	93
ソフトウェアのインストールおよび構成の準備 . . . . .	96
システム要件 . . . . .	97
製品インストール用のオペレーティング・システムの準備 . . . . .	98
AIX システムのインストール準備 . . . . .	98
Linux システムのインストール準備 . . . . .	99
Solaris システムのインストール準備 . . . . .	101
Windows システムのインストール準備 . . . . .	102
HADR のセットアップおよび構成に関する考慮事項 . . . . .	103

IBM Business Process Manager での Oracle Data Guard の構成 . . . . .	105	Solaris における IBM Business Process Manager のインストールと構成 . . . . .	1362
IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成 . . . . .	107	Solaris におけるスタンドアロン環境の構成	1362
Linux における IBM Business Process Manager のインストールと構成 . . . . .	107	標準インストールと構成 . . . . .	1362
Linux におけるスタンドアロン環境の構成	107	カスタム・インストールおよび構成 . . . . .	1384
標準インストールと構成 . . . . .	107	Solaris における Network Deployment 環境の構成 . . . . .	1667
カスタム・インストールおよび構成 . . . . .	134	プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与 . . . . .	1667
Linux における Network Deployment 環境の構成 . . . . .	418	データベースおよびデータベース設計ファイルの作成 . . . . .	1669
プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与 . . . . .	418	configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	1725
データベースおよびデータベース設計ファイルの作成 . . . . .	420	プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成 . . . . .	1729
configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	476	Windows における IBM Business Process Manager のインストールと構成 . . . . .	1991
プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成 . . . . .	480	Windows におけるスタンドアロン環境の構成 . . . . .	1991
AIX での IBM Business Process Manager のインストールおよび構成 . . . . .	742	標準インストールと構成 . . . . .	1991
AIX におけるスタンドアロン環境の構成 . . . . .	742	カスタム・インストールおよび構成 . . . . .	2020
標準インストールと構成 . . . . .	742	Windows における Network Deployment 環境の構成 . . . . .	2316
カスタム・インストールおよび構成 . . . . .	764	プロファイル作成または拡張のための、非管理ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与 . . . . .	2316
AIX における Network Deployment 環境の構成 . . . . .	1043	データベースおよびデータベース設計ファイルの作成 . . . . .	2318
プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与 . . . . .	1043	configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	2373
データベースおよびデータベース設計ファイルの作成 . . . . .	1045	プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成 . . . . .	2377
configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成 . . . . .	1101		
プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成 . . . . .	1105		

---

# 第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM® Business Process Manager Standard のインストールおよび構成プログラムは、さまざまな開発シナリオおよび実動シナリオに対応します。このロードマップでは、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境で IBM Business Process Manager Standard をインストールして構成するための最も一般的な方法について説明します。

あるいは、対話式インストールおよび構成ガイドを使用して、ターゲット環境に関する一連の質問に答えることもできます。このガイドは、各ユーザーのインストール・ニーズに合わせてカスタマイズされたインストールと構成に関する一連のトピックを生成します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをオペレーティング・システムごとにグループ化し、それぞれに最も関連するリンクを記載しています。

すべてを表示 | タブ付きで表示

- 『Linux』
- 2 ページの 『AIX』
- 2 ページの 『Solaris』
- 3 ページの 『Windows』

## Linux

IBM Business Process Manager を Linux にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検査し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの 『システム要件』
- 99 ページの 『Linux システムのインストール準備』

**決定** インストールを進める前に、実行するインストールのタイプ (標準またはカスタム) を決定し、インストールに適切なデプロイメント環境 (スタンドアロンまたは Network Deployment 環境) を選択します。

- インストールのタイプの選択
- スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

## インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 107 ページの 『標準インストールと構成』
- 134 ページの 『カスタム・インストールおよび構成』
  - 135 ページの 『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 140 ページの 『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

## スタンドアロン・デプロイメント

148 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

### Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを構成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 480 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## AIX

IBM Business Process Manager を AIX にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』
- 98 ページの『AIX システムのインストール準備』

**決定** インストールを進める前に、実行するインストールのタイプ (標準またはカスタム) を決定し、インストールに適切なデプロイメント環境 (スタンドアロンまたは Network Deployment 環境) を選択します。

- インストールのタイプの選択
- スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 742 ページの『標準インストールと構成』
- 764 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 764 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 767 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

## スタンドアロン・デプロイメント

774 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

### Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを構成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 1105 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## Solaris

IBM Business Process Manager を Solaris にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』



- 101 ページの『Solaris システムのインストール準備』

**決定** インストールを進める前に、実行するインストールのタイプ (標準またはカスタム) を決定し、インストールに適切なデプロイメント環境 (スタンドアロンまたは Network Deployment 環境) を選択します。

- インストールのタイプの選択
- スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 1362 ページの『標準インストールと構成』
- 1384 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 1385 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 1387 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

#### スタンドアロン・デプロイメント

1395 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

#### Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを作成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 1729 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## Windows

IBM Business Process Manager を Microsoft Windows にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』
- 102 ページの『Windows システムのインストール準備』

**決定** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 1991 ページの『標準インストールと構成』
- 2020 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 2020 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 2027 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

## スタンドアロン・デプロイメント

2034 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

## Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを構成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 2377 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## 第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ（「標準的」または「カスタム」）と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

- 『IBM BPM Advanced』
- 『IBM BPM Advanced: Process Server』
- 6 ページの 『IBM BPM Standard』
- 6 ページの 『IBM BPM Express』

### IBM BPM Advanced

表 1. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

### IBM BPM Advanced: Process Server

表 2. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Server のみ	いいえ	はい	適用外

表2. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server (続き)

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります。	はい	いいえ	はい

## IBM BPM Standard

表3. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Standard

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

## IBM BPM Express

表4. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Express

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

## 第 3 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 5. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>IBM Business Process Manager Advanced system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Standard system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Express system requirements</li></ul>	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	<ul style="list-style-type: none"><li><b>AIX</b> AIX システムのインストール準備</li><li><b>Linux</b> Linux システムのインストール準備</li><li><b>Solaris</b> インストールに向けた Solaris システムの準備</li><li><b>Windows</b> Windows システムのインストール準備</li></ul>	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表 5. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。ユーザーは、DB2 Express をインストールするための管理特権 (root または管理者権限) を持っている必要があります。</p> <p><b>注:</b> 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p><b>重要:</b> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<b>ipcs -l</b> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p> <p><b>重要:</b> オペレーティング・システム・ユーザーはインストール時に作成されるため、指定したパスワードがオペレーティング・システムまたは社内の制約事項に適合しない場合は、DB2 Express を正しくインストールして使用することはできません。</p>

---

## 第 4 章 IBM Business Process Manager の計画

実装するシステムがユーザーのニーズを満たすことを確実にするために、該当のソフトウェアをご使用のエンタープライズ情報システムに導入する前に、ご使用の IBM Business Process Manager の計画を立てます。

---

### インストール資料のパスの計画

さまざまなコンポーネントを備え、選択可能な構成が複数存在する IBM Business Process Manager のインストール・プロセスは、多数のシナリオとトポロジーをサポートするように設計されており、その範囲は、基本的な PoC (概念実証) 環境、デモ環境、あるいはテスト環境から、完成された分散型の高可用性実稼働環境に及びます。その数の多さから、インストール・オプションでヘルプが必要になる場合があります。

インストール・プロセスを進める際に必要なトピックは、必ずしもまとめてナビゲーション・ツリーに表示されるわけではありません。また、実行する検索照会によっては、検索結果から該当するトピックを容易に選択できない場合もあります。

この状態に対処するには、対話式インストールおよび構成ガイドを使用して、インストール・ニーズに合わせてカスタマイズされたインストールと構成に関する一連のトピックを生成してください。「対話式インストールおよび構成ガイド」フォームでは、インストール・シナリオに必要なオプションを選択します。各オプションを選択するときに、以前の選択で除外したオプションがツールによって自動的に除去されます。例えば、Express 構成をインストールする計画があることを指定すると、トポロジーの候補から Network Deployment が除去されます。

フォームへの記入を完了すると、ツールにより、ユーザーのシナリオに該当するインストールおよび構成の説明がすべて組み込まれた単一のトピックが生成されます。これらの説明は保存したり印刷したりできるため、共有や移植が可能です。前に戻って選択内容を変更し、説明のセットを新たに生成することもできます。別のオプションを指定して製品コンポーネントをインストールする必要が生じるたびに、フォームに戻って新しいガイドを生成するか、またはこのツールを使用して、別のオプションを選択した場合にインストールと構成のプロセスがどのように変わるかを確認します。

この後のトピックでは、「対話式インストールおよび構成ガイド」フォームで提示されるオプションの一部について説明するとともに、インストール・プロセスを計画する際の考慮事項、および一部のオプションが使用できなくなる原因について説明します。フォームの「ヘルプ」リンクでは、これらのトピックにアクセスして、決定する内容とその決定が最終的に生成される説明に与える影響を理解できます。

### インストールする構成の決定

IBM BPM には、Advanced、Advanced: Process Server、Standard、および Express の 4 つの構成があり、それぞれが異なる企業ニーズをターゲットとしています。インストールする構成を選択するには、ビジネス・プロセス・マネジメントの採用レベル、および必要とする製品機能とトポロジー・サポートの観点から、企業のニーズを検討します。

表 6. インストールする IBM Business Process Manager 構成の決定

ビジネス・プロセス・マネジメントのフル機能採用までのパスにおいて、所属する企業がどこに位置しているか	必要とする具体的な機能および高可用性サポート	インストールする構成
<p>プロジェクト・レベルの採用: ビジネス・プロセス・マネジメント・プロジェクトに初めて着手し、主に迅速な TTV (Time-To-Value) およびユーザーの生産性の向上を模索しています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Lombardi Edition との実行の互換性</li> <li>• IBM Process Designer オーサリング・ツール</li> <li>• コラボレーション編集と即時プレイバック</li> <li>• 対話式ユーザー・インターフェース</li> <li>• ILOG ベースのプロセス・ルール</li> <li>• リアルタイム・モニターおよびレポート作成</li> <li>• パフォーマンス分析および最適化プログラム</li> <li>• パフォーマンス・データウェアハウス</li> <li>• IBM Process Center (共有アセット・リポジトリを含む)</li> <li>• 最大 3 人のプロセス作成者と 200 人のユーザー</li> <li>• 開発用に 2 コア、製品用に 4 コア、ただしクラスタリングはなし</li> <li>• Windows および Linux on Intel のサポート</li> </ul>	<p>IBM Business Process Manager Express®</p>
<p>複数のプロジェクト: 所属する企業が、複数のビジネス・プロセス・マネジメント・プロジェクトに関与しており、基本的な統合サポートを必要としています。</p>	<p>IBM BPM Express のすべての機能、および以下の機能とサポート:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 無制限の作成者数とユーザー数</li> <li>• 高可用性のためのクラスタリングのサポート</li> <li>• Linux on System z、AIX、および Solaris のサポート</li> <li>• Network Deployment サポート</li> <li>• DB2® for z/OS® サポート</li> </ul>	<p>IBM Business Process Manager Standard</p>
<p>変革に対応: 所属する企業が、大容量プロセスの自動化を必要とし、また、広範なサービスの統合とオーケストレーションのために追加の SOA コンポーネントを必要としています。</p>	<p>IBM BPM Standard のすべての機能と高可用性サポート、および以下の機能とサポート:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere® Process Server との実行の互換性</li> <li>• IBM Integration Designer オーサリング (BPEL と SOA)</li> <li>• 組み込みエンタープライズ・サービス・バス (ESB)</li> <li>• トランザクション・サポート</li> <li>• 統合アダプター</li> <li>• Business Space ユーザー・インターフェース</li> </ul>	<p>IBM Business Process Manager Advanced</p>
<p>所属する企業が、以前のバージョンの Process Server のみを使用しており、最新のリリースに更新するか、IBM Business Process Manager for z/OS をインストールしたいと考えている。</p>	<p>Process Server 関連のすべての機能と IBM BPM Advanced の高可用性サポート。Process Designer または Process Center は含まれません。z/OS へのインストールに使用できる。</p>	<p>IBM Business Process Manager Advanced: Process Server</p>



## オペレーティング・システムの選択

サーバー・コンポーネントのインストールを計画しているサポート対象オペレーティング・システムがどれであるかは、おそらくどのユーザーも認識しています。インストールする製品構成、プロジェクトの設定、および使用可能なインフラストラクチャーによって、オプションが制限される可能性があります。さらに、選択するオペレーティング・システムによって、インストール・プロセス中に行うその他の選択でのオプションも、ある程度制約されます。

IBM BPM Express のインストールを計画している場合は、Windows または Linux on Intel システム上にサーバー・コンポーネントをインストールできます。さらに、IBM Master Data Management ユーザーの場合には、AIX 上にインストールすることもできます。IBM BPM Standard および IBM BPM Advanced の場合は、Windows、Linux on Intel、Linux on System z、AIX、Solaris、および z/OS がサポートされます。

選択するオペレーティング・システムによっては、対話式インストール・ガイドで、サポート対象データベースに対して選択できるオプションが、想定されるシナリオに基づいて自動的に制約されます。残りのオプションから選択して、製品をインストールして構成する際に従う一連の説明をカスタムで生成できます。

サーバー・コンポーネントを Linux on System z、AIX、Solaris、または z/OS にインストールすることを選択した場合は、生成されるインストール・ガイドに、既存のデータベース・サーバーを使用するための IBM BPM の構成の説明が組み込まれます。Windows または Linux on Intel を選択した場合は、既存のデータベース・サーバーを使用するオプション、またはインストール・プロセスで DB2 Express をインストールおよび構成するオプション（これは、PoC（概念検証）または単純な環境のインストールで便利です）を選択できます。

## インストール・トポロジーの選択

IBM BPM コンポーネントのすべてを 1 台のコンピューターにインストールするか（一般に、小規模なプロジェクト、試用時、または PoC インストールには、これで十分です）、複数のコンピューターに分散してインストールするか（より大規模なプロジェクトやエンタープライズ・システムに適しています）を選択できます。

スタンドアロン・トポロジーは、どの製品構成でもインストールできます。Network Deployment トポロジーをインストールする場合は、IBM BPM Standard または IBM BPM Advanced をインストールする必要があります。IBM BPM Express ではスタンドアロンしか使用できません。

「対話式インストールおよび構成ガイド」フォームでスタンドアロン・トポロジーのインストールを選択すると、フォームで、Network Deployment トポロジーを構成するためのオプション（`configureNode` コマンドやデプロイメント環境ウィザードの使用など）がグレー表示され、生成される説明には Network Deployment 環境トポロジーの構成に関する情報が組み込まれません。

Network Deployment トポロジーのインストールをフォームで指定すると、標準インストール・タイプを選択できなくなります。分散トポロジーをインストールするには、カスタム・インストール・タイプのいずれかを選択する必要があります。

## 既存の WebSphere Application Server インスタンスにインストールするかどうかの決定

既存のプロファイルを拡張したい WebSphere Application Server インスタンスがあるかどうか、あるいは新規のインスタンスをインストールする必要があるかどうかは、おそらくどのユーザーも認識しています。

新しいテスト環境をインストールする場合や、PoC（概念検証）プロジェクトを実行する場合は、より大規模なインストール・プロセスの一環として、WebSphere Application Server のインスタンスをインストール

できます。ただし、WebSphere Application Server のサポートされるバージョンが既にインストールされている場合は、それを再使用し、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。それによって、インストールおよび構成プロセスがある程度短縮化され、単純化されます。また、IBM BPM は、デプロイメント・マネージャーおよびスタンドアロン・プロファイル、またはデプロイメント・マネージャーにまだ統合されていない管理対象ノードのプロファイルの拡張のみをサポートします。

既存の WebSphere Application Server インスタンスにインストールすることを選択した場合、対話式インストールおよび構成ガイドで、グラフィカル・インターフェースを使用するカスタム・インストール・プロセスに関する情報を生成するオプションが制限されます。標準インストール、またはコマンド行や応答ファイルを使用したサイレント・インストールを行うためのオプションは使用できません。これは、IBM BPM が、WebSphere Application Server インストール用のこれらのオプションを文書化しないためです。このため、標準インストールまたはサイレント・インストールに関するカスタム・インストール・ガイドを生成する必要がある場合には、新規の WebSphere Application Server インスタンスをインストールすることを選択する必要があります。

非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして WebSphere Application Server の新規インスタンスをインストールすると、そのインストール済み環境は、インストールを行ったユーザーにのみ使用可能になり、システム上の他のユーザーが使用することはできません。非管理ユーザーに関するその他の制約については、WebSphere Application Server インフォメーション・センターを参照してください。

## インストールのタイプの選択

選択するインストール・タイプによって、情報の提供や必要なオプションの選択を行うためにインストール・プロセスとどのように対話するかが決まります。

既存の WebSphere Application Server インスタンスにインストールする場合は、グラフィカル・インターフェースからカスタム・インストールを実行するオプションのみを選択できます。対話式インストールおよび構成ガイドで、WebSphere Application Server の標準インストールおよびサイレント・インストールに関する説明を生成することはできません。標準インストールまたはサイレント・インストールを実行する必要がある場合は、新規の WebSphere Application Server インスタンスをインストールして構成する必要があります。

標準インストールは、インストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。インストール・プログラムでは、できるだけ多くのインストール・オプションにデフォルト値が使用されます。残りのオプションには、ユーザーがグラフィカル・インターフェースを使用して値を指定します。これは、比較的簡単な PoC (概念検証) またはスタンドアロンのインストール済み環境に適しています (既存の WebSphere Application Server インスタンスを使用しない場合)。標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

**Windows** 標準インストールは、マシンに Process Designer もインストールします。

グラフィカル・インターフェースを使用するカスタム・インストールでは、すべてのインストール設定をカスタマイズできます。

コマンド行を使用するカスタム・インストールでは、インストール設定を指定するコマンドを実行します。これは、単一のインストール済み環境のみが必要な場合に、より適しています。

応答ファイルを使用するカスタム・インストールでは、インストール設定を指定するファイルを作成し、そのファイルを呼び出すインストール・コマンドを実行します。社内の複数のシステムに同様のインストール済み環境が必要であることがわかっている場合は、応答ファイルを使用するほうが適切な選択です。

IBM Business Process Manager for z/OS をインストールする場合、使用可能なインストールのタイプは 1 つのみで、コマンドを使用してインストールが実行されます。

すべてのカスタム・オプションでは、生成されるガイドに、インストール完了後のプロファイルの作成に関する情報が組み込まれます。

## 構成するプロファイルのタイプの決定

インストール・プロセスでは、Process Center および Process Server のサーバー・コンポーネントがインストールされます。Process Center は、プロセス資産のリポジトリと、プロセスのパフォーマンスをテストして調査するためのランタイム環境を提供するほか、アセットへのアクセスの管理、およびテスト環境、ステージング環境、および実稼働環境へのプロセスのデプロイを行うためのコンソールを提供します。

Process Server は、Process App のランタイム環境、およびアプリケーションのパフォーマンス・データを収集するためのデータウェアハウスを提供します。また、このランタイム環境とデータウェアハウスを維持管理するための管理コンソールが搭載されています。これらのサーバー・コンポーネントを使用するには、サーバー・プロファイルを構成する必要があります。

各ユーザーのニーズに応じて、どちらか一方または両方のサーバー・コンポーネントのサーバー・プロファイルを構成できます。一方のみを構成する場合は、後から同じ手順でもう一方を構成できます。

IBM BPM Advanced: Process Server をインストールする場合は、Process Center オプションを選択できません。

Process Server と Process Center のプロファイルは、それぞれ別のアクティビティで構成します。まず一方のプロファイルを構成してから、もう一方のプロファイルを構成します。Process Center と Process Server の両方のプロファイルを構成する場合は、カスタム・インストール・タイプを選択する必要があります。「対話式インストールおよび構成ガイド」フォームを使用してインストール・ガイドを生成する際に、「**Process Center および Process Server**」を選択すると、生成される説明に、両タイプのプロファイルを順番に構成する場合についての情報が組み込まれます。

標準インストール・タイプを選択する場合、構成するプロファイルのタイプは 1 つしか選択できません。もう一方のタイプのプロファイルも構成する必要がある場合には、標準インストールの完了後に、そのプロファイルの構成ステップを実行する必要があります。

## DB2 Express をインストールするかどうかの選択

インストール・プロセスで IBM DB2 Express のインスタンスが自動的にインストールされるように選択することができます。Process Center または Process Server のコンテンツを保管するために使用する既存の、または計画されたサポート対象データベース・サーバーがない場合には、このオプションを選択してください。テスト環境または PoC (概念検証) 環境をインストールする場合は、DB2 Express がまだシステムに存在していなければ、新しい DB2 Express を自動的にインストールすることを選択する可能性が高くなります。

ここで選択できる内容には、他のインストール・オプションで行った選択が影響します。生成される説明に DB2 Express の自動インストールを追加したい場合は、Windows または Linux on Intel システム上にインストールする必要があります。任意の製品構成を Linux on System z、AIX、Solaris、または z/OS にインストールする場合は、インストール・プロセスで DB2 Express をインストールするオプションが提示されません。したがって、インストール済みの、またはこれからインストールするデータベース・サーバー製品を使用する必要があります。

DB2 がすでにインストールされているシステムに、DB2 Express をインストールすることはできません。また、DB2 Express をインストールするには、管理ユーザーまたは root ユーザーとしてインストールする必要があります。

構成ステップでは、新規の DB2 Express インスタンスを自動的にインストールするか、各自でインストールしたサポート対象データベース・サーバーを使用するかにかかわらず、ユーザーの選択したデータベースを使用するように Process Center または Process Server が構成されます。

## configureNode を使用するかどうかの選択

**configureNode** コマンドを使用すると、プロファイルおよび標準的なネットワーク・デプロイメント環境の作成と拡張を 1 つのコマンド行ステップで実行できます。これは、プロファイル管理ツールまたは **manageProfiles** を使用してプロファイルを作成し、デプロイメント環境ウィザード、管理コンソール、または **wsadmin** コマンドを使用してネットワーク・デプロイメント環境を構成するという 2 ステップのプロセスの代わりに使用できます。

以下の場合には、**configureNode** コマンドを使用できません。

- 使用するデータベースとして DB2 for z/OS を選択した場合。
- IBM Business Process Manager for z/OS をインストールした場合。
- Network Deployment 環境をセットアップする必要がないスタンドアロン環境のセットアップを選択した場合。

「はい、**configureNode** コマンドを使用します (Yes, I want to use the configureNode command)」を選択した場合は、生成される説明に **configureNode** コマンドの実行に関する情報が追加されます。「いいえ、プロファイルと Network Deployment 環境を別々に作成します (No, I will create profiles and the network deployment environment separately)」を選択した場合は、プロファイルを作成するための 2 つのオプションに関する情報、および Network Deployment 環境を作成するための 3 つのオプションに関する情報が、生成される説明に組み込まれます。

## プロファイルの作成にプロジェクト管理ツールとコマンドのどちらを使用するか

Process Center または Process Server のサーバー・プロファイルを作成または拡張する際に、プロファイル管理ツールのグラフィカル・インターフェースを使用するか、**manageProfiles** コマンド (z/OS では **zpmc.sh**) のコマンド行インターフェースを使用するか (サイレント構成を容易に行うことができます) を選択できます。

「プロファイル管理ツール (PMT)」または「z/OS 用プロファイル管理ツール (zPMT) (Profiles Management Tool for z/OS (zPMT))」を選択した場合は、グラフィカル・インターフェース・ツールを使用したプロファイルの作成または拡張に関する情報が、生成される説明に組み込まれます。

「**manageProfiles** コマンド (サイレント)」または「**zpmc.sh** コマンド」を選択した場合は、コマンド行インターフェースを使用したプロファイルの作成または拡張に関する情報が、生成される説明に組み込まれます。

標準インストールを選択した場合 (この場合、プロファイルは自動的に作成されます)、または **configureNode** コマンドを使用してプロファイルを作成することを選択した場合は、これらのオプションを選択できません。

**制約事項:** PMT は、SPARC 64 ビットを使用する Solaris でのインストールには使用できません。対話式インストールおよび構成ガイドでは、この制約が強制されないため、SPARC 64 ビットを使用する Solaris にインストールする場合には、**manageProfiles** オプションを選択してください。

## Network Deployment を構成する方法の選択

**configureNode** コマンドを使用しない場合、Network Deployment 環境を構成するには、3 つのオプションがあります。つまり、デプロイメント環境ウィザード、管理コンソール、または **wsadmin** コマンドを使用できます。いずれの場合も、プロファイル管理ツールまたは **manageProfiles** または **zpm.sh** コマンドを使用してサーバー・プロファイルを作成した後に、デプロイメント環境が構成されます。

「デプロイメント環境ウィザード」を選択した場合は、グラフィカル・インターフェース・ツールを使用した Network Deployment マネージャーの作成に関する情報が、生成される説明に組み込まれます。「管理コンソール」を選択した場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用したデプロイメント環境の作成に関する情報が、生成される説明に組み込まれます。「**wsadmin コマンド (サイレント) (wsadmin commands (silent))**」を選択した場合は、サイレント構成を容易にするコマンド行インターフェースを使用したデプロイメント環境の作成に関する情報が、生成される説明に組み込まれます。

標準インストールを実行することを選択した場合 (この場合、プロファイルは自動的に作成されます)、スタンドアロン環境をインストールする場合 (この場合、Network Deployment 環境は不要です)、または **configureNode** コマンドを使用してプロファイルを作成することを選択した場合は、これらのオプションを選択できません。

---

## 要件の評価

再作業および障害を最小限にするために、インストールおよび構成の決定を行う前に、現行の環境の検討に時間をかけてください。現在のビジネス要件と設計、既にインストールされているハードウェアとソフトウェア、および現在の長所と短所を検討してください。また、この計画は、財政投資を最小化するのにも役立つ場合があります。

いくつかの要因がご使用のソフトウェアの要件を決定します。それらの要因は、以下のカテゴリーにまとめることができます。

- 製品のハードウェア要件およびソフトウェア要件、ユーザー自身のシステム・リソースの制約、およびご使用のシステムを管理し維持するためのリソースの可用性
- ランタイム環境にデプロイするアプリケーション、および構成済み環境の所期の使用方法
- 要件を満たすためにインストールする製品および製品のバージョン

これらすべての要因について賢明な選択をするには、以下の概念を理解する必要があります。

- 環境の構成に適用される用語
- インストール、構成、管理、保守を行う製品の管理アーキテクチャー。
- (提供されるパターンを介して) 使用可能な構成オプション、およびパターンが製品の使用目的に対処するかどうかを判別する方法。
- サポート対象の実装メソッド。製品をインストールし環境を構成する各種タスク・フローの理解も含まれる。

このセクションの情報を使用して、現在および将来の要件を評価および分析し、これらの要件に合致する環境を開発します。

**重要:** プラットフォーム固有のディスク・スペース要件、サポート対象のオペレーティング・システム、およびサポート対象のデータベースのバージョンに関する最新情報については、以下のリンクの 1 つをクリックします。オペレーティング・システムを要件に準拠させるためにインストールする必要がある、オペレーティング・システムのフィックスとパッチを検索することもできます。

- IBM Business Process Manager Advanced system requirements
- IBM Business Process Manager Standard system requirements
- IBM Business Process Manager Express system requirements
- IBM Business Process Manager Tools and Add-Ons requirements

## プロセスおよび Process Application に関する考慮事項

ビジネス・コンポーネントの統合を合理化する計画のベースラインになるのは、現在の要件です。ビジネスの拡大に伴う意思決定に役立つガイドラインを作成するには、ビジネスの将来を視野に入れた構想が必要になります。

製品の製造および出荷、サービスの提供がどのように行われているかを把握する必要があります。IBM Business Process Manager には、実稼働環境とテスト環境の両方の要件に合うように設計されたデプロイメント環境パターンが用意されています。

以下を検討します。

- Process Application が既存のサービスやバックエンド・システムとどう対話するかを検討します。
- 特定のビジネス・ニーズに対処するために、プロセス・アプリケーションでデータをどう処理するか、およびシステム内にデータをどう流すかを検討します。

ソリューションを開発してその環境を構成する際には、複数の検索、セッション、プロセス、およびその他の境界にわたって、データがどのように存続するかを理解する必要があります。

環境にデプロイするプロセス・アプリケーションに関する以下の項目を検討してください。

### – Process Application の呼び出しパターン

非同期呼び出しがランタイム環境でどのように処理されるか、また、非同期呼び出しを実装するために、基盤となるメッセージ・システムが SCA ランタイム環境でどのように利用されるかを理解する必要があります。

アプリケーションが異なれば要件が異なります。こうした要件の決定要因としては、例えば、エクスポート・タイプ、コンポーネント間の対話、インポート・タイプ、データベースや JMS リソースなどの必要なリソース、ビジネス・イベントの必要性、ビジネス・イベントの伝送機構などがあります。

### – 実装予定のビジネス・プロセスのタイプ (トランザクション・ビジネス・プロセス、割り込み可能なビジネス・プロセス、割り込み不可能なビジネス・プロセス)

割り込み不可能なビジネス・プロセス、つまり microflow は、1 つのトランザクションで実行されるかトランザクションなしで実行される、実行時間の短いビジネス・プロセスです。割り込み不可能なビジネス・プロセスは、パフォーマンスに与える影響がほとんどなく、高速です。このプロセス内のすべてのアクティビティが単一スレッド内で処理されます。

割り込み可能なビジネス・プロセス、つまり macroflow は、一連のアクティビティが含まれている、実行時間の長いビジネス・プロセスです。このプロセス内のアクティビティは、それぞれ固有のトランザクションで実行されます。割り込み可能なビジネス・プロセスには、人の介入またはリモ

ート・システムの呼び出し、あるいはその両方が必要なアクティビティーを組み込むことができます。非同期アクティビティーは完了するために数分、数時間、あるいは数日の時間がかかる可能性があるため、それらのアクティビティーを組み込むビジネス・プロセスは割り込み可能にする必要があります。

## リソースに関する考慮事項

資産を明確化し、既に使用可能なソフトウェアおよびハードウェアのリソースを最大限に利用するとともに、十分な情報に基づいて実装の決定を下します。現在のエンタープライズ情報システムを評価し、ビジネス上のニーズを満たすためにハードウェアまたはソフトウェアを追加する必要があるかを判別します。

次の要因を検討します。

- 現在のハードウェアおよびソフトウェアをよく理解します。以下のようにして使用可能な資産のリストを準備します。
- 使用する物理コンピューター・システムの数を判別し、各物理ハードウェアを項目別に分けます。以下の情報を記録します。
  - 実装済みメモリーの量
  - 実装済みマイクロプロセッサの数およびタイプ
  - 外部メディア
  - 特定の装置がアップグレード可能かどうか
- すべてのサーバーが、製品とデータベースのどちらに関与するかを問わず、同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用し、同じ時刻に設定されているようにします。
- 現在インストールされているソフトウェアおよびデータベース・アプリケーションを列挙します。以下の情報を記録します。
  - 機能
  - 企業内での使用範囲
  - セキュリティー要件
- 現在の IT 要員のリストを作成します。ご使用のデータベースを管理するのに必要な専門的知識と共に、IBM Business Process Manager をインストールし維持するために必要な専門的知識を備えているかどうか判別します。適切なユーザーが、すべての製品およびファイルを正しくインストールする権限のあるユーザー ID を持っていることを確認します。

## 開発およびデプロイメントのバージョン・レベル

ご使用の環境に必要な IBM Business Process Manager のバージョン・レベルの決定は、アプリケーションの開発で使用されたバージョン・レベルに依存します。一般に、前のバージョンの IBM Business Process Manager にデプロイされたアプリケーションは、次に入手可能なバージョンの IBM Business Process Manager 上でも実行できます。

次の表は、IBM Integration Designer V8.0.1 (以前の WebSphere Integration Developer) および IBM Process Designer V8.0.1 を含む IBM Business Process Manager V8.0.1 と、それ以前のリリースとの互換性を説明しています。

タスク	サポートされているか
<p>WebSphere Integration Developer バージョン 6.1.0、6.1.2、6.2.0、または 7.0.0 または IBM Integration Designer 7.5 から IBM Business Process Manager V8.0.1 へのデプロイメント。</p>	<p>はい。</p> <p><b>重要:</b> WebSphere Adapters V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 の場合は、「<i>Mandatory adapter fix for running 6.1 and 6.2 Adapters on WPS v7.0</i>」というタイトルの暫定修正をインストールする必要があります。WebSphere Adapter をバージョン 7.0 レベルにアップデートせず、アプリケーションを WebSphere Adapter バージョン 6.1.0、V6.1.2、または V6.2.0 で使用し続ける計画の場合は、この暫定修正をソース環境に適用する必要があります。</p> <p><b>重要:</b> Websphere Adapter for SAP V6.0.2、V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 は、IBM Business Process Manager V8.0.1 ではサポートされません。Websphere Adapter for SAP を使用するアプリケーションを IBM Business Process Manager V8.0.1 にデプロイするには、まず Websphere Adapter for SAP を V7.0 に更新する必要があります。</p>
<p>IBM Business Process Manager V8.0.1 成果物の WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 での実行。</p>	<p>いいえ。</p> <p>IBM Integration Designer V8.0.1 で作成したアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 (前のすべてのリリース) のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。</p> <p>WebSphere Integration Developer 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Integration Designer 7.5 で作成され、IBM Integration Designer V8.0.1 で生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。</p> <p><b>serviceDeploy</b> を使用して IBM Business Process Manager V8.0.1 サーバーで生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにインストールできません。</p>

## プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項

このトピックでは、プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。このトピックは分散プラットフォームに適用されます。

### プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース



- ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリー名に使用できない特殊文字 (\*、&、または ? など)
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

**Windows** ディレクトリー・パスについての考慮事項: インストール・ディレクトリーのパスは、60 文字以下でなければなりません。 `profiles_directory_path¥profile_name` ディレクトリーの文字数は、80 文字以下でなければなりません。

注: Windows の 255 文字のパス長制限を回避するために、Windows 環境でプロファイルを作成する際には、短いパスの命名規則を使用してください。

## ノード、サーバー、ホスト、セルの命名の考慮事項

**予約名:** フィールド値として予約済みの名前を使用しないでください。予約済みの名前を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- cells
- nodes
- servers
- クラスタ
- アプリケーション
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」ページのフィールドの説明: プロファイルの作成時には、適切な命名に関するガイドラインを使用してください。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイル
- Deployment manager プロファイル
- カスタム・プロファイル

表7. スタンドアロン・サーバー・プロファイルの命名に関するガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux      UNIX</p> <p>Windows    <code>shortHostName</code></p> <p>Node <code>NodeNumber</code> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>shortHost Name</code> は短いホスト名です。</li> <li>• <code>NodeNumber</code> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	予約名を使用しないでください。	希望の名前を選択してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。
サーバー名	<p>Linux      UNIX</p> <p>Windows    <code>server1</code></p>	サーバーの固有の名前を使用します。	サーバーの論理名です。

表7. スタンドアロン・サーバー・プロファイルの命名に関するガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ホスト名	<p>Linux      UNIX</p> <p>Windows      ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表8. デプロイメント・マネージャー・プロファイルの命名に関するガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux      UNIX</p> <p>Windows      <i>shortHostName</i> Cell ManagerNode Number ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内での管理に使用されます。</p>
ホスト名	<p>Linux      UNIX</p> <p>Windows      ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表8. デプロイメント・マネージャー・プロファイルの命名に関するガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux UNIX</p> <p>Windows <i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」ページで指定します。</p>

表9. カスタム・プロファイルの命名に関するガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p>Linux UNIX</p> <p>Windows <i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>予約名を使用しないでください。</p> <p>デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>	<p>この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。</p>
ホスト名	<p>Linux UNIX</p> <p>Windows ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決される必要があります。サーバー内に複数のネットワーク・カードが存在する場合、ホスト名または IP アドレスは、ネットワーク・カードのいずれかに解決される必要があります。リモート・ノードは、ホスト名を使用してこのノードに接続し、このノードと通信しません。

IBM Business Process Manager は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 について詳しくは、IPv6 の説明を参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のワークステーションに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。
- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、IBM Business Process Manager 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。
- サーバー名には下線文字 ( \_ ) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名の要件に適合するよう定めています。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字のみを使用する必要があります。ただし、名前の先頭または末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 ( - ) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 ( \_ ) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに IBM Business Process Manager をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してください。

同一コンピューター上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがサーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態で

も実行されるように定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないということがあります。

## 必要なセキュリティー許可の準備

セキュリティー・ポリシーによっては、ファイルおよびフォルダーの作成やデータベースへのアクセスなどのタスクを完了するためにユーザー ID とパスワードが必要な場合があります。サーバーが保護データにアクセスしようとしたときの問題を防ぐために、セキュア・ユーザー ID を準備してください。

- データベースの設計を完了します。
- 使用する認証システム (例えば Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)) を決定します。
- IBM Business Process Manager のインストールに必要な権限に影響する制御として、存在している制御を判別します。
- 製品をインストールするシステムを識別します。

サイトのセキュリティー・ポリシーではグローバル・セキュリティーが有効になっており、ソフトウェアのインストール、データベースまたはテーブルの作成、およびデータベースへのアクセスを行うために所定の権限が必要になっています。正常に製品をインストールして運用するためには、ここに示すステップを行う必要があります。

IBM Business Process Manager データベースのセキュリティー許可を準備するには、以下のステップを実行します。

- システムにソフトウェアをインストールする権限を持つユーザー ID とパスワードのリストを作成します。ファイルおよびフォルダーを作成する権限を持つ IBM Business Process Manager ユーザー ID 用に、インストール・ウィザードを実行する必要があります。
- システムの日常の運用に必要なユーザー ID、パスワード、およびロールのリストを作成します。
  - 管理コンソールのユーザー ID と能力を制限するロール。ロールの構成、管理、またはモニター用のユーザー ID を所有することができます。
  - システム通信を認証する各システム・バスのユーザー ID。
- システムが操作中に使用するデータベース表にアクセスするために使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。
- オプション: システムがインストール中にデータベースまたはデータベース表の作成に使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。サイト・ポリシーによっては、この権限がデータベース管理者に制限されている場合があります。その場合は、生成されたスクリプトを管理者に提供して、データベースまたはデータベース表を作成してもらう必要があります。

サーバーをセキュアな環境にインストールして運用できます。

## 製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー

IBM Business Process Manager のインストール・ディレクトリーは、いくつかの変数で表されます。それらの変数の意味は、さまざまな要因で異なる可能性があります。

### この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数を使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであればどのディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できます。IBM Business Process Manager 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

#### *install\_root*

IBM Business Process Manager のインストール・ロケーション。IBM Business Process Manager は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

#### *profile\_root*

IBM Business Process Manager プロファイルの場所。

### 変数の意味の違いについて

インストール・ディレクトリーを表すために使用される変数の意味は、製品をクリーンなワークステーションにインストールするか、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされているワークステーションにインストールするかによって異なる場合があります。またそのような変数は、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、あるいは非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

### root 以外のユーザーがインストールする場合の制限

root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・プログラムが提供するデフォルト・ディレクトリーは、ユーザーが root 特権 (管理者特権) を所有しているかどうかによって異なります。root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共有リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれできません。非 root ユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

### 標準インストールの場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、標準インストールの場合の IBM Business Process Manager の基本インストールとそのプロファイルのデフォルトのインストール・ロケーションを示します。

25 ページの表 10 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・プログラムが IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 10. *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> /opt/IBM/BPM/v8.0	<b>AIX</b> <i>user_home</i> /IBM/BPM/v8.0
<b>Linux</b> /opt/ibm/BPM/v8.0	<b>Linux</b> <i>user_home</i> /ibm/BPM/v8.0
<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v8.0	<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v8.0

表 11 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、*profile\_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 11. *profile\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
<b>AIX</b> /opt/IBM/BPM/v8.0/profiles/ <i>profile_name</i>	<b>AIX</b> <i>user_home</i> IBM/BPM/v8.0/profiles/ <i>profile_name</i>
<b>Linux</b> /opt/ibm/BPM/v8.0/profiles/ <i>profile_name</i>	<b>Linux</b> <i>user_home</i> /ibm/BPM/v8.0/profiles/ <i>profile_name</i>
<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v8.0¥profiles¥ <i>profile_name</i>	<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v8.0¥profiles¥ <i>profile_name</i>

表 12 は、DB2 Express のインストール・ロケーションを示します。DB2 Express は IBM Business Process Manager と同じディレクトリーの下にインストールされます。

表 12. DB2 Express デフォルト・ディレクトリー

DB2 Express バイナリーのデフォルト・ロケーション	データベース・インスタンスのロケーション
<b>Linux</b> /opt/ibm/BPM/v8.0/DB2	<b>Linux</b> データベース・インスタンスは <i>bpminst</i> ユーザーの下で作成されます。例: <i>user_home</i> / <i>bpminst</i>
<b>Windows</b> C:¥IBM¥BPM¥v8.0¥DB2	<b>Windows</b> BPMINST データベース・インスタンスは、IBM Business Process Manager がインストールされているドライブのルート (¥) に作成されます。例えば、IBM Business Process Manager が C:¥IBM¥BPM¥v8.0¥ にインストールされている場合は、C:¥BPINST となります。

## カスタム・インストールのデフォルト・ディレクトリー、または WebSphere Application Server あるいは WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、製品とそのプロファイルのデフォルト・インストール・ロケーションを示します。サポートされる既存のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の上に IBM Business Process Manager をインストールする場合、IBM Business Process Manager は同じロケーションにインストールされます。26 ページの表 13 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 13. インストール・プログラムが root (管理者) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方に IBM Business Process Manager と WebSphere Application Server の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<b>AIX</b> /usr/IBM/WebSphere/AppServer	<b>AIX</b> <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
<b>Linux</b> <b>Solaris</b> /opt/IBM/WebSphere/AppServer	<b>Linux</b> <b>Solaris</b> <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
<b>Windows</b> C:\Program Files\IBM \WebSphere\AppServer	<b>Windows</b> <i>user_home</i> \IBM \WebSphere\AppServer

表 14. root (Administrator) および root 以外のユーザーの両方における、*profile\_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示します。

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
<b>AIX</b> /usr/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/ <i>profile_name</i>	<b>AIX</b> <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer/ profiles/ <i>profile_name</i>
<b>Linux</b> <b>Solaris</b> /opt/IBM/WebSphere/AppServer/ profiles/ <i>profile_name</i>	<b>Linux</b> <b>Solaris</b> <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ AppServer/profiles/ <i>profile_name</i>
<b>Windows</b> C:\Program Files\IBM\ WebSphere\AppServer\profiles\ <i>profile_name</i>	<b>Windows</b> <i>user_home</i> \IBM\ WebSphere\AppServer\profiles\ <i>profile_name</i>

## IBM Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

表 15 は、Installation Manager ツールに関連する 2 つのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

インストール・ディレクトリーの下にあるディレクトリーは、Installation Manager のデフォルトのインストール先 (オペレーティング・システムごと) です。

エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー内のディレクトリーは、Installation Manager に関連するデータ (Installation Manager によって実行された操作の状態や履歴など) が格納される (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

root (Administrator) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方の値が提供されます。

エージェント・データのロケーションについては、Installation Manager 資料の『エージェント・データのロケーション』を参照してください。Installation Manager のその他のデフォルト設定については詳しくは、Installation Manager 資料の『管理者または非管理者としてのインストール』を参照してください。

表 15. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
インストール・ディレクトリー:	インストール・ディレクトリー:
<b>Linux</b> /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	<b>Linux</b> <i>user_home</i> /IBM/InstallationManager/eclipse
<b>UNIX</b> /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	<b>UNIX</b> <i>user_home</i> /IBM/InstallationManager/eclipse



表 15. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー (続き)

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
<p><b>Windows</b> C:¥Program Files¥IBM¥ Installation Manager¥eclipse</p>	<p><b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥ userID¥IBM¥Installation Manager¥eclipse</p> <p><b>Vista</b> <b>Windows 7</b></p> <p>C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager</p>
エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:	エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:
<p><b>Linux</b> /var/ibm/InstallationManager</p>	<p><b>Linux</b> user_home/var/ibm/InstallationManager</p>
<p><b>UNIX</b> /var/ibm/InstallationManager</p>	<p><b>UNIX</b> user_home/var/ibm/InstallationManager</p>
<p><b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager</p> <p><b>Vista</b> <b>Windows 7</b></p> <p>C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager</p>	<p><b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥userID¥Application Data¥IBM¥Installation Manager</p> <p><b>Vista</b> <b>Windows 7</b></p> <p>C:¥Users¥userID¥AppData¥Roaming¥IBM¥ Installation Manager</p>

## スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティー、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

スタンドアロン環境はインストールおよび構成が最も容易であり、計画はほとんど必要ありません。Network Deployment 環境では、多数のロールを含む、より詳細なインストールおよび構成のタスクが必要です。

Network Deployment 環境の場合、ビジネス・アプリケーションおよびサービスがその環境で実行する作業の要件を満たすことを目的として、慎重に特性を計画する必要があります。考慮すべき点はいくつかあります。以下に例を示します。

- 必要とする物理ワークステーションおよびハードウェア・リソースの数
- ビジネスをサポートするために必要なクラスターおよびクラスター・メンバーの数
- 必要なデータベースの数
- 認証の役割およびセキュリティー上の考慮事項
- デプロイメント環境の実装に使用する方式
- ユーザー・レジストリー (セキュリティー用)、1 台以上の HTTP サーバー (Web コンテンツ用)、必要なファイアウォール、ロード・バランサーなど、その他のサポート・リソース。

## スタンドアロン環境

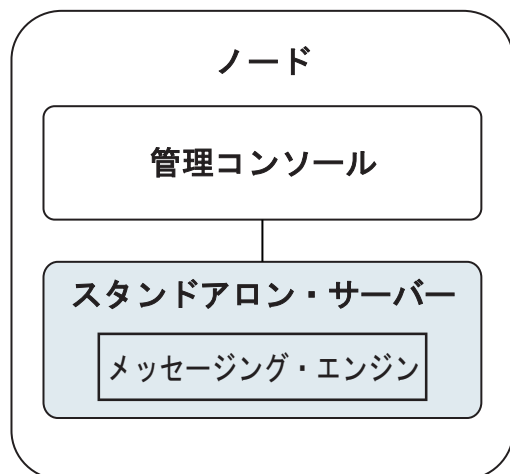


図1. スタンドアロン環境

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするために、サンプルをインストールして、スタンドアロン・サーバーにサンプル・ソリューションをデプロイできます。このサンプルに使用されているリソースは、管理コンソールで探索できます。

まずスタンドアロン環境から始めて、後でそれを **Network Deployment** 環境に組み込むには、スタンドアロン環境をデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。これは、そのセルに他のノードが統合されていない場合にのみ可能です。

製品ソフトウェアをインストールするときに、スタンドアロン開発環境用のプロファイル (**qwps**) を作成することができます。作成されたプロファイルは、テスト・シナリオでの使用またはアプリケーション開発のサポートにのみ適します。実動目的でスタンドアロン・サーバー環境を使用するシナリオの場合、製品ソフトウェアをインストールしてください。次に、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロン・プロファイルを構成します。

## ネットワーク・デプロイメント環境

**Network Deployment** 環境には、サービス要求元およびプロバイダーのエンタープライズ・アプリケーション、およびそれらのメディエーション・モジュールを実行するために相互接続されたサーバーとクラスターのコレクションが含まれます。この環境には、**WebSphere Application Server** のアプリケーション・サーバーも組み込むことができます。

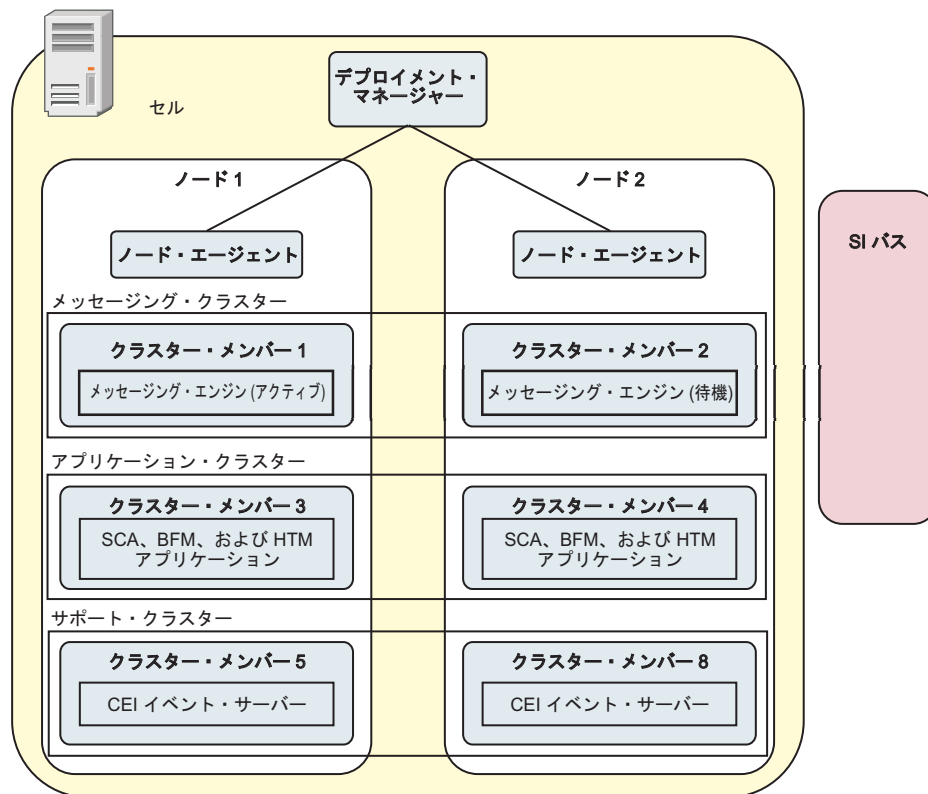


図 2. Network Deployment 環境

サーバーおよびクラスターは、1 つ以上の管理対象ノードで実行されます。それらの管理対象ノードは、それぞれ 1 つの論理コンピューター・システムまたは物理コンピューター・システムに対応しています。

複数のサーバーを、ロード・バランシングとフェイルオーバーをサポートするためにクラスターにグループ化することができます。

相互接続サーバーまたはクラスターのデプロイメント環境は、スタンドアロン・サーバーでは提供できないパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、および安定度の特性を提供します。さらに、集中化されたデプロイメント・マネージャーからすべてのサーバーまたはクラスターを管理することができます。

デプロイメント・マネージャーによって管理されるサーバーとクラスターの集合全体は、デプロイメント環境として構成および管理されます。

Network Deployment 環境をインストールするには、製品ソフトウェアをインストールしてから、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象) ノード用のプロファイルを構成します。管理対象のデプロイメント環境は後で作成できます。提供されているトポロジー・パターンから標準のデプロイメント環境を作成するか、あるいはクラスターおよびサーバーを構成して、カスタマイズされたデプロイメント環境を作成することができます。

## 使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択内容と、それに関連する計画について、以下の表に記載しています。

表 16. IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

使用目的	構成パスおよび計画アクティビティ
単一サーバーの単体テスト環境 (UTE)	スタンドアロン・プロファイル構成パス。計画はほとんど必要ない。
クラスター化されたテスト環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
柔軟性の高い実稼働環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
高度に最適化された実稼働環境	固有の処理要件やビジネス要件に対応したカスタマイズ・トポロジー。必須の詳細計画 (資料の本セクションで説明しているもの)。

適切なクラスター・トポロジー・パターンの選択については、関連概念のリンクを参照してください。

## Network Deployment 環境の計画

Network Deployment 環境のセットアップには、物理ワークステーションの数および選択するパターンのタイプなど、多くの決定が関係しています。それぞれの決定はデプロイメント環境をセットアップする方法に影響を与えます。

デプロイメント環境を計画する前に、以下の作業を実行します。

- データベース・タイプの選択
- 使用可能なリソースの識別
- 必要なセキュリティ権限の明確化

相互接続サーバーのレイアウトを計画する際には、いくつかの決定を下す必要があります。こうした決定は、使用可能なハードウェアと物理接続の間で行われるトレードオフ、管理および構成の複雑さ、およびパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、安定度などの要件に影響を与えます。

### 1. デプロイメント環境の機能要件を明確化します。

- a. デプロイメント環境のフィーチャーおよびランタイム機能を明確化します。

デプロイメント環境で、IBM Business Process Manager に加えてその他の IBM Business Process Manager 製品および BPM 以外の製品をサポートするかどうか検討します。

- b. デプロイするコンポーネントのタイプを確認します。

コンポーネント・タイプとコンポーネント間の対話を要件の一部として検討します。

- c. インポートおよびエクスポートの実装タイプとトランスポートを決定します。

データベースに必要なリソースまたは Java™ Message Service (JMS) リソース、およびビジネス・イベントとそれらの伝送手段に必要な事柄について考慮します。

- d. アプリケーションに関連しない機能要件を確認します。

セキュリティー・サーバー、ルーター、およびビジネス・イベントを処理するための他のすべてのハードウェア要件またはソフトウェア要件を検討します。

2. ご使用の環境に対する容量とパフォーマンスの要件を明確化します。
3. 各機能に必要な物理サーバーの数を決定します。
4. デプロイメント環境を設計します。

パターンを決定します。IBM Business Process Manager では、次の 4 つの確立されたトポロジー・パターンのいずれかを選択できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

これらのパターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールを使用してカスタム・デプロイメント環境を作成できます。

**注:** 構成が、IBM Business Process Manager に加えて、およびこれと互換性のある、複数の IBM Business Process Manager および BPM 以外の製品をサポートする場合、デプロイメント環境を作成するときにこれらの製品のパターンを使用できます。

各パターンとその相違点について詳しくは、37 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』を参照してください。

5. デプロイメント環境の構成に使用できる方法を理解します。

以下のタイプの IBM Business Process Manager のデプロイメント環境を構成できます。

- 標準化された Network Deployment 環境

標準化された Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターン・テンプレートに基づいており、「デプロイメント環境構成」ウィザードまたは `wsadmin` コマンドを使用して実装されます。

「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングとリモート・サポート、および (該当する場合) リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web クラスターのトポロジー・パターンを持つクラスターを作成できます。

- カスタマイズされた Network Deployment 環境

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、管理コンソールから作成する構成であり、デプロイメント環境ウィザードを使用して作成される「テンプレート・ベース」の構成とは異なります。

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターンが構成要件を満たさない場合にのみ作成してください。

標準化された環境の場合と同様に、カスタマイズされた Network Deployment 環境は `wsadmin` を使用して作成できます。

## 概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

### トポロジーの概要

トポロジーとは、キャパシティー、可用性、およびスケーラビリティに対するビジネス・ニーズを満たすために必要なデプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。

IBM Business Process Manager の Process Center コンポーネントと Process Server コンポーネントの両方のトポロジーをセットアップすることができます。

さまざまな要因がトポロジーの設計方法および実装方法に影響を与えます。例えば、ビジネスおよびアプリケーションの要件、リソースの要件および制約、環境の本来の目的、オペレーティング・システムなどを考慮する必要があります。

IBM Business Process Manager には、以下のトポロジーのパターンが組み込まれています。これらのパターンを使用すると、PoC (概念検証) から完全な機能を備えた実稼働環境に至るさまざまなビジネス・シナリオに対処できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

各トポロジー・パターンには、特定のビジネス・ニーズに対応する設計特性があります。例えば、分散システムの場合、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、テストまたは PoC のシナリオに使用します。z/OS システムの場合、このトポロジー・パターンはデフォルト・パターンであり、実稼働環境で使用できます。

各トポロジーの設計特性は、トポロジー・パターンとして取り込まれ、構成テンプレートとして製品とともに提供されます。

標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンを必ず使用する必要はありません。どのトポロジー・パターンも特定のニーズに対応しない場合は、カスタム・トポロジー・パターンを作成できます。

### デプロイメント環境パターンの目的

デプロイメント環境トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境に関するコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。トポロジー・レイアウトごとに IBM 提供のパターンが用意されています。これらのトポロジー・パターンは、最もよく使用される BPM トポロジー・パターンの特性である、コンポーネント対話のルールおよびガイドラインを提供します。IBM 提供のトポロジー・パターンは、テスト済みの既知の構成シナリオに基づいています。これらのパターンにはデプロイメント環境を作成するための反復可能な自動化方式が含まれています。各トポロジー・パターンは、関連付けられているトポロジーの構成要件およびビジネス・ニーズを満たすように設計されています。トポロジー・パターンを使用すると、デプロイメント環境を最も単純な方法で作成できます。

デプロイメント環境トポロジー・パターンは、連携して動作するコンポーネント構成を含む推奨トポロジーを表します。そのため、完全に機能するデプロイメント環境を確実に構築できます。デプロイメント環境トポロジー・パターンの構成ルールを使用して、ファースト・パス構成を生成できます。これが可能な理由

は、多数の設計上の決定 (例えば、どのコンポーネントを構成するか、どのデフォルト・パラメーターおよびリソースが必要か) がトポロジー・パターンに実装されているためです。

提供されているデプロイメント環境トポロジー・パターンは、それぞれ特定の要件のセットに対応しています。これらのトポロジー・パターンのいずれかを使用すると、ほとんどの要件セットに対処できます。トポロジー・パターンを選択するには、以下のステップをすべて実行します。

- 作成するビジネス・ソリューションの要件を理解します。
- IBM 提供のトポロジー・パターンの機能および特性を検討し、理解します。
- 使用するトポロジー・パターンを決定します。

IBM Business Process Manager トポロジー・パターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールまたはスクリプティング (wsadmin コマンド) を使用して、カスタマイズ・トポロジー・パターンを作成できます。

## データベースおよびデプロイメント環境

Network Deployment 環境を作成して構成する前に、データベースを構成し、必要なデータベース表を作成する必要があります。IBM Business Process Manager を使用するには、少なくとも、データベース管理システムで以下のデータベースを構成する必要があります。

- 共通データベース (CMNDB)
- Process Server データベース (BPMDB)
- Performance Data Warehouse データベース (PDWDB)

スタンドアロン・サーバー構成の場合、「標準」インストール・オプションを使用すると、これらのデータベースが構成され、必要なデータベース表が自動的に作成されます。

Network Deployment 環境 (カスタマイズされたデプロイメント環境または標準化されたデプロイメント環境) の場合は、担当者またはデータベース管理者がインストーラーの外部で各データベースを構成する必要があります。追加機能をサポートするには、追加データベースが必要です。例えば、IBM Business Process Manager 構成に Business Process Choreographer、Business Space、または Common Base Event のモニタリングが含まれている場合は、担当者またはデータベース管理者がこれらのデータベースを構成し、用意されているユーティリティまたはスクリプトを使用して、必要なデータベース表を作成する必要があります。この構成は、Network Deployment 環境を作成する前に行う必要があります。

詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

## IBM 提供のデプロイメント環境トポロジー・パターンの機能

どの IBM Business Process Manager デプロイメント環境にも、基本的な一連の機能が含まれており、それらの機能が組み合わさることで完全な実稼働環境を形成しています。

堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが IBM 提供のトポロジー・パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。特定のタイプの機能 (例えば、サポート・インフラストラクチャー機能) を特定のクラスターに割り振ることができます。これらの機能を理解しておくことで、ニーズに最も合ったデプロイメント環境トポロジー・パターンを選択するのに役立ちます。

ネットワーク・デプロイメントの場合、複数のクラスターが共同でその環境に固有の機能を提供できます。お客様の要件に合わせて、デプロイメント環境内の各クラスターに特定の機能を割り当てて、パフォーマンス、フェイルオーバー、および容量を提供します。

デプロイメント環境で構成されたクラスターは、以下の機能を提供します。

これらの機能は、単一のクラスター内に存在している場合もあれば、複数のクラスターにまたがって分散している場合もあります。標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンでは、これらの機能をサポートするために、それぞれ異なる数のクラスターが作成されます。デプロイメント環境内でのクラスターの数は、使用するトポロジー・パターンにより異なります。

#### アプリケーション・デプロイメント・ターゲット

アプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは、アプリケーション (ヒューマン・タスク、ビジネス・プロセス、メディエーションなど) のインストール先となる一連のサーバー (クラスター) です。選択したデプロイメント環境トポロジー・パターンによっては、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットがメッセージング・インフラストラクチャーおよびサポート・インフラストラクチャーの機能を提供する場合があります。デプロイするアプリケーションのタイプに基づいて適切な製品を選択します。

- アプリケーションにヒューマン・タスクまたはビジネス・プロセスの成果物が含まれる場合、Process Server をインストールします。
- アプリケーションにメディエーション・モジュールのみが含まれる場合、WebSphere Enterprise Service Bus をインストールします。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットはデプロイメント環境のすべての機能を提供します。

#### サポート・インフラストラクチャー

サポート・インフラストラクチャーには、環境をサポートしてシステムを管理するために使用される Common Event Infrastructure (CEI) サーバーやその他のインフラストラクチャー・サービスが含まれます。各種インフラストラクチャー・サービスには、以下のものがあります。

- ビジネス・ルール
- セレクター
- ヒューマン・タスク
- ビジネス・プロセス

**重要:** このノードに対して、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに対して使用した製品機能と同じ製品機能のカスタム・プロファイルを使用する必要があります。

ビジネス・ルールは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターには結合されません。実際、ビジネス・ルールは、セル内のすべての場所で存在し、機能することができます。ビジネス・ルール管理機能 (Business Rules Manager から実行される) は、サポート・インフラストラクチャー・クラスター (3 クラスター構成の場合) または Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター (4 クラスター構成の場合) にデプロイできます。同じ原理がヒューマン・タスクとビジネス・プロセスに適用されます。ヒューマン・タスクとビジネス・プロセスは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターで実行されます。これは、このクラスターでヒューマン・タスク・コンテナとビジネス・プロセス・コンテナが構成されるためです。ただし、プロセスとタスクは、Business Process Choreographer Explorer から管理します。Business Process Choreographer Explorer は、3 クラスター構成の場合はサポート・インフラストラクチャー・クラスター上、4 クラスター構成の場合は Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター上に配置できます。

#### メッセージング・エンジン・インフラストラクチャー

メッセージング・インフラストラクチャーは、メッセージング・エンジンが配置されている一連のサーバー (クラスター) です。メッセージング・インフラストラクチャーは、ご使用のアプリケーションおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの内部メッセージング・ニーズに非同



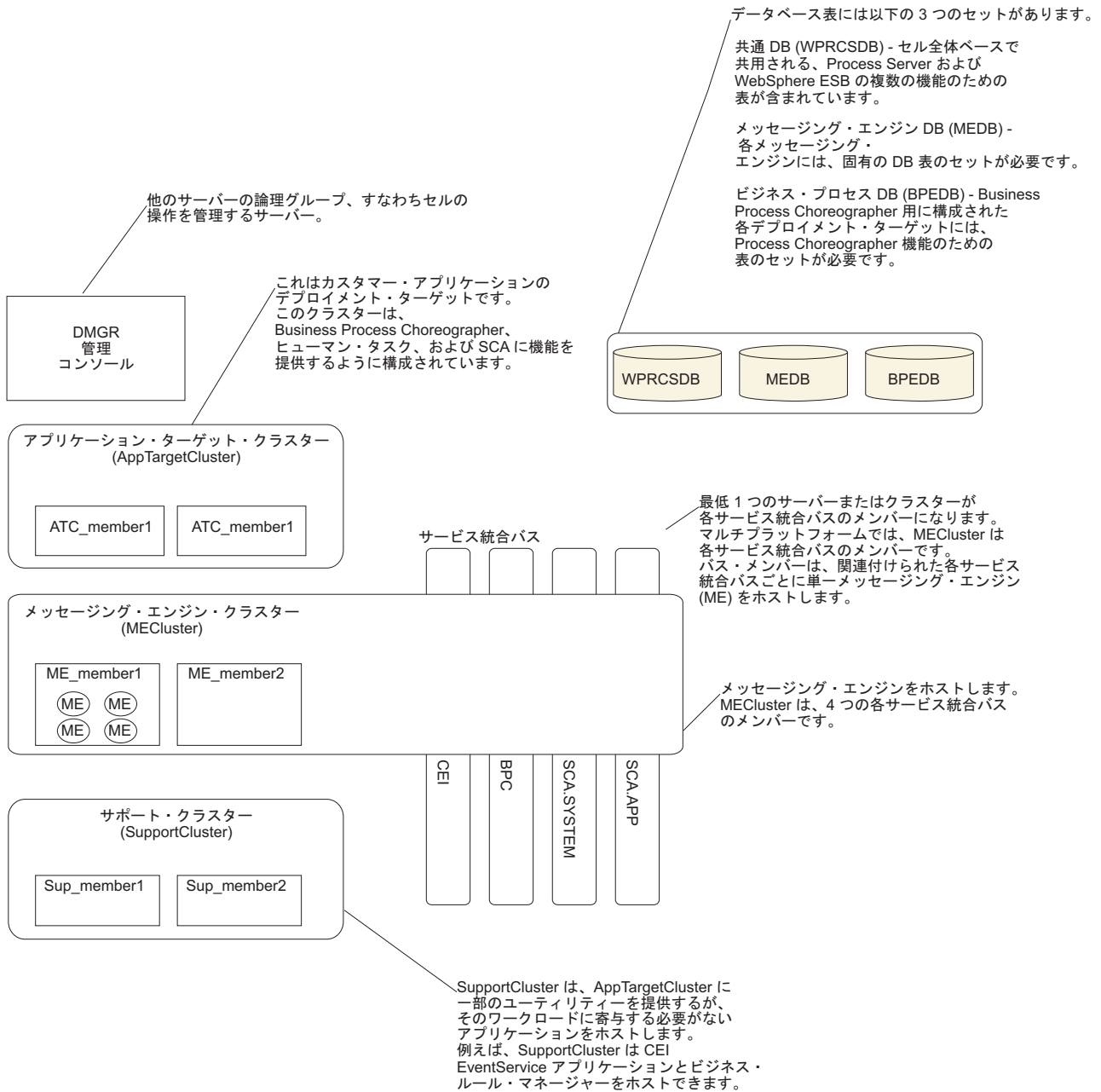
期メッセージング・サポートを提供するために使用されます。メッセージング・エンジンによって、デプロイメント環境内のノード間の通信が可能になります。クラスターがメッセージング機能のみを提供する場合は、このクラスターは IBM Business Process Manager ではなく WebSphere Application Server で作成されたノード上のメンバーでも構成することができます。

#### Web アプリケーション・インフラストラクチャー

Web ベース・コンポーネントの Business Process Choreographer Explorer、Business Rules Manager、Business Space、Process Portal、および REST API サービスが配置されている 1 つのクラスターで構成されます。

すべての環境内にあるトポロジに対して、IBM Process Server および WebSphere ESB の基本的な部分は、常にほぼ同等です。どの IBM Process Server セルおよび WebSphere ESB セルでも、デプロイメント・マネージャーが、そのセルの管理の中心点になります。

次の図に、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジ・パターンを使用して構成した、IBM Process Server デプロイメント環境の注目点を示します。Process Center デプロイメント環境ではアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに Process Center コンソールが含まれていますが、この点を除けば、このトポロジ・パターンは Process Center デプロイメント環境と同じです。Process Server の Network Deployment 環境には、Process Center コンソールは含まれません。



この図には、以下のものが含まれています。

- **デプロイメント・マネージャー (DMGR):** 論理グループまたは他のサーバーのセルの操作を管理するサーバー。
- **アプリケーション・ターゲット・クラスター:** カスタマー・アプリケーションのデプロイメント・ターゲット。このクラスターは、BPEL プロセス、ヒューマン・タスク、プロセス・アプリケーション、および SCA に機能を提供するように構成されています。Process Center デプロイメントの場合、このクラスターには Process Center コンソールも含まれます。
- **データベース:**
  - 共通データベース (CMNDB) - 必須。複数の IBM BPM Advanced Process Server および WebSphere ESB 機能のためにセル全体ベースで共有される表が含まれます。

- Process Server データベース (BPMDDB) - 必須。IBM BPM Advanced Process Server 機能のための表が含まれます。
- Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) - 必須。Performance Data Warehouse 機能のための表が含まれます。
- メッセージング・エンジン・データベース (MEDB) - 各メッセージング・エンジンには、固有のデータベース表のセットが必要です。
- Business Process データベース (BPEDB) - Business Process Choreographer 用に構成された各デプロイメント・ターゲットには、Business Process Choreographer 機能のための表のセットが必要です。
- **サービス統合バス (SIBus):** 少なくとも 1 つのサーバーまたはクラスターが各 SIBus のメンバーです。マルチプラットフォームでは、メッセージング・エンジン・クラスターは各 SIBus のメンバーです。バス・メンバーは、関連付けられた各 SIBus ごとに 1 つのメッセージング・エンジン (ME) をホストします。
- **メッセージング・エンジン (ME) クラスター:** メッセージング・エンジンをホストします。ME クラスターは、4 つのサービス統合バスのそれぞれのメンバーです。
- **サポート・クラスター:** サポート・クラスターは、アプリケーション・ターゲット・クラスターに一部のユーティリティを提供するアプリケーション (ただし、そのクラスターのワークロードの一部にはならない) をホストします。例えば、サポート・クラスターはビジネス・プロセス・ルール・マネージャーをホストする場合があります。

## ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

### 関連概念:

47 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

49 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

### 単一クラスター・トポロジー・パターン

「単一クラスター」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。単一クラスター・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境のすべての機能が 1 つのクラスターにまとめられています。

これは、IBM Business Process Manager for z/OS のデフォルト・パターンです。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。ただし、サポート・アプリケーションおよび統合アプリケーションを各サーバー・インスタンスで実行する必要があるため、個々の Java 仮想マシン (JVM) のメモリー所要量が多くなります。さらに、クラスターの 1 つ以上のメンバーで、非同期対話に必要なメッセージング・エンジンも実行する必要があります。そのため、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、PoC (概念検証) 環境、開発環境、およびテスト環境で使用されます。

IBM Business Process Manager 環境のすべての側面を単一クラスターに結合する場合には、メモリー所要量が増加する点に加えて、いくつかの点を考慮する必要があります。

- 非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む)、ヒューマン・タスク、ステート・マシン、および長期実行ビジネス・プロセスは、メッセージング・インフラストラクチャーを頻繁に使用することがあるため、これらのコンポーネントを使用するアプリケーションには、単一クラスター環境は適していません。
- このトポロジー・パターンでは、メッセージング要件は最小に抑える必要があります (z/OS の場合は除く)。
- Service Component Architecture (SCA) の内部非同期呼び出し、Java Message Service (JMS) と MQ のメッセージングのバインディングは、同じクラスターで複数のメッセージング・エンジンをサポートしません。

必要な場合は、他のいずれかのトポロジー・パターン (メッセージング・インフラストラクチャーがアプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは別のクラスターに存在する) を選択してください。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、アプリケーションの実行および同期呼び出しに焦点を当てたシナリオに適しています。このトポロジー・パターンは、Common Event Infrastructure (CEI) を頻繁に使用することを計画している場合にも適していません。CEI 関連のメッセージング・トラフィックとイベントを生成すると、クラスター・メンバーに対する負荷が増加します。

管理上の観点とスケーラビリティの観点からは、単一クラスター・トポロジー・パターンが優れています。単一クラスターでは、各メンバーがすべての IBM Business Process Manager コンポーネントを実行するため、管理が容易になります。複数のクラスター内にいくつかのサーバー・インスタンスがある代わりに、少数のメンバーが単一のクラスターにまとめられています。環境のニーズが増大した場合でも、ノードおよびクラスター・メンバーを追加するだけで、インフラストラクチャーを拡張できます。このため、簡単に機能を追加できますが、その場合はすべてのコンポーネントが同じ比率で拡張されます。例えば、クラスター・メンバーを追加するたびに、CEI 処理が必要かどうかに関係なく、CEI 処理が追加されます。複数のサーバー・メンバーにわたって分散するメッセージング・エンジンがポリシーを使用する場合は、ポリシーの作成および保守のために、管理上の作業が増える可能性があります。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、以下に示すすべてのデプロイメント環境機能およびコンポーネントの機能グループが単一クラスター上で実行されます。

- アプリケーション:
  - Business Process Choreographer (BPC) コンテナ
  - Process Server
  - Process Portal
- メッセージング・バス・メンバー:
  - Business Process Choreographer バス・メンバー
  - Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
  - Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
  - Process Server バス・メンバー
  - Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
  - SCA システム・バス・メンバー
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - Business Process Choreographer Explorer

- ビジネス・ルール・マネージャー
- Business Space
- Process Portal
- REST API サービス

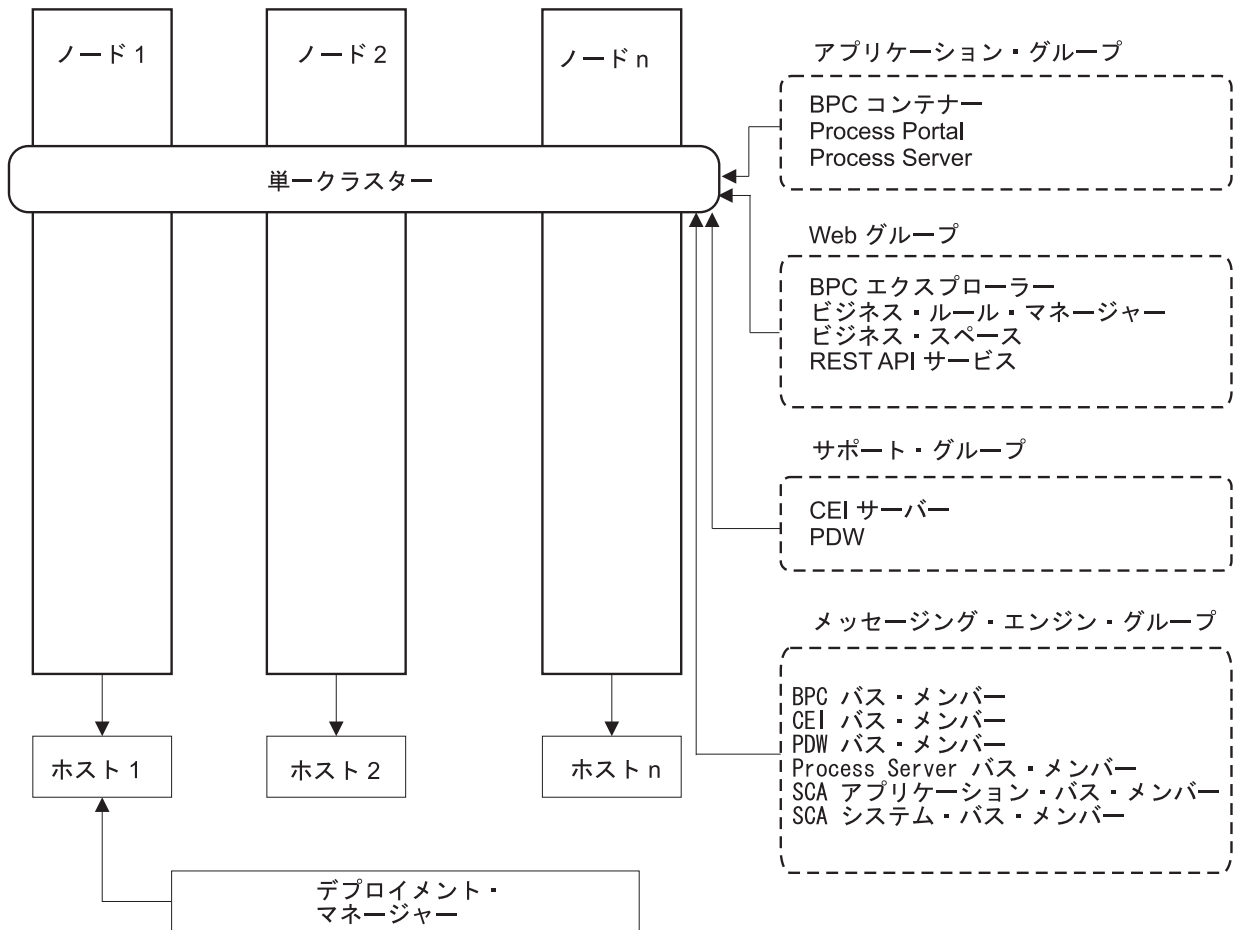


図3. 単一クラスター・トポロジー・パターン

### リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能は 2 つの別個のクラスターに分割されています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、メッセージング機能用に独立したクラスターを使用します。このトポロジー・パターンは、負荷に対してクラスターを拡張できるため、非同期呼び出しを必要とするシナリオに適しています。各コンポーネントは、2 つのクラスター間で分割されます。

多数のヒューマン・タスク、長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、および非同期対話をサポートする必要がある環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの方が単一クラスター・トポロジー・パターンよりも有利です。

独立したクラスターにメッセージング・インフラストラクチャーを分離することで、メッセージングのオーバーヘッドがアプリケーション・ターゲット・クラスターから取り除かれます。分離されたメッセージング・インフラストラクチャーを持っている場合には、アプリケーション・ターゲット・クラスター・メンバーに必要なメモリーは少なくなります。このトポロジー・パターンは、また、必要なハードウェアに関して、単一クラスター・トポロジー・パターンとは異なっています。複数のクラスター・メンバーを持つ 2 つのクラスターがあるので、分散環境を構築するためにハードウェア要件が増えています。

管理上の観点からは、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの要件は、単一クラスター・トポロジー・パターンの要件よりも増えています。クラスターやクラスター・メンバーを追加すると、必要な管理上の手間が増えます。さらに、メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させているので、ポリシーを作成し、維持する必要があります。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、サポート・アプリケーションおよび Common Event Interface (CEI) コンポーネントはやはりアプリケーション・ターゲット・クラスターの一部です。したがって、CEI を頻繁に使用する環境には、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンも理想的ではないことがあります。小規模から中規模のビジネスの場合、または頻繁なモニター要件または監査要件がないビジネスの場合は、通常、このトポロジー・パターンが適しています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケラビリティ・オプションは、単一クラスター・トポロジー・パターンのオプションと同程度に単純なものです。メッセージング・エンジンが従うのは  $n$  個のポリシーのうちのいずれか 1 つである (各メッセージング・エンジンは 1 つのサーバー上でのみアクティブになる) ため、メッセージング・クラスターにメンバーを追加しても、影響はほとんどありません。ポリシーを使用してサーバーのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させる場合、メッセージングの負担を最大で 3 つのサーバーに分割できます。(SCA.SYSTEM および SCA.APPLICATION のエンジンは、同じサーバー上でアクティブです。) このため、3 つより多くのクラスター・メンバーをメッセージング・クラスターに追加しても、メッセージング・インフラストラクチャーの処理能力は増強されません。アプリケーション・ターゲット・クラスターの拡張は、比較的容易です。ご使用のアプリケーションまたはサポート・インフラストラクチャーのために追加の処理能力が必要な場合は、追加のノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。

2 クラスター・トポロジー・パターンでは、メッセージング・メンバーはメッセージング・クラスターで実行され、その他すべてのデプロイメント環境機能およびコンポーネントの機能グループは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターで実行されます。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- アプリケーション:
  - Business Process Choreographer (BPC) コンテナ
  - Process Server
  - Process Portal
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - Business Process Choreographer Explorer
  - ビジネス・ルール・マネージャー
  - Business Space

- Process Portal
- REST API サービス

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer バス・メンバー
- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

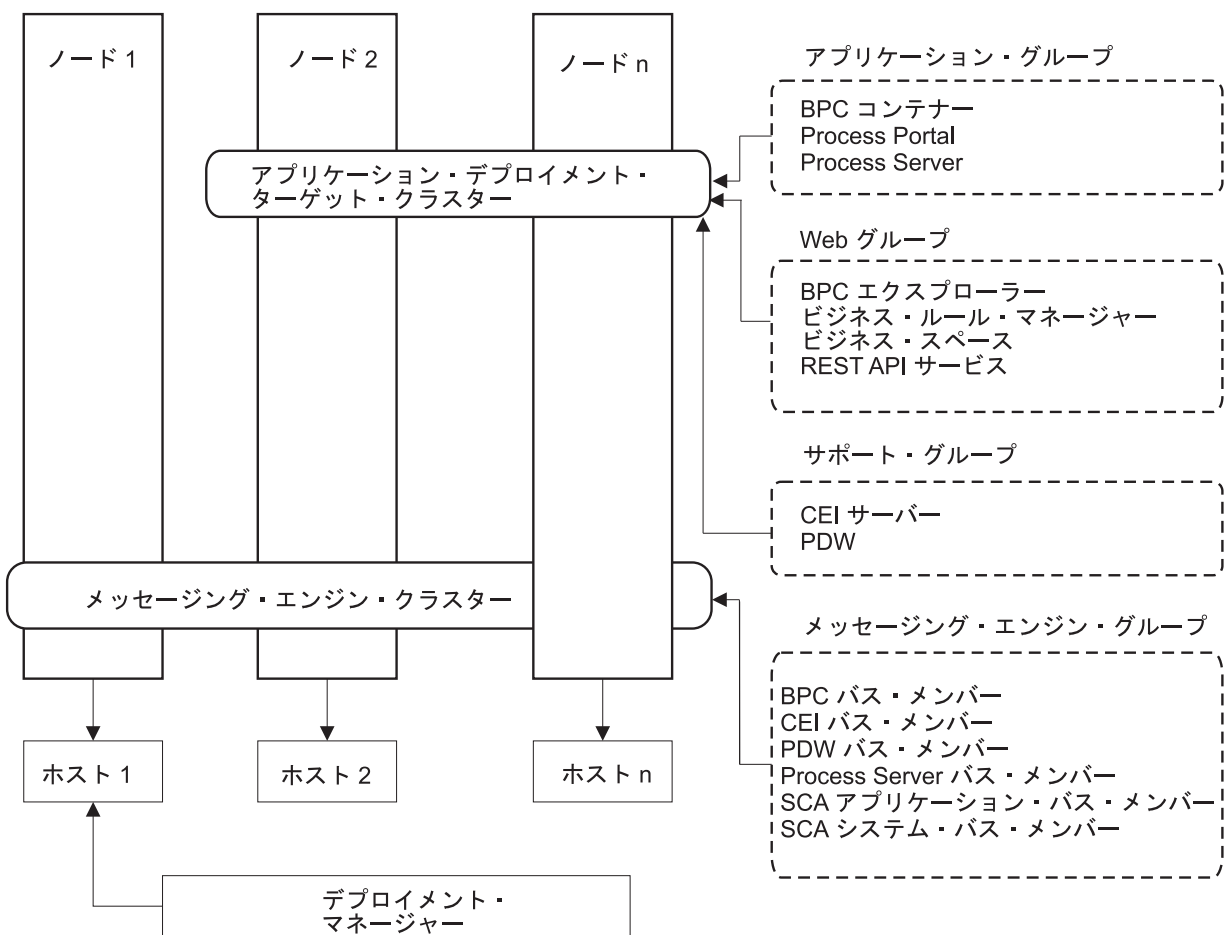


図4. リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

## リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境機能は 3 つの分離したクラスターに分割されます。

この 3 クラスター・トポロジー・パターンでは、コンポーネントはメッセージング・クラスター、サポート・クラスター、およびアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クライアント・クラスターの間で分割されます。IBM Business Process Manager Standard のユーザーの場合、このトポロジー・パターンがデフォルトの優先トポロジーでした。現在は、IBM Business Process Manager Standard のデフォルトの優先トポロジーは 4 クラスターであり、Business Space、Process Portal、および REST API サービスをホスティングする Web クラスターが追加されています。4 クラスター・トポロジーについて詳しくは、『リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン』を参照してください。

それぞれが自身の機能およびアプリケーションを持つ 3 つのクラスターを作成すると、管理上の余分の負担が追加されます。クラスターやクラスター・メンバーを追加するにつれて、パフォーマンス・チューニング計画の規模が大幅に拡大し、トラブルシューティングの負担が大幅に増すことがあります。メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させると、ポリシーの作成および保守に関連する管理上の負担も増します。

スケーラビリティの観点からは、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは優れた柔軟性を提供します。IBM Business Process Manager 内の個別の機能のそれぞれが 3 つのクラスター間で分割されるため、パフォーマンス上のボトルネックを正確に特定でき、クラスター・サイズもかなり容易に調整できます。追加の Common Event Interface (CEI) 処理が必要な場合は、単純にノードおよびクラスター・メンバーをサポート・クラスターに追加することができます。同様に、ビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスクの処理能力を増強する必要がある場合は、ノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。3 つより多くのクラスター・メンバーを追加してメッセージング・インフラストラクチャーを拡張しても処理能力には効果はないので、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケーラビリティの制限事項は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンにも適用されます。

アプリケーション・ターゲット・クラスターは、ビジネス統合アプリケーションのみを実行するので、パフォーマンスのチューニングと診断は、アプリケーション・ターゲット・クラスターがその他の役割を担っているトポロジー・パターンよりも簡単になります。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは、モニターおよび監査のために CEI を頻繁に使用する環境 (IBM Business Monitor を使用する環境を含む) でも理想的です。サポート・インフラストラクチャーをそれ自身のクラスターに分割すると、CEI 用およびサポートを行うアプリケーション用の専用のクラスター・メンバーのセットを持つことになります。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer (BPC) コンテナ
- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer バス・メンバー
- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。



- サポート・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - Business Process Choreographer Explorer
  - ビジネス・ルール・マネージャー
  - Business Space
  - Process Portal
  - REST API サービス

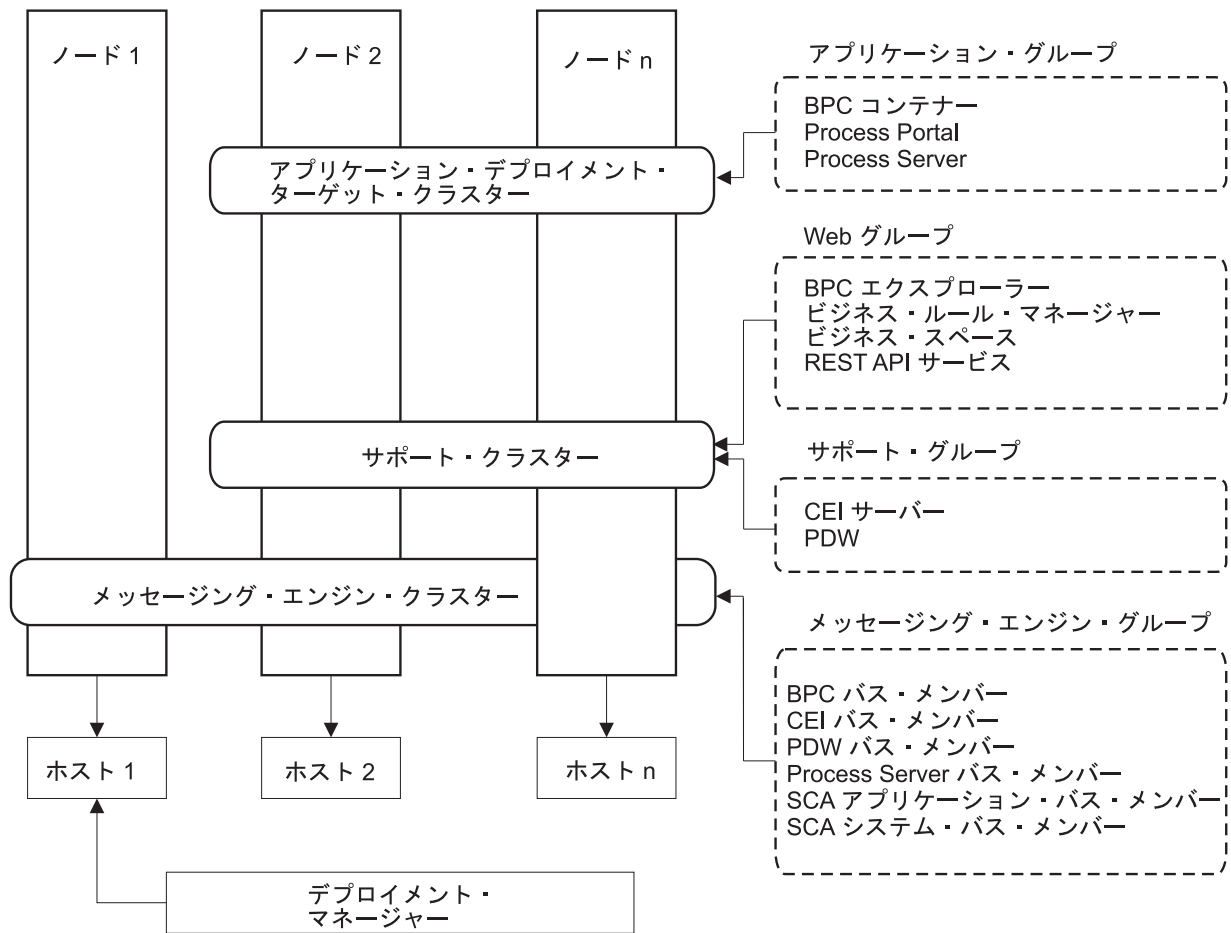


図 5. リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

**重要:** このトポロジーでは、Process Portal を対象とした要求が正しいクラスターに確実に送信されるようにするために、IBM HTTP Server、WebSphere Application Server プロキシ・サーバー、またはリバース・プロキシ・サーバーなどのルーティング・サーバーを構成する必要があります。

### リソース割り振りの例

以下の図は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンを使用してリソースを割り振る 1 つの方法を示しています。この図は、3 つのホストを示しています。ホスト A にはサ

サーバー 1 およびサーバー 3 があります。ホスト B にはサーバー 2、サーバー 4、およびサーバー 5 があります。またホスト C にはサーバー 6 およびサーバー 7 があります。このインストール済み環境に対する最も重い負荷はアプリケーションの使用によって発生するので、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスター (クラスター 3) には、サーバー 1、サーバー 2、およびサーバー 6 のために他の機能のためよりも多くのリソースが割り振られています。

**重要:** ロード・バランシングは、デフォルトの構成であるリモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは使用できません。このデフォルト構成で使用されるメッセージング・エンジン・バスは 1 つだけですが、ロード・バランシング機能を使用する場合、2 つ以上のメッセージング・エンジン・バスが必要になります。

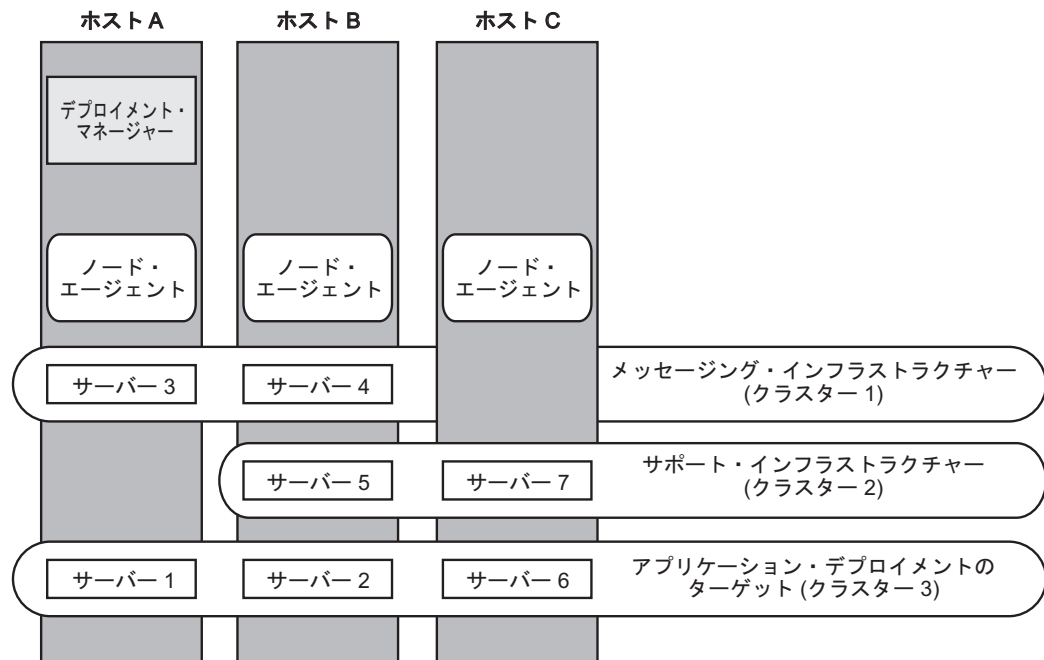


図 6. リソース割り振りの例

## リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン

リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。このパターンでは、デプロイメント環境の機能は 4 つの別個のクラスター間で分割されます。

「リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager Standard および IBM Business Process Manager Advanced の優先トポロジーです。z/OS の場合を除き、これは **configureNode** コマンドのデフォルトでもあります。

この 4 つのクラスターからなるトポロジー・パターンは、サポートする Web アプリケーションが独自のクラスターに常駐するという点を除き、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンによく似ています。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer (BPC) コンテナ
- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer バス・メンバー
- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- CEI サーバー・アプリケーション
- パフォーマンス・データウェアハウス

Web アプリケーション・クラスターは、以下をホスティングします。

- Business Process Choreographer Explorer
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Business Space
- Process Portal
- REST API サービス

「リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。メッセージング機能に 1 つのクラスター、サポート機能に 1 つのクラスター、アプリケーションに 1 つのクラスター、Web ベースの機能に 1 つのクラスターが使用されます。環境内の個々のコンポーネントを詳細に制御できる能力に加え、このトポロジー・パターンの利点は、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンの利点に似ています。

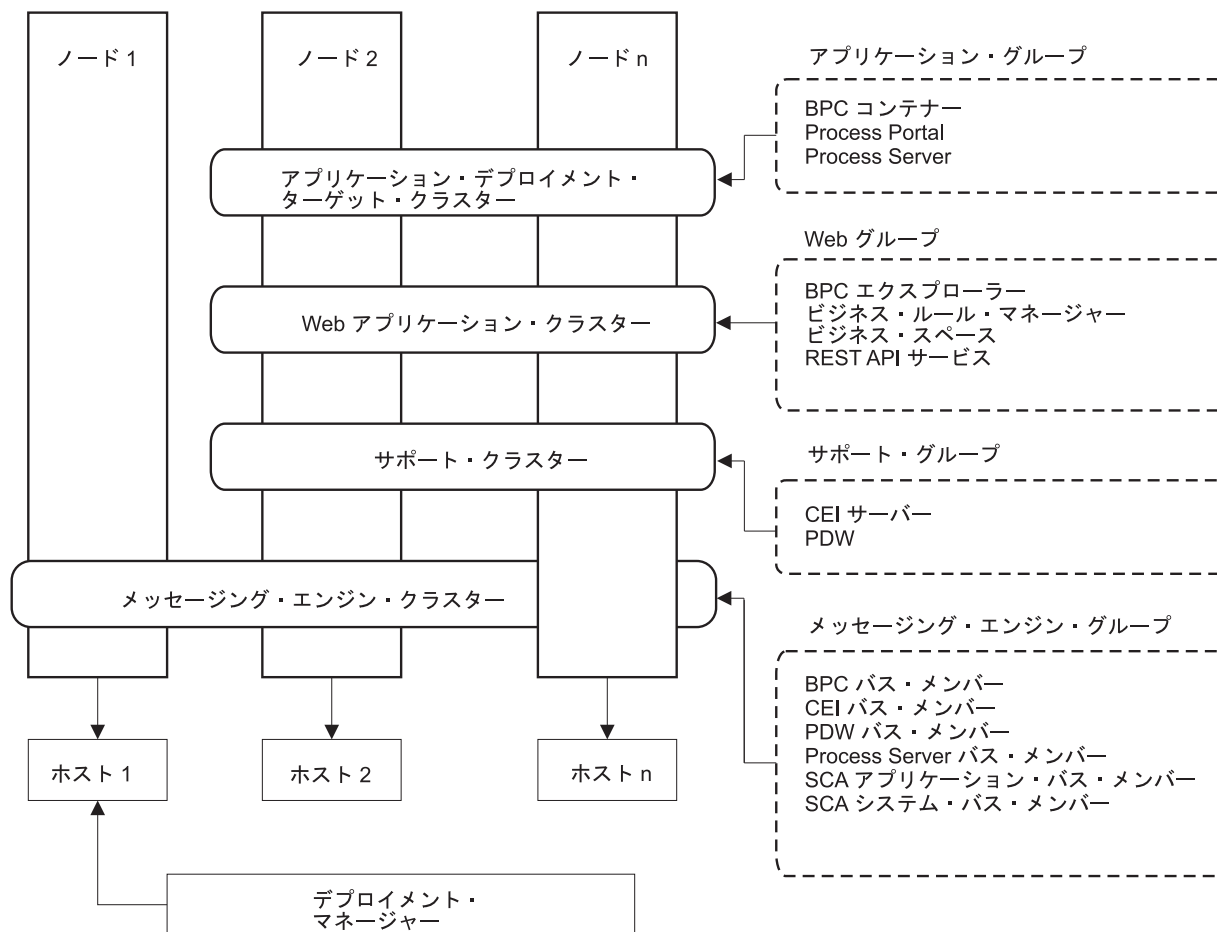


図7. リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン

**重要:** このトポロジーでは、Process Portal を対象とした要求が正しいクラスターに確実に送信されるようにするために、IBM HTTP Server、WebSphere Application Server プロキシ・サーバー、またはリバース・プロキシ・サーバーなどのルーティング・サーバーを構成する必要があります。

## カスタマイズされたトポロジー

カスタマイズされたトポロジーは、お客様の状態に固有の処理要件およびビジネス要件に対処します。これは IBM 提供のトポロジー・パターンではなく、ユーザーが作成し、次に固有のニーズに合うように調整するトポロジーです。

ユーザー自身のデプロイメント環境トポロジーを定義する必要がある場合には、カスタマイズされたトポロジーが抜群に柔軟性の高いものです。IBM 提供のトポロジー (単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート、および リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web) は、すべての IBM Business Process Manager コンポーネントを、それぞれのデフォルトの場所にデプロイします。これらのコンポーネントに関連する追加の保守は、必要でない場合があります。例えば、組織が Common Event Interface (CEI) を必要としない場合は、CEI サポートを使用環境から取り除いたカスタム・トポロジーを作成できます。同様に、ビジネス・ルール・マネージャーの利用を許可しないガバナンス・ルールが組織に存在する場合は、デプロイメント環境からビジネス・ルール・マネージャーを取り除くことができます。

使用環境にデプロイされているコンポーネントを制御できる能力を除けば、カスタム・トポロジーの利点は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジーの利点と同様です。また、欠点も同様です。

**重要:** カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するには、IBM 提供のトポロジー・パターンを使用する場合よりも多くの労力が必要です。IBM 提供のトポロジー・パターンは、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して作成できます。カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行する前に、IBM 提供のトポロジーの中に、ニーズに対処するものがないかを確認してください。管理コンソールのフィーチャーと機能を確かに理解している場合に限って、カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行すべきです。

## トポロジーを選択するための考慮事項

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

トポロジー・パターンを選択する場合には、以下の要因を考慮します。

- 使用可能なハードウェア・リソース
- アプリケーションの呼び出しパターン
- 実装を計画しているビジネス・プロセスのタイプ (割り込み可能か割り込み不可能か)
- Common Event Infrastructure (CEI) をどの程度頻繁に使用する予定であるか
- 個別のスケーラビリティ要件
- 必要になる管理作業

「リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web」の 4 クラスター・トポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager Standard および IBM Business Process Manager Advanced の優先トポロジーですが、最終的に選択はユーザーの個々の要件によって決まります。z/OS の場合を除き、4 クラスター・トポロジーは **configureNode** コマンドのデフォルトでもあります。3 または 4 クラスター・トポロジーを選択する場合は、Business Space 用のルーティング・サーバーを構成する必要があります。

IBM 提供のトポロジーは、Process Server および Process Center トポロジーの両方に適用することができます。したがって、ご使用の Process Center および Process Server Network Deployment 環境は、同様な方法で編成することができます。IBM 提供のトポロジーに基づいて Process Server および Process Center 用の環境を作成する手順も、やはり同様なものです。IBM 提供のパターンに関連する唯一の相違点は、実稼働環境用に推奨されるパターンと、それらのパターンを形成するクラスター上で構成されるコンポーネントです。

各 IBM Business Process Manager 構成で使用できるコンポーネント、フィーチャー、および機能については、『IBM Business Process Manager V8.0.1 の構成機能』を参照してください。

## 圧縮されたトポロジー・パターンの選択基準

以下の表に記載されている情報を考慮してください。これは、使用する実動トポロジーを選択する場合の簡単な手引きです。この表には、各トポロジー・パターンの利点と欠点の要約リストを示します。

提供トポロジー・パターンをサポートする BPM 製品については、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の BPM 製品フィーチャー』を参照してください。

表 17. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
保守するクラスターの数	すべてのコンポーネントに対して 1 クラスター	2 クラスター: アプリケーションおよびサポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター メッセージングに対して 1 クラスター	3 クラスター: アプリケーションに対して 1 クラスター サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター メッセージングに対して 1 クラスター	4 クラスター: アプリケーションに対して 1 クラスター Web インターフェースに対して 1 クラスター サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター メッセージングに対して 1 クラスター
ハードウェア要件	限られた数のハードウェアで実装できる	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	必要なハードウェアが最も多い
非同期対話	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	非同期対話に理想的な環境	非同期対話に理想的な環境
長期実行プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスク	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境
非常に高い CEI 活動の頻度	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境
管理上の負担	比較的少ない	手間が増す	管理の手間が増す	管理に最も多くの手間がかかる
スケーラビリティ	すべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	メッセージング・クラスターのスケーラビリティは制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない) それ以外のすべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	拡張が容易 すべての機能が独立している メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない)	スケールの変更が最も容易 すべての機能が独立している メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (他の BPM 製品を導入するとメリットが出てくる)

表 17. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項 (続き)

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
ルーティング・サーバー	ロード・バランシングおよび高可用性のためのオプション	ロード・バランシングおよび高可用性のためのオプション	Process Portal には必須 (ロード・バランシングおよび高可用性のために使用することも可能)	Process Portal には必須 (ロード・バランシングおよび高可用性のために使用することも可能)

ルーティング・サーバーは、IBM HTTP Server、WebSphere Application Server プロキシ・サーバー、またはその他の Web サーバー、リバース・プロキシ、サーバー、またはネットワーク層 IP スプレイヤーにすることができます。

#### 関連概念:

『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

53 ページの『IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー』

Network Deployment 環境では、ワークロード・バランシングとフェイルオーバーの目的で、IBM HTTP Server をプロキシ・サーバーとして構成できます。着信 HTTP 要求は、アプリケーション・サーバーに直接送信されるのではなく、プロキシ・サーバーに送信されます。このプロキシ・サーバーにより、処理を実行する複数のアプリケーション・サーバーの間で要求が分散されます。

37 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

## トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

管理コンソールで「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する場合、デプロイメント環境のベースにするトポロジー・パターンの可用性は、以下の条件および構成上の決定事項によって異なります。

- IBM Business Process Manager をインストールしたプラットフォーム
- 1 次デプロイメント環境フィーチャーおよび補足フィーチャー

50 ページの表 18 に、トポロジー・パターンと製品フィーチャーとの間の関係を示します。

表 18. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
単一クラスター	1	<p>メッセージング、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を単一のクラスターに含めます。このトポロジー・パターンは、同期メッセージング環境、PoC (概念検証) 環境、またはアプリケーション・テスト環境に役立ちます。</p> <p>単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。</p>	<p>以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager</li> </ul> <p>Advanced 構成および Standard 構成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Monitor</li> </ul>	
リモート・メッセージング	2	<p>このトポロジー・パターンでは、メッセージング環境をアプリケーション・デプロイメント・ターゲットおよびアプリケーション・サポート機能から分離します。このトポロジー・パターンは、日常の運用でメッセージのスループットが重要な要件となる場合に使用します。このトポロジー・パターンは、非同期メッセージング・システムおよびトランザクション・システムの場合に強くお勧めします。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンが処理要件を満たすのに十分である場合がよくあります。</p>	<p>以下の単一の製品インストールによってサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager</li> </ul> <p>Advanced 構成および Standard 構成</p>	



表 18. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係 (続き)

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	3	このトポロジー・パターンでは、メッセージング、Common Event Infrastructure (CEI)、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を別個のクラスターに分離します。ほとんどのビジネスでは、このトポロジー・パターンを使用してデプロイメント環境をサポートできます。このトポロジー・パターンはパフォーマンスを主眼にして設計され、トランザクション処理をメッセージングおよびその他のサポート機能から分離するように設計されているためです。	以下の単一の製品インストールによってサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager</li> </ul> Advanced 構成および Standard 構成	このトポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager 実稼働環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。  このトポロジー・パターンは、以下のインストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager Advanced (デプロイメント環境も含む)</li> <li>IBM Business Process Manager Standard</li> </ul>
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web	4	このトポロジー・パターンは、アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、サポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスター、および Web アプリケーション・デプロイメント (Business Process Choreographer Explorer、Business Rules Manager、Business Space、Process Portal、および REST API サービス) 用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。	以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager</li> <li>IBM Business Monitor</li> </ul> Advanced 構成および Standard 構成	このトポロジー・パターンは、IBM Business Monitor インストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。  標準構成の場合、ご使用のトポロジーに IBM Business Monitor が含まれている場合に限り、このパターンを選択します。

## 各構成の構成可能コンポーネント

IBM Business Process Manager のさまざまな構成をインストールする場合、インストールおよび構成プロセス時に特定のコンポーネントがユーザーに表示されます。Network Deployment の場合、これらのコンポーネントは 1 つのクラスター内か、複数のクラスター内にあることが可能です。

52 ページの表 19 に、各種構成それぞれのコンポーネントを示します。

表 19. IBM Business Process Manager コンポーネント

コンポーネント	拡張	ESB	Std	Exp
Process Server	X		X	X
Process Server メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
パフォーマンス・データウェアハウス	X		X	X
Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
共通データベース	X	X		
Common Event Infrastructure (CEI) メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
サービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) (Service Component Architecture)	X	X		
SCA アプリケーション・メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
Business Space	X	X	X*	X*
Process Portal	X		X	X
Business Process Choreographer	X			
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X			
Business Process Choreographer Explorer	X			

注: IBM BPM Standard および IBM BPM Express では、Business Space 構成は、IBM Business Monitor ウィジェットを含む Process Portal および Business Space スペースのみをサポートします。

#### 関連概念:

47 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

37 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

## 標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかの判断

プロファイルの作成後に、Network Deployment 環境を形成するサーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントを構成するには 2 つの方法があります。IBM 提供のトポロジー・パターンに基づいて、標準化された Network Deployment 環境を作成できます。または、ユーザーのビジネス・プロセス要件に応じてカスタマイズされた方法で、サーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントをセットアップして、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成することもできます。

### 標準化された Network Deployment 環境を作成する理由

IBM 提供のトポロジー・パターン (IBM Business Process Manager にテンプレートとしてパッケージ化) が、ユーザーのビジネス・プロセス要件のすべてまたは大部分を満たしている場合、デプロイメント環境ウィザードを使用して、標準化された Network Deployment 環境を作成します。デプロイメント環境ウィザードを使用すると、いくつかの事前定義トポロジーに従ってクラスターとサーバーを生成し、それらのクラスターとサーバー全体に複数のコンポーネントをすべて同時に構成することができます。

カスタマイズされた Network Deployment 環境ではなく、標準化された Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- サーバー、サーバー・クラスターおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの作成と構成に必要な管理コンソールのフィーチャーおよび機能の使用経験が豊富なユーザーがいません。
- 管理アプリケーションで単一のウィザードを実行して、複数のコンポーネントを構成します。
- データベース設計ファイルをインポートして、データベース関連リソース定義の値を指定します。データベース設計ファイルの作成については、データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成を参照してください。
- 現在の環境にインポートして、必要に応じてカスタマイズできる、事前定義デプロイメント環境が提供されています。

## カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成する理由

ユーザーのビジネス・プロセス要件が複雑で、IBM 提供のトポロジー・パターンでは十分に対応できない場合、管理コンソールのフィーチャーおよび機能を使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成します。

標準化された Network Deployment 環境ではなく、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- 管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成するために必要な経験と知識がユーザーに豊富にあります。
- マルチクラスター環境に必要な概念およびコンポーネント・アーキテクチャーを理解しています。
- IBM Business Process Manager コンポーネント自体を構成する前に、そのコンポーネントをデプロイするクラスターまたはサーバーを構成したいと考えています。

## IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー

Network Deployment 環境では、ワークロード・バランシングとフェイルオーバーの目的で、IBM HTTP Server をプロキシ・サーバーとして構成できます。着信 HTTP 要求は、アプリケーション・サーバーに直接送信されるのではなく、プロキシ・サーバーに送信されます。このプロキシ・サーバーにより、処理を実行する複数のアプリケーション・サーバーの間で要求が分散されます。

**ヒント:** ロード・バランシングには、IBM HTTP Server を必ずしも使用しなければならないわけではありません。他のタイプのルーティング・サーバー (例えば、WebSphere Application Server プロキシ・サーバー、その他の Web サーバー、リバース・プロキシ・サーバー、またはネットワーク層 IP スプレイヤー) を使用できます。

具体的な構成ステップは環境によって異なりますが、IBM HTTP Server を使用したワークロード・バランシングとフェイルオーバーの計画と実装には、以下の一般的なタスクが役立ちます。

1. 『WebSphere Application Server トポロジーのフロントエンドの選択』を参照して、プロキシ・サーバー・フロントエンドの使用方法を詳しく確認します。
2. Web サーバー・プラグインを実装します。このプラグインを、ローカルのデプロイメント・マネージャー・プロファイルの一部としてインストールし、構成します。詳しくは、WebSphere Application Server に関する以下のトピックを参照してください。
  - Web サーバー・プラグインの実装
  - Web サーバー・プラグインのインストールと構成 (このトピックのシナリオ 5 を参照)
3. WebSphere Application Server の Deployment Manager と IBM HTTP Server 管理サーバーの間に Secure Sockets Layer (SSL) を構成します。SSL 接続を受け入れてトランザクションを実行できるよう

に、IBM HTTP Server からの自己署名証明書を受け付けるように Application Server を構成する必要があります。詳しくは、IBM HTTP Server 管理サーバーと Deployment Manager の間の SSL の構成を参照してください。

4. 構成ファイルが Web サーバーを指し、Process Server がオンライン・モードとなり、通信が HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) に対応するように、Process Server クラスタまたは Process Center クラスタをカスタマイズします。Web サーバーと連動する Process Server または Process Center クラスタのカスタマイズを参照してください。

#### 関連概念:

47 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』  
使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

## トポロジーの拡張

8.0.1.2+

トポロジーを拡張するには 3 つの方法があります。すなわち、クラスタへのメンバーの追加、セルの追加、またはデプロイメント環境の追加です。

### クラスタ・メンバーの追加

インフラストラクチャーを拡張する最も簡単な方法は、既存のクラスタにクラスタ・メンバーを追加することです。拡張が必要な箇所に応じて、各クラスタにクラスタ・メンバーを個別に追加することも、クラスタ・メンバーを組み合わせて追加することもできます。新規ノードをデプロイメント環境に追加することで、アプリケーション・クラスタ・メンバーまたはメッセージング・クラスタ・メンバー、あるいはその両方を追加することができます。この方法でクラスタを拡張することにより、アプリケーションのスループットを改善することができます。

以下のいずれかの状態に該当する場合は、クラスタ・メンバーの追加を検討してください。

- 新しいアプリケーションをご使用の既存の環境にデプロイする計画がある。
- ご使用の既存のアプリケーションに対するボリューム要件の増大を見込んでいる。
- フェイルオーバーなどの操作上の目的のためにキャパシティーの増大を必要とする。

ただし、既存のクラスタの拡張が適切でない場合もあります。以下の場合には、別の解決方法を検討してください。

- さまざまなビジネス目的を果たすアプリケーションまたはアプリケーション・セットがあり、これらのアプリケーションを個別に保持したい場合。これらの個別のアプリケーションを同じデプロイメント環境にデプロイする場合は、その他の点では無関係のビジネス・ドメインの間の依存関係を導入することがあります。依存関係は、無関係のアプリケーションの信頼性が低い場合などに、メンテナンス・スケジュールやアプリケーション・アベイラビリティなどに影響を与える可能性があります。
- パフォーマンスの特性を分析すると、計画デプロイメントが現行のデプロイメント・ターゲットの限度を超えてご使用のシステムを強要する可能性があることが分かります。計画デプロイメントで、新しいアプリケーションまたは新規バージョンのアプリケーションから多くのモジュールを導入しすぎ、既存のメモリー・スペースでは実行できないか、あるいはデータベース表を過度に使用しすぎる場合があります。

## セルの追加

既存のクラスターの拡張は適切な解決方法ではないと確信した場合は、別のセルでの別のデプロイメント環境の作成について検討してください。この方法では、増大のための最大限の余地、拡張された機能要件のための最大限の柔軟性、およびご使用のアプリケーションの完全な独立性が得られます。

別のセルを追加するには、グローバル・セキュリティ設定などの、共通のセル・レベルの構成を複製します。複数のコンソールを使用して、個別の管理コンソールや障害のあるイベント・マネージャーなどの、ご使用のアプリケーションを管理します。

## デプロイメント環境の追加

上記の 2 つのオプションが要件を満たさない場合は、ご使用のトポロジーを拡張するための第 3 の代替方法があります。同じセル内のアプリケーションに対して、2 つの独立したデプロイメント環境を作成することができます。

以下のいずれかの状態に該当する場合は、別のデプロイメント環境の追加を検討してください。

- ご使用の環境のキャパシティを拡張する必要があるが、クラスター・メンバーの追加では要件を満たさない場合。
- 複数のプロセス・アプリケーションを個別の Java™ 仮想マシン (JVM) に分離させ、各アプリケーション・グループを特定の JVM セットに関連付けたい場合。
- セキュリティまたはノードを毎回構成する必要なしに、複数のテスト環境を迅速にセットアップしたい場合。

2 番目のデプロイメント環境は IBM Process Server 専用であり、IBM Process Center 用ではありません。セルごとに 1 つの Process Center が必要です。そうでないと、単一のリポジトリ・エクスペリエンスが失われます。

同じセル内の 2 つのデプロイメント環境の実行は、調査および計画を要する拡張トポロジーです。

## 同じセル内の複数のデプロイメント環境に関する考慮事項

8.0.1.2+

この拡張トポロジーを実装する前に、考慮すべき重要事項がいくつかあります。

### 保守に関する考慮事項

同じセル内に複数のデプロイメント環境がある場合は、保守がより困難になります。

- セル内の 1 つのアプリケーションに問題がある場合は、影響を受けるデプロイメント環境に対してのみインテリム・フィックスを適用することはできません。インテリム・フィックスは、セル内のすべてのサーバー、デプロイメント環境、およびクラスターに影響を及ぼします。1 つのアプリケーションに対するフィックスは、セル内で実行されているその他のアプリケーションに予期せぬ影響を及ぼすことがあります。
- いくつかのデプロイメント環境が同じセル内にある場合は、IBM からのインテリム・フィックスをテストすることがより困難になります。個別のセルは、フィックスが他のアプリケーションを中断させないようにするのに役立ちます。
- 1 つのクラスター・セットにインテリム・フィックスを適用するためにご使用のすべてのサーバーを停止させる必要が生じることがあり、その結果、同じセルを使用しているすべてのクラスター・セットにわたりダウン時間が生じます。サーバーの的確な配置は多種多様ですが、サーバーの一般的な配置は、

各ノード上の各クラスターについて 1 つのメンバーを保持することです。このような配置では、ノードを共有するすべてのサーバーおよびクラスター・メンバーは、インテリム・フィックスを適用する手順によって影響を受けます。

## アプリケーションに関する考慮事項

アプリケーションが同じセル内の 2 つの異なるデプロイメント環境とどのように併用されるかについて考慮してください。

- セル内に同じサービス・コンポーネント・アーキテクチャー (SCA) アプリケーションの 2 つのインスタンスをインストールすることはできません。多くの SCA アプリケーションをインストールできますが、異なるモジュール名を持っている必要があります。モジュールの名前を変更するには、**SCARename** ユーティリティを使用できます。

この問題の一例として、同じセル内で 2 つのデプロイメント環境を含んだ環境を作成してから、BPEL プロセスを含んだ IBM BPM エクスポート (.twx) ファイルをその両方の環境にインポートしようとする場合、SCA モジュール名が同じであるため、2 番目のインポートは失敗します。SCA モジュール名はセル内で固有のものでなければなりません。このいずれかの名前を変更するには、TWX ファイルから EAR ファイルを抽出し、その名前を変更するために **SCARename** ユーティリティを呼び出してから、新しい EAR ファイルをまとめて TWX ファイルに入れます。

この問題を管理するには、いくつかの方法があります。

- ターゲット・デプロイメント環境の名前を組み入れるモジュール命名規則を使用できます。
- Process Center 内のプロセス・アプリケーションの一部としてモジュールをデプロイする場合は、ターゲット・デプロイメント環境の名前を組み入れるプロセス・アプリケーション命名規則を使用できます。
- EAR ファイルとして直接デプロイする場合は、バージョン名でターゲット・デプロイメント環境の名前を組み入れる命名規則が使用されるモジュール・バージョン管理方式を使用できます。
- 実行時バインディングを機能させるには、新規バージョンの BPEL ビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスク (テンプレート) を、前のバージョンと同じデプロイメント環境にデプロイする必要があります。バインド先の正しいターゲットは、同じデプロイメント環境内になければなりません。プロセス間またはヒューマン・タスク間の親子関係はデプロイメント環境に従うようにします。親子のフローのような、JVM を経由すべきでない関係もあります。
- 各 Process Portal には各デプロイメント環境に対して 1 つのビューがあり、固有のコンテキスト・ルートが必要です。デプロイメント環境ごとに異なる Web サーバーを使用すべきかどうか検討してください。使用しない場合は、アプリケーション用の固有のコンテキスト・ルートを確保するために異なる仮想ホストを提供する必要があります。

## 管理に関する考慮事項

同じセル内に複数のデプロイメント環境がある場合の管理がどのように機能するかについて考慮してください。

- 各アプリケーション・クラスターには、対応するサポート・クラスターおよびメッセージング・エンジン・クラスターがなければなりません。
- すべてのデプロイメント環境からの失敗したイベントは、単一のセル・スコープ・テーブル・セットに保管されます。
- SCA モジュール (BPEL プロセス、カレンダー、ルール、セレクター、リレーションシップなど) を含むすべてのアプリケーション用に固有の名前を確保する必要があります。

- カスタマー・アプリケーション用だけでなく IBM BPM アプリケーション用に固有の名前を確保する必要があります。
- クラスタ・セットごとにデータベースおよびスキーマを追加する必要があります。これにより、管理責任が増大します。各クラスタ・セットには、以下に関するデータベースおよびスキーマが必要です。
  - プロセス・データベース
  - Performance Data Warehouse データベース
  - デプロイメント環境レベルの共通データベース

DB2 では個別のデータベース・インスタンスは不要です。1 つのデータベースを使用する場合は、Process Server および Performance Data Warehouse ごとに個別のユーザー ID を提供する必要があります。これらのユーザー ID はスキーマとして使用され、テーブルを個別の状態に保ちます。

---

## データベース構成の計画

データベース構成の計画を立てるには、該当ソフトウェアを使用するためにどのデータベースが所定の位置になければならないか、また構成する必要があるか、IBM Business Process Manager のどのコンポーネントを使用するのか、およびそれらに関連するデータベース、データベースを管理するのに必要なタスク、および使用するデータベース・システムのセキュリティ特権を知っている必要があります。

## データベースと IBM Business Process Manager トポロジー

データベース構成は、IBM Business Process Manager トポロジー全体の一部です。構成アクティビティーについては、Process Center と Process Server のデータベースがトポロジーおよびランタイム処理に関係する場合の相違を理解する必要があります。

Process Center は同じデータベース・スキーマを共有しますが、保管されるインスタンス・データには具体的な違いがあります。Process Center および Process Server のインスタンスごとに、共有スキーマの別個のインスタンスがなければなりません。

「標準プロファイル作成」オプションを使用する場合、データベース設計ツールは、デフォルトのデータベースの構成のために自動的に SQL スクリプトを生成します。

インストール時にスタンドアロン開発プロファイル (qwps) を作成すると、必要なデータベースが自動的に構成されます。ユーザーはデータベース要件を設計する必要はありません。

データベース表を手動で作成する場合は、データベース設計ツールを使用して SQL スクリプトを作成します。このツールを使用すると、生成される SQL スクリプトは必ず固有になるからです。

**制約事項:** Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

ユーザーは、データベースの構成情報を、以下のいずれかの方法でプロファイル作成プロセスに取り込むことができます。

- データベース設計ファイルを参照する
- プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデータベース構成パラメーターの設定

データベース構成を実装するために選択する方法に関係なく、プロファイル作成プロセスの一環として SQL スクリプトを生成する必要があります。 Process Server 間または Process Server のクラスター間で SQL スクリプトを再使用することはできません。

データベースを構成する前に、ソリューション・アーキテクトとデータベース管理者は、データベース・トポロジに関して共同作業を行って、データベース表を保管する最善の方法を理解する必要があります。例えば、表は共通データベースと同じデータベースに保管されるのかどうか。あるいは、表は別個のデータベースにスタンドアロン・プロファイルとして保管されるのかどうか。別個のデータベースは、データベース構成を単純化するので、役に立つ可能性があります。別個のデータベースを使用して、スタンドアロン・サーバー環境で、共通データベースとは別個にコンポーネント・データベースを調整し管理することが可能な場合もあります。

## Process Center データベースおよび Process Server データベース

IBM Business Process Manager Express および IBM Business Process Manager Standard にはデータベース構成パターンが含まれており、したがって各ランタイム環境用にデータベース設計を作成することができます。いずれかのパターンを使用して、Process Server および Performance Data Warehouse Server コンポーネント用のデータベース構成を作成することができます。

IBM Business Process Manager Advanced には、同じデータベース構成パターンに加えて、**bpm.advanced.standalone.dbDesign** と呼ばれる追加パターンが含まれています。**bpm.advanced.standalone.dbDesign** パターンを、共通データベース内の Process Server および Performance Data Warehouse サーバー・コンポーネント用のデータベース・スキーマとして使用することができます。Process Server と Performance Data Warehouse ランタイム環境を結合するスタンドアロン・プロファイルを作成する場合、このパターンを使用します。このパターンを共通データベース用に使用するには、カスタム・スキーマ値は指定されません。

デプロイメント環境ウィザードによる procsry および pctrsry データベース設計も使用することができます。標準 (standard) 構成または拡張 (advanced) 構成内の Network Deployment 環境については、これらのパターンは、デプロイメント・ホスト上の Process Server または Process Center のセットアップの一部です。

## 共通データベースを構成する方法とタイミングの選択

必須のデータベース表は、IBM Business Process Manager の構成前または構成後に作成することができます。いずれの場合も、IBM Business Process Manager のサーバーがデータベースを使用しようとする前に、データベース (テーブルやスキーマなども含む) が既に存在している必要があることに注意してください。

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:
  - IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースの作成のみに使用できます。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
  - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅



らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。

- データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。

## サポートされているデータベース・タイプ

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

IBM Business Process Manager でサポートされるデータベースのリストについては、60 ページの表 20を参照してください。

IBM Business Process Manager には、DB2、Oracle、および SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージ化されています。JDBC ドライバーについて (バージョンおよびレベル情報を含む) は、「Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager」の Web ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager でパッケージ化されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルの提供は、お客様の責任において行ってください。

DB2 Express データベースは IBM Business Process Manager ソフトウェアに組み込まれており、IBM Business Process Manager のインストール時に自動的にインストールおよび構成することができます。

**重要:** Linux DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

注: 現在、DB2 Express インストーラーには、IBM Business Process Manager インストーラーから渡されるプロパティーでの各国語 (NL) スtringの取り込み関する、既知の制約事項があります。DB2 Express のインストール時に DB2 Express に渡される以下の値に、NL スtringを組み込むことはできません。

Linux Windows

- Linux インスタンス・ユーザー名: `bpminst`
- Linux `fenced` ユーザー名: `bpmfenc`
- Linux 管理サーバー (DAS) ユーザー名: `bpmadmin`
- Windows 管理ユーザー名: `bpmadmin`

ご使用のシステム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠したパスワードを選択してください。

各データベースは、文字スStringのパラメーター `dbType` で表されています。`dbType` パラメーターは、`manageprofile` コマンド行ユーティリティーのパラメーターとして使用されます。サポートされているデータベースの `dbType` の値を 60 ページの表 20 にまとめます。

表 20. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 dbType の値および制約事項

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
DB2 Express	DB2_UNIVERSAL	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	DB2_UNIVERSAL	
DB2 データ・サーバー	DB2_DATASERVER	ダウンロード元: 9.7 GA レベル フィックスバック
DB2 for z/OS	DB2UDBOS390	DB2 for z/OS をデータベース管理システムとして使用する場合は、 <b>createDB2.sh</b> スクリプトを使用してデータベースおよびデータベース・オブジェクトを構成する必要があります。インストーラ・ウィザードは、このタイプのデータベースを作成できません。
Microsoft SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC 1.2 および 2.0 = MSSQLSERVER_MICROSOFT	Microsoft SQL Server JDBC 3.0 もサポートされていますが、プロファイル管理ツールには個別のデータベース・タイプとしてリストされません。Microsoft SQL Server JDBC 3.0 をデータベース管理システムとして使用する場合は、Microsoft SQL Server JDBC 2.0 のデータベース・タイプを選択すると、バージョン 3.0 がサポートされます。 <b>注:</b> Process Server および Performance Data Warehouse データベースを、CommonDB で共有することはできません。 <b>注:</b> ラテン語以外のロケールを指定する必要がある場合、 <b>createDatabase.sql</b> スクリプトは使用しないでください。大/小文字を区別しない別のロケールを指定する必要があります。 <b>重要:</b> データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。XA トランザクションを構成しないと、サーバーの始動時にエラーが発生することがあります。XA トランザクションの構成を参照してください。
Oracle	ORACLE	インストーラ・ウィザードは、Oracle 用のこのタイプのデータベースを作成できません。

ファイル・パスとファイルの命名規則で使用する 2 番目のパラメーターは、*feature* です。このパラメーターでは、対象になっているデータベースを指定します。表 21 は、各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* パラメーターをまとめたものです。

表 21. 各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* 名

データベース	フィーチャー
Process Server	ProcessServer
パフォーマンス・データウェアハウス	PerformanceDW
共通データベース	CommonDB

表 21. 各データベースとそれぞれに関連付けられている feature 名 (続き)

データベース	フィーチャー
エンタープライズ・サービス・パスのロガー・メディエーション・データベース	EsbLoggerMediation

IBM Business Process Manager をインストールすると、データベース・スクリプトが以下の場所に作成されます。

`INSTALL_ROOT/dbscripts/feature/dbType`

`feature` は以下のいずれかです。

- CommonDB
- EsbLoggerMediation
- ProcessServer
- PerformanceDW

ほとんどの JDBC プロバイダーの作成は、指定されたデータベース・パラメーターに基づいて、プロファイルの作成中に実行されます。ただし、Business Process Choreographer JDBC プロバイダーは、スクリプトまたは管理コンソールを使用して、後で作成されます。適切な JDBC プロバイダーがサーバーまたはクラスターに存在していれば、その既存の JDBC プロバイダーが使用され、新しいプロバイダーの作成は省略されます。

#### 関連概念:

63 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

#### 関連情報:



DB2 データベースを使用したカスタム・ユーザー・レジストリー・データの保持

## データベース命名の制約事項

データベースは、IBM Business Process Manager の複数のインストール済み環境にわたって再使用することはできません。IBM Business Process Manager の各インストール済み環境は、関連するデータベースを排他使用する必要があります。データベースは、一意的に識別できるように構成される必要があります。

選択するインストール・パスに応じて、インストールに関連するデータベースはデフォルト名を使用して構成されることがあります。例えば、IBM DB2 上の IBM Business Process Manager Advanced に関連付けられたデータベースは、以下のデフォルト名を持ちます。

- Process Server - BPMDB
- Performance Data Warehouse - PDWDB

DB2 を使用する 2 つの IBM Business Process Manager のインストール済み環境がある場合には、インストール済み環境のうちの 1 つに対して、デフォルト値を受け入れるのではなく名前を指定するインストール・パスを選択する必要があります。

データベース名の固有性を確実にするために、データベース名を求めるプロンプトを出すインストール・パスを選択します。

例えば、「標準」インストール・パスを使用するときに、データベース名を求めるプロンプトが出されません。デフォルトの DB2 Express ではなく既存のデータベース・サーバーを使用するオプションを選択します。

**注:** インストール後にプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するときに、プロファイル管理ツールのどのパス（「標準」または「拡張」）を選択しても、データベース名を求めるプロンプトが出されます。唯一の例外は、ご使用のデータベース構成用のデータベース設計ファイルを使用する場合です。データベース設計ファイルには、データベース名、ユーザー名、およびパスワード情報が含まれています。したがって、プロファイル管理ツールはこの情報を求めるプロンプトは出しません。

以下のケースでは、対照的に、ユーザーに対してデータベース名を求めるプロンプトは出されません。

- **Installation Manager** はプロファイルを作成するオプションを提供しますが、データベース名にはデフォルト値を割り当てます。
- 「標準」インストール・パスを使用しており、インストール・イメージと一緒にパッケージされている DB2 Express をインストールするよう選択しています。データベース名にはデフォルト値が割り当てられます。

追加の制約事項がデータベース名の命名に適用されます。これらの制約事項は、使用しているデータベース・サーバーによって決まります。

## IBM Business Process Manager Standard のインストール

IBM DB2 および Microsoft SQL Server データベースの場合、以下の制約事項が適用されます。

- **Process Server** および **Performance Data Warehouse** のコンポーネントは別個のデータベースになければなりません。
- **Process Server** および **Performance Data Warehouse** のコンポーネントは、大/小文字の区別のあるデータベースはサポートしません。これらのデータベースは大/小文字を区別しないものでなければなりません。

Oracle データベースの場合、**Process Server** および **Performance Data Warehouse** のコンポーネントは別個のスキーマ/ユーザーを使用しなければなりません。これらは同じインスタンスを使用することができます。

## データベース・タイム・ゾーンに関する考慮事項

IBM Business Process Manager に使用するデータベース・サーバーのタイム・ゾーンは変更しないでください。

データベースに保管されているタイム・スタンプは、データベース・サーバーに対して構成されているタイム・ゾーンに基づいています。このデータベース・タイム・ゾーンへの依存関係のため、既にタイマーがスケジュールされている場合は、既存のセットアップのデータベース・サーバーのタイム・ゾーン構成を変更しないでください。データベース・サーバーのタイム・ゾーン構成を変更すると、予期しない時刻に既存のタイマーがトリガーされる可能性があります。

フェイルオーバーまたは災害復旧の理由で 2 番目のデータベース・サーバーが存在する場合は、両方のデータベース・サーバーを、それらの物理的な位置に関係なく、同じタイム・ゾーンに構成してください。

## JDBC ドライバーおよびロケーション

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれています。

表 22. 製品に付属しているサポート対象の JDBC ドライバーとそのロケーション

サーバー	ドライバーの説明	ドライバーのロケーション	コメント
DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver 3.61.65	WAS_HOME/jdbcdrivers/DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver は、分散プラットフォームおよび z/OS プラットフォームでのデフォルトの DB2 ドライバーです。
	IBM Data Server Driver for JDBC and SQLJ 4.11.69		
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.2.0.1.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/Oracle	
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0 は、SQL Server 1.2、2.0、および 3.0 をサポートしています。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれていません。

表 23. 製品に付属していないサポート対象の JDBC ドライバー




サーバー	ドライバーの説明
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.1.0.6
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 1.2 および 3.0

### 関連概念:

59 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

### 関連情報:

-  IBM Business Process Manager Advanced のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細
-  IBM Business Process Manager Standard のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細
-  IBM Business Process Manager Express のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細

## 非管理ユーザーの考慮事項

インストール中には、入力できるように、データベースの詳細を覚えておいてください。

このトピックで説明する考慮事項は、「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールすることを選択したインストール・シナリオに適用されます。「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールを行うと、プロファイルが自動的に作成されます。

注: テスト・プロファイルは、IBM BPM 拡張構成で使用する場合にのみ該当します。

非管理ユーザーとしてインストールを行う場合は、以下の選択肢があります。

注：製品に組み込まれている（オプションでインストールした）DB2 Express データベースを使用する場合は、以下の基準を満たしている必要があります。

- 他のバージョンの DB2 をすべてシステムからアンインストールする
- 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする

## データベース特権

サポートされるデータベース管理システムごとに、データ・ストア・テーブルの作成またはアクセスに必要な権限を決めるために、データベース特権を設定します。

インストーラー、プロファイル管理ツール、データベース設計ツール、またはスクリプトを使用してスキーマを作成する場合、テーブルを作成する権限のあるユーザーID が必要です。テーブルが作成された後では、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行う権限が必要です。

次の表では、データ・ストアにアクセスするために必要なデータベース特権について説明します。

表 24. データベース特権

データベース・タイプ	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
DB2	ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。ユーザー ID にはシステム特権 CREATEDBA および CREATEDBC が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。  IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 データベース特権について詳しくは、『66 ページの表 25』を参照してください。
DB2 for z/OS	ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。データベースのストレージ・グループを作成するには、ユーザー ID には CREATESG、CREATEDBA、および CREATEDBC システム特権が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。  IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 for z/OS データベース特権について詳しくは、67 ページの表 26 を参照してください。

表 24. データベース特権 (続き)

データベース・タイプ	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
Oracle	<p>ユーザー ID には、データ・ストア・スキーマ内にリレーショナル・テーブルおよび索引を作成するための十分な特権が必要です。またデータベースには、スキーマの所有者のデフォルト・テーブル・スペースにおけるスペース割り当て量も必要です。</p>	<p>ユーザー ID には、データベースに接続するための SESSION 特権が必要です。データ・ストア・スキーマと、データベースに接続するコンポーネントの両方を同じユーザー ID が所有している場合、このユーザー ID にはテーブルを処理するのに十分な特権が設定されています。そうでない場合、ユーザー ID には、データ・ストアを構成するテーブルに関する SELECT、INSERT、UPDATE、ALTER、および DELETE オブジェクト特権と、TRUNCATE TABLE ステートメントの使用を可能にする DROP ANY TABLE システム特権が必要です。ユーザー ID には CREATE INDEX 特権も必要です。</p> <p>Oracle データベースの作成には UTF-8 文字セットを使用してください。この文字セットは、IBM Business Process Manager でサポートされるその他のカスタム文字セットをサポートしています。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する Oracle データベース特権について詳しくは、『69 ページの表 27』を参照してください。</p>
SQL Server	<p>理想的な場合、ユーザー ID には IBM Business Process Manager に使用されるデータ・ストアに関する DB OWNER 特権が必要です。</p>	<p>SQL Server および Windows の認証が SQL Server ログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルの所有者か、または TRUNCATE TABLE ステートメントを実行する十分な権限を持つグループのメンバーでなければなりません。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する SQL Server データベース特権について詳しくは、『73 ページの表 28』を参照してください。</p>

以下の表で、インストール特権は、製品のインストールおよび構成に必要な特権です。実行時特権は、製品の実行に必要なデータベース特権です。

66 ページの表 25 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の DB2 データベース特権について説明しています。

表 25. DB2 データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE
Business Space	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。 データベース特権を参照してください。
Process Server または Performance Data Warehouse	データベースの作成に必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATEDBA</li> <li>• CREATEDBC</li> </ul> データベースにスキーマおよびストアード・プロシージャを取り込むために必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATETAB</li> <li>• CREATEIN</li> <li>• DROPIN</li> </ul> 作成されたテーブルに関するその他の必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALTER</li> <li>• DELETE</li> <li>• INDEX</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul>	Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• DELETE</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul> 実行時ユーザーには、createProcedure_ProcessServer.sql スクリプト内の 6 つのストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。  実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、リストされた特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETAB 特権も必要です。  システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、syscat.tables、syscat.views、syscat.columns、syscat.tabconst、および sysibm.sysdummy1 に関する SELECT 権限が必要です。



データベースを作成し、DB2 ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
create database database_name automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to database_name;
grant dbadm on database to user user_name;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

表 26 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに関する追加の DB2 for z/OS データベース特権について説明します。

表 26. DB2 for z/OS データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE、USAGE
Business Space	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。

表 26. DB2 for z/OS データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Process Server または Performance Data Warehouse	<p>データベースの作成に必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATESG</li> <li>• CREATEDBA</li> <li>• CREATEDBC</li> </ul> <p>データベースにスキーマおよびストアード・プロシージャを取り込むために必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATETS</li> <li>• CREATETAB</li> <li>• CREATEIN</li> <li>• DROPIN</li> </ul> <p>作成されたテーブルに関するその他の必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALTER</li> <li>• DELETE</li> <li>• INDEX</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul>	<p>Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• DELETE</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul> <p>実行時ユーザーには、<code>createProcedure_ProcessServer.sql</code> スクリプト内の 6 つのストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。</p> <p>実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、リストされた特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETS および CREATETAB 特権も必要です。</p> <p>システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、<code>sysibm.systables</code>、<code>sysibm.sysviews</code>、<code>sysibm.syscolumns</code>、<code>sysibm.syschecks</code>、<code>sysibm.sysrels</code>、<code>sysibm.systabconst</code>、<code>sysibm.systablespace</code>、および <code>sysibm.sysdummy1</code> に関する SELECT 特権も必要です。</p>

69 ページの表 27 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の Oracle データベース特権について説明しています。

**重要:** 以下のすべてのコンポーネントを 1 つの Oracle データベースに対して構成する場合は、コンポーネントごとに指定されているすべての特権のスーパーセットを作成することができます。以下の 4 つのコンポーネントを多数のデータベースに対して構成する場合は、データベースごとに異なる特権を設定できません。

表 27. Oracle データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。CREATE USER、ALTER USER、CREATE ANY TABLE、ALTER ANY TABLE、DROP ANY TABLE、SELECT ANY TABLE、UPDATE ANY TABLE、INSERT ANY TABLE、DELETE ANY TABLE、CREATE ANY INDEX、DROP ANY INDEX、CREATE ANY VIEW、DROP ANY VIEW、CREATE ANY PROCEDURE、DROP ANY PROCEDURE、CREATE ANY SEQUENCE</p> <p>以下の特権は、DBA が既に共通 DB ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。CREATE TABLE、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE SEQUENCE</p>	<p>以下の特権は、DBA が既に共通 DB ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権: CREATE PROCEDURE CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる): SELECT INSERT UPDATE DELETE</p>
Business Space	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。CREATE USER、ALTER USER、CREATE ANY TABLE、ALTER ANY TABLE、DROP ANY TABLE、SELECT ANY TABLE、UPDATE ANY TABLE、INSERT ANY TABLE、DELETE ANY TABLE、CREATE ANY INDEX、DROP ANY INDEX、CREATE ANY VIEW、DROP ANY VIEW、CREATE ANY PROCEDURE、DROP ANY PROCEDURE</p> <p>以下の特権は、DBA が既に Business Space ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。CREATE TABLE、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE</p>	<p>以下の特権は、DBA が既に Business Space ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権: CREATE PROCEDURE CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる): SELECT INSERT UPDATE DELETE</p>
Business Process Choreographer	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE、CREATE ANY TABLE、ALTER ANY TABLE、DROP ANY TABLE、SELECT ANY TABLE、UPDATE ANY TABLE、INSERT ANY TABLE、DELETE ANY TABLE、CREATE ANY INDEX、DROP ANY INDEX、CREATE ANY VIEW、DROP ANY VIEW、CREATE ANY PROCEDURE、DROP ANY PROCEDURE</p> <p>以下の特権は、DBA が既に Business Process Choreographer ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。CREATE TABLE、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE。</p>	<p>以下の特権は、DBA が既に Business Process Choreographer ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権: CREATE PROCEDURE CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる): SELECT INSERT UPDATE DELETE</p>

表 27. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Common Event Infrastructure (CEI)	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。CREATE USER、ALTER USER、CREATE INDEXTYPE、ALTER ANY TABLE、ALTER SESSION、CREATE TABLESPACE、CREATE PROFILE、CREATE ROLE、CREATE TEMPORARY TABLESPACE</p> <p>以下の特権は、DBA が既に Common Event Infrastructure ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。CREATE TABLE、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE。</p>	<p>以下の特権は、DBA が既に Common Event Infrastructure ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権: CREATE PROCEDURE</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる): SELECT INSERT UPDATE DELETE</p>
メッセージング・エンジン	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。CREATE USER、ALTER USER、CREATE ANY TABLE、ALTER ANY TABLE、DROP ANY TABLE、SELECT ANY TABLE、UPDATE ANY TABLE、INSERT ANY TABLE、DELETE ANY TABLE、CREATE ANY INDEX、DROP ANY INDEX</p> <p>以下の特権は、DBA が既にメッセージング・エンジン・ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。CREATE TABLE</p>	<p>以下の特権は、DBA が既にメッセージング・エンジン・ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権: DROP ANY TABLE</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる): SELECT INSERT UPDATE DELETE</p> <p>ヒント: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。『データベース特権』を参照してください。ユーザーにこの特権を与えたくない場合は、調整によってこれを回避できます (ただし、パフォーマンス・コストが発生します)。『チューニング・プロパティの設定 (Setting tuning properties)』を参照してください。</p>

表 27. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Process Server	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。</p> <p>CREATE USER</p> <p>ALTER USER</p> <p>CREATE TABLESPACE</p> <p>CREATE ANY TABLE</p> <p>ALTER ANY TABLE</p> <p>DROP ANY TABLE</p> <p>SELECT ANY TABLE</p> <p>UPDATE ANY TABLE</p> <p>INSERT ANY TABLE</p> <p>DELETE ANY TABLE</p> <p>LOCK ANY TABLE</p> <p>CREATE ANY INDEX</p> <p>DROP ANY INDEX</p> <p>CREATE ANY VIEW</p> <p>DROP ANY VIEW</p> <p>CREATE ANY PROCEDURE</p> <p>DROP ANY PROCEDURE</p> <p>CREATE ANY SEQUENCE</p> <p>DROP ANY SEQUENCE</p> <p>以下の特権は、DBA が既に Process Server ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権:</p> <p>CREATE TABLE</p> <p>CREATE PROCEDURE</p> <p>CREATE SEQUENCE</p> <p>CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる):</p> <p>INSERT</p> <p>UPDATE</p> <p>DELETE</p> <p>ALTER</p> <p>DROP</p>	<p>以下の特権は、DBA が以前に Process Server ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権:</p> <p>CREATE TABLE</p> <p>CREATE PROCEDURE</p> <p>CREATE SEQUENCE</p> <p>CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる):</p> <p>SELECT</p> <p>INSERT</p> <p>UPDATE</p> <p>DELETE</p>

表 27. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
パフォーマンス・データウェアハウス	<p>以下の特権は、DBA がユーザーと、それらのユーザー用のすべてのデータベース・オブジェクトを作成する状況のための特権です。DBA には、以下の特権が必要です。</p> <p>CREATE USER</p> <p>ALTER USER</p> <p>CREATE TABLESPACE</p> <p>CREATE ANY TABLE</p> <p>ALTER ANY TABLE</p> <p>DROP ANY TABLE</p> <p>SELECT ANY TABLE</p> <p>UPDATE ANY TABLE</p> <p>INSERT ANY TABLE</p> <p>DELETE ANY TABLE</p> <p>LOCK ANY TABLE</p> <p>CREATE ANY INDEX</p> <p>DROP ANY INDEX</p> <p>CREATE ANY VIEW</p> <p>DROP ANY VIEW</p> <p>CREATE ANY PROCEDURE</p> <p>DROP ANY PROCEDURE</p> <p>CREATE ANY SEQUENCE</p> <p>DROP ANY SEQUENCE</p> <p>以下の特権は、DBA が既に Performance Data Warehouse ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権:</p> <p>CREATE TABLE</p> <p>CREATE PROCEDURE</p> <p>CREATE SEQUENCE</p> <p>CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる):</p> <p>INSERT</p> <p>UPDATE</p> <p>DELETE</p> <p>ALTER</p> <p>DROP</p>	<p>以下の特権は、DBA が以前に Performance Data Warehouse ユーザーの作成を済ませており、そのユーザーがデータベース・オブジェクトを作成し、それらのオブジェクトを所有し、それらのオブジェクトを実行時に使用する状況のための特権です。</p> <p>明示的な特権:</p> <p>CREATE TABLE</p> <p>CREATE PROCEDURE</p> <p>CREATE SEQUENCE</p> <p>CREATE VIEW</p> <p>暗黙的な特権 (データベース・オブジェクトの所有権に含まれる):</p> <p>SELECT</p> <p>INSERT</p> <p>UPDATE</p> <p>DELETE</p> <p>IBM BPM プロファイルを作成またはマイグレーションするすべてのスキーマまたはユーザーは、<b>DBMS_LOCK</b> パッケージへのアクセス権限を持っている必要があります。次の例に示すように、パフォーマンス・データベースを使用する Oracle ユーザーまたはスキーマに対して <b>DBMS_LOCK</b> パッケージの <b>Execute</b> 権限を設定します。</p> <p>GRANT execute ON DBMS_LOCK TO <i>schema_name</i></p> <p>この例で、<i>schema_name</i> はパフォーマンス・データベースに使用されるユーザー ID です。</p>

Oracle ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
CREATE USER user_name IDENTIFIED BY user_password;  
GRANT connect, resource, unlimited tablespace TO user_name;  
GRANT create view TO user_name;  
GRANT javauserpriv TO user_name;  
GRANT execute on dbms_lock TO user_name;
```

表スペースを作成する例:

```
CREATE TABLESPACE user_table_space DATAFILE '/disk6/user_table_space.dbf'  
SIZE 200M AUTOEXTEND ON NEXT 20M MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;  
CREATE USER DB_user_name IDENTIFIED BY user_password DEFAULT user_table_space;
```

表 28 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の SQL Server データベース特権について説明します。

IBM Business Process Manager データベース・ユーザーに対して、以下の 3 つのロールを割り当てる必要があります。

注: データベースは、データベース管理者が作成する必要があります。作成後、データベース管理者は、IBM Business Process Manager のデータベース・ユーザーにこれらのロールを割り当てることができます。

- db\_ddladmin
- db\_datawriter
- db\_datareader

これらのロールに設定されている権限については、Microsoft 固有の資料を参照してください。

以下の表は、インストール・アクティビティと実行時アクティビティの両方について、各コンポーネントの必要な権限を示しています。

表 28. SQL Server データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Space	CREATE TABLE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。

表 28. SQL Server データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Process Server	CREATE TABLE、 SELECT、 INSERT、 UPDATE、 DELETE TABLE、 DROP TABLE、 CREATE INDEX、 CREATE VIEW、 DROP VIEW、 CREATE PROCEDURE、 CREATE USER、 ALTER USER	SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT、 CREATE VIEW、 CREATE PROCEDURE、 DROP TABLE、 DROP VIEW
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE、 SELECT、 INSERT、 UPDATE、 DELETE TABLE、 DROP TABLE、 CREATE INDEX、 CREATE VIEW、 DROP VIEW、 CREATE PROCEDURE、 CREATE USER、 ALTER USER	SELECT、 UPDATE、 DELETE、 INSERT、 CREATE VIEW、 CREATE PROCEDURE、 DROP TABLE、 DROP VIEW

SQL ユーザーへの権限の割り当てと、PDWDB データベース用のスキーマの作成を行うための構文:

```
USE database_name
GO
CREATE USER user_name FOR LOGIN user_name
GO
CREATE SCHEMA user_name AUTHORIZATION user_name
GO
ALTER USER user_name WITH DEFAULT_SCHEMA=user_name
```

**重要:** パフォーマンス・データウェアハウス・ユーザーの場合は、以下の制限に注意してください。

- ユーザーをシステム管理者 (sysadmin) ロールに割り当てることはできません。
- db\_owner ロールを使用して、ユーザーを PDWDB データベースにマップする必要があります。
- SqlJDBCXAuser ロールを使用して、ユーザーをマスター・データベースにマップする必要があります。

詳しくは、関連参照の WebSphere Application Server のページを参照してください。

関連資料:

 WebSphere Application Server でのデータベース特権

## ユーザー ID またはスキーマ名特権

IBM Business Process Manager のインストール時には、デフォルトのスキーマ名およびユーザー ID 特権を使用してデータベースをインストールできます。ただし、データベース設計によっては、別のユーザー ID またはスキーマ名特権が必要になる場合があります。

提供されているシナリオを検討して、IBM Business Process Manager のインストール時に別のスキーマ名およびユーザー ID 特権を構成するタイミングと方法を決定してください。

### 単一のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ

データベースのデフォルト・インストールを選択した場合、IBM Business Process Manager では、テーブルを作成する機能と、作成したテーブルの行の選択、挿入、更新、および削除を行う機能を備えたユーザー ID またはスキーマ名が最小限 1 つ必要です。データベースを作成するには、プロファイル管理ツールまたはインストーラーが使用できます。



次の表は、データベースとして DB2 を使用する際のデフォルトのデータベース構成プロパティを示しています。他のデータベースでは、データベース構成用に、これとは異なるデフォルト構成プロパティがあります。

表 29. シナリオ: 単一のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデフォルト・データベース名	ユーザー ID またはスキーマ名
共通データベース表	CMNDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にユーザー ID を提供します
メッセージング・テーブル	MEDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にスキーマ名を提供します

データベース設計のプロパティが異なる場合、複数のユーザー ID およびスキーマ名特権が必要となる場合があります。以下のシナリオは、構成を適用して設計を実現する方法を示しています。提供されているシナリオに希望する特定の設計が含まれていない場合でも、アイデアの一部を修正して、特定の設計を実装することができます。

### 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 1

このシナリオでは、ユーザー ID 特権と同じスキーマ名を使用しますが、デフォルトのスキーマ名またはデフォルトのユーザー ID 特権は使用しません。この単一ユーザー ID は、すべてのデータベースにアクセスすることができ、必要なすべてのテーブルを作成することもできます。以下にシナリオ 1 の特権の例を示します。

- スキーマ名: dog
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: dogSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: dogAPP
- Event ME のスキーマ名: dogEvent
- スキーマを作成するためのユーザー ID: dog
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: dog

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 30. シナリオ 1: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>プロファイル管理ツール</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>プロファイル管理ツール</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>

## 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 2

このシナリオでは、同じスキーマ名とユーザー ID を使用して、スキーマの選択、挿入、更新、削除を行います。ただし、スキーマの作成には別のユーザー ID を使用します。以下にシナリオ 2 の特権の例を示します。

- スキーマ名 : snow
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: snowSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: snowAPP
- Event ME のスキーマ名: snowEvent
- スキーマを作成するためのユーザー ID: rock
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: snow

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 31. シナリオ 2: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. テーブル作成スクリプト</li> <li>2. 次のいずれかを使用した IBM Business Process Manager 構成時: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理コンソール</li> <li>• インストール・ウィザード</li> <li>• プロファイル管理ツール</li> <li>• サイレント・インストーラ</li> <li>• サイレント・プロファイル作成</li> </ul> </li> </ol> <p><b>制約事項:</b> 最初にインストーラーを実行する場合は、生成されるスクリプトに既に正しいスキーマ名およびユーザー ID の値が含まれているため、値を指定する回数は 1 回です。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール・ウィザード</li> <li>• プロファイル管理ツール</li> <li>• サイレント・インストーラ</li> <li>• サイレント・プロファイル作成</li> </ul>

### 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 3

このシナリオでは、同じユーザー ID を使用してすべてのスキーマを作成します。ただし、各スキーマには、行を選択、挿入、更新、および削除するための別々のユーザー ID があります。次のリストは、シナリオ 3 の特権の例を示しています。

- スキーマ名: waterCom
- 共通テーブルのスキーマ名 : waterCom
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: waterSYSME
- SCA.APP ME のスキーマ名: waterAPPME
- Event ME のスキーマ名: waterEventME
- ESBMessaging テーブルのスキーマ名: waterESB
- スキーマを作成するためのユーザー ID: milk
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID:

スキーマ名	スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID
waterCom	waterCom
waterSYSME	waterSYSME
waterAPPME	waterAPPME
waterEventME	waterEventME
waterESB	waterESB

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 32. シナリオ 3: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>プロファイル管理ツール</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>プロファイル管理ツール</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>
メッセージング・テーブル	この値は、各メッセージング・エンジンの定義を使用して指定します。	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるスキーマ名を含める必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、メッセージング・エンジンの作成中に指定します。メッセージング・エンジンの構成中に「 <b>テーブル作成</b> 」オプションを使用します。

## コンポーネントに固有のデータベース構成の計画

IBM Business Process Manager には、データベース表を必要とするコンポーネントと、表が保管されるデータベースの固有の名前が含まれています。

このセクションの情報を使用して、該当のデータベース管理者が管理し、構成し、運営する必要のある IBM Business Process Manager コンポーネントに精通してください。

データベースの構成を計画するには、使用するコンポーネントを明確にする必要があります。データベース表を必要とする IBM Business Process Manager のコンポーネントと、それぞれのコンポーネントに関連付けられている表が保管されているデータベースのデフォルト名を、79 ページの表 33 にまとめます。

**重要:** これらの名前は必要に応じて変更できますが、後の構成手順でも一貫してその名前を使用する必要がありますのでご注意ください。

表 33. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
Process Server	BPMDB	Process Server のテーブルは、Process App リポジトリのデータの保持、格納、および追跡を行うために使用されます。
パフォーマンス・データウェアハウス	PDWDB	
Application Scheduler	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
Business Space	CMNDB (共通データベース)	スタンドアロン・プロファイルの場合、IBM Business Process Manager の開始前に共通データベースを作成する必要があります。その他のプロファイルについては、管理コンソールを使用して Business Space を構成する必要があります。Business Space データベースの構成は、Business Space powered by WebSphere および Process Portal を使用する場合には必須の作業です。Business Space powered by WebSphere は、さまざまな IBM 製品にわたって Web インターフェースを作成、管理、および統合するための共通インターフェースをアプリケーション・ユーザーに提供します。

表 33. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
Common Event Infrastructure (CEI)	EVENT (イベントの格納)	<p>CEI データベースの構成は、プロファイル管理ツールまたは <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティーではサポートされていません。</p> <p>永続イベントのパフォーマンスに影響を与える可能性があるため、実稼働環境の場合はこのデータベースを作成しないでください。</p> <p>Common Base Event ブラウザーは CEI データベースを利用します。ご使用のビジネス・エンタープライズ・アプリケーションでのロギング、トレース、管理、およびビジネスの各イベントの取得および表示に Common Base Event ブラウザーを使用する場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。</p>
エンタープライズ・サービス・バス	CMNDB (共通データベース)	<p>これらのテーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、あるいはデプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。</p>
メディアエーション	CMNDB (共通データベース)	<p>IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。</p>
リカバリー	CMNDB (共通データベース)	<p>IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。</p>

表 33. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
関係	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
セレクターおよびビジネス・ルール	CMNDB (共通データベース)/リポジトリ DB	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
SIBus	ユーザー作成	これらのテーブルは、メッセージング・エンジンの始動時、またはメッセージング・エンジンを始動する前に構成する必要があります。プロファイルの作成時には、スタンドアロン環境で SIBus によるファイル・ストアを使用できます。ただし、Network Deployment 環境では、SIBus によるファイル・ストアを使用することはできません。

## テーブルおよびスキーマの作成

データベース・プロバイダーによっては、IBM Business Process Manager 内のデータベース用に異なるデータベース表およびスキーマが必要な場合があります。

管理コンソールで「リソース」 > 「JDBC」 > 「ビジネス・インテグレーション・データ・ソース」を選択してデータ・ソースをクリックするときに、「テーブルの作成」のチェック・ボックスを選択して、データ・ソースからテーブルを作成できます。データベース表の作成がデータベース管理者に限られている場合は、このチェック・ボックスを選択解除し、メッセージ・ボックスでスクリプトを見つけ、そのスクリプトをデータベース管理者に提供して実行を依頼します。「テーブルの作成」を使用可能にすると、以下の表に示すように、各データベース・プロバイダーの各種のデプロイメント環境機能を使用できます。「X」は、テーブルまたはスキーマが作成されたことを示します。

**ヒント:** 共通データベースはプロファイル作成時に構成します。

表 34. データベース・プロバイダーごとのテーブルの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	X
Microsoft SQL	X	X		X	X

表 35. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	
DB2 for z/OS	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	

Common Event Infrastructure データベースは手動でのみ構成できます。詳しくは、『*Common Event Infrastructure データベースの構成*』を参照してください。

## 共通データベース構成の計画

共通データベース構成には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、インストール・パラメーター、作成されるテーブルのタイプ、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれます。

共通データベースは、各種コンポーネントのリポジトリとして機能します。IBM Business Process Manager 共通データベースは、以下の製品コンポーネントで使用します。

- Business Space
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- Enterprise Service Bus (ESB) ロガー・メディエーション・プリミティブ

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:
  - IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースの作成のみに使用できます。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
  - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。

## サポートされているデータベース・タイプ

共通データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 36. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。



表 36. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳しくは、『データベース特権』および『ユーザー ID またはスキーマ名特権』を参照してください。

## データベース管理サービス・インスタンス

Network Deployment 環境の場合、セルあたりに共通データベース表のセットが 1 つあります。

### プロファイル作成時の構成操作

共通データベースをインストールするのに、以下のオプションの中の 1 つを使用することができます。

- インストーラー
- プロファイル管理ツール
- サイレント・インストール
- スクリプト

これらのオプションのそれぞれに、さらにいくつかの選択項目があります。

#### インストーラー

ソフトウェアのインストール時にプロファイルを作成する場合は、「インストーラー」を使用します。インストール時に、ご使用のデータベース製品をインストールすることができますが、インストールできるデータベース製品のタイプは制限されています。84 ページの表 37 にはない、サ

ポート対象のデータベース製品を使用するには、プロファイル管理ツールを使用して、ユーザーのデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。

表 37. インストーラー・オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	DB2 Express
標準: その他のすべてのプロファイル	DB2 Express
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 データ・サーバー</li> <li>• Oracle</li> </ul>
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 データ・サーバー</li> <li>• Oracle</li> </ul>

標準インストールでは、構成パラメーターのデフォルト値を使用します。これらのデフォルト値は変更できません。カスタマイズ・インストールを選択する場合は、ユーザーの固有の要件に合わせてデフォルトを変更することができます。

### プロファイル管理ツール

プロファイル管理ツールを使用して、ソフトウェアのインストール後にプロファイルを作成します。プロファイル管理ツールを使用すると、プロファイルの作成前、作成中、または作成後にデータベースをインストールすることができます。

表 38 では、標準 (デフォルト) プロファイルおよびカスタマイズ・プロファイルでサポートされるデータベースをリストします。

表 38. 「プロファイル管理ツール」 オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 DataServer</li> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 for z/OS</li> <li>• Microsoft SQL Server</li> <li>• Oracle</li> </ul> <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>
標準: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 DataServer</li> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 for z/OS</li> <li>• Microsoft SQL Server</li> <li>• Oracle</li> </ul> <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>

表 38. 「プロファイル管理ツール」 オプション (続き)

オプション	使用可能なデータベース
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	82 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	82 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか

### サイレント・インストール

製品をサイレント・インストールするとき、テンプレート応答ファイルを編集して共通データベース構成を指定することができます。

### スクリプト

IBM Business Process Manager をインストールする前、またはプロファイルの作成中に、スクリプトを使用して、ご使用の共通データベースを作成することができます。

プロファイルの作成後にデータベースを手動で構成するように選択した場合は、まず IBM Business Process Manager をインストールして、プロファイル管理ツール内で、プロファイル作成の一環としてスクリプトを実行したくないことを示す必要があります。プロファイル管理ツールは、ユーザーが指定したデータベース・パラメーターを使用してデフォルト・スクリプトを更新し、更新されたスクリプトを `profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリーに書き込みます。

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用して、更新されたスクリプトが書き込まれるディレクトリーを変更することができます。

スクリプトは、そのままでも実行できますが、編集して特定の要件を組み込むことも可能です。これらのスクリプトを、共通データベースを作成する担当者に渡すことができます。データベースを作成する前に IBM Business Process Manager を開始しようとする、エラー・メッセージを受け取ります。

スクリプトを実行するときに、以下のタスクも実行します。

- 適切な場合 (ローカル・データベースの場合にのみ有効)、プロファイル管理ツール内の「データベース構成」パネルでの選択に応じて、データベースを作成します。

**重要:** データベースの作成をプロファイル作成の完了後に先送りすることもできますが、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルに有効な情報を入力する必要があります。その情報に基づいて、IBM Business Process Manager のデータ・ソースが作成されます。

- JDBC プロバイダーでデータ・ソースを作成します。

**重要:** プロファイルの作成と同時にデータベースも作成する場合に、データベース・パラメーターに誤りがあると、プロファイルにエラーが発生します。データベースの作成を先送りすれば、プロファイルはエラーなしで作成されますが、生成されたデータベース・スクリプトにはエラーが含まれているため、データベースを作成できるようにするには、そのスクリプトを訂正する必要があります。セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

**注:** セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

## SQL スクリプト

SQL スクリプトを使用して、プロファイル作成の前後にご使用のデータベースを構成します。テーブルは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを使用して作成されるため、管理対象ノードの作成時に SQL スクリプトが実行されることはありません。

各共通データベース・クライアントの SQL スクリプトは、以下の場所にあります。

- IBM Business Process Manager のインストール後の *install\_root/dbscripts/CommonDB/dbType*

データベースの作成をプロファイルの作成後に先送りするよう選択した場合は、更新されたスクリプトは *profile\_root/dbscripts/feature/dbType/dbName* ディレクトリーで見つけることができます。

### SQL スクリプト命名規則

- コンポーネント固有のスクリプトの場合: **createTable\_componentName.sql**、例えば **createTable\_Recovery.sql**。
- コンポーネントに依存しないスクリプトの場合: **createTable.sql**。

以下の表は、スクリプトの命名規則を示しています。

表 39. 共通データベース・スクリプトの命名規則

スクリプトのタイプ	スクリプト名
コンポーネント固有のスクリプト	<i>scriptName_componentName.sql</i>
コンポーネントに依存しないスクリプト	<i>scriptName.sql</i>

## JDBC プロバイダー

新しい Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーは、データベース・タイプに応じて作成されます。プロバイダーは、スタンドアロン・プロファイルのノード・スコープ内に、Network Deployment 環境のセル・レベルで作成されます。JDBC プロバイダーは、**JDBC\_DRIVER\_PATH** 変数を参照して、ローカル JDBC ドライバーを見つけます。その変数は、セル・レベルで指定され、各ノード・レベルは、正しいローカル・パスを指します。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

### 制約事項

プロファイルの作成中に使用可能なデータベース・コマンドには、いくつかの制約事項があります。

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 for z/OS
- Oracle
- Microsoft SQL Server

## テーブル

共通データベース・スクリプトは、プロファイルの作成時に静的テーブルのみを作成します。以下の表には、さまざまなコンポーネントによって作成されるすべてのテーブルのリストが含まれています。

表 40. IBM Business Process Manager の各コンポーネントによって作成されるテーブル

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
リレーションシップ	実行時に作成される動的テーブル	<b>createTable_Relationship MetadataTable.sql</b>
共通データベース	SchemaVersionInfo	<b>createTable_CommonDB.sql</b>
ESB ロガー・メディエーション	MSGLOG	<b>createTable_ESBLogger Mediation.sql</b>

前出のテーブル中のすべての SQL スクリプトは、**configRecovery > commonDBUtility > execute createTable\_Recovery.sql** といった各コンポーネント・スクリプトからの `commonDBUtility.ant` ファイルによって実行されます。値 `delayConfig=true` が応答ファイル内にあるとき、SQL ファイルは作成されますが、これらのファイルは実行はされません。この場合、構成後に SQL を手動で実行する必要があります。

WebSphere Enterprise Bus ロガー・メディエーション・コンポーネントでは、各メッセージ・ロガー・プリミティブを構成して、さまざまなデータ・ソースおよびさまざまなデータベースを使用できるようにすることができます。

## スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースを構成するためにプロファイル管理ツール・パネルで選択されたすべてのオプション用に作成されます。これらのスクリプトには、データベース、テーブル、および索引の基本的な作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、これらのスクリプトを実行するために、データベースのネイティブ・コマンドを使用する必要があります。

スクリプトの名前は、Windows の場合は `configCommonDB.bat`、UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合は `configCommonDB.sh` です。

データベース・スクリプトは、

`profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリーにエクスポートされます。

## Common Event Infrastructure データベース構成の計画

Common Event Infrastructure (CEI) データベース仕様には、サポートされるデータベースのタイプ、スクリプトの場所、プロファイル構成タイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされます。オプションで、CEI データベースを使用して、それが IBM Business Process Manager をモニターしているときに取り込まれるイベントを保管することができます。

CEI データベースは内部のデバイスであり、ユーザーと直接対話することはありません。CEI データベースとの間のすべての対話に対して、サポート対象の CEI プログラミング・インターフェースを使用する必要があります。

プロファイル管理ツールを実行するときに、自動的に CEI データベースを作成することはありません。CEI イベントを保管したい場合には、スタンドアロン・プロファイルに対して、および Network Deployment 環境内の CEI サーバーの各インスタンスに対して、データベースを手動で作成する必要があります。

## メッセージング・エンジン・データベース構成の計画

このメッセージング・エンジン・データベースの仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成のタイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされています。

メッセージング・エンジン・データベースは、運用情報を格納するために使用します。障害が発生した場合のリカバリーのためにメッセージング・エンジンが必要とする重要なオブジェクトも保管されます。

SCA メッセージング・エンジンのデフォルトのデータベース名は SCADB です。他のメッセージング・エンジンの場合、デフォルトのデータベース名は MEDB です。デフォルトのスキーマ名は、IBMWSSIB です。

**重要:** すべてのデータベース・タイプで複数のスキーマがサポートされているとは限りません。詳細については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

スタンドアロン環境では、管理コンソールを使用して、SCA メッセージング・エンジンを構成できます。パターン化された Network Deployment 環境では、メッセージング・エンジンは、デプロイメント環境の作成時に構成されます。カスタム Network Deployment 環境の場合、メッセージング・エンジンを手動で構成する必要があります。

ユーザーは、メッセージング・エンジン・データベースに対して制御を行います。例えば、各メッセージング・エンジン用のデータベースを作成することができ、また、すべてのメッセージング・エンジンに対して単一のデータベースを使用することができます。各メッセージング・エンジンは、独自のデータベースまたはスキーマのいずれかを持つ必要があります。

## サポートされているデータベース・タイプ

メッセージング・エンジン・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 41. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。

表 41. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳しくは、『データベース特権』および『ユーザー ID またはスキーマ名特権』を参照してください。

Network Deployment 環境では、構成時に管理コンソールで指定したユーザー特権に関して必要な許可すべてを持っている必要があります。

**重要:** DB2 V9.7 の場合、新しく作成されたユーザーに、適切な権限を付与します。これは、ユーザー作成プロセスはユーザーに対して自動的に必要な権限を付与することがないためです。

## データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各メッセージング・エンジンには、以下に示す独自のデータベースまたはスキーマがあります。

- Service Component Architecture システム・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Service Component Architecture アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Common Event Infrastructure バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。

以下のリストには、メッセージング・エンジンがデータベースと対話するのに使用する JDBC データ・ソースの命名規則が含まれています。

- システム・バス: <node><server><cluster>-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus
- アプリケーション・バス: <node><server><cluster>-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus
- CEI バス: <node><server><cluster>-CEI.cellName.BUS

## プロファイル作成時の構成操作

### Network Deployment

メッセージング・エンジン・データベースは自動的に作成されません。プロファイルが作成された後、「Network Deployment 環境の構成」というガイド付きアクティビティを使用して、SCA 用のサーバーまたはクラスターを構成することができます。デプロイメント・マネージャーの管理コンソールからこのガイド付きアクティビティにアクセスするには、「ガイド付きアクティビティ」を展開して、「Network Deployment 環境の構成」をクリックします。

管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「servername」 > 「Service Component Architecture」パネルで、サーバーの SCA 構成を表示できます。

プロファイルの作成時に、以下の管理用タスクが実行されます。

- リモート宛先の場所:
  - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer (remoteMELocation は true)
  - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster (remoteMELocation は true)
- ローカル宛先の場所:
  - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer
  - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster

これらのタスクに関する詳細については、『configSCAAsyncForCluster コマンド』および『configSCAAsyncForServer コマンド』を参照してください。

サーバーまたはクラスターに非同期の SCA 構成を実行すると、SCA システム・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。サーバーまたはクラスターに SCA 構成の JMS エlement を実行すると、SCA アプリケーション・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。両方のメッセージング・エンジンに対して、データベースまたはスキーマを作成する必要があります。

Common Event Infrastructure メッセージング・エンジンを構成するためには、deployEventService 管理用タスクを使用して、イベント・サーバーおよび Common Event Infrastructure バスを構成します。

## SQL スクリプト

製品の一部として SQL スクリプトが作成されることはありません。必要な場合は、既存の基本 WebSphere Application Server のスクリプトを使用して、データベースとテーブルを作成することができます。MEDB を構成する前に、これを手動で作成するには、管理コンソールの「サーバー」>「サーバー・タイプ」>「WebSphere Application Server」>「servername」>「Service Component Architecture」パネルを使用します。

## JDBC プロバイダー

### Service Component Architecture

JDBC プロバイダーの実装クラスが、拡張構成で選択されている実装クラスと一致しなければならない場合は、その JDBC プロバイダーが再利用されます。同じデータベース・タイプを使用する場合には、通常、実装クラスは一致します。resource.xml ファイル内に一致する JDBC プロバイダーが見つからない場合、templates/system ディレクトリー (プロファイル構成) 内にある jdbc-resource-provider-templates.xml ファイルで、一致する JDBC プロバイダーが検索されます。プロバイダーの突き合わせは、実装クラスについても行われます。

### Common Event Infrastructure

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、CEIDB データベースの場合の作成手順とよく似ています。

### データ・ソース名

- システム・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cel/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `_(node.server| cluster-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`

### データ・ソース JNDI 名



- システム・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `Jdbc/ com.ibm.ws.sib /(node.server|cluster)-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`

## 制約事項

既知の制約事項はありません。

## テーブル

テーブルについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストア』のトピックを参照してください。

## スクリプトのエクスポート

**WAS\_INSTALL\_ROOT/bin** 内の **sibDDLGenerator** スクリプトを使用して、メッセージング・エンジン・データベース用の SQL スクリプトを作成することができます。実稼働環境、特に DB2 for z/OS プラットフォームで使用される SQL スクリプトを作成するために、**sibDDLGenerator** スクリプトを使用します。詳細については、「sibDDLGenerator コマンド」を参照してください。

これらのスクリプトには、基本的な **database/tablespace/table** 作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、データベースのニーズを満たすために、特に DB2 for z/OS において、これらのスクリプトを調整する必要がさらに生じることがあります。



---

## 第 5 章 IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager Standard を単一サーバー上にインストールおよび構成すること (スタンドアロン構成と呼ばれます) も、そのコンポーネントを複数のシステムに分散させること (Network Deployment 構成と呼ばれます) もできます。

---

### ロードマップ: IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成プログラムは、さまざまな開発シナリオおよび実動シナリオに対応します。このロードマップでは、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境で IBM Business Process Manager Standard をインストールして構成するための最も一般的な方法について説明します。

あるいは、対話式インストールおよび構成ガイドを使用して、ターゲット環境に関する一連の質問に答えることもできます。このガイドは、各ユーザーのインストール・ニーズに合わせてカスタマイズされたインストールと構成に関する一連のトピックを生成します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをオペレーティング・システムごとにグループ化し、それぞれに最も関連するリンクを記載しています。

すべてを表示 | タブ付きで表示

- 1 ページの『Linux』
- 2 ページの『AIX』
- 2 ページの『Solaris』
- 3 ページの『Windows』

#### Linux

IBM Business Process Manager を Linux にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』
- 99 ページの『Linux システムのインストール準備』

**決定** インストールを進める前に、実行するインストールのタイプ (標準またはカスタム) を決定し、インストールに適切なデプロイメント環境 (スタンドアロンまたは Network Deployment 環境) を選択します。

- インストールのタイプの選択
- スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

#### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 107 ページの『標準インストールと構成』
- 134 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 135 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 140 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

#### スタンドアロン・デプロイメント

148 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

#### Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを作成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 480 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## AIX

IBM Business Process Manager を AIX にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』
- 98 ページの『AIX システムのインストール準備』

**決定** インストールを進める前に、実行するインストールのタイプ (標準またはカスタム) を決定し、インストールに適切なデプロイメント環境 (スタンドアロンまたは Network Deployment 環境) を選択します。

- インストールのタイプの選択
- スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

#### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 742 ページの『標準インストールと構成』
- 764 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 764 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 767 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

#### スタンドアロン・デプロイメント

774 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

#### Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを作成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 1105 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## Solaris

IBM Business Process Manager を Solaris にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』
- 101 ページの『Solaris システムのインストール準備』

**決定** インストールを進める前に、実行するインストールのタイプ (標準またはカスタム) を決定し、インストールに適切なデプロイメント環境 (スタンドアロンまたは Network Deployment 環境) を選択します。

- インストールのタイプの選択
- スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 1362 ページの『標準インストールと構成』
- 1384 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 1385 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 1387 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

#### スタンドアロン・デプロイメント

1395 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

#### Network Deployment

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを構成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 1729 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

## Windows

IBM Business Process Manager を Microsoft Windows にインストールするには、以下のロードマップに従います。

**準備** ハードウェアおよびソフトウェア要件を検討し、インストールに向けてオペレーティング・システムを準備し、データベース管理システムがインストールされていることを確認します。

- 97 ページの『システム要件』
- 102 ページの『Windows システムのインストール準備』

**決定** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

### インストール

決定した内容に基づいて、デプロイメント環境に最適なインストール・オプションを選択してから、製品のインストール手順を完了します。

- 1991 ページの『標準インストールと構成』

- 2020 ページの『カスタム・インストールおよび構成』
  - 2020 ページの『IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール』
  - 2027 ページの『IBM Business Process Manager のサイレント・インストール』

**構成** 標準インストールの場合は、完了後に構成を行う必要はありません。標準以外のインストールの場合は、完了後に以下の構成を行います。

**スタンドアロン・デプロイメント**

2034 ページの『プロファイルおよびデータベースの構成』

**Network Deployment**

ご使用の構成に応じて、操作するデータベースを選択し、ステップに従ってプロファイルを作成し、Network Deployment 構成を作成します。

- 2377 ページの『プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成』
- Network Deployment 環境の作成

---

## ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 42. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager Advanced system requirements</li> <li>• IBM Business Process Manager Standard system requirements</li> <li>• IBM Business Process Manager Express system requirements</li> </ul>	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>AIX</b> AIX システムのインストール準備</li> <li><b>Linux</b> Linux システムのインストール準備</li> <li><b>Solaris</b> インストールに向けた Solaris システムの準備</li> <li><b>Windows</b> Windows システムのインストール準備</li> </ul>	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表 42. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。ユーザーは、DB2 Express をインストールするための管理特権 (root または管理者権限) を持っている必要があります。</p> <p><b>注:</b> 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p><b>重要:</b> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<b>ipcs -l</b> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p> <p><b>重要:</b> オペレーティング・システム・ユーザーはインストール時に作成されるため、指定したパスワードがオペレーティング・システムまたは社内の制約事項に適合しない場合は、DB2 Express を正しくインストールして使用することはできません。</p>

## システム要件

インストールする前に、ご使用のシステムがすべてのシステム要件を満たしていることを確認します。

プラットフォーム固有のディスク・スペース要件、サポート対象のオペレーティング・システム、およびサポート対象のデータベースのバージョンに関する最新情報については、以下のリンクの 1 つをクリックします。オペレーティング・システムを要件に準拠させるためにインストールする必要がある、オペレーティング・システムのフィックスとパッチを検索することもできます。

- IBM Business Process Manager Standard system requirements
- IBM Business Process Manager Tools and Add-Ons Requirements

## 製品インストール用のオペレーティング・システムの準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、オペレーティング・システムを準備する必要があります。構成は、ご使用のオペレーティング・システムのタイプによって異なります。

インストール環境を準備する前に、以下の作業を実行してください。

- IBM Business Process Manager のインストールを計画しているシステム上でファイアウォールが実行中である場合は、ファイアウォールを使用不可にします。
- ご自分のユーザー・ログインが、DB2 または Oracle データベースのコマンドにアクセスできることを確認します。
- ご使用のオペレーティング・システムに固有の追加作業を実行します。

**重要:** IBM Business Process Manager を **Windows Server 2003** または **Windows 7 (英語版)** でインストールし、IBM Process Portal の「設定」->「インターフェース言語」でロケールをチェコ語に切り替えると、IBM Process Designer のいくつかのパネルでテキストが文字化けして表示されます。IBM Process Designer をチェコ語のロケールで開始しても、テキストは文字化けして表示されます。

**ヒント:** この問題を解決するには、システム設定を以下のように変更します。

- **Windows Server 2003** の場合: 「地域と言語のオプション」->「詳細設定」->「Unicode 対応でないプログラムの言語」->「チェコ語」に設定
- **Windows 7** の場合: 「地域と言語」オプション->「管理」タブ->「システム ロケールの変更...」(「Unicode 対応でないプログラムの現在の言語」の下)->「チェコ語」を選択

## AIX システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、AIX® オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『AIX システムのインストール準備』というトピックの、必要な準備ステップを実行する必要があります。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。

64 ビット AIX システムで実行するようにインストール・マネージャーを構成するための準備情報については他に、次の技術情報を参照してください: <https://www-304.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21330190&wv=1>

IBM Business Process Manager をインストールする前に、AIX システム上で以下の手順を実行します。

1. オープン・ファイルの最大数を増やしてください。通常デフォルト設定では十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。  
ulimit 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。



インストール前に、以下のコマンドを実行します。

```
ulimit -n 8800
```

または、以下の手順でリソースしきい値ファイルを編集します。

- a. /etc/security/limits を開きます。
- b. **default** セクションを編集または追加し、次の行を組み込みます。

```
nfiles = 8800
```

- c. ファイルを保存して閉じます。
- d. オペレーティング・システムからログオフしてから、再度ログインします。

2. 次のコマンドを使用して、**umask** 値を **022** に設定します。

```
umask 022
```

3. バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。
4. データ移動サービスを開始する前に、接続リセット・エラーを回避するために、AIX オペレーティング・システムで構成されているプロセスの数を増加します。プロセスの数を増加するには、コマンドを使用するか、AIX インターフェースを使用してください。

- 次のコマンドを実行します。

```
chdev -l sys0 -a maxuproc='256'
```

- AIX インターフェースで、**smitty** と入力し、「システム環境 (System Environments)」>「オペレーティング・システムの特性の変更/表示 (Change / Show Characteristics of Operating System)」>「許可されるユーザーあたりのプロセス数 (Number of processes allowed per user(Num.))」を選択します。

5. 『AIX システムの調整』のステップを実行します。
6. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

関連タスク:



AIX システムのインストール準備



AIX システムの調整

## Linux システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『Linux システムのインストール準備』というトピックの、必要な準備ステップをすべて実行する必要があります。

バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペ

レーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。Red Hat Enterprise Linux 6.0 (64 ビット) 上にインストール・マネージャーをインストールするには、『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。

注: Cognos には、Red Hat Enterprise Linux 6.0 (64 ビット) 用の代替バージョンの libfreebl3.so ライブラリーがバンドルされています。このシステム・ライブラリーは他のユーティリティーに必要となるので、必ずプリインストールしてください。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux システム上で以下の手順を実行します。

1. /etc/security/limits.conf ファイルの末尾に以下の行を追加して、許容されるスタック・サイズ、オープン・ファイルの数、およびプロセス数を増やします。

```
# - stack - max stack size (KB)
* soft stack 32768
* hard stack 32768
# - nofile - max number of open files
* soft nofile 65536
* hard nofile 65536
# - nproc - max number of processes
* soft nproc 16384
* hard nproc 16384
```

ファイルを保存してクローズし、いったんログオフしてから、再度ログインします。ulimit -n を使用して、オープン・ファイルの現在の最大数を確認できます。ulimit 要件は、インストール時に動的に計算されます。場合によっては、選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。この設定の詳細については、man limits.conf を実行するか、WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピック、『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。

2. インストール・プロセスの一環として DB2 Express のインストールを計画している場合は、管理 (root) 特権を持っていることを確認してください。root ユーザーとして、DB2 Express のインストールの開始前に、すべてのカーネル要件が満たされていることを確認する必要があります。現行値は、ipcs -l コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。値を変更するには、/etc/sysctl.conf ファイルに以下の行を、この順序で追加します。

```
kernel.shmni=4096
kernel.shmmax=4294967296
kernel.shmall=8388608
#kernel.sem=<SEMMS><SEMMNS><SEMOPM><SEMMNI>
kernel.sem=250 256000 32 4096
kernel.msgmni=16384
kernel.msgmax=65536
kernel.msgmnb=65536
```

システムをリブートします。

3. ご使用のオペレーティング・システム用の以下のパッケージをインストールします。

オプション	説明
Red Hat Enterprise Linux 5	libXp-1.0.0-8 rpm-build-4.4.2-37.el5
Red Hat Enterprise Linux 6	ksh-version.rpm Korn シェル

訂正として新しいパッケージがある場合は、これらのいずれのパッケージについても、より最新のリリースをインストールすることもできます。ご使用のハードウェアに固有の追加パッケージがある場合は、インストールします。

以下のコマンド例で、サポートされる Linux ディストリビューションでデフォルトのパッケージ・マネージャーを使用する方法を説明します。

- **Red Hat Enterprise Linux 5:**

```
yum install libXp rpm-build
```

4. 次のコマンドを使用して、**umask** 値を 022 に設定します。

```
umask 022
```

5. Red Hat Enterprise Linux 5 システムの場合、SELinux を使用不可に設定するか、または許容モードに設定します。
6. コンピューターを再始動します。
7. Linux システムの調整を行うためのステップを実行します。
8. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

#### 関連タスク:

 [Linux システムのインストール準備](#)

 [Linux システムの調整](#)

#### 関連資料:

 [Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 \(64-bit\)](#)

## Solaris システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Solaris オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『Solaris システムのインストール準備』というトピックの、必要な準備ステップを実行する必要があります。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Solaris システム上で以下の手順を実行します。

1. オープン・ファイルの最大数を増やしてください。通常デフォルト設定では十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。**ulimit** 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

インストール前に、以下のコマンドを実行します。

```
ulimit -Hn 8800
```

または、以下の手順でリソースしきい値ファイルを編集します。

- a. Open /etc/system

b. 次の行をファイルの末尾に追加します。

```
set rlim_fd_max=8800
```

c. ファイルを保存して閉じます。

d. オペレーティング・システムからログオフしてから、再度ログインします。

2. 次のコマンドを使用して、umask 値を 022 に設定します。

```
umask 022
```

3. Solaris システムの調整を行うためのステップを実行します。

4. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

関連タスク:



Solaris システムのインストール準備



Solaris システムの調整

## Windows システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールするには、まず Windows オペレーティング・システムを準備する必要があります。


IBM Business Process Manager のインストールで DB2 Express を使用する場合は、ユーザー・アカウントに、インストールを実行するマシンに対する管理特権が設定されている (管理者である) 必要があります。


WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件製品であるため、IBM Business Process Manager をインストールする前に、WebSphere Application Server の準備作業をすべて完了する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Windows システムで以下の手順を実行します。

1. 必要なポートが使用可能であることを確認します。 Lotus Forms Turbo を Windows システムにインストールする場合、 2809、2810、8085、8880、8881、9043、9402、9403、9405、9406、9060、9080、9100、50000、および 55000 のポートを開放したままにする必要があります。使用中のポートを確認するには、コマンド・ウィンドウを開き、**netstat -b** コマンドを入力して、ポートを使用している実行可能ファイルを確認します。
2. WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピック『Windows システムのインストール準備』に記載されている手順を実行します。
3. Windows システムの調整を行うためのステップを実行します。
4. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

関連タスク:

 Windows システムのインストール準備

 Windows システムの調整

## HADR のセットアップおよび構成に関する考慮事項

DB2 で HADR (高可用性災害時リカバリー) のセットアップと構成を計画するときには、以下の考慮事項を検討してください。

- 『引き継ぎのためのデータベース状況の確認』
- 『HADR のデータ・ソースの構成』
- 104 ページの『プログラマチック・トランザクションの再試行プロパティのセットアップ』
- 104 ページの『HADR のユーザー・ロールの構成』
- 104 ページの『引き継ぎ後のメッセージング・エンジンの開始』
- 105 ページの『追加情報へのアクセス』

### 引き継ぎのためのデータベース状況の確認

HADR は、サイトで障害が発生した場合に、スタンバイ・データベースが完全な DB2 機能を備えた 1 次データベースとして処理を引き継ぐことを可能にします。引き継ぎが行われる前に、1 次データベースとスタンバイ・データベースの両方の DB2 HADR 状況を確認して、引き継ぎが許可されているかどうか、またはエラーが返されているかどうかを調べてください。場合によっては、引き継ぎによってエラーが発生することや、引き継ぎが許可されないこともあります。

DB2 HADR 状況を確認するには、**db2pd** コマンドを使用します。例えば、HADR を使用する MEDB9 という名前のデータベースを構成した場合は、以下のコマンドを使用して状況を確認します。

```
db2pd -hadr -db MEDB9
```

すべてのデータベースの状況を確認するには、以下のコマンドを使用します。

```
db2pd -hadr -all dbs
```

詳しくは、『TAKEOVER HADR コマンド』のトピックを参照してください。コマンドのパラメーターおよび使用上の注意を確認して、引き継ぎを実行するかどうかを決定してください。

### HADR のデータ・ソースの構成

『DB2 データベースを使用するアプリケーションのクライアント・リルトの構成』のトピックの説明に従って、IBM Business Manager 管理者コンソールで HADR の DB2 データ・ソースを構成します。

IBM Business Process Manager 製品のデータ・ソースを構成する際は、以下の考慮事項に注意してください。

- DB2 HADR をセットアップする場合は、自動クライアント・リルトを有効にすることをお勧めします。
- メッセージング・エンジンおよびセル・レベルのデータ・ソースの場合、「代替サーバー名」および「代替ポート番号」プロパティを構成する必要があります。
- 代替ポートには、`/etc/services` で指定されている HADR サービス・ポートでなく、DB2 サーバーの外部ポートを使用する必要があります。例えば、`/etc/services` で指定されている HADR サービス・ポ

ート DB2\_HADR\_1 が 55001 であり、DB2 サーバーが外部ポート 50000 を使用している場合は、管理コンソールでポート 50000 をデータ・ソースの代替ポートに指定する必要があります。

## プログラマチック・トランザクションの再試行プロパティのセットアップ

プログラマチック・トランザクションの再試行をサポートするために、以下の値を持つ 2 つの新規プロパティが 00static.xml ファイルに追加されました。

```
<transaction-reroute-retries>3</transaction-reroute-retries>
<transaction-reroute-retry-delay-in-millis>10000</transaction-reroute-retry-delay-in-millis>
```

デフォルト以外の値が必要な場合は、100Custom.xml 構成ファイルを使用して 00Static.xml で変更をカスタマイズしてください。以下の手順を実行します。

1. 100Custom.xml 構成ファイルを以下のようにして見つけます。

- ネットワーク・デプロイメント環境の場合、ファイル・パスは `DMGR_profile_root%config%cells%cell_name%nodes%custom_node_name%servers%server_name%server_type%config%100Custom.xml` です。
- スタンドアロン・サーバー環境の場合、ファイル・パスは `standalone_profile_root%config%cells%cell_name%nodes%standalone_node_name%servers%server_name%server_type%config%100Custom.xml` です。

2. 100Custom.xml ファイルを編集します。以下のセクションを編集して、この例のような内容にします。

```
<server merge="mergeChildren">
  <transaction-reroute-retries merge="replace">10</transaction-reroute-retries>
  <transaction-reroute-retry-delay-in-millis merge="replace">3000
</transaction-reroute-retry-delay-in-millis>
</server>
```

3. 変更を保管します。

すべてのデータ・ソースについて、クライアント・リルート・プロパティを指定してください。

## HADR のユーザー・ロールの構成

HADR をセットアップするときに、プラットフォームごとに適切なユーザー・ロールを指定して、各種の HADR タスクを実行できるユーザーを決定します。

- Windows の場合は、DB2 管理ユーザー db2admin を使用します。
- Linux の場合は、管理ユーザー dasusr1 ではなく、DB2 インスタンス・ユーザー db2inst1 を使用します。

例えば、DB2 インスタンス・ユーザーを指定すると、db2inst1 ユーザーが 1 次データベースをバックアップし、バックアップ・イメージをスタンバイ・サーバーにコピーし、このイメージを使用してスタンバイ・サーバーをリストアまたは始動します。管理ユーザーを指定すると、dasusr1 ユーザーがコピーされたイメージの所有者であるため、バックアップ・アクションおよびリストア・アクションを実行する db2inst1 ユーザーはこのイメージにはアクセスできません。この 2 人のユーザーは異なるグループに属し、ファイルに対するアクセス権限も異なるため、HADR のセットアップが失敗する可能性があります。

## 引き継ぎ後のメッセージング・エンジンの開始

メッセージング・エンジンの自動再始動が使用不可になっている場合は、データベース引き継ぎの発生後に手動でメッセージング・エンジンを始動する必要があります。

2 つのメッセージング・エンジン・サーバーが同一クラスター内に存在し、メッセージング・エンジン・サーバー 1 がアクティブな状態でメッセージング・エンジン・サーバー 2 が結合状態になっている場合、以下の順序でイベントが発生すると、それが原因で、稼働するメッセージング・エンジン・サーバーが環境内に存在しなくなる場合があります。

1. メッセージング・エンジンが使用するデータベースの引き継ぎが行われます。
2. データ損失を防ぐためにメッセージング・エンジン・サーバー 1 がシャットダウンします。
3. メッセージング・エンジン・サーバー 2 がすべてのメッセージング・エンジンを始動し、アクティブ・サーバーとして機能するが、メッセージング・エンジン・サーバー 1 はまだダウンしています。
4. データベースの新たな引き継ぎが発生します。
5. データ損失を防ぐためにメッセージング・エンジン・サーバー 2 がシャットダウンします。
6. メッセージング・エンジン・サーバー 1 と 2 が共にダウンした状態になります。

## 追加情報へのアクセス

さらに詳細な情報が必要な場合は、以下のリンクを使用してください。

- DB2 HADR 環境で停止が発生した場合は、『高可用性ソリューションにおけるシステム停止の検出と応答』を参照してください。
- フェイルオーバーが発生した後で、DB2 HADR 状況がピアではなく、一部のデータ損失が発生した場合は、以下のトピックの説明に従って、DB2 HADR 状況をピアに構成してください。
  - HADR フェイルオーバー操作の実行
  - 引き継ぎ操作後のデータベースの再統合

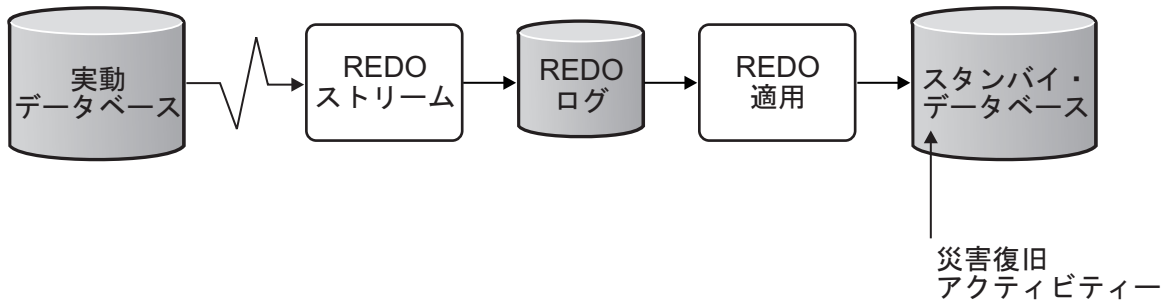
## IBM Business Process Manager での Oracle Data Guard の構成

IBM Business Process Manager で使用するように Oracle Data Guard を構成できます。高可用性、災害時リカバリー、およびデータ保護を提供する Oracle Data Guard を使用して、実動 Oracle データベースが災害やデータ破損に耐えられるように、1 つ以上のスタンバイ・データベースを作成、管理、およびモニターすることができます。

Oracle Data Guard を使用するように IBM Business Process Manager を構成する場合、通常は 1 つの実動データベース (1 次データベース) と複数のスタンバイ・データベースを用意します。この場合、Oracle Data Guard は、1 次データベースから REDO データを送信し、その REDO データをスタンバイ・データベースに適用することによって、各スタンバイ・データベースを自動的に保守します。計画停止または計画外の停止が原因で実動データベースが使用不可になった場合、Oracle Data Guard により、任意のスタンバイ・データベースを実動データベースの役割に切り替えられるため、停止に伴うダウン時間を最小限にできます。

Oracle Data Guard は、1 次データベースから REDO データを送信し、その REDO データをスタンバイ・データベースに適用することによって、各スタンバイ・データベースを自動的に保守します。

### 標準的な Data Guard 構成



1. Oracle Data Guard 環境をセットアップします。
2. 1 次データベースのデータベース・サービスを作成します。  
Exec DBMS\_SERVICE.CREATE\_SERVICE('BPM','BPM');
3. 次のコマンドを実行して、1 次データベースからのトリガーを作成します。

```

CREATE OR REPLACE TRIGGER START_SERVICES AFTER STARTUP ON DATABASE
DECLARE
  ROLE VARCHAR(30);
BEGIN
  SELECT DATABASE_ROLE INTO ROLE FROM V$DATABASE;
  IF ROLE = 'PRIMARY' THEN
    DBMS_SERVICE.START_SERVICE('ORCL'); END IF;
END;
/
  
```

注: データベースを始動すると、常に 1 次データベースが BPM サービスを開始します。したがって、クライアントは常に 1 次データベースに接続します。

4. 1 次データベースを再始動するか、次のコマンドを実行して以下のサービスを開始します。  
EXEC DBMS\_SERVICE.START\_SERVICE('BPM');
5. IBM Business Process Manager をインストールします。
6. プロファイル (Oracle インスタンスのデータベースと同様のデプロイメント環境) を作成します。プロファイルの作成中に、「Oracle データベース」を選択し、ステップ 2 で作成したデータベース・サービスに接続します。

1 次データベースとスタンバイ・データベースのすべてが同じサーバーにインストールされている場合、すべてのデータベースが同じ IP アドレスと Oracle リスニング・ポートを共有します。これ以上の構成は不要です。

一方、1 次データベースとスタンバイ・データベースが異なるサーバーにインストールされている場合には、これらのデータベースは異なる IP アドレスを持ち、同じ Oracle リスニング・ポートを共有します。1 次データベースとスタンバイ・データベースが別個のサーバー上にある場合、すべてのデータ・ソースを変更する必要があります。変更後の JDBC URL は以下のような URL になります。

JDBC URL を変更するには、以下の手順に従います。

1. IBM Business Process Manager 管理コンソールにログインします。
2. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」に移動します。
3. Oracle データベースに接続するすべてのデータ・ソースを変更し、以下のような URL を設定します。

```

jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=
  (ADDRESS_LIST=
    (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=<host A>)(PORT=1521))
    (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=<host B>)(PORT=1521))
    (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=<host C>)(PORT=1521))
  )
  
```



```
(LOAD_BALANCE=off)
(FAILOVER=on)
)
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=BPM))
)
```

---

## IBM Business Process Manager Standard のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager は、標準インストール、カスタム・インストール、またはサイレント・インストールを使用してインストールできます。スタンドアロンまたは Network Deployment 環境で、IBM Business Process Manager を構成することができます。

## Linux における IBM Business Process Manager のインストールと構成

IBM Business Process Manager を Linux にインストールし、スタンドアロンまたは Network Deployment 環境を構成します。

### Linux におけるスタンドアロン環境の構成

標準インストールを使用して、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center または Process Server プロファイルを構成できます。あるいは、カスタム・インストールを選択し、その後にプロファイルを作成して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。

#### 標準インストールと構成:

「標準インストール」オプションは、IBM Business Process Manager をインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

#### 関連タスク:

99 ページの『Linux システムのインストール準備』

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

#### 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

### 新しい DB2 Express データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:

標準インストールでは、DB2 Express を Linux にインストールし、IBM Business Process Manager に必要なデータベースを構成できます。このパスは、管理特権があり (root ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合のみ選択します。

### 新しい DB2 Express データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールでは、DB2 Express をインストールし、IBM Business Process Manager の必要なデータベースを構成します。このパスは、管理特権があり (root ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Center のインストール」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。

- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「いいえ」を選択して、DB2 Express をインストールします。
10. 以下の DB2 管理ユーザー名とパスワードを指定します。

- DB2 インスタンス・ユーザー
- DB2 fenced ユーザー
- DB2 管理サーバー (DAS) ユーザー

fenced ユーザー名または管理サーバー (DAS) ユーザー名が存在する場合は、「新規ユーザー」チェック・ボックスをクリアします。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

**注:** Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

## 関連情報:

### Installation Manager の更新

#### 新しい DB2 Express データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールでは、DB2 Express をインストールし、IBM Business Process Manager の必要なデータベースを構成します。このパスは、管理特権があり (root ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「**Process Server のインストール**」を選択します。

6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。

**制約事項:** DB2 Express をインストールしているので、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

環境の「**タイプ**」として「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. 「**次へ**」をクリックします。

8. 「**いいえ**」を選択して、DB2 Express をインストールします。

9. 以下の DB2 管理ユーザー名とパスワードを指定します。

- DB2 インスタンス・ユーザー
- DB2 fenced ユーザー
- DB2 管理サーバー (DAS) ユーザー

fenced ユーザー名または管理サーバー (DAS) ユーザー名が存在する場合は、「**新規ユーザー**」チェック・ボックスをクリアします。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

10. 以下の DB2 管理ユーザー名とパスワードを指定します。

- DB2 インスタンス・ユーザー
- DB2 fenced ユーザー
- DB2 管理サーバー (DAS) ユーザー

fenced ユーザー名または管理サーバー (DAS) ユーザー名が存在する場合は、「新規ユーザー」チェック・ボックスをクリアします。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

11. 「次へ」をクリックします。

12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

**関連情報:**



Installation Manager の更新

### **DB2 データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

## DB2 データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECON 64 DEFERRED;
connect reset;
```

## DB2 データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリからインストールする場合や、フィックス・レベ

ルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。

4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「Process Center のインストール」を選択します。

6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。

- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

8. 「次へ」をクリックします。

9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。

10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 43. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。



表 43. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリーに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリーへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

**注:** Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

## 関連情報:

 Installation Manager の更新

### DB2 データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

`extract_directory/launchpad.sh`

- オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで `launchpad` プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
- ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
- 「Process Server のインストール」を選択します。
- Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
- 「次へ」をクリックします。
- 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
- 必要なデータベース情報を指定します。

表 44. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

## 関連情報:

### Installation Manager の更新

#### **Oracle データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### **Oracle データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

#### **Oracle データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。

4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「Process Center のインストール」を選択します。

6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。

- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

8. 「次へ」をクリックします。

9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。

10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 45. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。

表 45. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース (Process Center database)	<p>Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

- 「次へ」をクリックします。
- 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

- 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:

 Installation Manager の更新

### Oracle データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:



```
ifix.1=/bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=/launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Server のインストール」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 46. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスバックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるように、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、

『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### SQL Server データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### SQL Server データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、hostname は SQL Server をホストするシステムのホスト名、db\_user\_account と db\_user\_password はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード

ド、 **database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$SstmtExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユ

ユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが `dbo` であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されます。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。`SQLServerXADataSource` クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

`javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp_sqljdbc_xa_init_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp_sqljdbc_xa_init_ex'.")`..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。

- c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

### **SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリーが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
6. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
9. 必要なデータベース情報を指定します。

表 47. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース (Process Center database)	Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

10. 「次へ」をクリックします。
11. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックします。「**サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください**」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用でき



るよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

12. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:



Installation Manager の更新

### **SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:**

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=/launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Server のインストール」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスと

の間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 48. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「次へ」をクリックします。

12. 「インストールの要約」 ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」 オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### カスタム・インストールおよび構成:

「カスタム・インストール」 オプションは、「標準インストール」 オプションでは提供されないインストール・オプションまたは構成オプションが必要である場合、サイレントにインストールしたい場合、あるいは WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境にインストールする場合に、IBM Business Process Manager をインストールするために使用します。

#### 関連タスク:

99 ページの『Linux システムのインストール準備』

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

#### 関連資料:



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### IBM Business Process Manager Standardのインストール:

カスタム・インストールでは、対話式インストールかサイレント・インストールを選択できます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

#### 関連タスク:

99 ページの『Linux システムのインストール準備』

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

#### 関連資料:



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### **IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージは対話式にインストールできます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

#### 関連タスク:

99 ページの『Linux システムのインストール準備』

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

#### 関連資料:



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### **WebSphere Application Server の新規インストールを伴う対話式インストール:**

カスタム・インストールを使用して、IBM Business Process Manager を WebSphere Application Server の新規インストールと共にインストールできます。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。
  - 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、次のステップに進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドを入力して手動で Launchpad を開始します。

```
mount_point/launchpad.sh
```

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。

- b. 以下のコマンドを入力して、ランチパッドを始動します。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

2. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。

インターネットにアクセスできず、ランチパッドの更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合、プロパティー・ファイルを使用して、更新が存在する場所を Installation Manager に指示できます。以下のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルでは、後にドットを付けたランチパッド接頭部を使用します。接頭部とドットの後の名前の部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ランチパッドのアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

3. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「カスタム・インストール」をクリックします。
4. 「管理ユーザーとしてのインストール」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。root ユーザーでない場合、または root 特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリックします。
5. 「インストール」をクリックします。IBM Business Process Manager をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment が自動的にインストールされます。
6. Installation Manager の「パッケージのインストール」ページで、「**IBM Business Process Manager Standard**」パッケージを選択します。デフォルトでは、
7. 「次へ」をクリックして先に進みます。IBM サービス・リポジトリーに接続するための IBM ID とパスワードを指定するよう求めるプロンプトが出されます。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリーへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して必須修正を

インストールできます。必須修正のダウンロードおよびインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

8. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
9. 「ロケーション」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび Installation Manager のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。「パッケージのインストール」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。IBM 以外の前提条件および相互前提条件となる製品のサポート・バージョンへのマイグレーション方法については、それらの製品のドキュメンテーションを参照してください。

10. 「フィーチャー」ページで、正符号を展開してインストールするパッケージのフィーチャーを選択します。Installation Manager では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。
  - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
  - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。
  - c. オプション: Process Server をインストールする場合は、Process Server フィーチャーを展開し、Process Server の用途を変更できます。実動でサーバーを使用する場合は「**実動**」(デフォルト)を選択し、テスト、ステージング、または開発のみにサーバーを使用する場合は「**非実動**」を選択します。選択内容はインベントリーの目的で製品タグに記録されます。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。

11. 「要約」ページで IBM Business Process Manager Standard パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
12. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを実行する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「**完了**」をクリックして、Installation Manager を終了します。

## 関連情報:



Installation Manager の更新

### 新規 DB2 Express データベースおよび WebSphere Application Server の新規インストールを伴う対話式インストール:

カスタム・インストールでは、DB2 Express を Linux にインストールし、IBM Business Process Manager に必要なデータベースを構成できます。このパスは、管理特権があり (root ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

- 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、次のステップに進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドを入力して手動で Launchpad を開始します。

```
mount_point/launchpad.sh
```

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドを入力して、ランチパッドを始動します。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

2. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。

インターネットにアクセスできず、ランチパッドの更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合、プロパティー・ファイルを使用して、更新が存在する場所を Installation Manager に指示できます。以下のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルでは、後にドットを付けたランチパッド接頭部を使用します。接頭部とドットの後の名前の部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ランチパッドのアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

3. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「カスタム・インストール」をクリックします。



4. 「**管理ユーザーとしてのインストール**」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。root ユーザーでない場合、または root 特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリックします。
5. 「**インストール**」をクリックします。IBM Business Process Manager をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment が自動的にインストールされます。
6. Installation Manager の「**パッケージのインストール**」ページで、「**IBM Business Process Manager Standard**」パッケージを選択します。組み込みの DB2 Express データベースをインストールして使用する場合は、「**IBM DB2 Express**」を選択します。
7. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ID とパスワードを指定するよう求めるプロンプトが出されます。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そうしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「**Required interim fix for APAR JR44669**」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「**Required interim fixes for IBM Business Process Manager**」を参照します。

「**キャンセル**」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して必須修正をインストールできます。必須修正のダウンロードおよびインストールについて詳しくは、『**Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0**』を参照してください。

8. 「**ライセンス**」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
9. 「**ロケーション**」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび Installation Manager のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。「**パッケージのインストール**」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。IBM 以外の前提条件および相互前提条件となる製品のサポート・バージョンへのマイグレーション方法については、それらの製品のドキュメンテーションを参照してください。

**重要:** DB2 Express をインストールしているので、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

10. 「フィーチャー」 ページで、正符号を展開してインストールするパッケージのフィーチャーを選択します。Installation Manager では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。
- オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
  - オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。
  - オプション: Process Server をインストールする場合は、Process Server フィーチャーを展開し、Process Server の用途を変更できます。実動でサーバーを使用する場合は「**実動**」(デフォルト) を選択し、テスト、ステージング、または開発のみにサーバーを使用する場合は「**非実動**」を選択します。選択内容はインベントリーの目的で製品タグに記録されます。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。

11. 「共通の構成」 ページで、DB2 の管理ユーザー名とパスワードを指定します。 デフォルトのユーザー名は以下のとおりです。
- インスタンス・ユーザー名: bpminst
  - 隔離 (fenced) ユーザー名: bpmfenc
  - 管理サーバー (DAS) ユーザー名: bpmadmin

fenced ユーザー名または管理サーバー (DAS) ユーザー名が存在する場合は、「**新規ユーザー**」チェック・ボックスをクリアします。

「**再検証**」をクリックして、選択内容が正しいことを確認します。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれていてはなりません。

12. 「要約」 ページで IBM Business Process Manager Standard パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。 進行標識で、インストールの完了率が示されます。
13. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
- オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - 終了時にプロファイル管理ツールを実行する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - 「**完了**」をクリックして、Installation Manager を終了します。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### **IBM Business Process Manager のサイレント・インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合

はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

#### 関連タスク:

99 ページの『Linux システムのインストール準備』

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

#### 関連資料:



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### コマンド行を使用したサイレント・インストール:

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager をサイレント・インストールできます。この方式では、コマンドを 1 つ実行するだけでインストールを実行できます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

```
extract_directory/IM/tools/imutilsc -silent -nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
3. 次のコマンドを実行します。

```
extract_directory/IM/tools/imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense  
-installationDirectory location -repositories repository  
-properties key=value,key=value -showVerboseProgress -log logName.log
```

ここで、

- *list\_of\_product\_IDs* は、インストールする製品と機能の ID のリストです。必須フィーチャーを組み込む必要があります。構文は *productID.feature.feature* で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 49. 製品 ID

製品	製品 ID	フィーチャーおよび説明
IBM BPM Standard	com.ibm.bpm.STD.V80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• bpmStd.nonprod: テスト、ステージング、または開発用。このフィーチャーまたは bpmStd.prod のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• bpmStd.prod: 実動用。このフィーチャーまたは bpmStd.nonprod のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• core.feature: 必須。WebSphere Application Server コア・コンテンツ。</li> <li>• ejbdeploy: 必須。Enterprise JavaBeans (EJB) 3.0 より前のモジュール。</li> <li>• thinclient: 必須。スタンドアロン・シン・クライアントおよびリソース・アダプター。</li> <li>• embeddablecontainer: 埋め込み可能 EJB コンテナ。</li> <li>• samples: サンプル・アプリケーション・フィーチャー。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_32bit: 32 ビット版 Software Development Kit (SDK)。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_64bit のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_64bit: 64 ビット版 SDK。このフィーチャーは、64 ビット・システムでのみ選択可能です。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_32bit のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
Installation Manager	com.ibm.cic.agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>• agent_core: Installation Manager コア・コンテンツ。</li> <li>• agent_jre: Installation Manager Java ランタイム環境 (JRE)。</li> </ul>
DB2 Express for Linux (32 ビット版)	com.ibm.ws. DB2EXP97.linuxia32	適用なし: DB2 は、オペレーティング・システムおよびビット・レベルが一致している必要があります。
DB2 Express for Linux (64 ビット版)	com.ibm.ws. DB2EXP97.linuxia64	適用なし: DB2 は、オペレーティング・システムおよびビット・レベルが一致している必要があります。

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

```
extract_directory/repository/repos_32bit
extract_directory/repository/repos_64bit
```

複数のリポジトリを指定する場合は、リポジトリの場所をコンマで区切ってください。

- `key=value` は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。IBM Installation Manager を使用して、暗号化パスワードを作成します。

表 50. キー

キー	説明
user.db2.use.existing	既存の DB2 セットアップを使用する場合は、以下の行を正確に追加します。 <code>user.db2.use.existing=true</code>  DB2 をインストールする必要がある場合は、値 <code>false</code> を指定します。
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。
user.db2.instance.username	DB2 インスタンス・ユーザー名。デフォルト値は <code>bpminst</code> です。
user.db2.instance.password	DB2 インスタンス・ユーザー名の暗号化パスワード。
user.db2.fenced.newuser	新規ユーザーの場合は値を <code>true</code> にします。既存のユーザーの場合は値を <code>false</code> にします。
user.db2.fenced.username	fenced ユーザー名。デフォルト値は <code>bpmfenc</code> です。
user.db2.fenced.password	fenced ユーザー名の暗号化パスワード。
user.db2.das.newuser	新規ユーザーの場合は値を <code>true</code> にします。既存のユーザーの場合は値を <code>false</code> にします。
user.db2.das.username	管理サーバー (DAS) ユーザー名。デフォルト値は <code>bpmadmin</code> です。
user.db2.das.password	管理サーバー・ユーザー名の暗号化パスワード。

- `logName` は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、`imcl` のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストした製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。エラーも警告もない場合、ログ・ファイルは空になります。

以下の例では、IBM Business Process Manager Standard、WebSphere Application Server Network Deployment、および DB2 Express が Linux にインストールされます。

```
imcl install com.ibm.bpm.STD.V80,bpmStd.prod com.ibm.websphere.ND.v80,core.feature,ejbdeploy,thinclient,
embeddablecontainer,samples,com.ibm.sdk.6_32bit com.ibm.ws.DB2EXP97.linuxia32 -acceptLicense
-installationDirectory /usr/IBM/BPM80 -repositories /usr/tmp/BPM/repository
-properties user.db2.instance.username=bpmadmin,user.db2.instance.password=Vvrs88V/a9BUdxwodz0nUg==
-showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」

を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

#### 関連資料:



imcl のコマンド行引数



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### 関連情報:



IBM WebSphere Application Server インフォメーション・センター

#### 応答ファイルを使用したサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Standard をサイレント・インストールできます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

応答ファイルを使用すると、保存された共有可能なファイルでインストール・オプションを設定し、そのファイルを 1 台以上のマシンで使用できるため、サイレント・インストールを単純化し、プロセスにおけるエラーを減らすことができます。インストール・ソフトウェアには、それぞれのサポートされるオペレーティング・システムとビット・バージョン用のサンプルの応答ファイルが用意されています。サンプルの応答ファイルを変更せずにそのまま使用すると、デフォルト設定でサイレント・インストールを実行することができます。あるいは、これらの応答ファイルを変更して、特定の値を設定することもできます。サンプルの応答ファイル内のコメントに、詳細な説明と、値の設定に関する情報が記載されています。

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

```
extract_directory/IM/tools/imutilsc -silent -nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Standard をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーから、ご使用のビット・バージョンおよびユーザー・アクセス・レベルに適したサンプル応答ファイルをコピーします。

```
extract_directory/responsefiles/BPM/
```

あるいは、応答ファイルは Installation Manager でアクションを記録することによっても作成できます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager で行った選択が XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。

3. サンプル応答ファイルに指定されたデフォルト値では基本インストールが実行されますが、ファイルとそのコメントを確認し、ご使用の環境に合わせて必要に応じてパラメーターとユーザー ID のアクセス・レベルを変更してください。

特に、以下のパラメーターと値を確認してください。

- 非 root ユーザー ID の場合は、すべてのロケーション変数が、そのユーザーが許可を持つロケーションを指していることを確認してください。
  - リポジトリ・ロケーション。 *extract\_directory/responsefiles/BPM/* ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリの場所を指定します。リポジトリは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリでこの応答ファイルを再び指定します。
  - IBM Installation Manager が既にインストールされているか、これからインストールされるインストール・ロケーション (**installLocation**)。
  - IBM Business Process Manager Standard がインストールされるインストール・ロケーション。
  - Eclipse ロケーション (**eclipseLocation**)。
  - 製品のフィーチャーのリスト。
  - 実動用または非実動用。
  - DB2 Express をインストールする場合は、応答ファイルの説明に従って、必要なユーザー ID とパスワードを指定します。含める暗号化パスワードを生成するには、ステップ 1 の説明に従ってください。
4. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
  5. 次のコマンドを実行します。

root ユーザー:

```
extract_directory/IM/installc -acceptLicense input
  extract_directory/responsefiles/BPM/response_file_name.xml
  -log preferred_log_location/silent_install.log
```

非 root ユーザー:

```
extract_directory/IM/userinstc -acceptLicense input
  extract_directory/responsefiles/BPM/response_file_name.xml
  -log preferred_log_location/silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Standard がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタ

ンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

#### 関連タスク:

 Installation Manager を使用したサイレント・インストール

 Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

#### 関連資料:

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (root の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

非 root ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の `install_root/profiles` ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

#### 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非 root ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をイン



ストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします。製品インストール・ユーザーは、root ユーザーの場合または非 root ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- 次のように入力して、**install\_root/logs/manageprofiles** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

- 次のように入力して **install\_root/properties/fsdb** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、profileRegistry.xml ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/AppServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/AppServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK
```

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非 root ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリーおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

root ユーザーと非 root ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

### プロファイルおよびデータベースの構成:

標準インストールを使用しなかった場合は、製品をインストールした後に、1 つ以上のプロファイルを作成または拡張してランタイム環境を定義する必要があります。プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

### Linux における DB2 データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

### DB2 データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

DB2 Universal Database™ を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ファイルに追加します。実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqlllib/db2profile
```

**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーとしてログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、root ユーザーを `/etc/group` 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

### **DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### **DB2 を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベースの作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、

出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

[info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

[info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
スキーマ名 [デフォルト=] :
(Schema name[default=] :)
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Regular pagesize[default=32k] :)
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Temporary pagesize[default=32k] :)
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)
```

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

- データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)
```

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。  
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。  
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]  
(2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]  
(3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]  
(4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]  
(5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]  
(6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]  
(7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]  
(8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]  
(9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]  
(10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]  
(11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]  
(12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]  
(2)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]  
(3)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]  
(4)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]  
(5)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.standard.standalone は完了しました  
(bpm.standard.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :



12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=TWPSPACE]:  
(Regular TableSpace[default=TWPSPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
Temporary TableSpace[default=TWSTEMPSpace] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database

scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:  
(Database server port[default=50000] :)  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 JCC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## DB2 データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## DB2 データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

データベースをリモート・サーバーで構成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのデータベースを作成する必要があります。ローカル・サーバーにデータベースを作成することも、リモート・サーバーの既存のデータベースを使用することも可能です。

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ファイルに追加します。実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqlllib/db2profile
```

**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーとしてログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、root ユーザーを `/etc/group` 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103:db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
- 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。
- 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」 プロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
- 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
- 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
- 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。



プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower® 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 51. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、 <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard, Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、**Linux** サービスを使用して **IBM Business Process Manager** を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、**IBM Business Process Manager** は、**Linux** サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが **Linux** サービスとして構成されている場合、**IBM Business Process Manager** は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する **Linux** サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを **Linux** サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

**Linux** サービスを削除するためには、ユーザーが `root` ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、`root` ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: **Web** サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。



- a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。 それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。 設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

17. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。 新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
18. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 52. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、 <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

19. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  20. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
```

```

# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

```

```

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period

```



```

#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or

```

```

# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword

```

```

#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

```

```

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port

```

```

# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the

```

```

# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMPassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
# The schema name for the Common database. If no value is specified, the
# following default database schema names are used:
# DB2 database
# The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
# The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
# Oracle and Microsoft SQL Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType

```



```

#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### **Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01
#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
processCenterURL=process_center_URL

```

```

processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####

```

```

# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#

```



```

# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database.  The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name.  Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password.  Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse.  The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name.  Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserID

```

```

#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter:  cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM

```

```

# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる *Process Center* のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して *Process Center* のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」 ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」 をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「標準的」 または「拡張」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。

「標準的」 オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」 オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」 をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」 をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」 をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」 の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならぬため、「次へ」 は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 53. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。



表 53. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」 ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」 をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「標準的」 または「拡張」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。

「標準的」 オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」 オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」 をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」 をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」 をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」 をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」 は、値が入力されて初めて使用可能になります。

8. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 54. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

12. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profiles/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に *profile\_root/dbscripts/ProcessServer/DB2/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2/* に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/DB2/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** データベースに接続し、**db2 bind DB2\_installation\_directory¥bnd¥@db2cli.lst blocking all grant public** コマンドを使用してコマンド行インターフェースを Business Space データベースにバインドした後、データベース接続をリセットします。

### **スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:**

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。



**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### **Linux における DB2 for z/OS データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:**

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### **データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン):**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:**

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

```
-? , -help
ヘルプ情報を表示します。

-e db_design_file_name
指定したデータベース設計ファイル (*.dbDesign、*.properties など) を編集します。

-v db_design_file | db_scripts_output_directory
db_design_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。db_scripts_output_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。
```

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することが

できます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション (2)**bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション (1)**[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**注:** DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。
- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]

```

(5)[BSPACE]      WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME]      WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME]      WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME]      WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
(12)[save and exit]

```

Please enter the number for the database component :12

```

[status] bpm.advanced.standalone.topology is not complete with 6 remaining item(s):
[ 1 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 2 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
[ 3 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminUserName' for SECURITY_ADMIN_USER is empty.
[ 4 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.
[ 5 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 6 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.

```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):
```

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. ここまでの手順で指定したディレクトリ内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```

[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB

```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。



- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。各ディレクトリーには、**createDB2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- **dbDesignGenerator.log** という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。**DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...
```

```
[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)
```

```
[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。
```

```
[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)
```

```
(1)Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
(2)Create a database design for a single component
(3) 既存のデータベース設計を編集する
(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
(5)exit [q]
```

```
Please enter the number for the design option :
```

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [component(s)]):
```

```
(1)bpc
(2)bpcreporting
(3)bpm_performancedw
```

- (4)bpm\_processserver
- (5)bspace
- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)

Data source user name[default=] :

Database schema name (SQLID)[default=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-z/OS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
Database Location on z/OS system[default=] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
```

```
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「false」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。  
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

## 関連タスク:

278 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

## DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するためのものですが、Linux on System z® 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関与することがあります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関

係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力 completed したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd /install_root/util/dbUtils
```

例: `cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils`

3. 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.sh -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.sh -g /tmp/DB2-zOS/W8CELL.nd.dbDesign
```

4. 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで `ddl_outDir` 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、`ddl_outDir` 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

1. 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

2. FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
3. z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
```

```
...
```

```
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```



## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### **DB2 for z/OS データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:**

プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

### **プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「`Linux_operating_system_menus_to_access_programs`」 > 「IBM」 > 「`your_product`」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**  
**をデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。

- 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
- 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
- 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。

- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「*Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs*」 > 「IBM」 > 「*your\_product*」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard, Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」 および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。

- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しな

いことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。



- d. 「次へ」をクリックします。
15. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「プロトコル」:** Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。
  - d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
17. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「**作成**」をクリックしてプロファイルを作成するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response

- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを実作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType

```



```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDB0S390
# Default Values:

```

```

# DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid

```

dbPassword=db\_pswd

#####

# Parameter: procSvrDbName

#

# Description:

# Database name for Process Server database. The value specified for  
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.

#

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

#

# Valid Values:

# Varies

# Default Values:

# None

#

# Parameter: dbProcSvrUserId

#

# Description:

# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.

#

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

#

# Valid Values:

# Varies

# Default Values:

# None

#

# Parameter: dbProcSvrPassword

#

# Description:

# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.

#

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

#

# Valid Values:

# Varies

# Default Values:

# None

#

procSvrDbName=procSvr\_Db\_Name

dbProcSvrUserId=db\_ProcSvr\_UserId\_name

dbProcSvrPassword=db\_ProcSvr\_Password

#####

# Parameter: perfDWDbName

#

# Description:

# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for  
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.

#

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

#

# Parameter: dbPerfDWUserId

#

# Description:

# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the  
# Performance Data Warehouse.

#

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

#

# Parameter: dbPerfDWPassword

#

# Description:

# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the  
# Performance Data Warehouse.

#

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production

```

```

# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT
#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2zOS.response

```

```

#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```

profileName=ProcSrv01

```
#####  
# Parameter: applyPerfTuningSetting  
#  
# Description:  
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are  
#   creating.  
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.  
#  
# Valid Values:  
#   development  
#   standard  
#   production  
# Default Values:  
#   None  
#####  
#applyPerfTuningSetting=standard  
  
#####  
# Parameter: cellName  
#  
# Description:  
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each  
#   profile.  
#   The default value for this parameter is based on a combination of the  
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:  
#   if (DMgr)  
#       shortHostNameCellCellNumber  
#   else  
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell  
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is  
#   the node number that you used to define the node name.  
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters  
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   Varies  
#  
# Parameter: nodeName  
#  
# Description:  
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.  
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile  
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.  
#   This parameter is required for profile creation only with the  
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.  
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.  
#   The default value for this parameter is based on the short host name,  
#   profile type, and a trailing number, for example:  
#   if (DMgr)  
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber  
#   else  
#       shortHostNameNodeNodeNumber  
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.  
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters  
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   Varies  
#  
# Parameter: serverName  
#
```



```

# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####

```

```
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
```

```
# Parameter: signingCertDN
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: signingCertValidityPeriod
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: keyStorePassword
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#####
```

```
#signingCertDN =distinguished_name
```

```
#signingCertValidityPeriod =validity_period
```

```
#keyStorePassword =keyStore_password
```

```
#####
```

```
# Parameter: defaultPorts
```

```
#
```

```
# Description:
```

```
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
```

```
#
```

```
# Valid Values:
```

```
# Varies
```

```
# Default Values:
```

```
# None
```

```
#
```

```
# Parameter: startingPort
```

```

#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbiddbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:

```

```

# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2UDBOS390
# Default Values:
# DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:

```

```

# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#

```

```

# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```



```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」>「IBM」>「your\_product」>「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
- 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
- 「プロファイル拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
- 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  - 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
    - 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
    - 「参照」をクリックします。
    - 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。
    - 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
  - 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

10. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。「**次へ**」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
  - 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
  - **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
  - **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
  - **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。
- 「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。
9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。 データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
10. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  11. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、**install\_root/profileRegistry.xml** ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root/profileTemplates/BPM** ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完

全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### DB2 for z/OS の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

#### DB2 for z/OS のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

**#DB\_USER#** として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファークラス・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された createDatabase.sql データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

**#SCHEMA#** のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を **#DB\_USER#** ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

## DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース #DB\_NAME# に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF<sup>®</sup>) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。

- ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、SICELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようになります。



```
INFORMATION FOR GROUP S1CELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS  OWNER=ZWPS  CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN  CONNECT  000000  NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE  RESUME DATE=NONE
```

## 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

## ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

## クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## **DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:**

データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

### 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

#### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

#### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが `listen` するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` `port` はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

274 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファー・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファロー・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは

DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『**createDB2.sh** スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

270 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。



**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBST0 -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する *z\_schema.sql* ファイルおよび *z\_schemaProc.sql* ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。*z\_schemaProc.sql* ファイル

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

270 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS™ データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に `createDB2.sh` スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (`z_schema.sql` および `z_schemaProc.sql`) を実行することもできます。

- 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

274 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

`createDB2.sh` スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、`createDB2.sh` スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (`z_schema.sql` および `z_schemaProc.sql`) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
  - データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
    - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。
    - メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。

- a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
- b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
- c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

219 ページの『スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

211 ページの『DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

#### • **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリーの *bootstrapProcessServerData.timestamp.log* というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようになります。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。

- b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
- a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:
- ```
BB000222I: "BusName"
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

### Linux における Oracle データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### Oracle データベースのセットアップ:

ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースの構成を、プロファイルの作成または拡張の前、後、またはその途中に実行できます。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

データベースを作成および構成するためのオプションは以下のとおりです。

- ユーザーまたは DBA があらかじめデータベースを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、プロファイル管理ツールが自動的にその構成を行います。
- ユーザーまたは DBA がデータベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、ユーザーがそのファイルのプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーに渡します。
- データベースの構成を延期し、ユーザーまたは DBA が、プロファイルの作成中または拡張中に生成されたスクリプトを実行することによって、後から必要なデータベースおよびデータベース表を作成します。

#### Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。



1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB]            WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

```

(2)[BPC]          WBI_BPC : [status = not complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[Bspace]      WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME]      WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME]      WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME]      WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :

```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。 完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。 このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。 データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリ

がまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

**スタンドアロン環境における Oracle を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成**  
:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

(1) bpc

(2) bpcreporting

(3) bpm\_performancedw

(4) bpm\_processserver

(5) bspace

(6) cei

(7) sca

(8) sibme

(9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。



**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=BPMDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8  
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。  
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### Oracle データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## Oracle データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルの作成中または拡張中にデータベース情報を構成するには、Oracle インスタンスのサービス名を知っておく必要があります。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Center スタンドアロン」 プロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。
- 個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。



- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 55. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

| フィールド                 | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Process Server データベース | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p> |

表 55. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Performance Data Warehouse データベース                                                        | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)                                                           | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| サーバー・ポート                                                                                 | デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。                                                                                                                                                                                                                                                               |

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン」 プロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または 「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。

6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張:「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使

用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。た

だし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

d. 「次へ」をクリックします。

15. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

17. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
18. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 56. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

| フィールド                 | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Process Server データベース | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p> |



表 56. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Performance Data Warehouse データベース                                                        | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)                                                           | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| サーバー・ポート                                                                                 | デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。                                                                                                                                                                                                                                                               |

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
19. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  20. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response

- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

```

```

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:

```

```

# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```

```

#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None

```



```

#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType

```

```

#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter:  dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter:  dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#

```

```

# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for

```

```

# -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####

```

```

# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserID
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmbdDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####

```

```

# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.

```



```

#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard

```

```

# production
# Default Values:
# None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
# Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
# to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.

```

```

# Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
# offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the

```

```

# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default

```

```

#     port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#     settings for the new profile.
#     Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#     parameter.
#     During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#     automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#     -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#     parameter. The recommended port values can be different than the default
#     port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#     Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#     false. The default value for this parameter is false. When the
#     manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#     set to true , the Linux service is created with the profile when the
#     command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#     manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#     service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#     does not have sufficient permission to set up the service. An
#     INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#     creation and the profile creation log
#     install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#     message indicating the current user does not have sufficient permission to
#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#

```

```

# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#

```

```

# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE

```

```

#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

```



```

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」 ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」 をクリックします。

6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「Oracle」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。

- このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
- データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - 「次へ」をクリックします。
- 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 57. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

| フィールド                             | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Process Server データベース             | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>                         |
| Performance Data Warehouse データベース | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)    | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| サーバー・ポート                          | デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

表 57. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                            |
|------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。 |

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
 スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。



プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」 をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」 タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」 ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」 ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」 をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」 ページで、「**標準的**」 または「**拡張**」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」 をクリックします。

「標準的」 オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」 オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 **Oracle** を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、**SYSDBA** 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 58. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Process Server データベース                                                                    | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>                         |
| Performance Data Warehouse データベース                                                        | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b><br/>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b><br/>Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b><br/>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)                                                           | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| サーバー・ポート                                                                                 | デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。                                                                                                                                                                                                                                                               |

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。

- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは

**-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の Oracle データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root*/dbscripts/ProcessServer/Oracle/ に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root*/dbscripts/PerformanceDW/Oracle/ に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/Oracle/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** 代わりに、次の順序で個々のスクリプトを手動でカスタマイズし、実行することもできます。

- a. **createDatabase.sql**



- b. `createTable_BusinessSpace.sql`
- c. `createGrant_BusinessSpace.sql`

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

**重要:** `bootstrap` コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **`bootstrapProcessServerData.sh`**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリーの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### Linux における SQL Server データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### SQL Server データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは `BPMDB`、Performance Data Warehouse データベースは `PDWDB`、共通データベースは `CMNDB` です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name  
'message.routingCache'  
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is  
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class  
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;  
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;  
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is  
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement  
(SQLServerPreparedStatement.java:388)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute  
(SQLServerPreparedStatement.java:338)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery  
(SQLServerPreparedStatement.java:281)  
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)  
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

## XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**。

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。

- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### SQL Server を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

(1) bpm.advanced.nd.topology

(2) bpm.advanced.standalone

(3) bpm.standard.nd

(4) bpm.standard.standalone

(5) wesb.nd.topology

(6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション (2)bpm.advanced.standalone.topology を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

(2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]

(3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]

(4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]

(5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]

(6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]

(7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]

(8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]

```
(9)[SibMe]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
```

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```



注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s)):
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2
```

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき

- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における *SQL Server* を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

- Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

- Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

- オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-

```
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## SQL Server データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## SQL Server データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

**制約事項:** Process Server データベース (BPMDDB) および Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) では、大/小文字が区別されないようにする必要があります。それ以外のデータベースでは、大/小文字を区別できます。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 59.

| データベース管理システム         | データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権                                                                                                                                          | データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権                |
|----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| Microsoft SQL Server | SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。 | ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。 |

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド



**ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 dbo として CMNDB データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

**注:** IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。

### **プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」 をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならぬため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」 および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」 をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」 および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」 フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」 フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」 をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」 をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合

は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

d. 「次へ」をクリックします。

17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 60. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

| フィールド                                                                                           | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| <b>Process Server データベース</b>                                                                    | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>                                                 |
| <b>Performance Data Warehouse データベース</b>                                                        | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)                                                                  | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| サーバー・ポート                                                                                        | デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| <b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b> | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%</code> SQLServer に置かれています。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

表 61. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

| フィールド                                                                                                                                                        | SQL 認証に必要なアクション                                                                                                                                     | Windows 認証に必要なアクション                                                                      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p> |

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。



4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および

tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、**Linux** サービスを使用して **IBM Business Process Manager** を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、**IBM Business Process Manager** は、**Linux** サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが **Linux** サービスとして構成されている場合、**IBM Business Process Manager** は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する **Linux** サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを **Linux** サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

**Linux** サービスを削除するためには、ユーザーが `root` ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、`root` ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. オプション: 拡張: **Web** サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。

- a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
15. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名**: 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ**: Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

- 17. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
- 18. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 62. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

| フィールド                            | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。 |                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| Process Server データベース            | Process Server データベースの場合は、以下のパラメータの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名<br/>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード<br/>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認<br/>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul> |

表 62. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Performance Data Warehouse データベース                                                        | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名<br/>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード<br/>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認<br/>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)                                                           | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| サーバー・ポート                                                                                 | デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー \${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer に置かれています。                                                                                                                                                                                                                      |

表 63. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

| フィールド                                                                                                                                          | SQL 認証に必要なアクション                                                                                                                                     | Windows 認証に必要なアクション                                                                      |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p> |

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証: Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - Windows 認証: Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
19. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  20. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。

- default.procsvr: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Standalone.response
```



ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmin -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDbName PERFDW -dbPerfDWUserId perfadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the

```

```

# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:

```

```

# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####

```

```

# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

```



```

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName

```

```

#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId

```

```

dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pwd
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:

```

```

# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT
#####
# These response file has the applicable parameters for creating a

```

```

# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be

```

```

# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword

```



```

# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winServiceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winServiceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winServicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winServiceCheck
#
# Description:

```

```

# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false

```

```

#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB

```

```

#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

```

```

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
# An optional parameter that is valid in all default profile templates.
# Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
# windows authentication.
#

```



```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.

```

```
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。

- b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 64. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

| フィールド                             | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| Process Server データベース             | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名<br/>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード<br/>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認<br/>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>                                                 |
| Performance Data Warehouse データベース | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名<br/>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード<br/>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認<br/>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)    | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| サーバー・ポート                          | デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |

表 64. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                                              |
|------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。 |

表 65. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

| フィールド                                                                                                                                                        | SQL 認証に必要なアクション                                                                                                                                     | Windows 認証に必要なアクション                                                                      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p> |

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
- **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。

11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の

Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合



は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

d. 「次へ」をクリックします。

11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 66. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

| フィールド                                                                                    | 必要なアクション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。                                                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| Process Server データベース                                                                    | <p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>                                                 |
| Performance Data Warehouse データベース                                                        | <p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p> |
| データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)                                                           | デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| サーバー・ポート                                                                                 | デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files) | JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |

表 67. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

| フィールド                                                                                                                                                        | SQL 認証に必要なアクション                                                                                                                                            | Windows 認証に必要なアクション                                                                      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p><b>注:</b> SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p> | <p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p> |

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 `chmod` コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 `templatePath` プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 `-profilePath` パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 `-response` パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の SQL Server データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/SQLServer/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

## Performance Data Warehouse データベース表の作成:

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/SQLServer/* に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

注: このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

## Business Space データベース表の作成:

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/SQLServer/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** 代わりに、次の順序で個々のスクリプトを手動でカスタマイズし、実行することもできます。

- a. **createDatabase.sql**
- b. **createTable\_BusinessSpace.sql**
- c. **createGrant\_BusinessSpace.sql**

## スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリの *bootstrapProcessServerData.timestamp.log* というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

**重要:** ブートストラップ・ユーティリティが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
```

```
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## Linux における Network Deployment 環境の構成

Network Deployment 構成の場合は、ソフトウェアをインストールした後に、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張し、Network Deployment 環境を構成します。

### プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (root の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

非 root ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

### 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非 root ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることもできます。



少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします 製品インストール・ユーザーは、root ユーザーの場合または非 root ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- 次のように入力して、**install\_root/logs/manageprofiles** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

- 次のように入力して **install\_root/properties/fsdb** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、profileRegistry.xml ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/AppServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/AppServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu  
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK
```

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非 root ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリにプロファイルを作成することはできません。

root ユーザーと非 root ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

#### データベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;  
connect to @DB_NAME@;  
grant dbadm on database to user @DB_USER@;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;  
connect reset;
```

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ファイルに追加します。実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、`root` ユーザーとしてログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、`root` ユーザーを `/etc/group` 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

### **DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### **DB2 を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
スキーマ名 [デフォルト=] :
(Schema name[default=] :)
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Regular pagesize[default=32k] :)
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :
```

(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] : )
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] : )
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」

を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティー値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1) [WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2) [BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5) [BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6) [SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7) [SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8) [SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9) [SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12) [save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(3) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
(4) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
(5) [save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):5
```

```
[status] bpm.standard.nd is complete with 0 remaining item(s):
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。



[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

- SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

- 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database

scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:  
(Database server port[default=50000] :)  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 JCC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。 ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。 以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

#### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment):

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート `ddl` 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー `/tmp/DB2-zOS/W1MYDB` 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば `/tmp/DB2-zOS/W8CELLDB` などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば `/tmp/DB2-zOS/W8S1DB` などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1)Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment



- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「false」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s))

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。  
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。  
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]  
(2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]  
(3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]  
(4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]  
(5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]  
(6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]  
(7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]  
(8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]  
(9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]  
(10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]  
(11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]  
(12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

注: DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。

- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
 [これは Process Center のデータベースですか?]:  
 ([info] Please pick one of the following  
 [Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
 (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12) [save and exit]

Please enter the number for the database component :12

[status] bpm.advanced.nd.topology is not complete with 6 remaining item(s):  
 [ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'schemaName' for SCHEMA is empty.  
 [ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'catalog' for VCAT is empty.  
 [ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
 [ 4 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.  
 [ 5 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects : required property 'schemaName' for SCHEMA is empty.  
 [ 6 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects : required property 'catalog' for VCAT is empty.

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに [状況 = 完了] が示されていたら、該当する番号を入力して [保存して終了] を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
 bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
 (bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
]:)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. ここまでの手順で指定したディレクトリー内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。各ディレクトリーには、**createDB2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- **dbDesignGenerator.log** という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。



**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### 関連タスク:

614 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### **DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:**

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するもののですが、

Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関わる場合があります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力 completed したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
  - 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
  2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd /install_root/util/dbUtils
```

例: cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils

3. 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.sh -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.sh -g /tmp/DB2-zOS/W8CELL.nd.dbDesign
```

4. 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

*dbDesignGenerator.log* という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで *ddl\_outDir* 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、*ddl\_outDir* 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

1. 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

2. FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
3. z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。  
      (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。  
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
```

```
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### Oracle 用データベースのセットアップ:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

### Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]



```

(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :

```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

```
Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
Oracle JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

-----

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、

**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください

(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):

[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、

bpm.advanced.nd.topology は完了しました

(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

- SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

- 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :



7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8  
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### SQL Server 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

**ヒント:** フェデレーテッド・リポジトリをユーザー・レジストリーとして使用している場合は、`systemout.log` ファイル内にあるキーの最大長に関する警告「... 警告: 最大キー長は 900 バイトです ...」を無視してかまいません。スタンドアロン LDAP レジストリーを使用している場合は、組織内のすべてのユーザー識別名 (DN) 項目の文字数が 131 文字の制限を超えていないことを確認してください。いずれかのユーザー DN 項目の文字数が 131 文字を超えている場合は、ユーザー・アカウント・レジストリーをフェデレーテッド・リポジトリ・オプションに変更する必要があります。

### SQL Server データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは `BPMDB`、Performance Data Warehouse データベースは `PDWDB`、共通データベースは `CMNDB` です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (`BPMDB`) データベースおよび Performance Data Warehouse (`PDWDB`) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、`hostname` は SQL Server をホストするシステムのホスト名、`db_user_account` と `db_user_password` はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、`database_name` は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、`COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS` が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは `COLLATE` 分節です。`CMNDB` では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、`COLLATE` 属性値に含まれる文字列 `CI` によって指定されます。この変数が `SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS` のように (`SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS` ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 68.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

#### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**.

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。

f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### SQL Server を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

(1) bpm.advanced.nd.topology

(2) bpm.advanced.standalone

(3) bpm.standard.nd

(4) bpm.standard.standalone

(5) wesb.nd.topology

(6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

(2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]

(3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]

(4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]

(5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]

(6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]

(7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]

(8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]



```
(9)[SibMe]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
```

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2
```

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。

- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における SQL Server を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace

- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9)wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。



Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI_CommonDB
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### **configureNode** コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成:

標準的な Network Deployment 環境を構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または `manageprofiles` コマンドと `wsadmin` コマンドを使用する代わりに、`configureNode` コマンドを使用できます。このコマンドでは、プロパティ・ファイルを使用して限られたカスタマイズを行い、すぐに使用できる環境を作成します。`configureNode` は、後からデプロイメント環境を拡張する場合にも使用できます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

**重要:** 最初に作成されたプロファイルを削除しないと、1 台のマシンで `configureNode` を 2 回実行することはできません。2 回目の `configureNode` コマンドを実行するには、まずプロファイルを削除してください。

### **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の作成:

`configureNode` コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。このコマンドの目標は、すぐに使用できる環境を提供することです。プロパティ・ファイルには、カスタマイズ可能なパラメーターのみが提供されます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

製品をインストールし、プロパティ・ファイルに指定されているすべてのデータベースを作成しておく必要があります。

**重要:** データベース・ソフトウェアをインストールして、データベースを作成しておく必要があります (ただし、テーブルは作成しないでください)。また、プロパティ・ファイルで指定したユーザーも、すべて作成しておく必要があります。『データベース特権』にリストされたインストール特権をユーザーが持っていることを確認してください。

SQL Server データベース・サーバーの場合:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。

- サーバーを実行中の現行の Windows ユーザーによってデータベースへの接続が行われる場合は、SQL Server で「**Windows 認証モード**」または「**SQL Server 認証モードと Windows 認証モード**」が有効になっている必要があります (これらは Microsoft SQL Server Management Studio を通して指定されます)。

**制約事項: configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

**configureNode** コマンドは、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーを作成します。このコマンドを使用してポートをカスタマイズすることはできません。サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。デフォルト・ポートで構成された他のプロファイルが同じマシン上で開始されていないことを確認してください。

**configureNode** コマンドにより、以下の Network Deployment トポロジーが作成されます。

- 単一セル環境
- この環境には、プロパティ・ファイルで指定した数のクラスター・メンバーが含まれます。
- この環境では、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンが使用されます。このトポロジー・パターンには、以下の 4 つのクラスターが含まれます。
  - メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
  - サポート・インフラストラクチャー・クラスター
  - アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
  - Web アプリケーション・クラスター

このコマンドは、以下のタスクを実行します。

- デプロイメント・マネージャー・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてデプロイメント・マネージャー・ノードを作成し、デプロイメント・マネージャーを始動する。
- デプロイメント環境の定義を作成する。
- カスタム・ノード・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてカスタム・ノードを作成する。
- ノードをフェデレートしてデプロイメント環境に追加する。
- デプロイメント環境を生成する。
- データベース表を作成する (データベースは、あらかじめ作成しておく必要があります。手順については、『始める前に』を参照してください)。
- ブートストラップ・ユーティリティを実行し、システム情報と共に Process Server データベースをロードする。
- Web アプリケーション・クラスターで Business Space および Process Portal を構成する。

プロパティ・ファイルでオプション・ポートが指定されていない場合は、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーが作成されます。**configureNode** を実行した時点で、デプロイメント・マネージャーが既にマシン上で稼働している場合は、デプロイメント環境の作成が失敗します。デプロイメント・マネージャーが既に作成されているが、まだ稼働していない場合は、いずれかのデプロイメント・マネージャーのポートを変更する必要があります。変更しないと、別のデプロイメント・マネージャーを始動したときに、ポートの競合エラーが発生する可能性があります。

初めてデプロイメント環境を作成する場合は、以下のステップを実行します。

1. デプロイメント環境を作成するマシン上で、サンプルのプロパティ・ファイル `install_root/util/ndUtils/samples/` を探します。

2. サンプル・ファイルをコピーして、現在の環境を反映するように変更します。例えば、Process Server の IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_std_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。

作成したい各データベースについて、データベース・パラメーターのセクションをコピーし、データベース名、ユーザー名、パスワード、スキーマ名を指定します。Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。これらのデータベースには、それぞれ異なる名前を指定する必要があります。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. 上記手順で作成した 2 つのファイルの名前を **configureNode** コマンドに渡して実行します。カスタム・ノード・ファイルはオプションですが、カスタム・ノード・ファイルを指定しなかった場合、デプロイメント・マネージャーだけが作成されます。例:

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```

**注: Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**


これで、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンを使用するデプロイメント・マネージャー、カスタム・ノード、およびデプロイメント環境が作成されました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されます。

**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで) テスト接続の操作が例外 `com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT` で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

## 関連概念:

 仮想ホスト

## 関連タスク:

 仮想ホストの構成

## 関連資料:

 テスト接続サービス

### **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張:

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

**configureNode** コマンドを実行するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- デプロイメント環境の拡張を行うマシンに製品をインストールしておく必要があります。
- デプロイメント・マネージャーは稼働している必要があります。
- **configureNode** コマンドを実行してデプロイメント環境を作成しておく必要があります。

**制約事項:** **configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

1. デプロイメント環境の拡張を行うマシンで、サンプルのカスタム・ノード・ファイルを見つけます。  
`install_root/util/ndUtils/samples/`
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Server 用 IBM BPM Standard のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_std_ps_node.properties` ファイルを選択します。

デプロイメント・マネージャーの詳細を含む、ご使用の環境を反映させるために、新規カスタム・ノード・ファイルを変更します。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. サンプル・ファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。例:

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node01_response_file.properties
```

**注:** **Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**

デプロイメント環境を拡張しました。


ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されます。

**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで)テスト接続の操作が例外 `com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT`

で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。


関連概念:

 仮想ホスト

関連タスク:

 仮想ホストの構成

関連資料:

 テスト接続サービス

**プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成:**

製品をインストールした後に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張して、ランタイム環境を定義する必要があります。デプロイメント・マネージャーを開始する前に、IBM Business Process Manager で使用することになるデータベースを構成しておく必要があります。

**Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成および構成する場合は、これ以上の構成は不要です。それ以外の場合は、デプロイメント環境を作成する前に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。プロファイルを使用することにより、IBM Business Process Manager の複数のコピーをインストールする必要なく、システムに複数のランタイム環境を持つことができます。

**DB2 データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

**デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー

には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルがデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。



- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root/profileTemplates/BPM** ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
- **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMgr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMgr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMgr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMgr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMgr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMgr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMgr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMgr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
```



```

# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr.templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true

```

```

#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:

```

```

# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their

```

```

# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#

```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```



```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true

```

```

#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる *Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」 ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」 をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「標準的」 または「拡張」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。

「標準的」 オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」 オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」 をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。

- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および

tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。



- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、**Linux** サービスを使用して **IBM Business Process Manager** を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、**IBM Business Process Manager** は、**Linux** サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが **Linux** サービスとして構成されている場合、**IBM Business Process Manager** は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する **Linux** サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを **Linux** サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

**Linux** サービスを削除するためには、ユーザーが `root` ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、`root` ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。

6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル
- をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
- プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。

- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービス

を開始しようとしています。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-profilePath パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-response パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。



3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。 ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 「**フェデレーション**」 ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャ

のホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。

– 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
```

create

```
#####  
# Parameter: templatePath  
#  
# Description:  
# Specifies the directory path to the template files in the installation  
# root directory. Within the profileTemplates directory are various  
# directories that correspond to different profile types and that vary with  
# the type of product installed. The profile directories are the paths that  
# you indicate while using the -templatePath option.  
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to  
# a valid template directory.  
#  
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file  
# path for the parameter.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
templatePath=BPM/managed.procctr
```

```
#####  
# Parameter: profileName  
#  
# Description:  
# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a  
# profile.  
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a  
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a  
# trailing number, for example:  
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,  
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a  
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces  
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,  
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On  
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose  
# the value in quotation marks. The default value is based on the  
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the  
# file. For example, the default for profile creation is:  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties  
# file in the install_root/properties directory. The value for this  
# parameter must be a valid path for the target system and must not be  
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
profileName=Custom01
```

```
#####  
# Parameter: cellName  
#  
# Description:  
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each  
# profile.  
# The default value for this parameter is based on a combination of the  
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:  
# if (Dmgr)  
# shortHostNameCellCellNumber  
# else  
# shortHostNameNodeNodeNumberCell
```

```

# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:

```



```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual

```

```

#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#    Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#    profileTemplates/managed.esbserver or the
#    profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#    or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#    -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#    parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#    WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#    true.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#    Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#    Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#    profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#    the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#    host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#    deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#    the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#    node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#    This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#    stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#    deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#    is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#    profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#    profile repository (the profile's installation root directory) before
#    creating another custom profile with the same profile name. If you have
#    changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#    manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#    the node is created instead. The default value for this parameter is
#    localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#    name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#    the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#    deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#    parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#    -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#    on the local machine.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.

```

```

# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####

```

```

# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters

```

```

# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```

```

#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType

```



```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when

```

```
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  5. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
7. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「標準的」または「拡張」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」 オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」 オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「**システム管理**」 > 「**デプロイメント・マネージャー**」 > 「**管理サービス**」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張:「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使

用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

関連情報:

 [既存プロファイル内のポートの更新 \(WebSphere Application Server\)](#)

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。



1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを増強する必要があります。 テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。 このファイルは変更しないでください。 テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。 使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 `-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。 理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。 スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。 データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。 以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`

- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、 **addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、 *profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
  - デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
  - デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### **DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

#### **デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

#### **プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。
- 個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文

字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **Linux におけるプロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。



10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

**manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
- `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『`manageprofiles`』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`

- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: keyStorePassword
#

```

```

# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies

```



```

# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service

```

```

# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```

```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#

```

```

# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the

```

```

# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:

```

```

# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the

```

```

# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true, the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a

```

```

# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```



```

# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####

```

```

environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。

プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  8. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

14. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  8. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。



- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

14. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、`Linux` サービスを使用して `IBM Business Process Manager` を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、`IBM Business Process Manager` は、`Linux` サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが `Linux` サービスとして構成されている場合、`IBM Business Process Manager` は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する `Linux` サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを `Linux` サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

**重要:**

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response**



- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
```

```

# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#

```

```

# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid

```

```

#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#     Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#     creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#     and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#     Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#     false. The default value for this parameter is false. When the
#     manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#     set to true , the Linux service is created with the profile when the
#     command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#     manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#     service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#     does not have sufficient permission to set up the service. An
#     INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#     creation and the profile creation log
#     install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#     message indicating the current user does not have sufficient permission to
#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.

```

```

#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual

```

```

#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created

```

```

# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false

```



```
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation
# root directory. Within the profileTemplates directory are various
# directories that correspond to different profile types and that vary with
# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
```

```

#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr
#####

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####

# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:

```

```

# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:   keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:   enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:   serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:   winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem

```

```

#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:   winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:   winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:   winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:   winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID

```

```

#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later

```

```

# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  5. 「プロファイル」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」 ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」 をクリックします。
  7. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「標準的」 または「拡張」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。



「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
- a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
  - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:



既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、 **addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、 *profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの **bin** ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

`profile_root/bin`

## 2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

### **Network Deployment** プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### **DB2 for z/OS の許可に関する前提条件:**

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

#### **DB2 for z/OS のユーザー許可要件**

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティーに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

**#DB\_USER#** として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファークラス・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された `createDatabase.sql` データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

**#SCHEMA#** のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアード・プロシージャを作成する許可を **#DB\_USER#** ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

## DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース #DB\_NAME# に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。
  - ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```



- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、S1CELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```
INFORMATION FOR GROUP S1CELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS  OWNER=ZWPS  CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN CONNECT 000000 NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE
```

### 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

### ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

### クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共有モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## **DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:**

データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

### 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

#### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

#### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=wasv8config/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが listen するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` port はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

610 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファー・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCcreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは

DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

606 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。



**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBST0 -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する `z_schema.sql` ファイルおよび `z_schemaProc.sql` ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。`z_schemaProc.sql` ファイ

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

606 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に **createDB2.sh** スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (**z\_schema.sql** および **z\_schemaProc.sql**) を実行することもできます。

- 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

610 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (**z\_schema.sql** および **z\_schemaProc.sql**) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

データベース・スクリプトを作成して実行する前に、以下を行います。

- クラスタを作成します。
- Network Deployment 構成で作成するサービス統合バス・コンポーネントを決定します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
- データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
  - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。

- メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。
    - a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
    - b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
    - c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

440 ページの『Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

433 ページの『DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)  
DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

### Oracle データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー

には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリは、`install_root/profiles/profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルがデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメータは WebSphere Application Server パラメータです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリ・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。



- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した *Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または 「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうでない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
- **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMgr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMgr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMgr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMgr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMgr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMgr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMgr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMgr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
```



```

# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr.templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true

```

```

#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:

```

```

# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.

```

```

# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_Oracle.response
#

```

```

# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

```



```

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

```

```

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports

```

```

# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux

```

```

#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false

```

```

#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test

```

```

# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。

- コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
- 6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから

発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。



13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」 ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」 をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「標準的」 または「拡張」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。

「標準的」 オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」 オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」 をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」 をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」 をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー

には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。

- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- *dmgr.procctr*: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - *dmgr.procsvr*: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、*augment* パラメーターを使用します。 *augment* パラメーターを使用すると、*manageprofiles* コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- *PC\_Std\_DMGr\_DB2.response*
- *PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response*
- *PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response*
- *PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response*
- *PC\_Std\_Managed\_DB2.response*
- *PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response*
- *PC\_Std\_Managed\_Oracle.response*
- *PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response*
- *PC\_Std\_Standalone\_DB2.response*
- *PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response*
- *PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response*
- *PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response*
- *PS\_Std\_DMGr\_DB2.response*

- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。



プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
6. 「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」 および 「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」 を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」 および 「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」 を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response

- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT
```

```

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere

```

```

# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.

```



```

# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux

```

```

# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the

```

```

# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####

```

```

federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```



```

#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not

```

```

# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created

```

```

# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false

```

```
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「*Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs*」 > 「IBM」 > 「*your\_product*」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」 をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」 タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」 タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」 をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」 ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」 ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」 ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」 をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」 ページで、「**標準的**」 または「**拡張**」 プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」 をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
- a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
- プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。



- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:



既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 `-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、 **addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、 *profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの **bin** ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

`profile_root/bin`

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

**SQL Server データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

**デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

**プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  3. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。
 

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」 または「拡張」 プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」 をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
 

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」 をクリックします。「戻る」 をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」 をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならぬため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」 をクリックします。「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」 および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」 をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」 および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」 フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」 フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」 をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」 をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。



3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および

tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、**Linux** サービスを使用して **IBM Business Process Manager** を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、**IBM Business Process Manager** は、**Linux** サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが **Linux** サービスとして構成されている場合、**IBM Business Process Manager** は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する **Linux** サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを **Linux** サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

**Linux** サービスを削除するためには、ユーザーが `root` ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、`root` ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response**
- **PC\_Std\_Managed\_DB2.response**
- **PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response**
- **PC\_Std\_Managed\_Oracle.response**

- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmIn -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDbName PERFDB -dbPerfDWUserId perfadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
```

```

#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:

```

```

# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```



```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the

```

```

# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:

```

```

# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####

```

```

# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
```

```

# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.

```

```

# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```



```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you

```

```

# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

## プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 拡張: `root` 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。`root` 特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、`Linux` サービスを使用して `IBM Business Process Manager` を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、`IBM Business Process Manager` は、`Linux` サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが `Linux` サービスとして構成されている場合、`IBM Business Process Manager` は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する `Linux` サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを `Linux` サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。



プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。

- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。
- 個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文

字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 拡張: root 特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。root 特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

プロファイルが Linux サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Linux サービスを開始しようとします。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための必要な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されている

プロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。-**templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、-**templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. -**responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。



- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
```

create

```
#####  
# Parameter: templatePath  
#  
# Description:  
# Specifies the directory path to the template files in the installation  
# root directory. Within the profileTemplates directory are various  
# directories that correspond to different profile types and that vary with  
# the type of product installed. The profile directories are the paths that  
# you indicate while using the -templatePath option.  
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to  
# a valid template directory.  
#  
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file  
# path for the parameter.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
templatePath=BPM/managed.procctr
```

```
#####  
# Parameter: profileName  
#  
# Description:  
# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a  
# profile.  
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a  
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a  
# trailing number, for example:  
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,  
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a  
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces  
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,  
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On  
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose  
# the value in quotation marks. The default value is based on the  
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the  
# file. For example, the default for profile creation is:  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties  
# file in the install_root/properties directory. The value for this  
# parameter must be a valid path for the target system and must not be  
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
profileName=Custom01
```

```
#####  
# Parameter: cellName  
#  
# Description:  
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each  
# profile.  
# The default value for this parameter is based on a combination of the  
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:  
# if (Dmgr)  
# shortHostNameCellCellNumber  
# else  
# shortHostNameNodeNodeNumberCell
```

```

# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual

```



```

#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  dbWinAuth
#
# Description:
#    An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#    Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#    windows authentication.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter:  federateLaterBPM
#
# Description:
#    Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#    profileTemplates/managed.esbserver or the
#    profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#    or false.  If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#    -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#    parameter is true.  If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#    WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#    true.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    true
#
# Parameter:  dmgrHost
#
# Description:
#    Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#    Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#    profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#    the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#    host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#    deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#    the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#    node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.

```

```

# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.

```

```

# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#

```

```

# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true

```

```
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
```

```

# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows

```

```

# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
# An optional parameter that is valid in all default profile templates.
# Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
# windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false

```



```

# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#

```

```

# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  5. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  7. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは `WebSphere Application Server` パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 「**フェデレーション**」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。

- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されま

す。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、

WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:



既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```



応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの **bin** ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターの場合は、クラスター名を指定する必要があります。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。
- 1 つの WebSphere セルに複数のアプリケーション・ターゲット・クラスターが含まれている場合は、各クラスターでこのコマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
Linux      UNIX      install_root/profiles/Dmgr01/bin
```

```
Windows   install_root¥profiles¥Dmgr01¥bin
```

以下のいずれかのコマンドを使用してブートストラップ・ユーティリティを実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh -clusterName cluster\_name**
- **bootstrapProcessServerData.sh -nodeName node\_name -serverName server\_name**

ここで、

- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ブートストラップ・データをクラスター上で実行する場合は、このパラメーターを指定する必要があります。
- **-nodeName** はノードの名前です。ネットワーク・デプロイメント環境に含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-serverName** パラメーターを指定する必要があります。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ネットワーク・デプロイメントに含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-nodeName** パラメーターの両方を指定する必要があります。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

**重要: SQL Server の場合のみ:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

IBM Business Process Manager サーバーを正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、**USER\_INSTALL\_ROOT/logs/** ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.clusterName.timestamp.log** または **bootstrapProcessServerData.nodeName.serverName.timestamp.log** というファイル内 (指定したターゲットによって異なる) に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

Process Server または Process Center をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

#### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## AIX での IBM Business Process Manager のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager を AIX にインストールし、スタンドアロン環境または Network Deployment 環境を構成します。

### AIX におけるスタンドアロン環境の構成

標準インストールを使用して、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center または Process Server プロファイルを構成できます。あるいは、カスタム・インストールを選択し、その後にプロファイルを作成して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。

#### 標準インストールと構成:

「標準インストール」オプションは、IBM Business Process Manager をインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

#### 関連資料:

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### DB2 データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### DB2 データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

#### DB2 データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process

Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合

は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。

4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。  
  
**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 69. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックします。「**サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください**」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:



Installation Manager の更新

### **DB2 データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:**

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Server のインストール」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
  - **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サ



サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 70. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「**次へ**」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックします。「**サポート・アカウントを使用し**

てインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:

 Installation Manager の更新

#### **Oracle データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### **Oracle データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

#### **Oracle データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを作成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
 

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 71. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
<b>Process Center データベース (Process Center database)</b>	Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
<b>Performance Data Warehouse データベース</b>	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「**次へ**」をクリックします。
12. 「**インストールの要約**」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックします。「**サポート・アカウントを使用し**

てインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるように、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:



Installation Manager の更新

**Oracle データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:**

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。

4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「Process Server のインストール」を選択します。

6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b>: 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b>: 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b>: Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b>: Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:

 [Installation Manager の更新](#)

#### SQL Server データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。



## SQL Server データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違ってするのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name  
'message.routingCache'  
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is  
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class  
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;  
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;  
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is  
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement  
(SQLServerPreparedStatement.java:388)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute  
(SQLServerPreparedStatement.java:338)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
```

```
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmtExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されます。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

## XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

```
javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp_sqljdbc_xa_init_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp_sqljdbc_xa_init_ex'").
```

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

**Windows XP および Windows Server 2003 の場合:**

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

**Windows Vista および Windows 7 の場合:**

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
    - a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
    - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
    - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.d11 ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.d11 ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.d11 ファイルを使用します。
    - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.d11 で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
    - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

## SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Center のインストール」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。  
  
 重要: ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 73. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース (Process Center database)	Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

表 73. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

- 「次へ」をクリックします。
- 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

- 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

#### 関連情報:

 Installation Manager の更新

#### SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「**Process Server のインストール**」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。
  - **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

環境の「**タイプ**」として「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 74. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。



表 74. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

- 「次へ」をクリックします。
- 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスバックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスバック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必

須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

関連情報:

 [Installation Manager の更新](#)

**カスタム・インストールおよび構成:**

「カスタム・インストール」オプションは、「標準インストール」オプションでは提供されないインストール・オプションまたは構成オプションが必要である場合、サイレントにインストールしたい場合、あるいは WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境にインストールする場合に、IBM Business Process Manager をインストールするために使用します。

関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

**IBM Business Process Manager Standard のインストール:**

カスタム・インストールでは、対話式インストールかサイレント・インストールを選択できます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

**IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージは対話式にインストールできます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

**WebSphere Application Server の新規インストールを伴う対話式インストール:**

カスタム・インストールを使用して、IBM Business Process Manager を WebSphere Application Server の新規インストールと共にインストールできます。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

- 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、次のステップに進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドを入力して手動で Launchpad を開始します。

```
mount_point/launchpad.sh
```

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドを入力して、ランチパッドを始動します。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

2. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。

インターネットにアクセスできず、ランチパッドの更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合、プロパティー・ファイルを使用して、更新が存在する場所を Installation Manager に指示できます。以下のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルでは、後にドットを付けたランチパッド接頭部を使用します。接頭部とドットの後の名前の部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ランチパッドのアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

3. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「カスタム・インストール」をクリックします。
4. 「管理ユーザーとしてのインストール」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。root ユーザーでない場合、または root 特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
5. 「インストール」をクリックします。IBM Business Process Manager をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment が自動的にインストールされます。
6. Installation Manager の「パッケージのインストール」ページで、「IBM Business Process Manager Standard」パッケージを選択します。デフォルトでは、

7. 「次へ」をクリックして先に進みます。IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ID とパスワードを指定するよう求めるプロンプトが出されます。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して必須修正をインストールできます。必須修正のダウンロードおよびインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

8. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックし、「次へ」をクリックします。
9. 「ロケーション」ページでは、「新規パッケージ・グループの作成」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび Installation Manager のロケーションを選択し、「次へ」をクリックします。「パッケージのインストール」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。IBM 以外の前提条件および相互前提条件となる製品のサポート・バージョンへのマイグレーション方法については、それらの製品のドキュメンテーションを参照してください。

10. 「フィーチャー」ページで、正符号を展開してインストールするパッケージのフィーチャーを選択します。Installation Manager では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。
  - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「依存関係の表示」を選択します。
  - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「詳細」の下に表示されます。
  - c. オプション: Process Server をインストールする場合は、Process Server フィーチャーを展開し、Process Server の用途を変更できます。実動でサーバーを使用する場合は「実動」(デフォルト)を選択し、テスト、ステージング、または開発のみにサーバーを使用する場合は「非実動」を選択します。選択内容はインベントリーの目的で製品タグに記録されます。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

フィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。

11. 「要約」ページで IBM Business Process Manager Standard パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
12. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「ログ・ファイルの表示」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを実行する場合は「プロファイル管理ツール」を選択し、そうでない場合は「なし」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「完了」をクリックして、Installation Manager を終了します。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### **IBM Business Process Manager のサイレント・インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

#### 関連資料:



IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### **コマンド行を使用したサイレント・インストール:**

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager をサイレント・インストールできます。この方式では、コマンドを 1 つ実行するだけでインストールを実行できます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

```
extract_directory/IM/tools/imutilsc -silent -nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。

3. 次のコマンドを実行します。

```
extract_directory/IM/tools/imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense  
-installationDirectory location -repositories repository -showVerboseProgress  
-log logName.log
```

ここで、

- *list\_of\_product\_IDs* は、インストールする製品と機能の ID のリストです。必須フィーチャーを組み合わせる必要があります。構文は *productID.feature.feature* で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 75. 製品 ID

製品	製品 ID	フィーチャーおよび説明
IBM BPM Standard	com.ibm.bpm.STD.V80	<ul style="list-style-type: none"><li>• bpmStd.nonprod: テスト、ステージング、または開発用。このフィーチャーまたは bpmStd.prod のいずれかを指定する必要があります。</li><li>• bpmStd.prod: 実動用。このフィーチャーまたは bpmStd.nonprod のいずれかを指定する必要があります。</li></ul>

表 75. 製品 ID (続き)

製品	製品 ID	フィーチャーおよび説明
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• core.feature: 必須。WebSphere Application Server コア・コンテンツ。</li> <li>• ejbdeploy: 必須。Enterprise JavaBeans (EJB) 3.0 より前のモジュール。</li> <li>• thinclient: 必須。スタンドアロン・シン・クライアントおよびリソース・アダプター。</li> <li>• embeddablecontainer: 埋め込み可能 EJB コンテナ。</li> <li>• samples: サンプル・アプリケーション・フィーチャー。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_32bit: 32 ビット版 Software Development Kit (SDK)。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_64bit のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_64bit: 64 ビット版 SDK。このフィーチャーは、64 ビット・システムでのみ選択可能です。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_32bit のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
Installation Manager	com.ibm.cic.agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>• agent_core: Installation Manager コア・コンテンツ。</li> <li>• agent_jre: Installation Manager Java ランタイム環境 (JRE)。</li> </ul>

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

```
extract_directory/repository/repos_32bit
extract_directory/repository/repos_64bit
```

複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。

- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。IBM Installation Manager を使用して、暗号化パスワードを作成します。

表 76. キー

キー	説明
user.db2.use.existing	<p>既存の DB2 セットアップを使用する場合は、以下の行を正確に追加します。</p> <pre>user.db2.use.existing=true</pre> <p>DB2 をインストールする必要がある場合は、値 <i>false</i> を指定します。</p>
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、`imcl` のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストした製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。エラーも警告もない場合、ログ・ファイルは空になります。

以下の例では、IBM Business Process Manager Standard および WebSphere Application Server Network Deployment が AIX にインストールされます。

```
imcl install com.ibm.bpm.STD.V80,bpmStd.prod
com.ibm.websphere.ND.v80,core.feature,ejbdeploy,thinclient,embeddablecontainer,samples,com.ibm.sdk.6_32bit
-acceptLicense -installationDirectory /usr/IBM/BPM80
-repositories /usr/tmp/BPM/repository -showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` で作成されたプロファイルのみを使用できます。

#### 関連資料:

 [imcl のコマンド行引数](#)

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

#### 関連情報:

 [IBM WebSphere Application Server インフォメーション・センター](#)

#### 応答ファイルを使用したサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Standard をサイレント・インストールできます。



IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

応答ファイルを使用すると、保存された共有可能なファイルでインストール・オプションを設定し、そのファイルを 1 台以上のマシンで使用できるため、サイレント・インストールを単純化し、プロセスにおけるエラーを減らすことができます。インストール・ソフトウェアには、それぞれのサポートされるオペレーティング・システムとビット・バージョン用のサンプルの応答ファイルが用意されています。サンプルの応答ファイルを変更せずにそのまま使用すると、デフォルト設定でサイレント・インストールを実行することができます。あるいは、これらの応答ファイルを変更して、特定の値を設定することもできます。サンプルの応答ファイル内のコメントに、詳細な説明と、値の設定に関する情報が記載されています。

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

```
extract_directory/IM/tools/imutilsc -silent -nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Standard をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーから、ご使用のビット・バージョンおよびユーザー・アクセス・レベルに適したサンプル応答ファイルをコピーします。

```
extract_directory/responsefiles/BPM/
```

あるいは、応答ファイルは Installation Manager でアクションを記録することによっても作成できます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager で行った選択が XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。

3. サンプル応答ファイルに指定されたデフォルト値では基本インストールが実行されますが、ファイルとそのコメントを確認し、ご使用の環境に合わせて必要に応じてパラメーターとユーザー ID のアクセス・レベルを変更してください。

特に、以下のパラメーターと値を確認してください。

- 非 root ユーザー ID の場合は、すべてのロケーション変数が、そのユーザーが許可を持つロケーションを指していることを確認してください。
- リポジトリ・ロケーション。 *extract\_directory/responsefiles/BPM/* ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリの場所を指定します。リポジトリは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリでこの応答ファイルを再び指定します。
- IBM Installation Manager が既にインストールされているか、これからインストールされるインストール・ロケーション (**installLocation**)。

- IBM Business Process Manager Standard がインストールされるインストール・ロケーション。
  - Eclipse ロケーション (**eclipseLocation**)。
  - 製品のフィーチャーのリスト。
  - 実動用または非実動用。
4. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
  5. 次のコマンドを実行します。

root ユーザー:

```
extract_directory/IM/installc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/BPM/response_file_name.xml
-log preferred_log_location/silent_install.log
```

非 root ユーザー:

```
extract_directory/IM/userinstc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/BPM/response_file_name.xml
-log preferred_log_location/silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Standard がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

関連タスク:

 Installation Manager を使用したサイレント・インストール

 Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

関連資料:

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

**プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:**

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (root の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

非 root ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

#### 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非 root ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、*profilers* グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします 製品インストール・ユーザーは、root ユーザーの場合または非 root ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。
  - 次のように入力して、*install\_root/logs/manageprofiles* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```
  - 次のように入力して *install\_root/properties/fsdb* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```
5. プロファイルが存在しない場合は、*profileRegistry.xml* ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/AppServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/AppServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK
```

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非 root ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリーおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

root ユーザーと非 root ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

### プロファイルおよびデータベースの構成:

標準インストールを使用しなかった場合は、製品をインストールした後に、1 つ以上のプロファイルを作成または拡張してランタイム環境を定義する必要があります。プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

### AIX における DB2 データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

## DB2 データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを /etc/profile ファイルに追加します。

実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

db2profile スクリプトを /etc/profile ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーとしてログインし、db2inst1 をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、root ユーザーを /etc/group 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103:db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.

## DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベースの作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、

指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、  
指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、  
テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、  
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)] :

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください

(Please pick one of the following [database type(s)]):



- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSpace] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (3) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.standard.standalone は完了しました  
(bpm.standard.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。

- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。**DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw

- (4)bpm\_processserver
- (5)bspace
- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:

(Database User name[default=] :)

System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください

[これは Process Center のデータベースですか?]:

([info] Please pick one of the following

[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

番号を入力してください。

これは Process Center のデータベースですか？

(Please enter the number for the

Is this database for a Process Center?)[default=false] :

管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:

(The user ID you use for administrative security[default=] :)

The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:

(Regular pagesize[default=32k] :)

通常の表スペース [デフォルト=TWPSSPACE]:

(Regular TableSpace[default=TWPSSPACE] :)

一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:

(Temporary pagesize[default=32k] :)

Temporary TableSpace[default=TWPSTEMPSPACE] :

- 6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。

([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- 7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1) DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:

```
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。



[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI\_BSPACE は未完了です  
(WBI\_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    userId の必須プロパティ「userName」が空です。  
    (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    DB\_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。  
    (required property 'password' for DB\_PASSWORD is empty.)

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
```

```
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## DB2 データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## DB2 データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

データベースをリモート・サーバーで構成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのデータベースを作成する必要があります。ローカル・サーバーにデータベースを作成することも、リモート・サーバーの既存のデータベースを使用することも可能です。

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを /etc/profile ファイルに追加します。  
実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH  
./home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

db2profile スクリプトを /etc/profile ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーとしてログインし、db2inst1 をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、root ユーザーを /etc/group 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

- 4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
- 5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
- 6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
- 7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
- 8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。た

だし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

- d. 「次へ」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

15. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 77. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 77. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。



- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。
- 個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフ

オルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、

WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 78. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。

表 78. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
- **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```



```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:

```

```

#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default

```

```

# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must

```

```

# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#

```

```

# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the

```

```

# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source

```

```

# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name

```



```

dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

```

```

#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```

## Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```



```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:

```

```

# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of

```

```

# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is

```

```

#     specified.)
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  dbServerPort
#
# Description:
#     The database server port number. Depending on the database you are using,
#     you can specify a different port number instead of the default port
#     number.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#     Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#     created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#     default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#     scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#     database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter:  dbName
#
# Description:
#     The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#     databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#     The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#     privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#     uses this ID to authenticate the database connection.
#     Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database

```

```

# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

```

```

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false
#####

```



## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。

10. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 79. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

11. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。

- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 80. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは

**-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response



サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に `profile_root/dbscripts/ProcessServer/DB2/` に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2/` に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、`install_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node_name_server_name/DB2/CMNDB` です。

- このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** データベースに接続し、**db2 bind DB2\_installation\_directory¥bnd¥@db2cli.lst blocking all grant public** コマンドを使用してコマンド行インターフェースを Business Space データベースにバインドした後、データベース接続をリセットします。

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** **bootstrap** コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、**bootstrap** コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、**USER\_INSTALL\_ROOT/logs/** ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.timestamp.log** というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### AIX における DB2 for z/OS データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

## データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン):

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する

- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5)exit [q]

Please enter the number for the design option :

- 2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1)bpm.advanced.nd.topology
- (2)bpm.advanced.standalone
- (3)bpm.standard.nd
- (4)bpm.standard.standalone
- (5>wesb.nd.topology
- (6>wesb.standalone

- 3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

- 4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、  
WBI\_CommonDB は未完了です  
(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、**s** 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、**s** を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。



[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

注: DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。

- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
 [これは Process Center のデータベースですか?]:  
 ([info] Please pick one of the following  
 [Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
 (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12) [save and exit]

Please enter the number for the database component :12

```
[status] bpm.advanced.standalone.topology is not complete with 6 remaining item(s):
[ 1 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 2 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
[ 3 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminUserName' for SECURITY_ADMIN_USER is empty.
[ 4 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.
[ 5 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 6 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):
```

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリ

がまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. ここまでの手順で指定したディレクトリー内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。各ディレクトリーには、**createDB2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 for zOS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。

- データベース表のロケーション。
- サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
- データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、

ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for

BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)

Data source user name[default=] :

Database schema name (SQLID)[default=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください

[これは Process Center のデータベースですか?]:

([info] Please pick one of the following

[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。

これは Process Center のデータベースですか?

(Please enter the number for the

Is this database for a Process Center?)[default=false] :

管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:

(The user ID you use for administrative security[default=] :)

The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :

Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :

Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :

Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :

Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :

Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。

([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-z/OS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)

Database Location on z/OS system[default=] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed  
through jdbcDriver Type 4)[default=] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「false」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/ProcessServer for BPM\_ProcessServer

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

#### 関連タスク:

904 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### **DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:**

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。



- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するためのものですが、Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関与することがあります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力が完成したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
  - 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
  2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd /install_root/util/dbUtils
```

例: cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils

- 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.sh -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.sh -g /tmp/DB2-zOS/W8CELL.nd.dbDesign
```

- 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで *ddl\_outDir* 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、*ddl\_outDir* 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

- 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

- FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
```

```
(required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
```

```
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## DB2 for z/OS データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**拡張**」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。 Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」 ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
  15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。



- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」 ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスと

の間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr:** IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
- **default.procsvr:** IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
```

```

#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#    Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#    For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#    security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#    You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#    along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#    true
# Default Values:
#    true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#    Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#    create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#    quotation marks. This default personal certificate is located in the
#    server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#    signing certificate, one is created by default. See the
#    -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#    root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#    with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#    for 20 years.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#

```



```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort

```

```

#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
```



```

# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)

```

```

#     shortHostNameCellCellNumber
#     else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#     where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#     the node number that you used to define the node name.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or

```

```

#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```

```

#      automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#      -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#      parameter. The recommended port values can be different than the default
#      port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```



```

# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:

```

```

# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
- 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
    - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
    - b. 「参照」をクリックします。
    - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。
    - d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
  9. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  10. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### **プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:**

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。「**次へ**」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「**Process Server 構成**」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。

- サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「**次へ**」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
10. 「**プロファイル・サマリー**」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  11. 「**プロファイル完了 (Profile Complete)**」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `default.procctr`: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - `default.procsvr`: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`

- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。



## スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

### DB2 for z/OS の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

### DB2 for z/OS のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

**#DB\_USER#** として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファークラス・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された createDatabase.sql データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

**#SCHEMA#** のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を **#DB\_USER#** ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

### DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース **#DB\_NAME#** に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。
  - ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WADMIN に対して発行できます。

```

GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;

```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、SICELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```

INFORMATION FOR GROUP SICELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS OWNER=ZWPS CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN CONNECT 000000 NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE

```

## 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプ

レッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

### ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

### クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## **DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:**

データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

### 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

#### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

#### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが `listen` するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` `port` はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

900 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファー・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファロー・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCcreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは



DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『**createDB2.sh** スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

896 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBST0 -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する `z_schema.sql` ファイルおよび `z_schemaProc.sql` ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。`z_schemaProc.sql` ファイル

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

896 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に **createDB2.sh** スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) を実行することもできます。

6. 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

900 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
- データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
  - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。
  - メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。

1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。

- a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
- b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
- c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

845 ページの『スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

838 ページの『DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

#### • **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.timestamp.log** というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。



2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

#### **AIX における Oracle データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### **Oracle データベースのセットアップ:**

ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースの構成を、プロファイルの作成または拡張の前、後、またはその途中に実行できます。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

データベースを作成および構成するためのオプションは以下のとおりです。

- ユーザーまたは DBA があらかじめデータベースを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、プロファイル管理ツールが自動的にその構成を行います。
- ユーザーまたは DBA がデータベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、ユーザーがそのファイルをプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティに渡します。
- データベースの構成を延期し、ユーザーまたは DBA が、プロファイルの作成中または拡張中に生成されたスクリプトを実行することによって、後から必要なデータベースおよびデータベース表を作成します。

#### **Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジ・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB]            WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

```

(2)[BPC]          WBI_BPC : [status = not complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[Bspace]      WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME]       WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME]       WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME]       WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME]       WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]      BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]      BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :

```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。 完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。 このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。 データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)(デフォルト=) :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)(デフォルト=) :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)(default=) :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリ

がまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

**スタンドアロン環境における Oracle を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成**  
:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。



- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

(1) bpc

(2) bpcreporting

(3) bpm\_performancedw

(4) bpm\_processserver

(5) bspace

(6) cei

(7) sca

(8) sibme

(9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=BPMDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=1521] :
```

```
[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :
```

```
(1)oci8
(2)thin
```

```
Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
Oracle JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。  
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### Oracle データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## Oracle データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルの作成中または拡張中にデータベース情報を構成するには、Oracle インスタンスのサービス名を知っておく必要があります。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
- コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。

2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。

6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。

7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。

- 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。

- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文



字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
- 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。 Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、 Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - 「次へ」をクリックします。

14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - 「参照」をクリックします。
  - 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。 それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- 「次へ」をクリックします。 設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

15. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。  
次のフィールドを指定します。

表 81. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\jdbcdrivers\Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。
 

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
 

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。

- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。

- 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
- 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。

- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、

プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

d. 「次へ」をクリックします。

14. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場



合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

- 16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
- 17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 82. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>

表 82. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response

- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

```

```

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:

```

```

# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```



```

#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType

```

```

#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter:  dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter:  dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#

```

```

# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for

```

```

# -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####

```

```

# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserID
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmbdDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmbdDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####

```



```

# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.

```

```

#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard

```

```

# production
# Default Values:
# None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
# Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
# to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.

```

```

# Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
# offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the

```

```

# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default

```

```

# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#

```

```

# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#

```

```

# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE

```



```

#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

```

```

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_passwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「Oracle」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。

- c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
- d. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 83. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。



表 83. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
 スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。

- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 84. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。

- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは

**-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の Oracle データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BP MDB** です。



Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/Oracle/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/Oracle/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/Oracle/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** 代わりに、次の順序で個々のスクリプトを手動でカスタマイズし、実行することもできます。

- a. **createDatabase.sql**

b. `createTable_BusinessSpace.sql`

c. `createGrant_BusinessSpace.sql`

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

**重要:** `bootstrap` コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

#### • `bootstrapProcessServerData.sh`

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリーの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### AIX における SQL Server データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### SQL Server データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name  
'message.routingCache'  
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is  
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class  
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;  
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;  
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is  
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement  
(SQLServerPreparedStatement.java:388)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute  
(SQLServerPreparedStatement.java:338)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery  
(SQLServerPreparedStatement.java:281)  
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)  
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

## XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。

- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### SQL Server を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、  
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション (2)bpm.advanced.standalone.topology を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]

```
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
```



データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the databases ? (s)} :

- (1) false
- (2) true

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s)):
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2
```

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき

- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における *SQL Server* を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondw

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:

(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください

[これは Process Center のデータベースですか?]:

([info] Please pick one of the following

[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。

これは Process Center のデータベースですか?

(Please enter the number for the

Is this database for a Process Center?)[default=false] :

管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:

(The user ID you use for administrative security[default=] :)

The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを作成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。



DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-

...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB\_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB\_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### SQL Server データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

### SQL Server データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

**制約事項:** Process Server データベース (BPMDDB) および Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) では、大/小文字が区別されないようにする必要があります。それ以外のデータベースでは、大/小文字を区別できます。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 85.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド

**ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 dbo として CMNDB データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

**注:** IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。
 

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
 

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。

- c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。 Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、 Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。 それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。 設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

15. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 86. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。	

表 86. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>Performance Data Warehouse データベース</b>	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b>	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
<b>サーバー・ポート</b>	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
<b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b>	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

表 87. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。



- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。
 

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12

ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。 Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、 Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」 ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。

- サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。

- a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。

- b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 88. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。	
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 88. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー \${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer に置かれています。

表 89. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証: Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
- Windows 認証: Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。

18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。



- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmin -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDbName PERFDB -dbPerfDWUserId perfadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
```

```

# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting

```

```

#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name

```

```

nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####

```

```

# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#     The following values for Windows service startup can be used:
#     manual
#     automatic
#     disabled
#     The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#     manual
#     automatic
#     disabled
# Default Values:
#     manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#     Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#     the IBM Business Process Manager components .
#     This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#     versions of WebSphere Process Server.
#
#     Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#     related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#

```



```

# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter:  dbName
#

```

```

# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid

```

```

dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer

```

```

#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####

```

create

```
#####  
# Parameter: templatePath  
#  
# Description:  
# Specifies the directory path to the template files in the installation  
# root directory. Within the profileTemplates directory are various  
# directories that correspond to different profile types and that vary with  
# the type of product installed. The profile directories are the paths that  
# you indicate while using the -templatePath option.  
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to  
# a valid template directory.  
#  
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file  
# path for the parameter.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
templatePath=BPM/default.procsvr  
  
#####  
# Parameter: profileName  
#  
# Description:  
# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a  
# profile.  
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a  
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a  
# trailing number, for example:  
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,  
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a  
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces  
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,  
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On  
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose  
# the value in quotation marks. The default value is based on the  
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the  
# file. For example, the default for profile creation is:  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties  
# file in the install_root/properties directory. The value for this  
# parameter must be a valid path for the target system and must not be  
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
profileName=ProcSrv01  
  
#####  
# Parameter: applyPerfTuningSetting  
#  
# Description:  
# Set a performance tuning level appropriate for the profile you are  
# creating.  
# This parameter is a WebSphere Application Server parameter.  
#  
# Valid Values:  
# development  
# standard  
# production
```

```

# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server

```



```

#    offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#    Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#    parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#    is required if the Process Server is online (connected to a Process
#    Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#    advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#    Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#    This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#    parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#    Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#    or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#    For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#    security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#    You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#    along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#    true
# Default Values:
#    true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#    Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#    create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#    quotation marks. This default personal certificate is located in the
#    server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#    signing certificate, one is created by default. See the
#    -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:

```

```

# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:

```

```

# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
#

```

```

# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the

```

```

# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:

```

```

# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

```



```

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。

- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - 「参照」をクリックします。
  - 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
- 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 90. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」 オプションは選択しないでください。	

表 90. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>Performance Data Warehouse データベース</b>	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b>	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
<b>サーバー・ポート</b>	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
<b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b>	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

表 91. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager

がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。「**次へ**」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「**Process Server 構成**」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスと



の間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 92. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
<p>「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。</p>	
<p><b>Process Server データベース</b></p>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<p><b>Performance Data Warehouse データベース</b></p>	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<p><b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b></p>	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
<p><b>サーバー・ポート</b></p>	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
<p><b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b></p>	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

表 93. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
 スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
- **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを実作業ディレクトリーにコピーします。 `chmod` コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 `templatePath` プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 `-profilePath` パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 `-response` パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の SQL Server データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/SQLServer/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

## Performance Data Warehouse データベース表の作成:

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/SQLServer/* に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

## Business Space データベース表の作成:

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/SQLServer/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** 代わりに、次の順序で個々のスクリプトを手動でカスタマイズし、実行することもできます。

- a. **createDatabase.sql**
- b. **createTable\_BusinessSpace.sql**
- c. **createGrant\_BusinessSpace.sql**

## スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリの *bootstrapProcessServerData.timestamp.log* というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

**重要:** ブートストラップ・ユーティリティが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery(SQLServerPreparedStatement.java:281)
```



```
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## AIX における Network Deployment 環境の構成

Network Deployment 構成の場合は、ソフトウェアをインストールした後に、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張し、Network Deployment 環境を構成します。

### プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (root の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

非 root ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

### 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非 root ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします 製品インストール・ユーザーは、root ユーザーの場合または非 root ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- 次のように入力して、**install\_root/logs/manageprofiles** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

- 次のように入力して **install\_root/properties/fsdb** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、profileRegistry.xml ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/AppServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/AppServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu  
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK
```

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非 root ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリにプロファイルを作成することはできません。

root ユーザーと非 root ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

#### データベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;  
connect to @DB_NAME@;  
grant dbadm on database to user @DB_USER@;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;  
connect reset;
```

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ファイルに追加します。実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

`db2profile` スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、`root` ユーザーとしてログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、`root` ユーザーを `/etc/group` 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

### **DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### **DB2 を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
スキーマ名 [デフォルト=] :
(Schema name[default=] :)
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Regular pagesize[default=32k] :)
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :
```

```
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Temporary pagesize[default=32k] :)
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)
```

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」



を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1) [WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2) [BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5) [BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6) [SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7) [SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8) [SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9) [SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12) [save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(3) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
(4) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
(5) [save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):5
```

```
[status] bpm.standard.nd is complete with 0 remaining item(s):
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

- SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

- 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database

scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:

(Database server port[default=50000] :)

Data source user name[default=] :

Data source password[default=] :

DB2 JCC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください

[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :

(Please enter the output filename

[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign

] :)

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。 ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。 以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

#### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment):

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、



指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート `ddl` 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー `/tmp/DB2-zOS/W1MYDB` 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば `/tmp/DB2-zOS/W8CELLDB` などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば `/tmp/DB2-zOS/W8S1DB` などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1)Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション (1)bpm.advanced.nd.topology を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSpace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には [master] が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete] を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、**s** 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、**s** を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

注: DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。

- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
 [これは Process Center のデータベースですか?]:  
 ([info] Please pick one of the following  
 [Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
 (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12) [save and exit]

Please enter the number for the database component :12

[status] bpm.advanced.nd.topology is not complete with 6 remaining item(s):  
 [ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'schemaName' for SCHEMA is empty.  
 [ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'catalog' for VCAT is empty.  
 [ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
 [ 4 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.  
 [ 5 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects : required property 'schemaName' for SCHEMA is empty.  
 [ 6 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects : required property 'catalog' for VCAT is empty.

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに [状況 = 完了] が示されていたら、該当する番号を入力して [保存して終了] を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
 bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
 (bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
]:)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. ここまでの手順で指定したディレクトリ内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。各ディレクトリには、**createdB2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- **dbDesignGenerator.log** という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```



**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
Database Location on z/OS system[default=] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed  
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### 関連タスク:

1237 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### **DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:**

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するもののですが、

Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関わる場合があります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力が完成したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
  - 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
  2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd /install_root/util/dbUtils
```

例: cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils

3. 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.sh -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.sh -g /tmp/DB2-zOS/W8CELL.nd.dbDesign
```

- 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで *ddl\_outDir* 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、*ddl\_outDir* 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

- 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

- FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。  
      (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。  
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
```

```
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### Oracle 用データベースのセットアップ:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'  
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M  
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];  
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE  
[tablespace_name];  
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE  
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;  
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;  
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;  
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;  
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

### Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。



1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]

```
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSpace] WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、

**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジ・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。



Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

- SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

- 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8  
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI\_CommonDB

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。  
      (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。  
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-  
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### SQL Server 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

**ヒント:** フェデレーテッド・リポジトリをユーザー・レジストリーとして使用している場合は、systemout.log ファイル内にあるキーの最大長に関する警告「... 警告: 最大キー長は 900 バイトです ...」を無視してかまいません。スタンドアロン LDAP レジストリーを使用している場合は、組織内のすべてのユーザー識別名 (DN) 項目の文字数が 131 文字の制限を超えていないことを確認してください。いずれかのユーザー DN 項目の文字数が 131 文字を超えている場合は、ユーザー・アカウント・レジストリーをフェデレーテッド・リポジトリ・オプションに変更する必要があります。

### SQL Server データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 94.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

#### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**。

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。

f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### SQL Server を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、  
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再



入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]

```
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
```

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the databases ? (s)} :

- false
- true

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s)):
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2
```

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。

- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における SQL Server を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、

出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace

- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9)wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。



管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

- Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

- Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

- オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI_CommonDB
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-  
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### **configureNode** コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成:

標準的な Network Deployment 環境を構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または **manageprofiles** コマンドと **wsadmin** コマンドを使用する代わりに、**configureNode** コマンドを使用できます。このコマンドでは、プロパティ・ファイルを使用して限られたカスタマイズを行い、すぐに使用できる環境を作成します。**configureNode** は、後からデプロイメント環境を拡張する場合にも使用できます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

**重要:** 最初に作成されたプロファイルを削除しないと、1 台のマシンで **configureNode** を 2 回実行することはできません。2 回目の **configureNode** コマンドを実行するには、まずプロファイルを削除してください。

### **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の作成:

**configureNode** コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。このコマンドの目標は、すぐに使用できる環境を提供することです。プロパティ・ファイルには、カスタマイズ可能なパラメーターのみが提供されます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

製品をインストールし、プロパティ・ファイルに指定されているすべてのデータベースを作成しておく必要があります。

**重要:** データベース・ソフトウェアをインストールして、データベースを作成しておく必要があります (ただし、テーブルは作成しないでください)。また、プロパティ・ファイルで指定したユーザーも、すべて作成しておく必要があります。『データベース特権』にリストされたインストール特権をユーザーが持っていることを確認してください。

SQL Server データベース・サーバーの場合:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。

- サーバーを実行中の現行の Windows ユーザーによってデータベースへの接続が行われる場合は、SQL Server で「**Windows 認証モード**」または「**SQL Server 認証モードと Windows 認証モード**」が有効になっている必要があります (これらは Microsoft SQL Server Management Studio を通して指定されます)。

**制約事項: configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

**configureNode** コマンドは、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーを作成します。このコマンドを使用してポートをカスタマイズすることはできません。サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。デフォルト・ポートで構成された他のプロファイルが同じマシン上で開始されていないことを確認してください。

**configureNode** コマンドにより、以下の Network Deployment トポロジーが作成されます。

- 単一セル環境
- この環境には、プロパティ・ファイルで指定した数のクラスター・メンバーが含まれます。
- この環境では、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンが使用されます。このトポロジー・パターンには、以下の 4 つのクラスターが含まれます。
  - メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
  - サポート・インフラストラクチャー・クラスター
  - アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
  - Web アプリケーション・クラスター

このコマンドは、以下のタスクを実行します。

- デプロイメント・マネージャー・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてデプロイメント・マネージャー・ノードを作成し、デプロイメント・マネージャーを始動する。
- デプロイメント環境の定義を作成する。
- カスタム・ノード・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてカスタム・ノードを作成する。
- ノードをフェデレートしてデプロイメント環境に追加する。
- デプロイメント環境を生成する。
- データベース表を作成する (データベースは、あらかじめ作成しておく必要があります。手順については、『始める前に』を参照してください)。
- ブートストラップ・ユーティリティを実行し、システム情報と共に Process Server データベースをロードする。
- Web アプリケーション・クラスターで Business Space および Process Portal を構成する。

プロパティ・ファイルでオプション・ポートが指定されていない場合は、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーが作成されます。**configureNode** を実行した時点で、デプロイメント・マネージャーが既にマシン上で稼働している場合は、デプロイメント環境の作成が失敗します。デプロイメント・マネージャーが既に作成されているが、まだ稼働していない場合は、いずれかのデプロイメント・マネージャーのポートを変更する必要があります。変更しないと、別のデプロイメント・マネージャーを始動したときに、ポートの競合エラーが発生する可能性があります。

初めてデプロイメント環境を作成する場合は、以下のステップを実行します。

1. デプロイメント環境を作成するマシン上で、サンプルのプロパティ・ファイル `install_root/util/ndUtils/samples/` を探します。

2. サンプル・ファイルをコピーして、現在の環境を反映するように変更します。例えば、Process Server の IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_std_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。

作成したい各データベースについて、データベース・パラメーターのセクションをコピーし、データベース名、ユーザー名、パスワード、スキーマ名を指定します。Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。これらのデータベースには、それぞれ異なる名前を指定する必要があります。

使用可能なプロパティーについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. 上記手順で作成した 2 つのファイルの名前を **configureNode** コマンドに渡して実行します。カスタム・ノード・ファイルはオプションですが、カスタム・ノード・ファイルを指定しなかった場合、デプロイメント・マネージャーだけが作成されます。例:

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```

**注: Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**


これで、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンを使用するデプロイメント・マネージャー、カスタム・ノード、およびデプロイメント環境が作成されました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されます。


**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで) テスト接続の操作が例外 `com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT` で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。


## 関連概念:

 仮想ホスト

## 関連タスク:

 仮想ホストの構成

## 関連資料:

 テスト接続サービス

## **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張:

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

**configureNode** コマンドを実行するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- デプロイメント環境の拡張を行うマシンに製品をインストールしておく必要があります。
- デプロイメント・マネージャーは稼働している必要があります。
- **configureNode** コマンドを実行してデプロイメント環境を作成しておく必要があります。

**制約事項:** **configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

1. デプロイメント環境の拡張を行うマシンで、サンプルのカスタム・ノード・ファイルを見つけます。  
`install_root/util/ndUtils/samples/`
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Server 用 IBM BPM Standard のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_std_ps_node.properties` ファイルを選択します。

デプロイメント・マネージャーの詳細を含む、ご使用の環境を反映させるために、新規カスタム・ノード・ファイルを変更します。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. サンプル・ファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。例:

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node01_response_file.properties
```

**注:** **Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**

デプロイメント環境を拡張しました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されます。

**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで)テスト接続の操作が例外 `com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT`


で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

 仮想ホスト

関連タスク:

 仮想ホストの構成

関連資料:

 テスト接続サービス

**プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成:**

製品をインストールした後に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張して、ランタイム環境を定義する必要があります。デプロイメント・マネージャーを開始する前に、IBM Business Process Manager で使用することになるデータベースを構成しておく必要があります。

**Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成および構成する場合は、これ以上の構成は不要です。それ以外の場合は、デプロイメント環境を作成する前に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。プロファイルを使用することにより、IBM Business Process Manager の複数のコピーをインストールする必要なく、システムに複数のランタイム環境を持つことができます。

**DB2 データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

**デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、*IBM Business Process Manager Standard* 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。



- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用  
のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理  
するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフ  
ァイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから  
発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ  
しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロ  
ファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必  
要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベ  
ルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページ  
が再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを  
実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノ  
ード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなけれ  
ばなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確  
認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および  
tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロ  
ファイルは管理セキュリティーが有効でなければならぬため、「次へ」は、値が入力されて初めて使  
用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステ  
ップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をイン  
ポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新  
規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create  
a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an  
existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import  
an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプ  
を選択します。

- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。

2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**標準**」または「**拡張**」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response

- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを実作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
```



```

# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a

```

```

# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name

```

nodeName=node\_name

```
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
```

```

#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the

```

```

#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:

```

```

# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file

```

```

# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName

```



```

#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN

```

```

#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and

```

```

# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#

```

```

# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:

```

```
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル
- をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
- プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。



- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## 関連タスク:

Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは `WebSphere Application Server` パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## 関連タスク:

Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**

- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフ



ファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

## **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『`manageprofiles`』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'`personalCertValidityPeriod=1` ' や '`winserviceCheck=false` ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
```

```

# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:

```

```

#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```

```

#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```



```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:

```

```

# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType

```

```

#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#

```

```

# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```



```

#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:

```

```

# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM

```

```

# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  5. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  7. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。

- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文

字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。



サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
  - デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
  - デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの *bin* ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:

 管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### **DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

#### **デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

#### **プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**  
**をデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。

- 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
- 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
- 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **AIX におけるプロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。

2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。



これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response

- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this

```

```

# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An

```

```

# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies

```



```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage

```

```

# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2z0S.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each

```

```

# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you

```

```

# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.

```

```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual

```

```

#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#    Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#    Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#    test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#    stage environment type might be used as a temporary location to host
#    changes before putting those changes into production. You might specify
#    Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#    accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#    are as follows:
#    Test
#    Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#    environment.
#    Stage
#    Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false
#    true

```



```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

7. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
8. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル **をデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。

- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しな

いことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロフィール作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロフィール管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロフィール管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「プロフィール管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロフィール管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロフィール」タブで、拡張するプロフィールを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロフィールは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロフィールの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロフィールに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロフィール拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロフィール管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロフィールに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロフィールは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロフィールを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロフィールは統合されている。統合プロフィールは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロフィールを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロフィールは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロフィールを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  8. 拡張: 「プロフィール名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロフィール名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロフィールに名前を付ける必要があります。複数のプロフィールがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロフィール・ディレクトリー」フィールドにプロフィールのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロフィール・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロフィールをデフォルト・プロフィールにするには、「このプロフィールをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロフィールがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロフィールがデフォルト・プロフィールの場合は、コマンドが自動的にこのプロフィールを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフィールです。デフォルト・プロフィールは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロフィールが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフ

オルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、

WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

- 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  - 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

- 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、**install\_root/properties/profileRegistry.xml** ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
- 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root/profileTemplates/BPM** ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
- 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: **install\_dir/profileTemplates/BPM** ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

- responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。



**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`

- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

## カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
```



```

#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:

```

```

# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#    Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#    false. The default value for this parameter is false. When the
#    manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#    set to true , the Linux service is created with the profile when the
#    command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#    Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#    service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#    service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#    The type of the owner account of the Windows service created for the
#    profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem

```

```

#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID

```

```

#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later

```

```

# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2z0S.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
```

```

# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.

```



```

# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser

```

```

# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem

```

```

#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is

```

```

#      8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#      connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#      the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#      the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#      manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
- a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアル化する必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。



- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:



既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完

全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

4. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

5. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response

- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

6. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、 **addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、 *profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
  - デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
  - デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### *Network Deployment* プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### *DB2 for z/OS* の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラスター・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

#### DB2 for z/OS のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリ

ティールに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

#DB\_USER# として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファ・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された createDatabase.sql データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

#SCHEMA# のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を #DB\_USER# ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

## DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース #DB\_NAME# に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。
  - ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```

```

GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;

```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、S1CELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```

INFORMATION FOR GROUP S1CELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS OWNER=ZWPS CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN CONNECT 000000 NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE

```

## 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

## ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

## クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。



## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## **DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:**

データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

## 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=wasv8config/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが listen するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：`server:port/database` port はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』  
IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

1233 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファー・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCcreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは

DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

1229 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する *z\_schema.sql* ファイルおよび *z\_schemaProc.sql* ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。*z\_schemaProc.sql* ファイル



ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

1229 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に `createDB2.sh` スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (`z_schema.sql` および `z_schemaProc.sql`) を実行することもできます。

6. 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1233 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

`createDB2.sh` スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成することを選択するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、`createDB2.sh` スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (`z_schema.sql` および `z_schemaProc.sql`) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

データベース・スクリプトを作成して実行する前に、以下を行います。

- クラスタを作成します。
- Network Deployment 構成で作成するサービス統合バス・コンポーネントを決定します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
- データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
  - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。

- メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
- 1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。
  - a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
  - b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
  - c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

- 2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

1065 ページの『Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

1058 ページの『DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

### Oracle データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、*IBM Business Process Manager Standard* 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用  
のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理  
するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフ  
ァイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから  
発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ  
しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロ  
ファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必  
要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベ  
ルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページ  
が再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを  
実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノ  
ード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなけれ  
ばなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確  
認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および  
tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロ  
ファイルは管理セキュリティーが有効でなければならぬため、「次へ」は、値が入力されて初めて使  
用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステ  
ップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をイン  
ポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の  
新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create  
a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an  
existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import  
an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプ  
を選択します。

- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。



「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した *Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Server* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。

2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**標準**」または「**拡張**」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response

- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
```

```

# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a

```

```

# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name

```



nodeName=node\_name

```
#####  
# Parameter: enableAdminSecurity  
#  
# Description:  
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative  
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.  
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword  
#   along with the values for these parameters.  
#  
# Valid Values:  
#   true  
# Default Values:  
#   true  
#####  
enableAdminSecurity=true  
adminUserName=adminUser_ID  
adminPassword=adminPassword  
  
#####  
# Parameter: signingCertDN  
#  
# Description:  
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you  
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in  
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the  
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root  
#   signing certificate, one is created by default. See the  
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter: signingCertValidityPeriod  
#  
# Description:  
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the  
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter  
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid  
#   for 20 years.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter: keyStorePassword  
#  
# Description:  
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile  
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate  
#   and the root signing certificate.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#####  
#signingCertDN =distinguished_name  
#signingCertValidityPeriod =validity_period  
#keyStorePassword =keyStore_password  
  
#####  
# Parameter: defaultPorts
```

```

#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the

```

```

#    manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#    service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#    does not have sufficient permission to set up the service. An
#    INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#    creation and the profile creation log
#    install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#    message indicating the current user does not have sufficient permission to
#    set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM

```

```

# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### **Standard Process Server** デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,

```

```

# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMgr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsrv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose

```

```

# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity

```

```

#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.

```



```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile

```

```

# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify

```

```

# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル(コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど)が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。

- 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
- 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
- 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連タスク:

Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。



- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー

には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。

- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連タスク:

Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、**install\_root/properties/profileRegistry.xml** ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root/profileTemplates/BPM** ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

- dmgr.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response

- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- 1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
- 2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

- 5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
- 6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
- 7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
- 8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。



- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しな

いことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。

3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:

```

```

# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:

```

```

# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```



```

# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:

```

```

# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be

```

```

# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

```

```

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties

```

```

# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword

```

```

# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user

```

```

# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#    The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#    service for the server process that is created within the profile. Specify
#    false to not create the Windows service. The default value for this
#    parameter is false.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#    The following values for Windows service startup can be used:
#    manual
#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#    The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#    databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#    server operating system. Server installations on all operating systems use
#    type 4.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#    Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#    profileTemplates/managed.esbserver or the
#    profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true

```



```

# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true

```

```

#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」 をクリックします。 「戻る」 をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。 ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」 をクリックします。

11. 「フェデレーション」 ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。

- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 [既存プロファイル内のポートの更新 \(WebSphere Application Server\)](#)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。



5. このファイルをコマンド行から実行します。-**profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-**response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:

 管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### **SQL Server データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

#### **デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

#### **プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した *SQL Server* データベース・サーバーによる *Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Server* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから

発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。



`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`

- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを実作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmin -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDName PERFDW -dbPerfDWUser perfdwadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true

```



```

#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer

```

```

#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with

```

```

# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```

```

#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter

```

```

# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.

```

```

# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem

```

```

#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password

```

```

#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false

```



```
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## 関連タスク:

Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは `WebSphere Application Server` パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。



## 関連タスク:

Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**

- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル（コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど）が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。

- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文

字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『`manageprofiles`』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`

- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。



## Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: keyStorePassword
#

```

```

# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
```

```
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
```

```
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a

```

```

# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath

```



```

#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#

```

```

# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#

```

```

# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom

```

```

# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#

```

```

# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 4. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
- 7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ



しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

関連情報:

 既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

**manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response

- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.proccr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていない ことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
  - デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
  - デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターの場合は、クラスター名を指定する必要があります。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。
- 1 つの WebSphere セルに複数のアプリケーション・ターゲット・クラスターが含まれている場合は、各クラスターでこのコマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
Linux UNIX install_root/profiles/Dmgr01/bin
```

```
Windows install_root¥profiles¥Dmgr01¥bin
```

以下のいずれかのコマンドを使用してブートストラップ・ユーティリティを実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh -clusterName cluster\_name**
- **bootstrapProcessServerData.sh -nodeName node\_name -serverName server\_name**

ここで、

- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ブートストラップ・データをクラスター上で実行する場合は、このパラメーターを指定する必要があります。
- **-nodeName** はノードの名前です。ネットワーク・デプロイメント環境に含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-serverName** パラメーターを指定する必要があります。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ネットワーク・デプロイメントに含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-nodeName** パラメーターの両方を指定する必要があります。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

**重要: SQL Server の場合のみ:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

IBM Business Process Manager サーバーを正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/ ディレクトリーの bootstrapProcessServerData.clusterName.timestamp.log` または `bootstrapProcessServerData.nodeName.serverName.timestamp.log` というファイル内 (指定したターゲットによって異なる) に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

Process Server または Process Center をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

#### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## Solaris における IBM Business Process Manager のインストールと構成

IBM Business Process Manager を Solaris にインストールし、スタンドアロンまたは Network Deployment 環境を構成します。

### Solaris におけるスタンドアロン環境の構成

標準インストールを使用して、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center または Process Server プロファイルを構成できます。あるいは、カスタム・インストールを選択し、その後にプロファイルを作成して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。

#### 標準インストールと構成:

「標準インストール」オプションは、IBM Business Process Manager をインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。



標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

#### 関連資料:

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

#### **DB2 データベースを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### **DB2 データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECON 64 DEFERRED;
connect reset;
```

#### **DB2 データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名

- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 95. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:

 Installation Manager の更新

### DB2 データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを作成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=/launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Server のインストール」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 96. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスバックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスバック、またはリフレッシュ・バックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるように、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、

「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必

須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### **Oracle データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### **Oracle データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

#### **Oracle データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。



表 97. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース (Process Center database)	Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

- 「次へ」をクリックします。
- 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、**Installation Manager** を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (**Install Software**)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた **Process Center** がインストールされました。

注: **Process Designer** は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:



Installation Manager の更新

### Oracle データベース・サーバーを使用する **Process Server** のインストールおよび構成:

**Process Server** には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの **BPM** ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して **IBM Business Process Manager Standard** をインストールするには、**Process Center** または **Process Server** データベース、**Performance Data Warehouse** データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- **Process Center** または **Process Server** データベース名
- **Performance Data Warehouse** データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを作成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの **IBM Installation Manager** だけで、**IBM Business Process Manager** の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、**Installation Manager** に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: **bpm\_updates.properties** ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=/launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「Process Server のインストール」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 98. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスバックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスバック、またはリフレッシュ・バックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### SQL Server データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### SQL Server データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは **COLLATE** 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmtExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。

スーパーユーザー (sa など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが dbo であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されます。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。

- c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

### **SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリーが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。



標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center のインストール・ロケーションを変更します。
7. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。

10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 99. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース (Process Center database)	Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「次へ」をクリックします。

12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合

があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:



Installation Manager の更新

### **SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:**

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=/launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。

4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。

5. 「Process Server のインストール」を選択します。

6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスと

の間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 100. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

11. 「次へ」をクリックします。

12. 「インストールの要約」 ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」 オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについては、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

#### 関連情報:

 [Installation Manager の更新](#)

#### カスタム・インストールおよび構成:

「カスタム・インストール」 オプションは、「標準インストール」 オプションでは提供されないインストール・オプションまたは構成オプションが必要である場合、サイレントにインストールしたい場合、あるいは WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境にインストールする場合に、IBM Business Process Manager をインストールするために使用します。

#### 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

#### **IBM Business Process Manager Standardのインストール:**

カスタム・インストールでは、対話式インストールかサイレント・インストールを選択できます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

## 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

### **IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージは対話式にインストールできます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

## 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

### **WebSphere Application Server の新規インストールを伴う対話式インストール:**

カスタム・インストールを使用して、IBM Business Process Manager を WebSphere Application Server の新規インストールと共にインストールできます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

- 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、次のステップに進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドを入力して手動で Launchpad を開始します。

```
mount_point/launchpad.sh
```

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドを入力して、ランチパッドを始動します。

```
extract_directory/launchpad.sh
```

2. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。

インターネットにアクセスできず、ランチパッドの更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合、プロパティー・ファイルを使用して、更新が存在する場所を **Installation Manager** に指示できます。以下のファイルを作成します。

```
/home/user/bpm_updates.properties
```

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルでは、後にドットを付けたランチパッド接頭部を使用します。接頭部とドットの後の名前の部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ランチパッドのアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=/bpmUpdates  
fixpack.2=http://test/rep  
launchpad.1=/launchpad_updates  
fixpack.WAS_REP=/WAS_updates  
fixpack.BPM_REP=/BPM_updates
```

3. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「**カスタム・インストール**」をクリックします。
4. 「**管理ユーザーとしてのインストール**」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。root ユーザーである場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。root ユーザーでない場合、または root 特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
5. 「**インストール**」をクリックします。IBM Business Process Manager をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment が自動的にインストールされます。
6. Installation Manager の「**パッケージのインストール**」ページで、「**IBM Business Process Manager Standard**」パッケージを選択します。デフォルトでは、
7. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。IBM サービス・リポジトリーに接続するための IBM ID とパスワードを指定するよう求めるプロンプトが出されます。

インターネットからフィックスバックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリーへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスバック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「**キャンセル**」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して必須修正をインストールできます。必須修正のダウンロードおよびインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

8. 「**ライセンス**」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。



9. 「ロケーション」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび **Installation Manager** のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。「パッケージのインストール」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。IBM 以外の前提条件および相互前提条件となる製品のサポート・バージョンへのマイグレーション方法については、それらの製品のドキュメンテーションを参照してください。

10. 「フィーチャー」ページで、正符号を展開してインストールするパッケージのフィーチャーを選択します。**Installation Manager** では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。
- オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
  - オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。
  - オプション: **Process Server** をインストールする場合は、**Process Server** フィーチャーを展開し、**Process Server** の用途を変更できます。実動でサーバーを使用する場合は「**実動**」(デフォルト)を選択し、テスト、ステージング、または開発のみにサーバーを使用する場合は「**非実動**」を選択します。選択内容はインベントリーの目的で製品タグに記録されます。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。

11. 「要約」ページで **IBM Business Process Manager Standard** パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
12. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
- オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「**インストール・ログ**」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - 終了時にプロファイル管理ツールを実行する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - 「**完了**」をクリックして、**Installation Manager** を終了します。

#### 関連情報:



**Installation Manager** の更新

#### **IBM Business Process Manager** のサイレント・インストール:

**IBM Business Process Manager** 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

**IBM Business Process Manager** をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

#### 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

#### コマンド行を使用したサイレント・インストール:

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager をサイレント・インストールできます。この方式では、コマンドを 1 つ実行するだけでインストールを実行できます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

```
extract_directory/IM/tools/imutilsc -silent -nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
3. 次のコマンドを実行します。

```
extract_directory/IM/tools/imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense  
-installationDirectory location -repositories repository -showVerboseProgress  
-log logName.log
```

ここで、

- *list\_of\_product\_IDs* は、インストールする製品と機能の ID のリストです。必須フィーチャーを組み込む必要があります。構文は *productID.feature.feature* で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 101. 製品 ID

製品	製品 ID	フィーチャーおよび説明
IBM BPM Standard	com.ibm.bpm.STD.V80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• bpmStd.nonprod: テスト、ステージング、または開発用。このフィーチャーまたは bpmStd.prod のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• bpmStd.prod: 実動用。このフィーチャーまたは bpmStd.nonprod のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• core.feature: 必須。WebSphere Application Server コア・コンテンツ。</li> <li>• ejbdeploy: 必須。Enterprise JavaBeans (EJB) 3.0 より前のモジュール。</li> <li>• thinclient: 必須。スタンドアロン・シン・クライアントおよびリソース・アダプター。</li> <li>• embeddablecontainer: 埋め込み可能 EJB コンテナ。</li> <li>• samples: サンプル・アプリケーション・フィーチャー。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_32bit: 32 ビット版 Software Development Kit (SDK)。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_64bit のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_64bit: 64 ビット版 SDK。このフィーチャーは、64 ビット・システムでのみ選択可能です。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_32bit のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
Installation Manager	com.ibm.cic.agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>• agent_core: Installation Manager コア・コンテンツ。</li> <li>• agent_jre: Installation Manager Java ランタイム環境 (JRE)。</li> </ul>

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

```
extract_directory/repos_32bit
extract_directory/repos_64bit
```

複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。

- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。 IBM Installation Manager を使用して、暗号化パスワードを作成します。

表 102. キー

キー	説明
user.db2.use.existing	<p>既存の DB2 セットアップを使用する場合は、以下の行を正確に追加します。</p> <pre>user.db2.use.existing=true</pre> <p>DB2 をインストールする必要がある場合は、値 <i>false</i> を指定します。</p>
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、*imcl* のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストした製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。エラーも警告もない場合、ログ・ファイルは空になります。

以下の例では、IBM Business Process Manager Standard および WebSphere Application Server Network Deployment が Solaris にインストールされます。

```
imcl install com.ibm.bpm.STD.V80,bpmStd.prod
com.ibm.websphere.ND.v80,core.feature,ejbdeploy,thinclient,embeddablecontainer,samples,com.ibm.sdk.6_32bit
-acceptLicense -installationDirectory /usr/IBM/BPM80
-repositories /usr/tmp/BPM/repository -showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

## 関連資料:

 [imcl のコマンド行引数](#)

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

## 関連情報:

 [IBM WebSphere Application Server インフォメーション・センター](#)

## 応答ファイルを使用したサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Standard をサイレント・インストールできます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

応答ファイルを使用すると、保存された共有可能なファイルでインストール・オプションを設定し、そのファイルを 1 台以上のマシンで使用できるため、サイレント・インストールを単純化し、プロセスにおけるエラーを減らすことができます。インストール・ソフトウェアには、それぞれのサポートされるオペレーティング・システムとビット・バージョン用のサンプルの応答ファイルが用意されています。サンプルの応答ファイルを変更せずにそのまま使用すると、デフォルト設定でサイレント・インストールを実行することができます。あるいは、これらの応答ファイルを変更して、特定の値を設定することもできます。サンプルの応答ファイル内のコメントに、詳細な説明と、値の設定に関する情報が記載されています。

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

```
extract_directory/IM/tools/imutilsc -silent -nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Standard をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーから、ご使用のビット・バージョンおよびユーザー・アクセス・レベルに適したサンプル応答ファイルをコピーします。

```
extract_directory/responsefiles/BPM/
```

あるいは、応答ファイルは Installation Manager でアクションを記録することによっても作成できます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager で行った選択が XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。

3. サンプル応答ファイルに指定されたデフォルト値では基本インストールが実行されますが、ファイルとそのコメントを確認し、ご使用の環境に合わせて必要に応じてパラメーターとユーザー ID のアクセス・レベルを変更してください。

特に、以下のパラメーターと値を確認してください。

- 非 root ユーザー ID の場合は、すべてのロケーション変数が、そのユーザーが許可を持つロケーションを指していることを確認してください。
  - リポジトリ・ロケーション。 *extract\_directory/responsefiles/BPM/* ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリの場所を指定します。リポジトリは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリでこの応答ファイルを再び指定します。
  - IBM Installation Manager が既にインストールされているか、これからインストールされるインストール・ロケーション (**installLocation**)。
  - IBM Business Process Manager Standard がインストールされるインストール・ロケーション。
  - Eclipse ロケーション (**eclipseLocation**)。
  - 製品のフィーチャーのリスト。
  - 実動用または非実動用。
4. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
  5. 次のコマンドを実行します。

root ユーザー:

```
extract_directory/IM/installc -acceptLicense input
  extract_directory/responsefiles/BPM/response_file_name.xml
  -log preferred_log_location/silent_install.log
```

非 root ユーザー:

```
extract_directory/IM/userinstc -acceptLicense input
  extract_directory/responsefiles/BPM/response_file_name.xml
  -log preferred_log_location/silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Standard がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

## 関連タスク:

 Installation Manager を使用したサイレント・インストール

 Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

## 関連資料:

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

## プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (root の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

非 root ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

## 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非 root ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします。製品インストール・ユーザーは、root ユーザーの場合または非 root ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- 次のように入力して、**install\_root/logs/manageprofiles** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

- 次のように入力して **install\_root/properties/fsdb** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、profileRegistry.xml ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/AppServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/AppServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK
```



このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非 root ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリーおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

root ユーザーと非 root ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

### プロファイルおよびデータベースの構成:

標準インストールを使用しなかった場合は、製品をインストールした後に、1 つ以上のプロファイルを作成または拡張してランタイム環境を定義する必要があります。プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

### Solaris における DB2 データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

### DB2 データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを /etc/profile ファイルに追加します。

実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
./home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

db2profile スクリプトを /etc/profile ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーとしてログインし、db2inst1 をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、root ユーザーを /etc/group 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

### **DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### **DB2 を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベースの作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。

- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する

- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5)exit [q]

Please enter the number for the design option :

- 2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1)bpm.advanced.nd.topology
- (2)bpm.advanced.standalone
- (3)bpm.standard.nd
- (4)bpm.standard.standalone
- (5>wesb.nd.topology
- (6>wesb.standalone

- 3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

- 4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、  
WBI\_CommonDB は未完了です  
(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12) [save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (3) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください (Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、**bpm.standard.standalone** は完了しました (bpm.standard.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリ

がまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。 プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。



- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

(1)bpc

(2)bpcreporting

(3)bpm\_performancedw

(4)bpm\_processserver

(5)bspace

(6)cei

(7)sca

(8)sibme

(9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=TWPSSPACE]:  
(Regular TableSpace[default=TWPSSPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
Temporary TableSpace[default=TWPSTEMPSPACE] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database

scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:

(Database server port[default=50000] :)

Data source user name[default=] :

Data source password[default=] :

DB2 JCC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## DB2 データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## DB2 データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

データベースをリモート・サーバーで構成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのデータベースを作成する必要があります。ローカル・サーバーにデータベースを作成することも、リモート・サーバーの既存のデータベースを使用することも可能です。

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ファイルに追加します。実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqlllib/db2profile
```

**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーとしてログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、root ユーザーを `/etc/group` 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド *install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh* を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。



「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12`

ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。 Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、 Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」 ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。 それ以外の場

合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

15. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 103. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフ

オルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、

WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。



「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 104. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。

表 104. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
 スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
- **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:

```

```

#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default

```



```

# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must

```

```

# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#

```

```

# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the

```

```

# local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
# specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
# specified.)
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdriver/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source

```

```

# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
# The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name

```

```
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
```

```
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
```

```
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
```

```
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

```

```

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```



## Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:

```

```

# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of

```

```

# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is

```



```

#     specified.)
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  dbServerPort
#
# Description:
#     The database server port number. Depending on the database you are using,
#     you can specify a different port number instead of the default port
#     number.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#     Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#     created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#     default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#     scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#     database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter:  dbName
#
# Description:
#     The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#     databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#     Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#     The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#     privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#     uses this ID to authenticate the database connection.
#     Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database

```

```

# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

```

```

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド *install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh* を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。

- b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 105. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

- 11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
- 12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。



## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。

2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。「**次へ**」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「**Process Server 構成**」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。

- a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**DB2**」を選択します。
- b. 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
- c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
- d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合

は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

e. 「次へ」をクリックします。

- 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 106. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

- 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
- 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**

- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に *profile\_root/dbscripts/ProcessServer/DB2/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

#### Performance Data Warehouse データベース表の作成:

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2/* に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/DB2/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** データベースに接続し、**db2 bind DB2\_installation\_directory¥bnd¥@db2cli.lst blocking all grant public** コマンドを使用してコマンド行インターフェースを Business Space データベースにバインドした後、データベース接続をリセットします。

### **スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:**

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。



注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリーの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### **Solaris における DB2 for z/OS データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:**

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### **データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン):**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:**

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。

- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データ

ベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)] :

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください

(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプショ

ンをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「false」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[Bspace] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って [状況 = 未完了] と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、[状況 = 完了] として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

注: DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。
- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかを選択してください
[これは Process Center のデータベースですか?]:
([info] Please pick one of the following
[Is this database for a Process Center?(s)] :)
```

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibME] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]

```
(11)[SibMe]      BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
(12)[save and exit]
```

Please enter the number for the database component :12

```
[status] bpm.advanced.standalone.topology is not complete with 6 remaining item(s):
[ 1 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 2 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
[ 3 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminUserName' for SECURITY_ADMIN_USER is empty.
[ 4 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.
[ 5 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 6 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):
```

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. ここまでの手順で指定したディレクトリ内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。各ディレクトリには、**createdB2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- **dbDesignGenerator.log** という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。



データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート `ddl` 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :

Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「false」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき

#### 関連タスク:

1526 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。

- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するためのものですが、Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関与することがあります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力が完成したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することが

できます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd /install_root/util/dbUtils
```

例: cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils

3. 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.sh -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.sh -g /tmp/DB2-zOS/W8CELL.nd.dbDesign
```

4. 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで *ddl\_outDir* 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、*ddl\_outDir* 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

1. 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

2. FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
3. z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

注: **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

#### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に **dbDesignGenerator.log** ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

#### DB2 for z/OS データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。



## プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル（コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど）が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**作成**」をクリックしてプロファイルを作成するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。
  - スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「**環境の選択**」ページが別ウィンドウで開きます。
4. 「**環境の選択**」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「**プロファイル作成オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。
6. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。

- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」 ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスと



の間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root/profileTemplates/BPM** ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr:** IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
- **default.procsvr:** IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
```

```

#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#    Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#    For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#    security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#    You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#    along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#    true
# Default Values:
#    true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#    Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#    create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#    quotation marks. This default personal certificate is located in the
#    server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#    signing certificate, one is created by default. See the
#    -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#    root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#    with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#    for 20 years.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort

```

```

#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.

```



```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
```

```

# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)

```

```

#     shortHostNameCellCellNumber
#     else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#     where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#     the node number that you used to define the node name.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or

```



```

#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```

```

#      automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#      -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#      parameter. The recommended port values can be different than the default
#      port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:

```



```

# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```

Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1

```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。

3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
    - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
    - b. 「**参照**」をクリックします。
    - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。
    - d. 「**次へ**」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
  9. 「**プロファイル・サマリー**」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  10. 「**プロファイル完了 (Profile Complete)**」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。

- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「プロトコル」:** Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
  - **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
  - **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
  - **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
  - **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。
- 「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。
9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。 データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
10. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  11. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-profilePath パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-response パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、bootstrapProcessServerData コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、bootstrapProcessServerData コマンドを実行する必要もあります。

### DB2 for z/OS の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

### DB2 for z/OS のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

#DB\_USER# として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファークラス・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された createDatabase.sql データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

#SCHEMA# のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を #DB\_USER# ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

## DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース *#DB\_NAME#* に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。
  - ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、SICELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```
INFORMATION FOR GROUP SICELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS OWNER=ZWPS CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
```



```
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=  
WSADMIN CONNECT 000000 NONE  
CONNECT ATTRIBUTES=NONE  
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE
```

## 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

## ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

## クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## **DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:**

データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

## 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが `listen` するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` `port` はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

1522 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、**IBM Business Process Manager** コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

**IBM Business Process Manager** のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、**IBM Business Process Manager** の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、**IBM Business Process Manager** データベースに対する DBADM 権限を **WebSphere** 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCcreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは

DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

1518 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。



**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBST0 -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する `z_schema.sql` ファイルおよび `z_schemaProc.sql` ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。`z_schemaProc.sql` ファイ

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

1518 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に **createDB2.sh** スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) を実行することもできます。

6. 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1522 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成することを選択するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
  - データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
    - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。
    - メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。

- a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
- b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
- c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

1467 ページの『スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

1459 ページの『DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.timestamp.log** というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。

2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

### **Solaris における Oracle データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### **Oracle データベースのセットアップ:**

ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースの構成を、プロファイルの作成または拡張の前、後、またはその途中に実行できます。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

データベースを作成および構成するためのオプションは以下のとおりです。

- ユーザーまたは DBA があらかじめデータベースを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、プロファイル管理ツールが自動的にその構成を行います。
- ユーザーまたは DBA がデータベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、ユーザーがそのファイルをプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティに渡します。
- データベースの構成を延期し、ユーザーまたは DBA が、プロファイルの作成中または拡張中に生成されたスクリプトを実行することによって、後から必要なデータベースおよびデータベース表を作成します。

#### **Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジ・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。



1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB]            WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

```

(2)[BPC]          WBI_BPC : [status = not complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[Bspace]      WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME]       WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME]       WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME]       WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME]       WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]      BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]      BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :

```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。 完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。 このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。 データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、

**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリ

がまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

**スタンドアロン環境における Oracle を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成**  
:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

(1)bpc

(2)bpcreporting

(3)bpm\_performancedw

(4)bpm\_processserver

(5)bspace

(6)cei

(7)sca

(8)sibme

(9)wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。



**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=BPMDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8  
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### Oracle データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## Oracle データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルの作成中または拡張中にデータベース情報を構成するには、Oracle インスタンスのサービス名を知っておく必要があります。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、**install\_root/profiles/profile\_name** です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

15. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。



- c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
- d. 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 107. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 107. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。

17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル(コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど)が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。

- a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Oracle**」を選択します。
- b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
  - データベース名は同じであっても構いません。
  - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
  - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
- c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
- d. 「**次へ**」をクリックします。

17. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 108. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。



スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。

3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDb -perfDWdbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT
```

```
#####
```

```

# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this

```

```

# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate

```

```

# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```

```

#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that

```



```

# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database

```

```

#      related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false
#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#

```

```

# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```

```

#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM

```

```

# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### **Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,

```

```

# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsrv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose

```



```

# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)

```

```

#           shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#           shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:

```

```

# Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user

```

```

# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an

```

```

# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
# The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
# when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
# only valid if you are using Oracle databases.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```



```

# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database.  The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name.  Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password.  Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse.  The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name.  Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWPassword

```

```

#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:

```

```

# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.

```

```

# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および

tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「Oracle」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 109. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。

- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
 スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```



プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

- 10. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
- 11. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 110. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>

表 110. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の Oracle データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/Oracle/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

#### Performance Data Warehouse データベース表の作成:

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/Oracle/* に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/Oracle/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** 代わりに、次の順序で個々のスクリプトを手動でカスタマイズし、実行することもできます。

- a. **createDatabase.sql**
- b. **createTable\_BusinessSpace.sql**
- c. **createGrant\_BusinessSpace.sql**

### **スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:**

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。



注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリーの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### **Solaris における SQL Server データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:**

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

### **SQL Server データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、`hostname` は SQL Server をホストするシステムのホスト名、`db_user_account` と `db_user_password` はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、`database_name` は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにするため、`COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS` が含まれています。

b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

### **SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### **SQL Server を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone

- (3)bpm.standard.nd
- (4)bpm.standard.standalone
- (5)wesb.nd.topology
- (6)wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for

WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定す

ることができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

Database name[default=CMNDB] :

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:

(Database User name[default=] :)

Database schema[default=] :

System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :

System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。

([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #  
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
Database server port[default=1433] :

[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the  
databases ? (s)} :

- (1) false  
(2) true

Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
MS SqlServer JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdriver/SQLServer] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]  
(2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]  
(3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]  
(4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]

```

(5)[BSPACE]      WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME]      WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME]      WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME]      WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]

```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

```

(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]

```

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):2

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :



14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における SQL Server を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。

- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1)bpc
- (2)bpcreporting
- (3)bpm\_performancedw
- (4)bpm\_processserver
- (5)bspace
- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)
```

```
[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)
```

```
(1>false  
(2>true
```

```
番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :
```

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #  
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the  
databases ? (s)} :
```

- (1) false
- (2) true

```
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

## データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。  
**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアード・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。

- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

**Windows Vista および Windows 7 の場合:**

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

**SQL Server データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:**

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## SQL Server データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

**制約事項:** Process Server データベース (BPMDB) および Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) では、大/小文字が区別されないようにする必要があります。それ以外のデータベースでは、大/小文字を区別できます。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 III.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 dbo として CMNDB データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)



IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。

- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。た

だし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

- d. 「次へ」をクリックします。
14. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

15. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
16. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 112. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」オプション	は選択しないでください。

表 112. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>Performance Data Warehouse データベース</b>	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b>	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
<b>サーバー・ポート</b>	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
<b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b>	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

表 113. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。



1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
  - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。

- c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
14. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「プロトコル」:** Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- 「データベース製品の選択」リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 114. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。	
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメータの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>

表 114. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー \${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer に置かれています。

表 115. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証: Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - Windows 認証: Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。

- default.procsvr: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```



ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmin -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDbName PERFDW -dbPerfDWUserId perfadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01
#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the

```

```

# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:

```

```

# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####

```

```

# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbiddbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

```



```

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName

```

```

#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId

```

```

dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pwd
#####
# Parameter:  dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:

```

```

# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a

```

```

# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be

```

```

# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword

```



```

#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#     Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#     creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#     and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#     Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#     parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#     During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#     automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#     -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#     parameter. The recommended port values can be different than the default
#     port values based on the availability of the default ports.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winServiceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winServiceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winServicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winServiceCheck
#
# Description:

```

```

# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false

```

```

#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB

```

```

#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

```

```

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
# An optional parameter that is valid in all default profile templates.
# Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
# windows authentication.
#

```



```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.

```

```
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
- 2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
- 6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

- 9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
- 10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 116. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」オプションは選択しないでください。	
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>

表 116. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー \${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer に置かれています。

表 117. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証: Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - Windows 認証: Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを作成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「プロトコル」:** Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。



9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。 それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。 設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 118. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」 オプションは選択しないでください。	

表 118. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
<b>Process Server データベース</b>	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
<b>Performance Data Warehouse データベース</b>	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
<b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b>	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
<b>サーバー・ポート</b>	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
<b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b>	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。

表 119. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
- **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを実作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_StandAlone.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の SQL Server データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/SQLServer/* に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/SQLServer/* に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.sh
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.sh** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、*install\_root/profile/dbscripts/BusinessSpace/node\_name\_server\_name/SQLServer/CMNDB* です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.sh** 代わりに、次の順序で個々のスクリプトを手動でカスタマイズし、実行することもできます。

- a. **createDatabase.sql**
- b. **createTable\_BusinessSpace.sql**
- c. **createGrant\_BusinessSpace.sql**

### **スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:**

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

データベース・パスワードは暗号化する必要があります。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root/profiles/ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

**重要:** ブートストラップ・ユーティリティが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
```



```
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## Solaris における Network Deployment 環境の構成

Network Deployment 構成の場合は、ソフトウェアをインストールした後に、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張し、Network Deployment 環境を構成します。

### プロファイル作成または拡張のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (root の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

非 root ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

### 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非 root ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします 製品インストール・ユーザーは、root ユーザーの場合または非 root ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- 次のように入力して、**install\_root/logs/manageprofiles** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```

- 次のように入力して **install\_root/properties/fsdb** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、profileRegistry.xml ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **/opt/IBM/WebSphere/AppServer** であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/AppServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu  
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK
```

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非 root ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリにプロファイルを作成することはできません。

root ユーザーと非 root ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

#### データベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;  
connect to @DB_NAME@;  
grant dbadm on database to user @DB_USER@;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;  
connect reset;
```

DB2 Universal Database を使用する計画がある場合は、データベース・サーバーの準備作業の一環として以下を行います。

- **db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ファイルに追加します。実行

```
vi /etc/profile
```

さらに、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

- DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、`root` ユーザーとしてログインし、`db2inst1` をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合は、`root` ユーザーを `/etc/group` 管理グループに追加します。実行

```
vi /etc/group
```

さらに、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103;db2fenc1,root
```

手順に従っていないと、プロファイル作成時または拡張時に、以下の例外が発生する可能性があります。

- **db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

- DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

- IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

### **DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### **DB2 を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。 完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。 このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。 データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
スキーマ名 [デフォルト=] :
(Schema name[default=] :)
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Regular pagesize[default=32k] :)
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :
```

```
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:
(Temporary pagesize[default=32k] :)
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)
```

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」



を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1) [WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2) [BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5) [BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6) [SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7) [SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8) [SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9) [SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12) [save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(3) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
(4) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
(5) [save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):5
```

```
[status] bpm.standard.nd is complete with 0 remaining item(s):
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database

scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:

(Database server port[default=50000] :)

Data source user name[default=] :

Data source password[default=] :

DB2 JCC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください

[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :

(Please enter the output filename

[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign

] :)

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。 ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。 以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

#### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment):

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、



指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート `ddl` 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー `/tmp/DB2-zOS/W1MYDB` 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば `/tmp/DB2-zOS/W8CELLDB` などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば `/tmp/DB2-zOS/W8S1DB` などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1)Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、**s** 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、**s** を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

注: DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。

- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかを選択してください
[これは Process Center のデータベースですか?]:
([info] Please pick one of the following
[Is this database for a Process Center?(s)] :)
```

- ```
(1) false
(2) true
```

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

- ```
(1)[WBI_CommonDB]      WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC]              WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSpace]           WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME]            WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME]            WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME]            WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME]            WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe]           BPM_PerformanceDW_ME : [status = complete]
(11)[SibMe]           BPM_ProcessServer_ME : [status = complete]
(12)[save and exit]
```

```
Please enter the number for the database component :12
```

```
[status] bpm.advanced.nd.topology is not complete with 6 remaining item(s):
[ 1 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 2 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
[ 3 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminUserName' for SECURITY_ADMIN_USER is empty.
[ 4 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.
[ 5 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 6 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
bpm.advanced.nd.topology は完了しました
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
]:)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. ここまでの手順で指定したディレクトリー内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。各ディレクトリーには、**createdb2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- **dbDesignGenerator.log** という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明でもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help

ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name

指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```



**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
Database Location on z/OS system[default=] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed  
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### 関連タスク:

1863 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### **DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:**

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するもののですが、

Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関わる場合があります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力が完成したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー /tmp/DB2-zOS/W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
  - 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば /tmp/DB2-zOS/W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
  2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd /install_root/util/dbUtils
```

例: cd /opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils

3. 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.sh -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.sh -g /tmp/DB2-zOS/W8CELL.nd.dbDesign
```

4. 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで *ddl\_outDir* 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、*ddl\_outDir* 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

1. 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

2. FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
3. z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。  
      (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。  
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
```

```
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### Oracle 用データベースのセットアップ:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'  
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M  
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];  
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE  
[tablespace_name];  
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE  
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;  
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;  
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;  
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;  
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

### Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。



1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]

```

(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSpace] WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :

```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
]:)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジ・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。



Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8  
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/Oracle-CommonDB for WBI\_CommonDB

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI\_BSPACE は未完了です  
(WBI\_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    userId の必須プロパティ「userName」が空です。  
    (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    DB\_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。  
    (required property 'password' for DB\_PASSWORD is empty.)

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-  
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### SQL Server 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

**ヒント:** フェデレーテッド・リポジトリをユーザー・レジストリーとして使用している場合は、systemout.log ファイル内にあるキーの最大長に関する警告「... 警告: 最大キー長は 900 バイトです ...」を無視してかまいません。スタンドアロン LDAP レジストリーを使用している場合は、組織内のすべてのユーザー識別名 (DN) 項目の文字数が 131 文字の制限を超えていないことを確認してください。いずれかのユーザー DN 項目の文字数が 131 文字を超えている場合は、ユーザー・アカウント・レジストリーをフェデレーテッド・リポジトリ・オプションに変更する必要があります。

### SQL Server データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 120.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

#### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。

f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### SQL Server を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、  
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再



入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

(1) bpm.advanced.nd.topology

(2) bpm.advanced.standalone

(3) bpm.standard.nd

(4) bpm.standard.standalone

(5) wesb.nd.topology

(6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

(2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]

(3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]

(4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]

(5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]

(6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]

(7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]

(8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]

```
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
```

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the databases ? (s)} :

- false
- true

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2
```

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
WAS\_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。

- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における SQL Server を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、

指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...

[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。

生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、

出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを *install\_root/util/dbUtils* ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/util/dbUtils> DbDesignGenerator.sh
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace

- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。



管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output directory [default=/WebSphere/V8T8DM/DeploymentManager/util/dbUtils] :

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/util/dbUtils/SQLServer-CommonDB for WBI_CommonDB
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### **configureNode** コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成:

標準的な Network Deployment 環境を構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または `manageprofiles` コマンドと `wsadmin` コマンドを使用する代わりに、`configureNode` コマンドを使用できます。このコマンドでは、プロパティ・ファイルを使用して限られたカスタマイズを行い、すぐに使用できる環境を作成します。`configureNode` は、後からデプロイメント環境を拡張する場合にも使用できます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

**重要:** 最初に作成されたプロファイルを削除しないと、1 台のマシンで `configureNode` を 2 回実行することはできません。2 回目の `configureNode` コマンドを実行するには、まずプロファイルを削除してください。

### **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の作成:

`configureNode` コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。このコマンドの目標は、すぐに使用できる環境を提供することです。プロパティ・ファイルには、カスタマイズ可能なパラメーターのみが提供されます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

製品をインストールし、プロパティ・ファイルに指定されているすべてのデータベースを作成しておく必要があります。

**重要:** データベース・ソフトウェアをインストールして、データベースを作成しておく必要があります (ただし、テーブルは作成しないでください)。また、プロパティ・ファイルで指定したユーザーも、すべて作成しておく必要があります。『データベース特権』にリストされたインストール特権をユーザーが持っていることを確認してください。

SQL Server データベース・サーバーの場合:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。

- サーバーを実行中の現行の Windows ユーザーによってデータベースへの接続が行われる場合は、SQL Server で「**Windows 認証モード**」または「**SQL Server 認証モードと Windows 認証モード**」が有効になっている必要があります (これらは Microsoft SQL Server Management Studio を通して指定されます)。

**制約事項: configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

**configureNode** コマンドは、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーを作成します。このコマンドを使用してポートをカスタマイズすることはできません。サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。デフォルト・ポートで構成された他のプロファイルが同じマシン上で開始されていないことを確認してください。

**configureNode** コマンドにより、以下の Network Deployment トポロジーが作成されます。

- 単一セル環境
- この環境には、プロパティ・ファイルで指定した数のクラスター・メンバーが含まれます。
- この環境では、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンが使用されます。このトポロジー・パターンには、以下の 4 つのクラスターが含まれます。
  - メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
  - サポート・インフラストラクチャー・クラスター
  - アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
  - Web アプリケーション・クラスター

このコマンドは、以下のタスクを実行します。

- デプロイメント・マネージャー・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてデプロイメント・マネージャー・ノードを作成し、デプロイメント・マネージャーを始動する。
- デプロイメント環境の定義を作成する。
- カスタム・ノード・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてカスタム・ノードを作成する。
- ノードをフェデレートしてデプロイメント環境に追加する。
- デプロイメント環境を生成する。
- データベース表を作成する (データベースは、あらかじめ作成しておく必要があります。手順については、『始める前に』を参照してください)。
- ブートストラップ・ユーティリティを実行し、システム情報と共に Process Server データベースをロードする。
- Web アプリケーション・クラスターで Business Space および Process Portal を構成する。

プロパティ・ファイルでオプション・ポートが指定されていない場合は、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーが作成されます。**configureNode** を実行した時点で、デプロイメント・マネージャーが既にマシン上で稼働している場合は、デプロイメント環境の作成が失敗します。デプロイメント・マネージャーが既に作成されているが、まだ稼働していない場合は、いずれかのデプロイメント・マネージャーのポートを変更する必要があります。変更しないと、別のデプロイメント・マネージャーを始動したときに、ポートの競合エラーが発生する可能性があります。

初めてデプロイメント環境を作成する場合は、以下のステップを実行します。

1. デプロイメント環境を作成するマシン上で、サンプルのプロパティ・ファイル `install_root/util/ndUtils/samples/` を探します。

2. サンプル・ファイルをコピーして、現在の環境を反映するように変更します。例えば、Process Server の IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_std_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。

作成したい各データベースについて、データベース・パラメーターのセクションをコピーし、データベース名、ユーザー名、パスワード、スキーマ名を指定します。Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。これらのデータベースには、それぞれ異なる名前を指定する必要があります。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. 上記手順で作成した 2 つのファイルの名前を **configureNode** コマンドに渡して実行します。カスタム・ノード・ファイルはオプションですが、カスタム・ノード・ファイルを指定しなかった場合、デプロイメント・マネージャーだけが作成されます。例:

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -dmgr_response my_dmgr_response_file.properties -response node01_response_file.properties
```

**注: Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**


これで、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンを使用するデプロイメント・マネージャー、カスタム・ノード、およびデプロイメント環境が作成されました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されます。


**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで) テスト接続の操作が例外 `com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT` で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。


## 関連概念:

 仮想ホスト

## 関連タスク:

 仮想ホストの構成

## 関連資料:

 テスト接続サービス

## **configureNode** コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張:

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

**configureNode** コマンドを実行するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- デプロイメント環境の拡張を行うマシンに製品をインストールしておく必要があります。
- デプロイメント・マネージャーは稼働している必要があります。
- **configureNode** コマンドを実行してデプロイメント環境を作成しておく必要があります。

**制約事項:** **configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

1. デプロイメント環境の拡張を行うマシンで、サンプルのカスタム・ノード・ファイルを見つけます。  
`install_root/util/ndUtils/samples/`
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Server 用 IBM BPM Standard のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_std_ps_node.properties` ファイルを選択します。

デプロイメント・マネージャーの詳細を含む、ご使用の環境を反映させるために、新規カスタム・ノード・ファイルを変更します。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. サンプル・ファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。例:

```
install_root/util/ndUtils/configureNode.sh -response node01_response_file.properties
```

**注:** **Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**

デプロイメント環境を拡張しました。

ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` にメッセージが記録されます。

**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで) テスト接続の操作が例外

`com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT`


で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

 仮想ホスト

関連タスク:

 仮想ホストの構成

関連資料:

 テスト接続サービス

**プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成:**

製品をインストールした後に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張して、ランタイム環境を定義する必要があります。デプロイメント・マネージャーを開始する前に、IBM Business Process Manager で使用することになるデータベースを構成しておく必要があります。

**Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成および構成する場合は、これ以上の構成は不要です。それ以外の場合は、デプロイメント環境を作成する前に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。プロファイルを使用することにより、IBM Business Process Manager の複数のコピーをインストールする必要なく、システムに複数のランタイム環境を持つことができます。

**DB2 データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

**デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。*Solaris* の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

*Solaris* オペレーティング・システム上の *Motif* グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、*IBM Business Process Manager Standard* 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。



6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使

用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、**install\_root/.Xdefaults** ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**標準**」または「**拡張**」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの **bin** ディレクトリーから

発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response**

- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDdbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```



コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true

```

```

#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
```



```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber

```

```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test

```

```

# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる *Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。



12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。 指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、**install\_root/.Xdefaults** ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。

- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル」をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、*install\_root/*

properties/profileRegistry.xml ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。

2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- dmgr.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
- dmgr.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。augment パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response

- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。



```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
```

```

# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:

```

```

#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```



```

#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false.  If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true.  If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:

```

```

# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType

```

```

#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own

```

```

# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces

```

```

# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#

```



```

# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:

```

```

# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM

```

```

# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  5. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  7. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。

- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
- 8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
- 9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」 ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。



`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 [既存プロファイル内のポートの更新 \(WebSphere Application Server\)](#)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-**profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-**response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:

 [管理対象ノード設定の追加 \(WebSphere Application Server\)](#)

#### **DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

#### **デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

#### **プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## Solaris におけるプロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー



には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルがデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの *bin* ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、*tw\_admin* および *tw\_user* を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。

– 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
```

```

# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####

```

```

# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####

```

```

# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,

```



```

#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType

```

```

#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.

```

```

# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName

```

```

#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.

```

```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName

```



```

#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。

8. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。

- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しな

いことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、**install\_root/.Xdefaults** ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  8. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、**install\_root/profiles/profile\_name** です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用  
のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理  
するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフ  
ァイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから  
発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ  
しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロ  
ファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必  
要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベ  
ルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページ  
が再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを  
実行します。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノー  
ド名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなけれ  
ばなりません。
- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確  
認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および  
tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をイン  
ポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の  
新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の  
新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an  
existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import  
an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプ  
を選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択し  
ます。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。



個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-profilePath パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-response パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、install\_root/.Xdefaults ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、java user.language 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張:「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使

用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイル調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。



2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
```

```

# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true

```

```
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
```

```

# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows

```

```

# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs

```

```

# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.

```



```

#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on

```

```

# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

```

```

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

```

```

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before

```

```

# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test

```

```

# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。



- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  5. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  7. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用  
のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理  
するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフ  
ァイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから  
発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ  
しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロ  
ファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必  
要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベ  
ルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページ  
が再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを  
実行します。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作  
成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。  
プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネー  
ジャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイ  
メント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。

- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 `-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 `chmod` コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 `templatePath` プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 `-profilePath` パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 `-response` パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
  - デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
  - デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの *bin* ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:

 管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### *Network Deployment* プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### *DB2 for z/OS* の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

#### DB2 for z/OS のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

**#DB\_USER#** として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファークラス・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された `createDatabase.sql` データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

**#SCHEMA#** のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を **#DB\_USER#** ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

#### DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース **#DB\_NAME#** に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。



ます。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。

- ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、S1CELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```
INFORMATION FOR GROUP S1CELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS OWNER=ZWPS CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN CONNECT 000000 NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE
```

## 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

### ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

### クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## **DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:**

データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

## 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが `listen` するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` `port` はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』  
IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

1859 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファー・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは

DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。



## 関連タスク:

1855 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する `z_schema.sql` ファイルおよび `z_schemaProc.sql` ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。`z_schemaProc.sql` ファイル

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

1855 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に **createDB2.sh** スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) を実行することもできます。

6. 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1859 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成することを選択するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

データベース・スクリプトを作成して実行する前に、以下を行います。

- クラスタを作成します。
- Network Deployment 構成で作成するサービス統合バス・コンポーネントを決定します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
- データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
  - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。

- メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。
    - a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
    - b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
    - c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

1689 ページの『Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

1682 ページの『DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

**注:** 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

### Oracle データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。*Solaris* の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

*Solaris* オペレーティング・システム上の *Motif* グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、*IBM Business Process Manager Standard* 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。



6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使

用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### プロファイル管理ツールを使用した *Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、*Process Server* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから

発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response**

- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDdbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```



コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true

```

```

#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer

```

```

#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with

```



```

# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```

```

#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter

```

```

# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.

```

```

# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem

```

```

#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password

```

```

#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false

```

```
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager

がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。



- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文

字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。

3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```



応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。

2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル

をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
```

create

```
#####  
# Parameter: templatePath  
#  
# Description:  
# Specifies the directory path to the template files in the installation  
# root directory. Within the profileTemplates directory are various  
# directories that correspond to different profile types and that vary with  
# the type of product installed. The profile directories are the paths that  
# you indicate while using the -templatePath option.  
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to  
# a valid template directory.  
#  
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file  
# path for the parameter.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
templatePath=BPM/managed.procctr
```

```
#####  
# Parameter: profileName  
#  
# Description:  
# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a  
# profile.  
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a  
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a  
# trailing number, for example:  
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,  
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a  
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces  
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,  
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On  
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose  
# the value in quotation marks. The default value is based on the  
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the  
# file. For example, the default for profile creation is:  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere  
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties  
# file in the install_root/properties directory. The value for this  
# parameter must be a valid path for the target system and must not be  
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
profileName=Custom01
```

```
#####  
# Parameter: cellName  
#  
# Description:  
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each  
# profile.  
# The default value for this parameter is based on a combination of the  
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:  
# if (DMgr)  
# shortHostNameCellCellNumber  
# else  
# shortHostNameNodeNodeNumberCell
```



```

# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual

```

```

#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:
#    manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  dbDriverType
#
# Description:
#    The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#    databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#    server operating system. Server installations on all operating systems use
#    type 4.
#
#    Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####
# Parameter:  federateLaterBPM
#
# Description:
#    Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#    profileTemplates/managed.esbserver or the
#    profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#    or false.  If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#    -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#    parameter is true.  If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#    WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#    true.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    true
#
# Parameter:  dmgrHost
#
# Description:
#    Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#    Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#    profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#    the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#    host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#    deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#    the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#    node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.

```

```

# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.

```

```

# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#

```

```

# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true

```



```
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
```

```

# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows

```

```

# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false

```

```

# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#

```

```

# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
- a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、*install\_root/profiles/profile\_name* です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」 ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャ

のホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。



- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」 をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」 をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」 が選択されていることを確認して「終了」 をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 [既存プロファイル内のポートの更新 \(WebSphere Application Server\)](#)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、 **addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、 *profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの **bin** ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

`profile_root/bin`

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

**SQL Server データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

**デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

**プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから

発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。



`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した *SQL Server* データベース・サーバーによる *Process Server* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、*Process Server* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。*Solaris* の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

*Solaris* オペレーティング・システム上の *Motif* グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response

- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmin -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDName PERFDW -dbPerfDWUser perfdwadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
```

```

# Parameter:  profilename
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber

```



```

# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

```

```

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```



```

#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService

```

```

#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####

```

```

#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、`install_root/.Xdefaults` ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは `WebSphere Application Server` パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。



## プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、32 ビット・アーキテクチャーで既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。

6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル
- をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
- プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **dmgr.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - **dmgr.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Dmgr.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。 **-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

32 ビット・アーキテクチャーでは、プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用します。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0  
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド **install\_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh** を実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

**重要:**



以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root/properties/portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- **PC\_Std\_DMGr\_DB2.response**
- **PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response**

- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
```

```

# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#

```

```

# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid

```

```

#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#     Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#     creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#     and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#     Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#     false. The default value for this parameter is false. When the
#     manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#     set to true , the Linux service is created with the profile when the
#     command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#     manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#     service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#     does not have sufficient permission to set up the service. An
#     INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#     creation and the profile creation log
#     install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#     message indicating the current user does not have sufficient permission to
#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.

```



```

#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual

```

```

#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is

```

```

# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test

```

```
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
```

```

#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the

```

```

# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the

```

```

# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux

```

```

#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#

```



```

# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with

```

```

# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test

```

```

# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

32 ビット・アーキテクチャーでは、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。Solaris の 64 ビット・アーキテクチャーでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Solaris オペレーティング・システム上の Motif グラフィカル・ユーザー・インターフェースでプロファイル管理ツールを使用する場合、プロファイル管理ツールのデフォルト・サイズが、すべてのメッセージおよびボタンを表示するには小さすぎる可能性があります。この問題を修正するには、*install\_root/.Xdefaults* ファイルに以下の行を追加します。

```
Eclipse*spacing:0
Eclipse*fontList:-misc-fixed-medium-r-normal-*-10-100-75-75-c-60-iso8859-1
```

行を追加したら、プロファイル管理ツールを開始する前に次のコマンドを実行します。

```
xrdb -load user_home/.Xdefaults
```

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar
```

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root/profiles/profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」 ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。

- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root/profileRegistry.xml* ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- **managed.procctr**: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - **managed.procsvr**: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。



4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root/BPM/samples/manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。 **chmod** コマンドを使用して、応答ファイルの新規コピーに適切な許可を割り当てます。以下に例を示します。

```
chmod 644 BPM_Custom.response
```

ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。 **templatePath** プロパティーのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-**profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-**response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root/bin/startManager.sh
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root/bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username  
userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターの場合は、クラスター名を指定する必要があります。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。
- 1 つの WebSphere セルに複数のアプリケーション・ターゲット・クラスターが含まれている場合は、各クラスターでこのコマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
Linux UNIX install_root/profiles/Dmgr01/bin
```

```
Windows install_root¥profiles¥Dmgr01¥bin
```

以下のいずれかのコマンドを使用してブートストラップ・ユーティリティを実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh -clusterName cluster\_name**
- **bootstrapProcessServerData.sh -nodeName node\_name -serverName server\_name**

ここで、

- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ブートストラップ・データをクラスター上で実行する場合は、このパラメーターを指定する必要があります。

- **-nodeName** はノードの名前です。ネットワーク・デプロイメント環境に含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-serverName** パラメーターを指定する必要があります。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ネットワーク・デプロイメントに含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-nodeName** パラメーターの両方を指定する必要があります。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

**重要: SQL Server の場合のみ:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.

Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

IBM Business Process Manager サーバーを正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、**USER\_INSTALL\_ROOT/logs/** ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.clusterName.timestamp.log** または **bootstrapProcessServerData.nodeName.serverName.timestamp.log** というファイル内 (指定したターゲットによって異なる) に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

Process Server または Process Center をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

## 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティー・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## Windows における IBM Business Process Manager のインストールと構成

Windows 上に IBM Business Process Manager をインストールし、スタンドアロンまたは Network Deployment 環境を構成します。

### Windows におけるスタンドアロン環境の構成

標準インストールを使用して、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center または Process Server プロファイルを構成できます。あるいは、カスタム・インストールを選択し、その後にプロファイルを作成して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。

#### 標準インストールと構成:

「標準インストール」オプションは、IBM Business Process Manager をインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

#### 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

### 新しい DB2 Express データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:

標準インストールでは、DB2 Express を Windows にインストールし、IBM Business Process Manager に必要なデータベースを構成できます。このパスは、管理特権があり (管理者ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

### 新しい DB2 Express データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールでは、DB2 Express をインストールし、IBM Business Process Manager の必要なデータベースを構成します。このパスは、管理特権があり (管理者ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties
```

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Documents and Settings¥user\_name¥ を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Users¥user\_name¥ を示します。

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥1launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥1launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。

- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center と Process Designer のインストール・ロケーションを変更します。

**制約事項:** DB2 Express をインストールしているので、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

8. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
9. 「**次へ**」をクリックします。
10. 「**いいえ**」を選択して、DB2 Express をインストールします。
11. DB2 Express データベースの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれていてはなりません。

12. 「**次へ**」をクリックします。
13. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックします。「**サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください**」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「**キャンセル**」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

14. 「**ソフトウェアのインストール (Install Software)**」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center および Process Designer がインストールされました。

**注:** Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

Windows ドメイン・ユーザー ID を使用して新しい DB2 Express データベースと表を作成した後、プロファイルの作成に失敗した場合は、以下のいずれかの解決策を実行してください。

- ローカル・システム・ユーザーとして Windows システムにログインし、プロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成します。

- 『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N "USERID does not have the authority to perform the requested command or operation"』にリストされたステップを実行した後、プロファイルを作成します。

#### 関連情報:

 Installation Manager の更新

#### 新しい DB2 Express データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールでは、DB2 Express をインストールし、IBM Business Process Manager の必要なデータベースを構成します。このパスは、管理特権があり (管理者ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

- オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

`C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties`

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Documents and Settings¥user_name¥` を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Users¥user_name¥` を示します。

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

- ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。



IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory%1launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「**更新**」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「**標準インストール**」をクリックします。
5. 「**Process Server のインストール**」を選択します。
6. 「**次へ**」をクリックします。
7. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「**参照**」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。

**制約事項:** DB2 Express をインストールしているので、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

環境の「**タイプ**」として「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

8. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**いいえ**」を選択して、DB2 Express をインストールします。
10. DB2 Express データベースの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

11. 「**次へ**」をクリックします。
12. 「**インストールの要約**」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」をクリックします。「**サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください**」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「**Required interim fix for APAR JR44669**」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「**Required interim fixes for IBM Business Process Manager**」を参照します。

「**キャンセル**」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、**Installation Manager** を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『**Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0**』を参照してください。

13. 「**ソフトウェアのインストール (Install Software)**」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

Windows ドメイン・ユーザー ID を使用して新しい DB2 Express データベースと表を作成した後、プロファイルの作成に失敗した場合は、以下のいずれかの解決策を実行してください。

- ローカル・システム・ユーザーとして Windows システムにログインし、プロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成します。
- 『**DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N "USERID does not have the authority to perform the requested command or operation"**』にリストされたステップを実行した後、プロファイルを作成します。

## 関連情報:



Installation Manager の更新

### **DB2 データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

#### **DB2 データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;  
connect to @DB_NAME@;  
grant dbadm on database to user @DB_USER@;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;  
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;  
connect reset;
```

### **DB2 データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties
```

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Documents and Settings¥user\_name¥ を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Users¥user\_name¥ を示します。

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥1launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥1launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「**更新**」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「**標準インストール**」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 「**次へ**」をクリックします。

7. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
 

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center と Process Designer のインストール・ロケーションを変更します。
8. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
11. 必要なデータベース情報を指定します。

表 121. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

12. 「次へ」をクリックします。
13. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用でき

るよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

14. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center および Process Designer がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:

 Installation Manager の更新

### **DB2 データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:**

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。データベースは、少なくとも 32 K のページ・サイズで作成する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties
```

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:\Documents and Settings\user\_name を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:\Users\user\_name を示します。

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:\bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:\launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:\WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:\BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) extract\_directory\launchpad.exe

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Server のインストール**」を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

環境の「タイプ」として「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「ホスト名」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- ポート: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- ユーザー名: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- パスワード: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
10. 必要なデータベース情報を指定します。

表 122. DB2 の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。 <b>制約事項:</b> ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
共通データベース名	共通データベース用の名前を入力してください。
Process Server データベース名 (Process Server database name)	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

11. 「次へ」をクリックします。
12. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用し



てインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

13. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

Windows ドメイン・ユーザー ID を使用して新しい DB2 Express データベースと表を作成した後、プロファイルの作成に失敗した場合は、以下のいずれかの解決策を実行してください。

- ローカル・システム・ユーザーとして Windows システムにログインし、プロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成します。
- 『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N "USERID does not have the authority to perform the requested command or operation"』にリストされたステップを実行した後、プロファイルを作成します。

関連情報:

 Installation Manager の更新

**Oracle データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

**Oracle データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

### **Oracle データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:**

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを作成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties
```

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Documents and Settings¥user\_name¥ を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Users¥user\_name¥ を示します。

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッ

ド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥1launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥1launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
 

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。
  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center と Process Designer のインストール・ロケーションを変更します。
8. このサーバーの管理アカウントの「ユーザー名」および「パスワード」を指定します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
11. 必要なデータベース情報を指定します。

表 123. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。

表 123. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース (Process Center database)	<p>Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

- 「次へ」をクリックします。
- 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

- 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center および Process Designer がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

関連情報:



Installation Manager の更新

### Oracle データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

`C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties`

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Documents and Settings¥user_name¥` を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Users¥user_name¥` を示します。

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッ

ド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥1launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥1launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「**更新**」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「**標準インストール**」をクリックします。
5. 「**Process Server のインストール**」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

環境の「**タイプ**」として「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. 「次へ」をクリックします。
8. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
9. 必要なデータベース情報を指定します。

表 124. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベース名	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
共通データベース	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

10. 「次へ」をクリックします。
11. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

12. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

Windows ドメイン・ユーザー ID を使用して新しい DB2 Express データベースと表を作成した後、プロファイルの作成に失敗した場合は、以下のいずれかの解決策を実行してください。

- ローカル・システム・ユーザーとして Windows システムにログインし、プロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成します。
- 『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N "USERID does not have the authority to perform the requested command or operation"』にリストされたステップを実行した後、プロファイルを作成します。

関連情報:

 Installation Manager の更新

**SQL Server データベース・サーバーを使用する IBM Business Process Manager のインストールおよび構成:**

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager をインストールすることができます。インストールする前に、必要なデータベースが使用可能であることを確認する必要があります。

**SQL Server データベースの作成:**

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。



Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name  
'message.routingCache'  
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is  
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class  
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;  
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;  
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is  
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement  
(SQLServerPreparedStatement.java:388)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute  
(SQLServerPreparedStatement.java:338)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery  
(SQLServerPreparedStatement.java:281)  
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)  
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

## XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。

- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Center のインストールおよび構成:

Process Center には、IBM Business Process Manager オーサリング環境で作成されたすべてのプロセス、サービス、およびその他のアセット用のリポジトリーが含まれます。Process Center 内に統合された Process Server を使用して、プロセスをビルドしながら実行できます。準備が整ったら、ランタイム環境の Process Server に、その同じプロセスをインストールして実行できます。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

`C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties`

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Documents and Settings¥user_name¥` を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Users¥user_name¥` を示します。

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合

は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティ・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。

4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Center のインストール**」を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. 必要に応じて、ロケーション情報を変更します。
  - **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。

**重要:** ホスト名に localhost または 127.0.0.1 の値を使用すると、リモート・システム上の Process Designer インストール済み環境から Process Center に接続できなくなります。

  - **ロケーション:** 「参照」をクリックして、Process Center と Process Designer のインストール・ロケーションを変更します。
8. このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. 「はい」を選択して、既存のデータベースを使用します。
11. 必要なデータベース情報を指定します。

表 125. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「 <b>Windows 認証を適用</b> 」オプションを選択します。このオプションを選択すると、それ以降のフィールドが非アクティブになります。	
共通データベース名	共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Center データベース名 (Process Center database name)	Process Center データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Center データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Center データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

- 「次へ」をクリックします。
- 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

- 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Center および Process Designer がインストールされました。

注: Process Designer は、Windows プラットフォームでのみサポートされます。

#### 関連情報:

 [Installation Manager の更新](#)

#### **SQL Server データベース・サーバーを使用する Process Server のインストールおよび構成:**

Process Server には、テスト、ステージング、または実稼働のためのさまざまなビジネス・プロセスをサポートできる 1 つの BPM ランタイム環境が用意されています。

標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Standard をインストールするには、Process Center または Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが既に存在し、それらが空の状態であることを確認する必要があります。

インストール時に以下の情報を指定できるように準備しておいてください。

- データベース認証用のユーザー名とパスワード
- データベース・サーバーのホスト名とポート
- Process Center または Process Server データベース名
- Performance Data Warehouse データベース名
- 共通データベースの名前。

標準インストールでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロン・プロファイルを構成します。後からプロファイル管理ツールや **manageprofiles** コマンドを使用してプロファイルを作成する必要はありません。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、最新のリフレッシュ・パック、および暫定修正レベルに、製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティー・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

```
C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties
```

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Documents and Settings¥user\_name¥ を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が C:¥Users¥user\_name¥ を示します。

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

ファイルでは、ifix、fixpack、および launchpad という 3 つのプレフィックスが使用されます。各プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。名前のプレフィックスおよびドットより後の部分は任意の文字列にすることができるため、ifix、フィックスパック、およびランチパッド・アップグレードについて複数のロケーションを指定できます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

2. ランチパッドを始動します。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

3. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。インターネットにアクセスできず、更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合は、ステップ 1 の説明に従ってプロパティー・ファイルで launchpad プレフィックスを使用することで、更新を検索する場所やインストール対象の更新を、Installation Manager に対して指定することができます。
4. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
5. 「**Process Server のインストール**」を選択します。
6. Process Server の情報を指定します。

- **ホスト名:** このフィールドには、ご使用のマシンの名前が表示されます。
- **ロケーション:** 「参照」をクリックして、インストールのロケーションを変更します。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。
- **環境の名前:** 環境名は、Process Center からこの Process Server に接続するために使用されます。

**制約事項:** 同じセル内に実動サーバーと非実動サーバーを混在させないでください。

- このサーバーの管理アカウントの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。

環境の「**タイプ**」として「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server を Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。オフライン・サーバーは Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- **「ホスト名」:** この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

7. 「**次へ**」をクリックします。
8. 「**はい**」を選択して、既存のデータベースを使用します。
9. 必要なデータベース情報を指定します。

表 126. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「 <b>Windows 認証を適用</b> 」オプションを選択します。このオプションを選択すると、それ以降のフィールドが非アクティブになります。	



表 126. SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
共通データベース名	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース名 (Process Server database name)	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse のデータベース名	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード:</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

10. 「次へ」をクリックします。
11. 「インストールの要約」ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)」をクリックします。「サポート・アカウントを使用してインストールに更新を含めてください」オプションを選択した場合は、IBM サービス・リポジトリーに接続するための IBM ユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリーへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** 一般的なインストールおよび構成の一環として、APAR JR44669 の暫定修正をインストールする必要があります。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。インストール時にインターネットにアクセスできない場合は、インストール時に利用できるよう、APAR JR44669 の必須の暫定修正をダウンロードしてください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「キャンセル」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して、追加の必須修正をインストールできます。残りの必須修正のダウンロードとインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

12. 「ソフトウェアのインストール (Install Software)」をクリックします。

これで、完全な機能を備えた Process Server がインストールされました。

Windows ドメイン・ユーザー ID を使用して新しい DB2 Express データベースと表を作成した後、プロファイルの作成に失敗した場合は、以下のいずれかの解決策を実行してください。

- ローカル・システム・ユーザーとして Windows システムにログインし、プロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成します。
- 『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N "USERID does not have the authority to perform the requested command or operation"』にリストされたステップを実行した後、プロファイルを作成します。

#### 関連情報:

 [Installation Manager の更新](#)

#### カスタム・インストールおよび構成:

「カスタム・インストール」オプションは、「標準インストール」オプションでは提供されないインストール・オプションまたは構成オプションが必要である場合、サイレントにインストールしたい場合、あるいは WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境にインストールする場合に、IBM Business Process Manager をインストールするために使用します。

#### 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

#### **IBM Business Process Manager Standard のインストール:**

カスタム・インストールでは、対話式インストールかサイレント・インストールを選択できます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

#### 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

#### **IBM Business Process Manager Standard の対話式インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージは対話式にインストールできます。既存の WebSphere Application Server にインストールする場合は、対話式インストールを選択する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

## 関連資料:

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

### WebSphere Application Server の新規インストールを伴う対話式インストール:

カスタム・インストールを使用して、IBM Business Process Manager を WebSphere Application Server の新規インストールと共にインストールできます。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。
  - 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。ワークステーションで自動実行が可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、次のステップに進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドを入力して手動で Launchpad を開始します。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `DVD_root¥launchpad.exe`

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドを入力して、ランチパッドを始動します。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

2. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「**更新**」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。

インターネットにアクセスできず、ランチパッドの更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合、プロパティ・ファイルを使用して、更新が存在する場所を Installation Manager に指示できます。以下のファイルを作成します。

`C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties`

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Documents and Settings¥user_name¥` を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Users¥user_name¥` を示します。

**注:** bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルでは、後にドットを付けたランチパッド接頭部を使用します。接頭部とドットの後の名前の部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ランチパッドのアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥1launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

- ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「**カスタム・インストール**」をクリックします。
- 「**管理ユーザーとしてのインストール**」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。管理者グループに属している場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
- 「**インストール**」をクリックします。IBM Business Process Manager をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment が自動的にインストールされます。
- Installation Manager の「**パッケージのインストール**」ページで、「**IBM Business Process Manager Standard**」パッケージを選択します。デフォルトでは、
- 「**次へ**」をクリックして先に進みます。IBM サービス・リポジトリーに接続するための IBM ID とパスワードを指定するよう求めるプロンプトが出されます。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリーへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そうしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・バックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「**キャンセル**」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して必須修正をインストールできます。必須修正のダウンロードおよびインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

- 「**ライセンス**」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
- 「**ロケーション**」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび Installation Manager のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。

**ヒント:** インストール・パスはできるだけ短くしてください。そうしないと、後で他のコンポーネントのパスをこのパスに追加して 255 文字のパス制限を超えたときに、問題が発生する可能性があります。

す。

「パッケージのインストール」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。IBM 以外の前提条件および相互前提条件となる製品のサポート・バージョンへのマイグレーション方法については、それらの製品のドキュメンテーションを参照してください。

10. 「フィーチャー」ページで、正符号を展開してインストールするパッケージのフィーチャーを選択します。Installation Manager では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。
  - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
  - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。
  - c. オプション: Process Server をインストールする場合は、Process Server フィーチャーを展開し、Process Server の用途を変更できます。実動でサーバーを使用する場合は「**実動**」(デフォルト)を選択し、テスト、ステージング、または開発のみにサーバーを使用する場合は「**非実動**」を選択します。選択内容はインベントリーの目的で製品タグに記録されます。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。

11. 「要約」ページで IBM Business Process Manager Standard パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
12. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを実行する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「**完了**」をクリックして、Installation Manager を終了します。

#### 関連情報:



Installation Manager の更新

#### 新規 DB2 Express データベースおよび WebSphere Application Server の新規インストールを伴う対話式インストール:

カスタム・インストールでは、DB2 Express を Windows にインストールし、IBM Business Process Manager に必要なデータベースを構成できます。このパスは、管理特権があり (管理者ユーザー)、かつシステムに DB2 データベース・サーバーが存在しない場合にのみ選択します。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。一度に実行できるランチパッドは 1 つだけです。

- 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Standard のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。ワークステーションで自動実行が可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、次のステップに進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、以下のコマンドを入力して手動で Launchpad を開始します。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `DVD_root¥launchpad.exe`

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドを入力して、ランチパッドを始動します。

IBM Business Process Manager Standard を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、launchpad.exe を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

(コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

2. オプション: ランチパッドの更新を指示するメッセージが表示された場合、「更新」をクリックして、最新の更新を受け取ってください。自動的に更新がインストールされ、ランチパッドが再始動されます。

インターネットにアクセスできず、ランチパッドの更新をローカル・ディレクトリーからインストールする場合、プロパティ・ファイルを使用して、更新が存在する場所を Installation Manager に指示できます。以下のファイルを作成します。

`C:¥HOMEPATH¥bpm_updates.properties`

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Documents and Settings¥user_name¥` を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が `C:¥Users¥user_name¥` を示します。

注: bpm\_updates.properties ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルでは、後にドットを付けたランチパッド接頭部を使用します。接頭部とドットの後の名前の部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、ランチパッドのアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ロケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。例:

```
ifix.1=C:¥bpmUpdates
fixpack.2=http://test/rep
launchpad.1=C:¥1launchpad_updates
fixpack.WAS_REP=C:¥WAS_updates
fixpack.BPM_REP=C:¥BPM_updates
```

3. ランチパッドを始動して、「ようこそ」ページで「**カスタム・インストール**」をクリックします。
4. 「**管理ユーザーとしてのインストール**」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。管理者グループに属している場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。
5. 「**インストール**」をクリックします。IBM Business Process Manager をインストールすると、必要な WebSphere Application Server Network Deployment が自動的にインストールされます。
6. Installation Manager の「**パッケージのインストール**」ページで、「**IBM Business Process Manager Standard**」パッケージを選択します。組み込みの DB2 Express データベースをインストールして使用する場合は、「**IBM DB2 Express**」を選択します。
7. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。IBM サービス・リポジトリに接続するための IBM ID とパスワードを指定するよう求めるプロンプトが出されます。

インターネットからフィックスパックと必須の暫定修正 (WebSphere Application Server および IBM Business Process Manager の修正を含む) をダウンロードしてインストールするには、サービス・リポジトリへの接続が必要です。IBM ID とパスワードは、<http://www.ibm.com> で登録を行うことで取得できます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが、このインストールの一環として構成されるデータベースに正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

「**キャンセル**」をクリックすると、インターネットから必須修正をダウンロードせずにインストールを続行できます。製品のインストールが正常に完了したら、Installation Manager を使用して必須修正をインストールできます。必須修正のダウンロードおよびインストールについて詳しくは、『Installing the required fixes for the IBM Business Process Manager V8.0 products and IBM Business Monitor V8.0』を参照してください。

8. 「**ライセンス**」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
9. 「**ロケーション**」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび Installation Manager のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。

**ヒント:** インストール・パスはできるだけ短くしてください。そうしないと、後で他のコンポーネントのパスをこのパスに追加して 255 文字のパス制限を超えたときに、問題が発生する可能性があります。

「**パッケージのインストール**」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムのより高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。IBM 以外の前提条件および相互前提条件となる製品のサポート・バージョンへのマイグレーション方法については、それらの製品のドキュメンテーションを参照してください。

**重要:** DB2 Express をインストールしているため、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

10. 「フィーチャー」ページで、正符号を展開してインストールするパッケージのフィーチャーを選択します。Installation Manager では、自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロードのサイズと、インストールに必要なディスク・スペースを表示します。
  - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
  - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡潔な説明が「**詳細**」の下に表示されます。
  - c. オプション: Process Server をインストールする場合は、Process Server フィーチャーを展開し、Process Server の用途を変更できます。実動でサーバーを使用する場合は「**実動**」(デフォルト) を選択し、テスト、ステージング、または開発のみにサーバーを使用する場合は「**非実動**」を選択します。選択内容はインベントリーの目的で製品タグに記録されます。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。

11. オプション: 「共通の構成」ページで、DB2 の管理**ユーザー名**と**パスワード**を指定します。デフォルトの管理ユーザー名は bpmadmin です。ご使用のシステム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠したパスワードを選択してください。

「**再検証**」をクリックして、選択内容が正しいことを確認します。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

12. 「要約」ページで IBM Business Process Manager Standard パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
13. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを実行する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「**完了**」をクリックして、Installation Manager を終了します。

Windows ドメイン・ユーザー ID を使用して新しい DB2 Express データベースと表を作成した後、プロファイルの作成に失敗した場合は、以下のいずれかの解決策を実行してください。

- ローカル・システム・ユーザーとして Windows システムにログインし、プロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成します。
- 『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N "USERID does not have the authority to perform the requested command or operation"』にリストされたステップを実行した後、プロファイルを作成します。



## 関連情報:

 [Installation Manager の更新](#)

### **IBM Business Process Manager のサイレント・インストール:**

IBM Business Process Manager 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。また、すべての前提ソフトウェアについて必要なレベルもリストされています。

## 関連資料:

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

### **コマンド行を使用したサイレント・インストール:**

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager をサイレント・インストールできます。この方式では、コマンドを 1 つ実行するだけでインストールを実行できます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

```
extract_directory%IM%tools%imutilsc -silent  
-nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 **-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
3. 次のコマンドを実行します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

```
extract_directory%IM#tools%imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense
-installationDirectory location -repositories repository
-properties key=value,key=value -showVerboseProgress -log logName.log
```

ここで、

- *list\_of\_product\_IDs* は、インストールする製品と機能の ID のリストです。必須フィーチャーを組み込む必要があります。構文は *productID.feature.feature* で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 127. 製品 ID

製品	製品 ID	フィーチャーおよび説明
IBM BPM Standard	com.ibm.bpm.STD.V80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• bpmStd.nonprod: テスト、ステージング、または開発用。このフィーチャーまたは bpmStd.prod のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• bpmStd.prod: 実動用。このフィーチャーまたは bpmStd.nonprod のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v80	<ul style="list-style-type: none"> <li>• core.feature: 必須。WebSphere Application Server コア・コンテンツ。</li> <li>• ejbdeploy: 必須。Enterprise JavaBeans (EJB) 3.0 より前のモジュール。</li> <li>• thinclient: 必須。スタンドアロン・シン・クライアントおよびリソース・アダプター。</li> <li>• embeddablecontainer: 埋め込み可能 EJB コンテナ。</li> <li>• samples: サンプル・アプリケーション・フィーチャー。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_32bit: 32 ビット版 Software Development Kit (SDK)。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_64bit のいずれかを指定する必要があります。</li> <li>• com.ibm.sdk.6_64bit: 64 ビット版 SDK。このフィーチャーは、64 ビット・システムでのみ選択可能です。このフィーチャーまたは com.ibm.sdk.6_32bit のいずれかを指定する必要があります。</li> </ul>
Installation Manager	com.ibm.cic.agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>• agent_core: Installation Manager コア・コンテンツ。</li> <li>• agent_jre: Installation Manager Java ランタイム環境 (JRE)。</li> </ul>

表 127. 製品 ID (続き)

製品	製品 ID	フィーチャーおよび説明
DB2 Express for Windows (32 ビット版)	com.ibm.ws. DB2EXP97. winia32	<ul style="list-style-type: none"> <li>適用なし: DB2 は、オペレーティング・システムおよびビット・レベルが一致している必要があります。</li> <li>適用なし: DB2 は、オペレーティング・システムおよびビット・レベルが一致している必要があります。</li> </ul>

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。

**ヒント:** インストール・パスはできるだけ短くしてください。そうしないと、後で他のコンポーネントのパスをこのパスに追加して 255 文字のパス制限を超えたときに、問題が発生する可能性があります。

- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

```
extract_directory¥repository¥repos_32bit
extract_directory¥repository¥repos_64bit
```

複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。

- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。IBM Installation Manager を使用して、暗号化パスワードを作成します。

表 128. キー

キー	説明
user.db2.admin.username	DB2 データベースにアクセスする権限を持つユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.admin.password	DB2 データベースにアクセスする権限を持つユーザー名の暗号化パスワード。ご使用のシステム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠したパスワードを選択してください。
user.db2.use.existing	既存の DB2 データベース・サーバーを使用する場合は、以下の行を正確に追加します。  user.db2.use.existing=true  DB2 をインストールする必要がある場合は、値 <i>false</i> を指定します。
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、imcl のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストした製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。エラーも警告もない場合、ログ・ファイルは空になります。

以下の例では、IBM Business Process Manager Standard、WebSphere Application Server Network Deployment、および DB2 Express が Windows にインストールされます。

```
imcl install com.ibm.bpm.STD.V80,bpmStd.prod com.ibm.websphere.ND.v80,core.feature,ejbdeploy,
thinclient,embeddablecontainer,samples,com.ibm.sdk.6_32bit
com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32 -acceptLicense -installationDirectory C:¥IBM¥BPM80
-repositories D:¥temp¥BPM¥repository
-properties user.db2.admin.username=bpmadmin,user.db2.admin.password=Vvrs88V/a9BUdxwodz0nUg==
-showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

#### 関連資料:

 [imcl のコマンド行引数](#)

 [IBM Business Process Manager Standard のシステム要件](#)

#### 関連情報:

 [IBM WebSphere Application Server インフォメーション・センター](#)

#### 応答ファイルを使用したサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Standard をサイレント・インストールできます。

IBM Business Process Manager Standard のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment (ejbdeploy フィーチャーおよび thinclient フィーチャーを含む)

応答ファイルを使用すると、保存された共有可能なファイルでインストール・オプションを設定し、そのファイルを 1 台以上のマシンで使用できるため、サイレント・インストールを単純化し、プロセスにおけるエラーを減らすことができます。インストール・ソフトウェアには、それぞれのサポートされるオペレーティング・システムとビット・バージョン用のサンプルの応答ファイルが用意されています。サンプルの応答ファイルを変更せずにそのまま使用すると、デフォルト設定でサイレント・インストールを実行することができます。あるいは、これらの応答ファイルを変更して、特定の値を設定することもできます。サンプルの応答ファイル内のコメントに、詳細な説明と、値の設定に関する情報が記載されています。

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Standard をインストールします。

1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 次のコマンドを実行して、DB2 および管理コンソールに安全に接続するために、IBM Installation Manager を使用して暗号化されたパスワードを生成します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

```
extract_directory%IM%tools%imutilsc -silent  
-nosplash encryptString password_to_encrypt
```

2. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Standard をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーから、ご使用のビット・バージョンおよびユーザー・アクセス・レベルに適したサンプル応答ファイルをコピーします。

```
extract_directory%responsefiles%BPM%
```

あるいは、応答ファイルは Installation Manager でアクションを記録することによっても作成できます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager で行った選択が XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。

3. サンプル応答ファイルに指定されたデフォルト値では基本インストールが実行されますが、ファイルとそのコメントを確認し、ご使用の環境に合わせて必要に応じてパラメーターとユーザー ID のアクセス・レベルを変更してください。

特に、以下のパラメーターと値を確認してください。

- 非管理者ユーザー ID の場合は、すべてのロケーション変数が、そのユーザーが許可を持つロケーションを指していることを確認してください。
- リポジトリ・ロケーション。 `extract_directory%responsefiles%BPM%` ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリの場所を指定します。リポジトリは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリでこの応答ファイルを再び指定します。
- IBM Installation Manager が既にインストールされているか、これからインストールされるインストール・ロケーション (`installLocation`)。
- IBM Business Process Manager Standard がインストールされるインストール・ロケーション。

**ヒント:** インストール・パスはできるだけ短くしてください。そうしないと、後で他のコンポーネントのパスをこのパスに追加して 255 文字のパス制限を超えたときに、問題が発生する可能性があります。

- Eclipse ロケーション (`eclipseLocation`)。
  - 製品のフィーチャーのリスト。
  - 実動用または非実動用。
  - DB2 Express をインストールする場合は、応答ファイルの説明に従って、必要なユーザー ID とパスワードを指定します。含める暗号化パスワードを生成するには、ステップ 1 の説明に従ってください。
4. インストールを行う前に、ライセンス条項を読み、同意します。 `-acceptLicense` をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
  5. 次のコマンドを実行します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「**管理者として実行**」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

管理者:

```
extract_directory%IM%installc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%BPM%response_file_name.xml
-log preferred_log_location%silent_install.log
```

非管理者:

```
extract_directory%IM%userinstc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%BPM%response_file_name.xml
-log preferred_log_location%silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Standard がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

**重要:** データベースを構成してデータを読み込む前に、APAR JR44669 の必須の暫定修正を必ずインストールしてください。そのようにしないと、将来の暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが正しくインストールされない場合があります。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

次に、プロファイル管理ツールで、または **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを定義します。実稼働環境では、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** で作成されたプロファイルのみを使用できます。

**関連タスク:**

 Installation Manager を使用したサイレント・インストール

 Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

**関連資料:**

 IBM Business Process Manager Standard のシステム要件

**プロファイル作成または拡張のための、非管理ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:**

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (管理ユーザーの場合または非管理ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非管理ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非管理ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。また、製品インストール・ユーザーは、プロファイルを作成する権限のあるユーザーのグループを作成したり、プロファイルを作成する権限を個々のユーザーに与えたりすることができます。

非管理ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非管理ユーザーは、製品の `install_root%profiles` ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

## 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非管理ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非管理ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非管理ユーザーには使用不可になります。さらに非管理ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非管理ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします 製品インストール・ユーザーは、管理ユーザーの場合または非管理ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。
  - Windows の資料の説明に従って、**install\_root%\logs\manageprofiles** ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root%\logs\manageprofiles
```
  - Windows の資料の説明に従って、**install\_root%\properties\fsdb** ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root%\properties\fsdb
```
5. プロファイルが存在しない場合は、profileRegistry.xml ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root%\properties\profileRegistry.xml
```

profileRegistry.xml ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 `$WASHOME` が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの `C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer` であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、**profilers** グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME\logs\manageprofiles
@WASHOME\properties
@WASHOME\properties\fsdb
@WASHOME\properties\profileRegistry.xml
```

非管理ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非管理ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root\properties\profileRegistry.xml_LOCK
```

非管理ユーザーがファイルを削除できるようにするには、それらのユーザーにファイルの書き込み権限を与えます。非管理ユーザーがプロファイルを削除できない場合でも、製品インストール・ユーザーはプロファイルを削除できます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非管理ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリーおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非管理ユーザーは、この非管理ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非管理ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

管理ユーザーと非管理ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

### プロファイルおよびデータベースの構成:

標準インストールを使用しなかった場合は、製品をインストールした後に、1 つ以上のプロファイルを作成または拡張してランタイム環境を定義する必要があります。プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

### Windows における DB2 データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

### DB2 データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは `BPMDB`、Performance Data Warehouse データベースは `PDWDB`、共通データベースは `CMNDB` です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。



DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

### DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### DB2 を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1) DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s))
```

-----

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

```
(1) [WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2) [BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3) [BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4) [BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5) [Bspace] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6) [SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7) [SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8) [SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9) [SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10) [SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11) [SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12) [save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントと

もにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (3) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):5

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.standard.standalone は完了しました  
(bpm.standard.standalone is complete with 0 remaining item(s):)

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\DB2-distributed-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。



[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1)bpc
- (2)bpcreporting
- (3)bpm\_performancedw
- (4)bpm\_processserver
- (5)bspace
- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:

(Database User name[default=] :)

System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=TWPSSPACE]:  
(Regular TableSpace[default=TWPSSPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
Temporary TableSpace[default=TWSTEMPSPACE] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1) DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。  
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\DB2-distributed-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

```
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

## データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### DB2 データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

### DB2 データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

データベースをリモート・サーバーで構成する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にこのデータベースを作成する必要があります。ローカル・サーバーにデータベースを作成することも、リモート・サーバーの既存のデータベースを使用することも可能です。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java  
-Duser.language=locale install_root  
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de  
install_root%  
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。
 

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
  5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
 

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
    - d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root¥properties¥portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。



プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場

合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 129. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、 <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

**制約事項:****Vista****Windows 7**

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root¥bin¥ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「**標準**」または「**拡張**」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「**環境の選択**」ページが別ウィンドウで開きます。
  4. 「**環境の選択**」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
  5. 「**プロファイル作成オプション**」ページで、「**標準**」または「**拡張**」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  6. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  7. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。

- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しな

いことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root¥properties¥portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サ

ービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。



「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

17. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
18. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 130. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 130. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、 <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code> に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

19. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  20. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### *manageprofiles* コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** `manageprofiles` コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、`runas` コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず `manageprofiles` コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root\bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
  - プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。
1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response

- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWdbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
 スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```



```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType

```

```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbddbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER

```

```

# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

```

```

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#

```



```

# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

```

```

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:

```

```

# None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
# Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
# to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
# Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
# offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the

```

```

# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual

```

```

#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#

```



```

# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#

```

```

# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserID
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a

```

```

# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。

- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「DB2」を選択します。
  - b. 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。
  - c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。



表 131. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

- 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
- 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java  
-Duser.language=locale install_root  
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de  
install_root%  
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。「**次へ**」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「**Process Server 構成**」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接

続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**DB2**」を選択します。
  - b. 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。新規データベースの作成を選択する場合は、プロファイル管理ツールによって DB2 データベースが新規作成されます。

- c. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - d. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - e. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 132. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

- 12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
- 13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

## 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、**install\_root**\%bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
  - プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。
1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、**install\_root**\%properties\profileRegistry.xml ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
  2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root**\%profileTemplates\BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完

全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root%BPM%samples%manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-**profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-**response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root%dbscripts%ProcessServer%DB2%` に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.bat
```



注: このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root%dbscripts%PerformanceDW%DB2%` に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.bat
```

注: このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.bat** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、`install_root%profile%dbscripts%BusinessSpace%node_name_server_name%DB2%CMNDB` です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.bat** データベースに接続し、**db2 bind**

**DB2\_installation\_directory%bnd%@db2cli.lst blocking all grant public** コマンドを使用してコマンド行インターフェースを Business Space データベースにバインドした後、データベース接続をリセットします。

## スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root%profiles/ProcCtr01%bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.bat**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリの *bootstrapProcessServerData.timestamp.log* というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

## Windows における DB2 for z/OS データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

### データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン):

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

## DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー C:\tmp\DB2-zOS\W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば C:\tmp\DB2-zOS\W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば C:\tmp\DB2-zOS\W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root\util\dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1)bpm.advanced.nd.topology
- (2)bpm.advanced.standalone
- (3)bpm.standard.nd
- (4)bpm.standard.standalone
- (5)wesb.nd.topology
- (6)wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、  
WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

- SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

- 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)

Database Location on z/OS system[default=] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

Database server port[default=] :

Data source user name[default=] :

Data source password[default=] :

DB2 Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :

Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :

DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed through jdbcDriver Type 4)[default=] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、

WBI\_CommonDB は完了しました

(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12) [save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**注:** DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができません。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。
- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
[[info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。



データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :12

```
[status] bpm.advanced.standalone.topology is not complete with 6 remaining item(s):
[ 1 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 2 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
[ 3 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminUserName' for SECURITY_ADMIN_USER is empty.
[ 4 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects : required property
'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.
[ 5 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'schemaName' for SCHEMA is empty.
[ 6 ] BPM_PerformanceDW.BPM_PerformanceDW : databaseObjects : required property
'catalog' for VCAT is empty.
```

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):
```

出力ディレクトリーを入力してください

```
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
```

(Please enter the output directory

```
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. ここまでの手順で指定したディレクトリー内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、`y` と入力し、`Enter` キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。各ディレクトリーには、`createDB2.sh` スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- `dbDesignGenerator.log` という名前のログ・ファイルが、`DbDesignGenerator` コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを `Process Server`、`Process Center`、または `Performance Data Warehouse` サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の `IBM Business Process Manager` コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

`IBM Business Process Manager` がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の `JDBC` ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー `ID` とパスワード。
- `IBM Business Process Manager` とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、  
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する

- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5)exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1)bpc
- (2)bpcreporting
- (3)bpm\_performancedw
- (4)bpm\_processserver
- (5)bspace
- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-zOS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

#### 関連タスク:

2170 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### **DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:**

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するためのものですが、Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプ

レッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関与することがあります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力が完成したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー C:\tmp\DB2-zOS\W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば C:\tmp\DB2-zOS\W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば C:\tmp\DB2-zOS\W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd install_root\util\dbUtils
```

例: cd C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils

3. 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.bat -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。



```
DbDesignGenerator.bat -g C:%tmp%DB2-zOS%W8CELL.nd.dbDesign
```

4. 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils%DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで `ddl_outDir` 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、`ddl_outDir` 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

1. 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

2. FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
3. z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。  
      (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。  
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### DB2 for z/OS データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、

com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。

- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root¥properties¥portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java  
-Duser.language=locale install_root  
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de  
install_root%  
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロフィール作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロフィール管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロフィール管理ツールを開始します。
  - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
- 「ようこそ」ページで、「プロフィール管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロフィール管理ツール」タブを選択します。
- 「プロフィール」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

- 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Server スタンドアロン」プロフィールを選択し、「次へ」をクリックします。
- 「プロフィール作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
- 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
- 拡張: 「プロフィール名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - 「プロフィール名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロフィールに名前を付ける必要があります。複数のプロフィールがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - 「プロフィール・ディレクトリー」フィールドにプロフィールのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロフィール・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - オプション: 作成中のプロフィールをデフォルト・プロフィールにするには、「このプロフィールをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロフィールがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロフィールがデフォルト・プロフィールの場合は、コマンドが自動的にこのプロフィールを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロフィールは、デフォルト・プロフィールです。デフォルト・プロフィールは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロフィールが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロフィールに基づいて機能します。複数のプロフィールが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロフィールを指定する必要があります。

- 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロフィールに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロフィール名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
- 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロフィールに対して以下のアクションを実行します。



- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。

- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の

Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「**次へ**」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

17. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「**作成**」をクリックしてプロファイルを作成するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

18. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root*¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- default.procctr: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - default.procsvr: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response

- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
```

```

# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a

```

```

# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile

```



```

# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter

```

```

# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.

```

```

# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem

```

```

#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password

```

```

#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####

```



```

# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2z0S.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.

```

```

#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard

```

```

#    production
# Default Values:
#    None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#    Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#    profile.
#    The default value for this parameter is based on a combination of the
#    short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#    if (DMgr)
#        shortHostNameCellCellNumber
#    else
#        shortHostNameNodeNodeNumberCell
#    where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#    the node number that you used to define the node name.
#    The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#    that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#    Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#    Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#    that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#    This parameter is required for profile creation only with the
#    dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#    procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#    The default value for this parameter is based on the short host name,
#    profile type, and a trailing number, for example:
#    if (DMgr)
#        shortHostNameCellManagerNodeNumber
#    else
#        shortHostNameNodeNodeNumber
#    where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#    The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#    that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#    Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#    Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#    to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.

```

```

# Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
# offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the

```

```

# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default

```

```

# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#

```

```

# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#

```

```

# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbidbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390

```



```

#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

```

```

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.

```

```

# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
    - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。

- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。

- d. 「次へ」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
9. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
10. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。代わりの方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。

- サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
- サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート**: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名**: Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード**: Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
 

DB2 for z/OS データベースを使用する場合は、データベース・スクリプトをプロファイル作成プロセスの一部として自動的に実行することはできません。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。
10. 「**プロファイル・サマリー**」ページで、情報を確認します。「**作成**」をクリックしてプロファイルを作成するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
11. 「**プロファイル完了 (Profile Complete)**」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」が選択されていることを確認して「**終了**」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。



## **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** `manageprofiles` コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、`runas` コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず `manageprofiles` コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root\bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root\properties\profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root\profileTemplates\BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `default.procctr`: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - `default.procsvr`: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

**注:** `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### スタンドアロン・プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

### DB2 for z/OS の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

### DB2 for z/OS のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

**#DB\_USER#** として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファークラス・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された `createDatabase.sql` データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

**#SCHEMA#** のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を **#DB\_USER#** ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

### DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース **#DB\_NAME#** に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメン

トまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。

- ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、SICELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```
INFORMATION FOR GROUP SICELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS OWNER=ZWPS CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN CONNECT 000000 NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE
```

## 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

### ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

### クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:

データベース設計ツール (DbDesignGenerator) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

### 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

#### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

#### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=${CLASSPATH}:${CLPHOME}/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=${CLASSPATH}:${CLPHOME}/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが `listen` するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` `port` はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。



- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

2166 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファー・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCcreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは

DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

2162 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBST0 -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する `z_schema.sql` ファイルおよび `z_schemaProc.sql` ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。`z_schemaProc.sql` ファイ

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

2162 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に **createDB2.sh** スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) を実行することもできます。

6. 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2166 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
  - データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
    - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。
    - メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。



- a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
- b. 「(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
- c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

2108 ページの『スタンドアロン環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

2101 ページの『DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root%profiles/ProcCtr01%bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

#### • **bootstrapProcessServerData.bat**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.timestamp.log** というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。

2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:  

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

#### **Windows における Oracle データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:**

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

#### **Oracle データベースのセットアップ:**

ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースの構成を、プロファイルの作成または拡張の前、後、またはその途中に実行できます。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

データベースを作成および構成するためのオプションは以下のとおりです。

- ユーザーまたは DBA があらかじめデータベースを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、プロファイル管理ツールが自動的にその構成を行います。
- ユーザーまたは DBA がデータベース設計ツールを使用してデータベース設計ファイルを作成し、プロファイルの作成中または拡張中に、ユーザーがそのファイルをプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティに渡します。
- データベースの構成を延期し、ユーザーまたは DBA が、プロファイルの作成中または拡張中に生成されたスクリプトを実行することによって、後から必要なデータベースおよびデータベース表を作成します。

#### **Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## Oracle を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジ・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション **(2)bpm.advanced.standalone.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB]            WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

```

(2)[BPC]          WBI_BPC : [status = not complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[Bspace]      WBI_BSPACE : [status = not complete]
(6)[SibME]       WBI_BPC_ME : [status = not complete]
(7)[SibME]       WBI_CEI_ME : [status = not complete]
(8)[SibME]       WBI_SCA_APP_ME : [status = not complete]
(9)[SibME]       WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]      BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]      BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]

```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.

```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :

```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。 完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。 このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):

```

```

(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server

```

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。 データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)(デフォルト=) :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)(デフォルト=) :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)(default=) :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects section properties needed for database scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションにプロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

- (1)oci8
- (2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12)[save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.standalone** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、

**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。



[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):

[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
[ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

**スタンドアロン環境における Oracle を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成**  
:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=BPMDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8  
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
Oracle JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle  
] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「**false**」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils] :)

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。  
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\Oracle-ProcessServer for BPM_ProcessServer
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティ「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## Oracle データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

### Oracle データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルの作成中または拡張中にデータベース情報を構成するには、Oracle インスタンスのサービス名を知っておく必要があります。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に **BPMDBA** というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に **PDWDBA** というユーザー名、および共通データベース用に **CMNDBA** というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. **DBMS\_LOCK** に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。



```
install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=de
install_root¥
bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root¥bin¥ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
- `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。

6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

**プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項**

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・シ

システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Oracle**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。

- c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
- d. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 133. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 133. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\jdbcdriivers\Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、`bootstrapProcessServerData` コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java
-Duser.language=locale install_root
¥bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=de
install_root¥
bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root¥bin¥ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  - 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  - 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
  - 「**環境の選択**」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。



5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

**プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項**

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・シ

システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。
15. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
  - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
  - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
    - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
    - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
    - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- 「**参照**」をクリックします。
- 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

17. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。

- 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Oracle**」を選択します。
- オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
  - データベース名は同じであっても構いません。
  - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
  - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
- データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
- 「**次へ**」をクリックします。

18. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 134. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。

- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
19. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  20. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、**install\_root**¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root**¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr:** IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr:** IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。

3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。



```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
```

```

# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies

```

```

#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####

```

```

# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN

```



```

dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orc1
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be

```

```

# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

```

```

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties

```

```

# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters

```

```

# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative

```



```

# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to

```

```

#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck

```

```

#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:
#   ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
#   The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
#   when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
#   only valid if you are using Oracle databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid

```

dbPassword=db\_pswd

```
#####  
# Parameter:  procSvrDbName  
#  
# Description:  
#   Database name for Process Server database.  The value specified for  
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter:  dbProcSvrUserId  
#  
# Description:  
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter:  dbProcSvrPassword  
#  
# Description:  
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#####  
procSvrDbName=procSvr_Db_Name  
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name  
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password  
#####  
# Parameter:  perfDWDbName  
#  
# Description:  
#   Database name for Performance Data Warehouse.  The value specified for  
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Parameter:  dbPerfDWUserId  
#  
# Description:  
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the  
#   Performance Data Warehouse.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Parameter:  dbPerfDWPassword  
#  
# Description:  
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the  
#   Performance Data Warehouse.  
#
```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)

```



```

# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production

```

```

# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替りの方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root\bin\ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「Oracle」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
    - データベース名は同じであっても構いません。
    - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
    - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合

は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

d. 「次へ」をクリックします。

10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 135. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。 <b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。 <b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
  - Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
11. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=de
install_root¥
bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root¥bin¥ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- Web サーバー定義を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  - 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  - 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  - 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  - 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。

6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。
    - **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
    - **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
      - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「実動」を選択します。
      - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「ステージ」を選択します。
      - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「実動」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「このサーバーをオフラインで使用する」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- 「**ポート**」: Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。



- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- 「**参照**」をクリックします。
- 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- 「**次へ**」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。

- 「**データベース製品の選択**」リストから、「**Oracle**」を選択します。
- オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。
  - データベース名は同じであっても構いません。
  - 各データベースのデータベース・サービス名を入力する必要があります。
  - このデータベースは既に存在するデータベースである必要があります。
- データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
- 「**次へ**」をクリックします。

11. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。Oracle を使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

次のフィールドを指定します。

表 136. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください (BPMDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください (PDWDBA など)。</p> <p><b>パスワード</b> Oracle でこのユーザーを作成したときに指定したパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥Oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。

- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、**install\_root%bin** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、**install\_root%properties%profileRegistry.xml** ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、**install\_root%profileTemplates%BPM** ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `default.procctr`: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - `default.procsvr`: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 `-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`

- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成後の Oracle データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。

- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、  
`profile_root%dbscripts%ProcessServer%Oracle%` に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。  
`configProcessServerDB.bat`

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### **Performance Data Warehouse データベース表の作成:**

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
  - データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
  - Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。
1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、  
`profile_root%dbscripts%PerformanceDW%Oracle%` に出力されます。
  2. 以下のスクリプトを実行します。  
`configPerformanceDWDB.bat`

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
1. **configBusinessSpaceDB.bat** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルト・ディレクトリーは、  
`install_root%profile%dbscripts%BusinessSpace%node_name_server_name%DB2%CMNDB` です。
  2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャを使用します。以下のコマンドを実行します。

**configBusinessSpaceDB.bat**

## スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
install_root%profiles/ProcCtr01%bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.bat**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、*USER\_INSTALL\_ROOT/logs/* ディレクトリの *bootstrapProcessServerData.timestamp.log* というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

## Windows における SQL Server データベース・サーバーを使用するスタンドアロン環境の構成:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager のスタンドアロン環境を構成することができます。

### SQL Server データベースの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name  
'message.routingCache'  
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is  
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class  
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;  
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;  
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is  
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement  
(SQLServerPreparedStatement.java:388)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute  
(SQLServerPreparedStatement.java:338)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)  
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery  
(SQLServerPreparedStatement.java:281)  
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)  
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)  
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。



```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
    at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmntExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- a. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- b. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- c. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- d. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- e. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- f. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

## XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。

**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**.

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。

- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

#### SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### SQL Server を使用したスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、スタンドアロン・プロファイルの作成時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再

入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

(1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment

(2) Create a database design for a single component

(3) 既存のデータベース設計を編集する

(4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する

(5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

(1) bpm.advanced.nd.topology

(2) bpm.advanced.standalone

(3) bpm.standard.nd

(4) bpm.standard.standalone

(5) wesb.nd.topology

(6) wesb.standalone

3. 構成を行うスタンドアロン・プロファイル用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.standalone』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のスタンドアロン環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 2 を入力してオプション (2)bpm.advanced.standalone.topology を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]

(2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]

(3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]

(4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]

(5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]

(6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]

(7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]

(8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]

```
(9)[SibME]      WBI_SCA_SYS_ME : [status = not complete]
(10)[SibMe]     BPM_PerformanceDW_ME : [status = not complete]
(11)[SibMe]     BPM_ProcessServer_ME : [status = not complete]
(12)[save and exit]
```

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
```

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

- 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

- データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the databases ? (s)} :

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s)):
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを
編集してください。
```

```
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティー値を変更することができます。
```

```
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[BSPACE] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.standalone** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [master] [status = complete]
(2)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = not complete]
(3)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(4)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(5)[save and exit]
```

```
データベース・コンポーネントの番号を入力してください
(Please enter the number for the database component):2
```

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[status] bpm.advanced.standalone is complete with 0 remaining item(s):

出力ディレクトリーを入力してください

[デフォルト=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils]:

(Please enter the output directory

[default=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils] :)

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in

C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。



データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### スタンドアロン環境における SQL Server を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondw

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、Process Server データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
データベース名 [デフォルト=BPMDB]: (Database name[default=BPMDB] :)  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
[これは Process Center のデータベースですか?]:  
([info] Please pick one of the following  
[Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1>false
- (2>true

番号を入力してください。  
これは Process Center のデータベースですか?  
(Please enter the number for the  
Is this database for a Process Center?)[default=false] :  
管理セキュリティに使用するユーザー ID [デフォルト=]:  
(The user ID you use for administrative security[default=] :)  
The password for the name specified with the adminUserName parameter[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils] :)

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

Please enter the output filename [default=bpm.advanced.standalone.topology.dbDesign] :

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥SQLServer-ProcessServer for BPM_ProcessServer
```

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI_BSPACE は未完了です  
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。  
      (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :  
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。  
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-

```
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## SQL Server データベース・サーバーによるスタンドアロン・プロファイルの作成または拡張:

プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルがある場合は、新規プロファイルを作成する代わりに、既存のプロファイルを拡張できます。

## SQL Server データベース・サーバーの準備:

プロファイル作成または拡張のプロセス中に、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースを構成することを選択できます。また別の方法として、データベース設計ツールによって生成された設計ファイルを使用してデータベースを構成することができます。

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

**制約事項:** Process Server データベース (BPMDDB) および Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) では、大/小文字が区別されないようにする必要があります。それ以外のデータベースでは、大/小文字を区別できます。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 137.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド

**ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 dbo として CMNDB データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

IBM Business Process Manager には SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージされています。JDBC ドライバー (バージョンおよびレベル情報を含む) については、『IBM Business Process Manager のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細 (Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager)』ページを参照してください。

**注:** IBM Business Process Manager に同梱されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルは、お客様ご自身で用意していただく必要があります。

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

制約事項: **Vista** **Windows 7**

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「管理者とし

て実行」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。SQL Server の場合は、拡張オプションをお勧めします。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Center 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard、Process Center スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。



- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル（コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど）が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。

- 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
- 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
- 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** Windows 認証オプションを選択した場合は、デフォルトの **LocalSystem** ID を現在のユーザー ID とパスワード (プロファイル管理ツールを起動したユーザー) に変更して、Windows サービスが正しく作成されるようにする必要があります。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「Web サーバー定義を作成する」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。

- c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。 Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、 Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
15. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。 それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。 設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

16. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
- a. 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。 データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。 **bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
17. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 138. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
<p>Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「<b>Windows 認証を適用</b>」オプションを選択します。このオプションを選択すると、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースのフィールドが非アクティブになります。</p> <p><b>制約事項:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「標準」プロファイル作成を使用している場合は、作成された Windows サービスを更新する必要があります。<b>LocalSystem</b> から、プロファイルの作成時に使用した特定のユーザー ID に変更してください。</li> <li>「拡張」プロファイル作成 (推奨) を使用している場合は、「Windows サービスの定義」ページで、デフォルトの <b>LocalSystem ID</b> を現在のユーザー ID とパスワード (プロファイル管理ツールを起動したユーザー) に変更して、Windows サービスが正しく作成されるようにする必要があります。</li> </ul>	
<p><b>Process Server データベース</b></p>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメータの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li><b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li><b>パスワードの確認</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
<p><b>Performance Data Warehouse データベース</b></p>	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメータの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li><b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li><b>パスワードの確認</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
<p><b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b></p>	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
<p><b>サーバー・ポート</b></p>	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
<p><b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b></p>	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%</code> SQLServer に置かれています。</p>

表 139. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
18. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  19. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファ

イル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。SQL Server の場合は、拡張オプションをお勧めします。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard: Process Server 構成を探し、そのセクションを展開します。「IBM BPM Standard, Process Server スタンドアロン」プロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) およびデフォルトの WebSphere Application Server アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから



発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、Process Server 構成ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root%properties%portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** Windows 認証オプションを選択した場合は、デフォルトの **LocalSystem** ID を現在のユーザー ID とパスワード (プロファイル管理ツールを起動したユーザー) に変更して、Windows サービスが正しく作成されるようにする必要があります。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. オプション: 拡張: Web サーバー定義をプロファイルに組み込む場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」を選択します。
  - b. ページ上で Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. ページの「その 2」で Web サーバーの特性を指定します。Web サーバーを使用して要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を組み込む場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。
  - d. 「**次へ**」をクリックします。

15. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

16. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

- a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

17. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
18. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 140. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
<p>Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「<b>Windows 認証を適用</b>」オプションを選択します。このオプションを選択すると、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースのフィールドが非アクティブになります。</p> <p><b>制約事項:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「標準」プロファイル作成を使用している場合は、作成された Windows サービスを更新する必要があります。<b>LocalSystem</b> から、プロファイルの作成時に使用した特定のユーザー ID に変更してください。</li> <li>• 「拡張」プロファイル作成 (推奨) を使用している場合は、「Windows サービスの定義」ページで、デフォルトの <b>LocalSystem</b> ID を現在のユーザー ID とパスワード (プロファイル管理ツールを起動したユーザー) に変更して、Windows サービスが正しく作成されるようにする必要があります。</li> </ul>	
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメータの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>

表 140. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー \${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer に置かれています。

表 141. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証: Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - Windows 認証: Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
19. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  20. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
  - ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、**install\_root%bin** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - **default.procsvr**: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response



- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、スタンドアロン・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadmin -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDName PERFDB -dbPerfDWUser perfdadmin -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

**重要:** **-dbType MSSQLSERVER\_MICROSOFT**、**-dbWinAuth true**、および **-winserviceCheck true** を設定する場合は、**-winserviceAccountType specifieduser**、**-winserviceUserName dbUser**、および **-winservicePassword dbPassword** も設定する必要があります。

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、Process Server データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
```

```

# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is

```

```

#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system
#    Log on as a service
#    The default value for this parameter is the current user name. The value
#    for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#    valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#    you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#    You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#    Specify the password for the specified user or the local account that is
#    to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#    The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#    service for the server process that is created within the profile. Specify
#    false to not create the Windows service. The default value for this
#    parameter is false.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#    The following values for Windows service startup can be used:
#    manual
#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic
#    disabled
# Default Values:

```

```

# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
# MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.

```



```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#

```

```

# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####

```

```

# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server スタンドアロン・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied

```

```

# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a

```

```

# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.

```

```

#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```



```

processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

```

```

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option

```

```

# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:

```

```

# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter: dbCreateNew

```

```

#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCclasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCclasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName

```

```

#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter:  dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter:  dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrMePassword
#

```

```

# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```



```

dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_passwd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####

```

```

# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Center のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、

com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および

tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

8. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

9. 「データベース構成 - パート 1」ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」リストから、「Microsoft SQL Server」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
10. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定します。次のフィールドを指定します。

表 142. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「Windows 認証を適用」オプション	選択した場合で、なおかつプロファイル作成時に Windows サービスを作成済みの場合は、Windows 認証に使用したユーザー ID でログオンするように Windows サービスが構成されていることを確認してください。

表 142. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>Performance Data Warehouse データベース</b>	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワード</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>パスワードの確認</b></li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</p>
<b>データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)</b>	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
<b>サーバー・ポート</b>	<p>デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
<b>JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)</b>	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

表 143. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Process Server</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• <b>Performance Data Warehouse</b> メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- **SQL 認証:** Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - **Windows 認証:** Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
11. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  12. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のスタンドアロン・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 スタンドアロン・プロファイルがある場合は、プロファイル管理ツールを使用して Process Server のスタンドアロン・プロファイルを構成できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイルの作成時に、必要なデータベースを構成したい場合は、データベース・サーバーがインストールされていて、稼働中であることを確認してください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項: Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファ

イル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。「次へ」をクリックします。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
  8. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。



- **環境名:** 環境名は、Process Center から、この Process Server に接続するために使用されます。
- **環境のタイプ:** Process Server をどのように使用するかを選択します。
  - 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。
  - サーバーを実動させる前に変更内容をホストするための一時的なロケーションとしてサーバーを使用する場合は、「**ステージ**」を選択します。
  - サーバーを負荷テストなどのテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

**制約事項:** 同じセルで実動サーバーと非実動サーバーを混用しないでください。

環境タイプとして「**実動**」を選択しなかった場合、またはこの Process Server は Process Center に接続しない場合は、「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択してください。Process App の Snapshot をデプロイする際にもオフライン・サーバーは使用できますが、オフライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法は、オンライン・プロセス・サーバーに Process App をデプロイする方法とは異なります。

「**このサーバーをオフラインで使用する**」を選択しなかった場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

- 「**プロトコル**」: Process Center への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。
- 「**ホスト名**」: この Process Server が Process Center と通信するために使用するホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ポート:** Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。
- **ユーザー名:** Process Center ユーザー名を入力してください。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。
- **パスワード:** Process Center ユーザーのパスワードを入力します。

「**接続のテスト**」をクリックすると、Process Center への接続を確認できます。

「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

9. 拡張: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。設計ファイルの指定を選択した場合、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、データベース情報を指定します。
  - a. 「データベース製品の選択」 リストから、「**Microsoft SQL Server**」を選択します。
  - b. オプション: デフォルト値を変更する場合は、必要なデータベースの新しい名前を入力します。データベース名は固有である必要があります。
  - c. データベース・スクリプトを自動でプロファイル作成プロセスの一部として実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化する**」を選択します。それ以外の場合は、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行する必要があります。**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行してデータベースにシステム情報を読み込む必要もあります。
  - d. 「次へ」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 2」 ページで、データベース構成を指定します。 次のフィールドを指定します。

表 144. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2)

フィールド	必要なアクション
「 <b>Windows 認証を適用</b> 」 オプションを選択した場合で、なおかつプロファイル作成時に Windows サービスを作成済みの場合は、Windows 認証に使用したユーザー ID でログオンするように Windows サービスが構成されていることを確認してください。	
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメータの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>

表 144. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 2) (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー \${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers% SQLServer に置かれています。

表 145. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (その 3)

フィールド	SQL 認証に必要なアクション	Windows 認証に必要なアクション
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Process Server メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> <li>• Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンのスキーマ名</li> </ul>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。</p> <p>注: SQL 認証の場合は、スキーマ名がユーザー ID にマップされます。</p>	<p>メッセージング・エンジン表は、異なるスキーマ名を使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じスキーマ名を使用することはできません。</p>

Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 をスタンドアロン・プロファイルとともに使用し、メッセージング・エンジン表を共通データベースに配置することを計画している場合は、SQL Server Studio を使用して、所有者 **dbo** として **CMNDB** データベース内に以下のスキーマを作成する必要があります。これらのスキーマは、SIBus メッセージング・エンジンに必要です。

**重要:** これらのスキーマは、サーバーおよびメッセージング・エンジンの開始前 (推奨)、またはメッセージング・エンジンの開始中に構成する必要があります。Windows 認証を選択した場合は、これらがデフォルト値になることに注意してください。別の値を指定できます。SQL 認証の場合、値は指定されたユーザー ID と同じになります。

- MEDPS00 (Process Server メッセージング・エンジン)
- MEDPE00 (Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン)

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、Process Server メッセージング・エンジン表が Process Server データベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- SQL 認証: Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、および Common Event Infrastructure (CEI) のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。
  - Windows 認証: Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードは必ず同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。
12. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  13. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

WebSphere Application Server V8.0 プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルを使用して拡張されました。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

#### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード  
スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要が

あります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 スタンドアロン・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root%properties%profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `default.procctr`: IBM BPM Standard または Express の Process Center のスタンドアロン・プロファイル用です。
  - `default.procsvr`: IBM BPM Standard または Express の Process Server のスタンドアロン・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root%BPM%samples%manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_StandAlone_DB2.response`

- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、それらのスクリプトを実行してデータベースを作成し、**bootstrapProcessServerData** コマンドを使用して、ProcessServer データベースにシステム情報を読み込みます。
- ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成したスタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動します。

### 関連タスク:

スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

### スタンドアロン・プロファイル作成後の SQL Server データベースの構成:

プロファイルの作成時または拡張時にデータベースの表を作成しなかった場合は、ユーザーまたはデータベース管理者がデータベースとその表を手動で作成する必要があります。さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

### Process Server データベース表の作成:

Process Server データベースの表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Process Server データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Process Server データベース名は **BPMDB** です。

Network Deployment 環境を作成する場合は、以下の手順は実行しないでください。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、  
`profile_root\dbscripts¥ProcessServer¥SQLServer¥` に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configProcessServerDB.bat
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Process Server 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、サーバーを開始することができます。

### Performance Data Warehouse データベース表の作成:

IBM Performance Data Warehouse のデータベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。
- データベース・スクリプトを実行して構成中にデータベースを初期化しないことを選択。
- Performance Data Warehouse データベース表を作成する予定のデータベースの作成。デフォルトの Performance Data Warehouse データベース名は **PDWDB** です。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、`profile_root%dbscripts%PerformanceDW%SQLServer%` に出力されます。
2. 以下のスクリプトを実行します。

```
configPerformanceDWDB.bat
```

**注:** このコマンドの後に **createDB** パラメーターを指定して、ローカル・データベースを作成できます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

### **Business Space データベース表の作成:**

共通データベース内の Business Space データベース表の作成をプロファイルの作成後まで延期した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者が手動で表を作成する必要があります。プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用できます。

実行済みのアクションは以下のとおりです。

- スタンドアロン・プロファイルの作成または拡張。

1. **configBusinessSpaceDB.bat** スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。 デフォルト・ディレクトリーは、`install_root%profile%dbscripts%BusinessSpace%node_name_server_name%DB2%CMNDB` です。
2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシーチャーを使用します。以下のコマンドを実行します。

```
configBusinessSpaceDB.bat
```

### **スタンドアロン環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:**

スタンドアロン・プロファイルを作成してデータベース表の作成を延期した場合は、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

**注:** スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイルの作成または拡張中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、bootstrap コマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティーを実行します。ブートストラップ・ユーティリティーは、スタンドアロン・プロファイル・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。



```
install_root%profiles/ProcCtr01%bin
```

ブートストラップ・ユーティリティーは、以下の構文を使用して実行します。

- **bootstrapProcessServerData.bat**

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、`USER_INSTALL_ROOT/logs/` ディレクトリーの `bootstrapProcessServerData.timestamp.log` というファイル内に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

**重要:** ブートストラップ・ユーティリティーが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、**COLLATE** 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、create コマンドが以下のようになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.

Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティ・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

## Windows における Network Deployment 環境の構成

Network Deployment 構成の場合は、ソフトウェアをインストールした後に、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張し、Network Deployment 環境を構成します。

プロファイル作成または拡張のための、非管理ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品をインストールしたユーザーでない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。製品インストール・ユーザーは、この権限を付与することも、プロファイルの作成または拡張権限を持つグループを作成することもできます。

製品インストール・ユーザー (管理ユーザーの場合または非管理ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非管理ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非管理ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。また、製品インストール・ユーザーは、プロファイルを作成する権限のあるユーザーのグループを作成したり、プロファイルを作成する権限を個々のユーザーに与えたりすることができます。

非管理ユーザーは、独自のプロファイルを作成して自分の環境を管理します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非管理ユーザーは、製品の `install_root\profiles` ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

### 制約事項:

- IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非管理ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。非管理ユーザーは、別のユーザーが所有するプロファイルを拡張することはできません。
- 固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非管理ユーザーには使用不可になります。さらに非管理ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非管理ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任をユーザーに割り当てることがもできます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。このトピック内にある、これらのディレクトリーおよびファイルの作成ステップは、スキップして構いません。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、`profilers` グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします 製品インストール・ユーザーは、管理ユーザーの場合または非管理ユーザーの場合があります。
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は **profilers**) を作成します。
  - b. プロファイルを作成できる、**user1** という名前のユーザーを作成します。
  - c. ユーザーの **product\_installer** および **user1** を **profilers** グループに追加します。
3. ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
  4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。

- Windows の資料の説明に従って、**install\_root¥logs¥manageprofiles** ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥logs¥manageprofiles
```

- Windows の資料の説明に従って、**install\_root¥properties¥fsdb** ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥properties¥fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、**profileRegistry.xml** ファイルをインストール・ユーザーとして作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

```
install_root¥properties¥profileRegistry.xml
```

**profileRegistry.xml** ファイルに次の情報を追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの **C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer** であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、**profilers** グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME¥logs¥manageprofiles
@WASHOME¥properties
@WASHOME¥properties¥fsdb
@WASHOME¥properties¥profileRegistry.xml
```

非管理ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非管理ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

```
install_root¥properties¥profileRegistry.xml_LOCK
```

非管理ユーザーがファイルを削除できるようにするには、それらのユーザーにファイルの書き込み権限を与えます。非管理ユーザーがプロファイルを削除できない場合でも、製品インストール・ユーザーはプロファイルを削除できます。

インストール・ユーザーによって **profilers** グループが作成され、非管理ユーザーがプロファイルを作成するのに必要なディレクトリーおよびファイルへの正しい権限がこのグループに付与されました。

**profilers** グループに属している非管理ユーザーは、この非管理ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非管理ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

管理ユーザーと非管理ユーザーは、同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

#### データベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

#### DB2 データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

DB2 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

```
create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

#### DB2 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### DB2 を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。

- データベース表のロケーション。
- サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
- データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

**C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat**

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1)bpm.advanced.nd.topology
- (2)bpm.advanced.standalone
- (3)bpm.standard.nd
- (4)bpm.standard.standalone
- (5>wesb.nd.topology
- (6>wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション (1)bpm.advanced.nd.topology を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には [master] が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete] を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

Database name[default=CMNDB] :

データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:

(Database User name[default=] :)

スキーマ名 [デフォルト=] :

(Schema name[default=] :)

通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:

(Regular pagesize[default=32k] :)

通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :

(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)

一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:

(Temporary pagesize[default=32k] :)

一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :

(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:
(Database server port[default=50000] :)
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 JCC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```



-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12) [save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、すべてのデータベース・コンポーネントが完了と表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (3) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください (Please enter the number for the database component):5

[status] bpm.standard.nd is complete with 0 remaining item(s):

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、bpm.advanced.nd.topology は完了しました (bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

出力ディレクトリーを入力してください [デフォルト=C:\¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils]: (Please enter the output directory [default=C:\¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils] :)

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
]:)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のよういくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

## Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリー内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root¥util¥dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 1 と入力して **(1)DB2-distributed** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
スキーマ名 [デフォルト=] :  
(Schema name[default=] :)  
通常のページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Regular pagesize[default=32k] :)  
通常の表スペース [デフォルト=WBISPACE] :  
(Regular TableSpace[default=WBISPACE] :)  
一時ページ・サイズ [デフォルト=32k]:  
(Temporary pagesize[default=32k] :)  
一時表スペース [デフォルト=WBITEMPSPACE] :  
(Temporary TableSpace[default=WBITEMPSPACE] :)

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database

scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-distributed** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

(1)DB2 Using IBM JCC Driver # XA data source # DB2 Using IBM JCC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。

([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)

データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:

(Database server host[default=] :)

データベース・サーバー・ポート [デフォルト=50000]:

(Database server port[default=50000] :)

Data source user name[default=] :

Data source password[default=] :

DB2 JCC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcd drivers/DB2] :

**注:** 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ディレクトリーを入力してください

[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:

(Please enter the output directory

[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\DB2-distributed-CommonDB for WBI\_CommonDB

[通知] 終了しています...

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI\_BSPACE は未完了です  
(WBI\_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    userId の必須プロパティ「userName」が空です。  
    (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    DB\_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。  
    (required property 'password' for DB\_PASSWORD is empty.)

#### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-distributed-  
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に `dbDesignGenerator.log` ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment):

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

`-? , -help`  
ヘルプ情報を表示します。



-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリ・パスおよびディレクトリ構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリ C:\tmp\DB2-zOS\W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば C:\tmp\DB2-zOS\W8CELLDB などの 1 つのディレクトリ内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
- 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば C:\tmp\DB2-zOS\W8S1DB などの 1 つのディレクトリ内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root\util\dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu;

'?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください

(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12) [save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete] を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、
WBI_CommonDB は未完了です
(WBI_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):
[ 1 ] WBI_CommonDB.WBI_CommonDB : : DbType key is not set.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

```
Please enter the output directory of the SQL files to be generated for
WBI_CommonDB [default=] :
```

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください
(Please pick one of the following [database type(s)]):
```

```
(1)DB2-distributed
(2)DB2-zOS
(3)Oracle
(4)SQL Server
```

7. 2 と入力して (2)DB2-zOS を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
Data source user name[default=] :
Database schema name (SQLID)[default=] :
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :
Bufferpool for indexes[default=BP2] :
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :
Storage group name[default=] :
```

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

9. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-z/OS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database Location on z/OS system[default=] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
DB2 Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
Universal JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed
through jdbcDriver Type 4)[default=] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「false」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを  
編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの  
プロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,  
since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

(1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]  
(2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]  
(3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]  
(4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]  
(5) [Bspace] WBI\_BSPACE : [status = complete]  
(6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]  
(7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]  
(8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]  
(9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]  
(10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]  
(11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]  
(12) [save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[状況 = 未完了]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。別のコンポーネントの親としてリストされているデータベース・コンポーネントがある場合は、他のコンポーネントより先にその親を構成してください。それによって提供される情報が、親がリストされているデータベース・コンポーネント用のデフォルト設定として使用されるためです。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[状況 = 完了]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**注:** DB2 for z/OS の場合は、残りの各コンポーネントを構成する必要があります。以下のガイドラインが適用されます。

- 残りの各データベース・コンポーネントに、必ず適切なスキーマ名を指定します。通常、Process Server、Performance Data Warehouse、およびメッセージング・エンジン・コンポーネントは固有スキーマ名を必要とします。残りのコンポーネントには同じスキーマ名を割り当てることができます。構成するコンポーネントのタイプに特有のその他の値 (例えば、表スペース名の接頭部や VSAM カタログ名 (VCAT) の値など) の入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。
- すべてのシステム統合バスのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する場合は、その表スペース名に固有の接頭部を指定します。こうした接頭部を使用することによって、データベース内で各メッセージング・エンジンの表スペース名が固有に保たれるためです。
- 各コンポーネントを構成しているときに、マスター・コンポーネントから継承された値が適切であるかどうか確認し、必要に応じて修正します。例えば、複数のデータベースを使用する予定である場合は、DB2 for z/OS サブシステム内でのデータベース・オブジェクトの分散計画に合わせて、データベース名を修正することをお勧めします。

- Process Server コンポーネント (**BPM\_ProcessServer**) の構成時に、以下のように、Process Center 用のデータベースなのか Process Server 用のデータベースなのかを指定する画面が表示されます。

[通知] 以下のいずれかを選択してください  
 [これは Process Center のデータベースですか?]:  
 ([info] Please pick one of the following  
 [Is this database for a Process Center?(s)] :)

- (1) false
- (2) true

ネットワーク・デプロイメント環境で Process Center のプロファイルまたはクラスターを作成する場合は、**true** オプションを選択する必要があります。このオプションを **false** に設定すると、Process Center コンソールにアクセスできなくなります。

データベースが Process Server 用の場合は、**false** オプションを選択する必要があります。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合は、マスター・コンポーネントを構成した後に、**BPM\_PerformanceDW** および **BPM\_ProcessServer** コンポーネントを手動で構成する必要があります。また、残りのコンポーネントの構成値を編集して、作成する各データベースにとって適切な構成となるようにします。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
 (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12) [save and exit]

Please enter the number for the database component :12

[status] bpm.advanced.nd.topology is not complete with 6 remaining item(s):  
 [ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'schemaName' for SCHEMA is empty.  
 [ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'catalog' for VCAT is empty.  
 [ 3 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.  
 [ 4 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects : required property 'adminPassword' for SECURITY\_ADMIN\_PASSWORD is empty.  
 [ 5 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects : required property 'schemaName' for SCHEMA is empty.  
 [ 6 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects : required property 'catalog' for VCAT is empty.

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに [状況 = 完了] が示されていたら、該当する番号を入力して [保存して終了] を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
 bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
 (bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

出力ディレクトリーを入力してください

```
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリ内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

14. ここまでの手順で指定したディレクトリ内に、各コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリに作成されます。各ディレクトリには、**createdB2.sh** スクリプトも含まれており、後でこれをデータベース・オブジェクトを作成するデータベース・スクリプトと共に実行することができます。
- **dbDesignGenerator.log** という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリに作成されます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、  
出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。



C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils> DbDesignGenerator.bat

ヒント: 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace
- (6) cei
- (7) sca
- (8) sibme
- (9) wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。特定のデータベースに対するすべての SQL スクリプトの照合先とするディレクトリーの完全修飾パスを入力する必要があります。例えば、WAS\_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB と入力します。次に、Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL

スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 2 と入力して **(2)DB2-zOS** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)

Database name[default=CMNDB] :  
Data source user name[default=] :  
Database schema name (SQLID)[default=] :  
Bufferpool of 4K size for tables[default=BP1] :  
Bufferpool for indexes[default=BP2] :  
Bufferpool of 4K size for LOB data[default=BP3] :  
Bufferpool of 8K size for tables[default=BP8K1] :  
Bufferpool of 16K size for tables[default=BP16K1] :  
Bufferpool of 32K size for tables[default=BP32K1] :  
Storage group name[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**DB2-z/OS** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS
- (2)DB2 Universal JDBC Driver Provider on local z/OS

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。例えば、**(1)DB2 Universal JDBC Driver Provider (XA) on remote z/OS** のオプションをデータベース・プロバイダーとして選択するには、番号 1 を入力して Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the data source properties section.)  
Database Location on z/OS system[default=] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
Database server port[default=] :  
Data source user name[default=] :  
Data source password[default=] :  
DB2 Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
Universal JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/DB2] :  
DB2 Universal JDBC driver native path(This should be empty since DB2 z on remote Machine accessed  
through jdbcDriver Type 4)[default=] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、「**false**」を指定してください。このオプションを使用すると、SQL スクリプトを指定の時間に手動で実行したり、お客様の DB2 for z/OS のベスト・プラクティスや規則に従ってデータベースの作成および編成を行ったりすることができます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:\¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:\¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils] :)

- 8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

- 9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

10. データベース設計ツールに提供された情報に基づいてデータベース・スクリプトを生成するには、y と入力し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
WAS_HOME/profiles/default/dbscripts/DB2-zOS/W8CELLDB for WBI_CommonDB  
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### 関連タスク:

2520 ページの『メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成』

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

#### **DB2 for z/OS でデータベース・オブジェクトを作成するためのスクリプトの生成:**

IBM Business Process Manager のインストール済み環境から、IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS データベース・サブシステム内で生成できます。データベース設計ツールを使用して、スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

生成する予定のデータベース・スクリプトの入力となる以下の情報を準備します。

- IBM Business Process Manager およびそのコンポーネントのインストール方法に関する情報。
- DB2 for z/OS サブシステム用に設計するデータベース構成に関する情報。この情報は、データベース管理者またはソリューション設計者が提供することができ、以下に示すような必須パラメーターおよびプロパティの詳細が含まれます。
  - データベース・サーバーの詳細
  - データ・ソースの詳細
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成する場合、データベース設計ツールを、**-g** コマンド行パラメーターを指定して、サイレント・モードで実行することができます。このモードでは、ツールには、DB2 for z/OS データベースの構成を定義したデータベース設計ファイルからの入力が必要です。データベース・スクリプトを生成する前に、データベース設計ファイルが存在している必要があります。データベース設計ファイルは、以下に示すように、データベース設計ツールを対話モードで実行するか、または構成計画スプレッドシートを使用して生成できます。

- 対話モードでデータベース設計ツールを実行して、データベース設計ファイルを生成できます。ツールのプロンプトに従って、スタンドアロンまたは Network Deployment トポロジー用の DB2 for z/OS のデータベース構成を定義します。
- 構成計画スプレッドシートは、IBM サポート・ポータルからダウンロードできる補助的な成果物です。このスプレッドシートは主に、IBM Business Process Manager for z/OS で使用するためのものですが、Linux on System z 上の IBM Business Process Manager 用に作り替えることができます。構成計画スプレッドシートは、データ入力や命名規則の設定に役立つ色分けやコメントを使用するいくつかのワークシートから構成されます。また、このスプレッドシートには、数あるファイルの中で特に、データベース設計ファイルの生成に使用できるマクロが含まれています。このスプレッドシートを使用する前に、データベース設計ツールを対話モードで実行して、各コンポーネントに必要な構成オプションについて理解しておいてください。

Microsoft Excel スプレッドシートは Techdoc WP102075 からダウンロードできます。スプレッドシートに記入するために必要なデータには、システム・プログラマー、製品管理者、およびデータベース管理者などの複数の職務担当者が関与することがあります。このため、スプレッドシートを詳細に検討し、関係する担当者と協力して命名規則の確立と項目の記入を行うことをお勧めします。入力が完成したら、「データベース設計ファイル (DataBase Design File)」ワークシートの「保存 (Save)」ボタンを使用して、データベース設計ファイルを生成します。

DB2 for z/OS データベース構成を定義する際に、IBM Business Process Manager コンポーネント用に生成する SQL データベース・スクリプトをグループ化する方法を指定できます。デフォルト設定では、スクリプトがコンポーネントごとに個別のディレクトリーに生成されます。データベース設計ツールを実行する前に、ツールで生成されるファイルを保管するロケーションを決定します。データベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステム全体にどのように分散させるかを反映したディレクトリー・パスおよびディレクトリー構造を使用することが重要です。作成されるデータベースごとに、1 つの出力ディレクトリーを使用し、データベースの作成に必要なすべてのスキーマをそのディレクトリーに生成します。参照時に役立つように、作成するデータベースの名前に基づいて SQL ディレクトリーの名前を付けることもできます。

例えば、W1MYDB という名前の単一のデータベースを作成する場合は、すべてのデータベース・コンポーネント用のデータベース・スクリプトを 1 つのディレクトリー C:¥tmp¥DB2-zOS¥W1MYDB 内に生成することができます。有効範囲がセル・レベルで設定されるデータベースとクラスター・レベルで設定されるデータベースの 2 つのデータベースを必要とする場合、データベース・スキーマを次の例のように構造化することができます。

- 有効範囲がセル・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8CELLDB というデータベースを作成するために、例えば C:¥tmp¥DB2-zOS¥W8CELLDB などの 1 つのディレクトリー内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8CELLDB データベース内に、共通データベース・コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
  - 有効範囲がクラスター・レベルであるデータベース・オブジェクトを格納する W8S1DB というデータベースを作成するために、例えば C:¥tmp¥DB2-zOS¥W8S1DB などの 1 つのディレクトリー内に、IBM Business Process Manager の残りのすべてのコンポーネントのデータベース・スクリプトを生成します。生成されたスキーマを後で実行して、W8S1DB データベース内に、これらのコンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成することができます。
1. 必要な場合、DB2 for z/OS の構成を定義したデータベース設計ファイルを **DbDesignGenerator** コマンドで使用できるようにするために、IBM Business Process Manager がインストールされているワークステーションにこのファイルをコピーします。
  2. コマンド行で以下のように入力して、**DbDesignGenerator** コマンドが保管されている IBM Business Process Manager ディレクトリーに移動します。

```
cd install_root%util%dbUtils
```

例: cd C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils

- 以下の構文を使用して、**DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

```
DbDesignGenerator.bat -g db_design_file
```

ここで、*db\_design\_file* は、データベース設計ファイルの完全修飾名です。以下に例を示します。

```
DbDesignGenerator.bat -g C:%tmp%DB2-zOS%W8CELL.nd.dbDesign
```

- 画面に表示された情報を調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。データベース設計ツールは、データベース・コンポーネントごとに、データベース設計ファイルに指定されたディレクトリー内にスクリプトが生成されたことを示す情報メッセージを画面に表示します。例えば、共通データベース・コンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in  
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils%DB2-distributed-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

**ヒント:** データベース設計ファイルでは、SQL スクリプト用のディレクトリーは、各コンポーネントのセクションで *ddl\_outDir* 変数によって定義されます。SQL スクリプトを別のディレクトリー・セットに生成する場合は、*ddl\_outDir* 変数の値を手動で更新すると簡単です。その後、データベース設計ファイルを保存し、再度 **DbDesignGenerator** コマンドを実行します。

- 指定したディレクトリーの場所を調べて、生成されたデータベース・スクリプトを確認します。各ディレクトリーには、SQL を実行するために使用できる **createDB2.sh** スクリプトが追加されています。

これらのスクリプトを使用して、DB2 for z/OS サブシステム内に IBM Business Process Manager データベース・オブジェクトを作成するには、まずスクリプトを z/OS システムに転送する必要があります。

- FTP を使用して、生成されたすべてのデータベース・スクリプトを、DB2 のインストール済み環境がある z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- z/OS UNIX System Services コマンド環境から **createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2for z/OS データベース・オブジェクトを作成します。

**注:** **createDB2.sh** スクリプトに実行権限が必要です。

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、WBI\_BSPACE は未完了です  
(WBI\_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
userId の必須プロパティ「userName」が空です。  
(required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
DB\_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。  
(required property 'password' for DB\_PASSWORD is empty.)

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v DB2-zOS-
```

```
...
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

## Oracle 用データベースのセットアップ:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、3 つの異なる BPM データベースに対して必ず別々のユーザー ID を使用してください。

1. 表スペースを作成します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE [tablespace_name] DATAFILE '[datafile_name]'
SIZE 50M AUTOEXTEND ON NEXT 10M
MAXSIZE UNLIMITED LOGGING;
```

2. ユーザーを作成します。これらのユーザーは、プロファイル管理ツールの「データベース構成 - パート 2」ページで指定します。以下の例では、Process Server データベース用に BPMDBA というユーザー名、Performance Data Warehouse データベース用に PDWDBA というユーザー名、および共通データベース用に CMNDBA というユーザー名を作成すると仮定します。

```
SQL> CREATE USER BPMDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE [tablespace_name];
SQL> CREATE USER PDWDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
SQL> CREATE USER CMNDBA IDENTIFIED BY [password] DEFAULT TABLESPACE
[tablespace_name];
```

3. 前のステップで指定したユーザーに特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO BPMDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO PDWDBA;
SQL> GRANT ALL PRIVILEGES TO CMNDBA;
```

4. DBMS\_LOCK に対する実行特権を付与します。以下に例を示します。

```
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to BPMDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to PDWDBA;
SQL> GRANT execute on DBMS_LOCK to CMNDBA;
```

### Oracle 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

### Oracle を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

```
-? , -help
ヘルプ情報を表示します。
```

```
-e db_design_file_name
指定したデータベース設計ファイル (*.dbDesign、*.properties など) を編集します。
```

```
-v db_design_file | db_scripts_output_directory
```



db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート dd1 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:%IBM%WebSphere%AppServer%util%dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください

(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください (Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[Bspace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、

WBI\_CommonDB は未完了です

(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):

[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください

(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[デフォルト=] :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)[default=] :

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・  
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。  
([info] You have completed database objects  
section properties needed for database  
scripts generation.)

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください  
(Please pick one of the following [database provider(s)]):

- (1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=1521] :

[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :

(1)oci8
(2)thin

Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
Oracle JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
WBI_CommonDB は完了しました
(WBI_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)
```

```
-----
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを
編集してください。
[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトの
プロパティ値を変更することができます。
[info] Design the 'master' component first, and then any parent components,
since other components may inherit values from them.
```

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください
(Please pick one of the following [database component(s)]):
```

```
(1)[WBI_CommonDB] WBI_CommonDB : [master] [status = complete]
(2)[BPC] WBI_BPC : [status = complete]
(3)[BPM_PerformanceDW] BPM_PerformanceDW : [status = complete]
(4)[BPM_ProcessServer] BPM_ProcessServer : [status = not complete]
(5)[Bspace] WBI_BSPACE : [status = complete]
(6)[SibME] WBI_BPC_ME : [status = complete]
(7)[SibME] WBI_CEI_ME : [status = complete]
(8)[SibME] WBI_SCA_APP_ME : [status = complete]
(9)[SibME] WBI_SCA_SYS_ME : [status = complete]
(10)[SibMe] BPM_PerformanceDW_ME : [parent = BPM_PerformanceDW] [status = complete]
(11)[SibMe] BPM_ProcessServer_ME : [parent = BPM_ProcessServer] [status = complete]
(12)[save and exit]
```

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.advanced.nd.topology** を選択した場合、必要とされるデータベース認証に関して、**BPM\_PerformanceDW**、**BPM\_ProcessServer**、および対応する **SibMe** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

Please enter the number for the database component :3

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSPACE] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = complete]
- (12)[save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):4

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 3 つあるため、BPM\_ProcessServer は未完了です  
(BPM\_ProcessServer is not complete with 3 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.  
[ 2 ] BPM\_ProcessServer.BPM\_ProcessServer : databaseObjects :  
required property 'adminUserName' for SECURITY\_ADMIN\_USER is empty.

```
[ 3 ] BPM_ProcessServer.BPM_ProcessServer : databaseObjects :
required property 'adminPassword' for SECURITY_ADMIN_PASSWORD is empty.
```

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに **[状況 = 完了]** が示されていたら、該当する番号を入力して **[保存して終了]** を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、
bpm.advanced.nd.topology は完了しました
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)
```

出力ディレクトリーを入力してください

```
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください

```
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
```

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

```
[通知] 終了しています...
```

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。

- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における DB2 を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory

db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。

db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ...  
[db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合バスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1) bpc
- (2) bpcreporting
- (3) bpm\_performancedw
- (4) bpm\_processserver
- (5) bspace



- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 3 と入力して **(3)Oracle** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name(SID) [default=CMNDB] :  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)  
Database schema [default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)(デフォルト=) :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)(デフォルト=) :  
Database Location(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile  
creation.)(default=) :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティーのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティーの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティーが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティーをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください：

7. データ・ソース・プロパティー・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**Oracle** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Oracle JDBC Driver # XA data source # Oracle JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティー・セクションに
プロパティーの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
Database server port[default=1521] :
```

```
[info] Please pick one of the following [Oracle driver type(s)] :
```

```
(1)oci8
(2)thin
```

```
Please enter the number for the Oracle driver type(s)? [default=thin] :
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
Oracle JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルのプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\Oracle-CommonDB for WBI_CommonDB
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

```
[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、
WBI_BSPACE は未完了です
(WBI_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):
[ 1 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      userId の必須プロパティー「userName」が空です。
      (required property 'userName' for userId is empty.)
[ 2 ] BSpace.WBI_BSPACE : authAlias :
      DB_PASSWORD の必須プロパティー「password」が空です。
      (required property 'password' for DB_PASSWORD is empty.)
```

## 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v Oracle-
```

```
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

## データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### SQL Server 用のデータベースおよびデータベース設計ファイルの作成:

IBM Business Process Manager には、Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。共通データベースには、Business Space とその他のコンポーネントが含まれます。データベースは、Network Deployment の前に作成する必要があります。

**ヒント:** フェデレーテッド・リポジトリをユーザー・レジストリーとして使用している場合は、systemout.log ファイル内にあるキーの最大長に関する警告「... 警告: 最大キー長は 900 バイトです ...」を無視してかまいません。スタンドアロン LDAP レジストリーを使用している場合は、組織内のすべてのユーザー識別名 (DN) 項目の文字数が 131 文字の制限を超えていないことを確認してください。いずれかのユーザー DN 項目の文字数が 131 文字を超えている場合は、ユーザー・アカウント・レジストリーをフェデレーテッド・リポジトリ・オプションに変更する必要があります。

### SQL Server データベースの作成:

プロファイルを作成する前に、必要なデータベースを作成できます。

デフォルトのデータベース名は、Process Server データベースは BPMDB、Performance Data Warehouse データベースは PDWDB、共通データベースは CMNDB です。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

1. Microsoft SQL Server をインストールします。
2. SQL Server 用のデータベースを作成するには、以下のコマンドを使用します。
  - a. Process Server (BPMDB) データベースおよび Performance Data Warehouse (PDWDB) データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password  
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"
```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** はデータベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

- b. 共通データベースを作成するには、以下の手順を実行します。

```
osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS"
```

違っているのは COLLATE 分節です。CMNDB では大/小文字を区別する照合が必要です。

**重要:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmtExecCmd.doExecute(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。スーパーユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

- SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
- 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
- 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
- タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
- 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されません。
- Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

次の表は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 146.

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

### XA トランザクションの構成:

Microsoft SQL Server データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションが構成されないと、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA コントロール接続を作成できませんでした。エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

- MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ウィンドウを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 「リソース」セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. アーカイブを任意のフォルダーに解凍します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに付与するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「ユーザー」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

## SQL Server 用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## SQL Server を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルの作成:

データベース設計ツールを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用できる設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、必要に応じてデータベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトを生成することもできます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。



```
-g db_design_file [-d output_directory] [db_design_file2] [-d output_directory2] ...  
[db_design_fileN] [-d output_directoryN]
```

指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。  
生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリーに格納されるか、  
出力ディレクトリーがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root¥util¥dbUtils` ディレクトリーから実行します。以下に例を示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。  
([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:  
([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(1) スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」を選択するには、数字の 1 を入力して Enter を押します。

データベース・パターンを選択するよう求める、以下の例のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・パターン] を選んでください  
(Please pick one of the following [database pattern(s)]):

- (1) bpm.advanced.nd.topology
- (2) bpm.advanced.standalone
- (3) bpm.standard.nd
- (4) bpm.standard.standalone
- (5) wesb.nd.topology
- (6) wesb.standalone

3. 構成を行うデプロイメント環境用のデータベース設計パターンを作成するには、該当するオプションの番号を入力し、Enter を押します。『.nd』を含むオプションを選択してください。

例えば、IBM Business Process Manager Advanced のデプロイメント環境のデータベース・パターンを構成するには、番号 1 を入力してオプション **(1)bpm.advanced.nd.topology** を選択し、Enter キーを押します。選択した環境用に構成可能なデータベース・コンポーネントのリストと、構成するコンポーネントを選択するよう求める以下のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティーを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティー値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]
- (2)[BPC] WBI\_BPC : [status = not complete]
- (3)[BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (4)[BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5)[BSpace] WBI\_BSPACE : [status = not complete]
- (6)[SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = not complete]
- (7)[SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = not complete]
- (8)[SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = not complete]
- (9)[SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = not complete]
- (10)[SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [status = not complete]
- (11)[SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [status = not complete]
- (12)[save and exit]

4. 該当するオプションの番号を入力してマスター・データベース・コンポーネントを構成し、Enter を押します。 マスター・コンポーネントとしてリストされているデータベース・コンポーネントの名前の横には **[master]** が示されており、これを最初に構成する必要があります。

例えば、番号 1 を入力してオプション **(1)[WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = not complete]** を選択し、Enter キーを押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、  
WBI\_CommonDB は未完了です  
(WBI\_CommonDB is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] WBI\_CommonDB.WBI\_CommonDB : : DbType key is not set.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

5. コンポーネントのデータベース構成を編集するには、y と入力し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
WBI\_CommonDB [default=] :

6. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できません。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

7. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データベース・オブジェクト・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the database objects section.)
Database name[default=CMNDB] :
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:
(Database server host[default=] :)
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:
(Database User name[default=] :)
Database schema[default=] :
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile
creation.)[デフォルト=] :
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile
creation.)[default=] :
```

8. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、続行するにはそれ以外のキーを入力してください。

9. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the databases ? (s)} :

- (1) false
- (2) true

Data source user name[default=] :

Data source password[default=] :

MS SqlServer JDBC driver path[default=\${WAS\_INSTALL\_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
WBI\_CommonDB は完了しました  
(WBI\_CommonDB is complete with 0 remaining item(s):)

-----  
[通知] 「未完了」のデータベース・コンポーネントの必須プロパティを編集してください。

[通知] 完了したデータベース・コンポーネントを編集して、既存またはデフォルトのプロパティ値を変更することができます。

[info] Design the 'master' component first, and then any parent components, since other components may inherit values from them.

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [WBI\_CommonDB] WBI\_CommonDB : [master] [status = complete]
- (2) [BPC] WBI\_BPC : [status = complete]
- (3) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = complete]
- (4) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [status = not complete]
- (5) [BSpace] WBI\_BSPACE : [status = complete]
- (6) [SibME] WBI\_BPC\_ME : [status = complete]
- (7) [SibME] WBI\_CEI\_ME : [status = complete]
- (8) [SibME] WBI\_SCA\_APP\_ME : [status = complete]
- (9) [SibME] WBI\_SCA\_SYS\_ME : [status = complete]
- (10) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (11) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (12) [save and exit]

マスター・データベース・コンポーネントの構成を終了すると、データベース設計ツールは入力した値を、残りのコンポーネントに伝搬します。これを正常に実行できると、マスター・コンポーネントとともにこれらのコンポーネントにも **[status = complete]** が表示されます。何らかの理由でこれが実行できない場合、これらのコンポーネントには **[状況 = 未完了]** が表示されたままになります。

- 10. 前のステップに従って **[status = not complete]** と表示されている残りのデータベース・コンポーネントを構成します。また、マスター・データベース・コンポーネントを構成した結果として、**[status = complete]** として示されているコンポーネントを再構成することも可能です。

**bpm.standard.nd** を選択した場合は、**BPM\_ProcessServer** を構成した後に、必要とされるデータベース認証に関して **BPM\_PerformanceDW** コンポーネントを手動で構成する必要があります。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [database component(s)]):

- (1) [BPM\_ProcessServer] BPM\_ProcessServer : [master] [status = complete]
- (2) [BPM\_PerformanceDW] BPM\_PerformanceDW : [status = not complete]
- (3) [SibMe] BPM\_PerformanceDW\_ME : [parent = BPM\_PerformanceDW] [status = complete]
- (4) [SibMe] BPM\_ProcessServer\_ME : [parent = BPM\_ProcessServer] [status = complete]
- (5) [save and exit]

データベース・コンポーネントの番号を入力してください  
(Please enter the number for the database component):2

-----  
[状況] 以下のように残り項目が 1 つあるため、BPM\_PerformanceDW は未完了です  
(BPM\_PerformanceDW is not complete with 1 remaining item(s)):  
[ 1 ] BPM\_PerformanceDW.BPM\_PerformanceDW : databaseObjects :  
required property 'databaseUser' for DB\_USER is empty.

このデータベース・コンポーネントを編集しますか?(y/n) [default=y] :

11. 選択したデータベース・パターン用のすべてのデータベース・コンポーネントの構成を完了し、データベース設計ツール内でそれらのコンポーネントに [状況 = 完了] が示されていたら、該当する番号を入力して [保存して終了] を選択し、Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

[状況] 以下のように残り項目が 0 になったため、  
bpm.advanced.nd.topology は完了しました  
(bpm.advanced.nd.topology is complete with 0 remaining item(s):)

出力ディレクトリーを入力してください  
[デフォルト=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils]:  
(Please enter the output directory  
[default=C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils] :)

12. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

出力ファイル名を入力してください  
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :  
(Please enter the output filename  
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign  
] :)

13. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルト名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。指定したディレクトリー内に同じ名前のファイルが既に存在する場合は、ファイルを上書きするか、別のファイル名を指定するかを選択できます。プロンプトでファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :

14. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。すべてのコンポーネントに対するスクリプトが生成されたことを示す一連の情報メッセージが表示されます。それぞれのコンポーネントについて、以下の例のような情報が表示されます。

[info] The script(s) have been generated in  
C:\IBM\WebSphere\AppServer\util\dbUtils\SQLServer-CommonDB for WBI\_CommonDB

最後のスクリプト・セットが生成されると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 終了しています...

以下のファイルが作成されます。

- データベース設計ファイルが、指定したディレクトリーに作成されます。
- データベース・スクリプトが、指定した 1 つ以上のディレクトリーに作成されます。
- dbDesignGenerator.log という名前のログ・ファイルが、**DbDesignGenerator** コマンドを実行したディレクトリーに作成されます。

データベース設計ツールからの出力は、以下のいずれかの方法で使用できます。

- データベース設計ファイルのみを生成した場合は、データベース設計ファイルを指定し、それらの構成ステップの一環としてデータベース表を作成するオプションを選択できます。
- データベース設計ファイルと SQL スクリプトの両方を生成した場合は、データベース設計ファイルのみを指定して、構成するランタイムを SQL スクリプトから作成されたデータベース表に合致させることができます。

データベース設計ファイルは、以下のようにいくつかの方法で指定できます。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

データベース設計ファイルは、管理コンソールでサーバーを Process Server、Process Center、または Performance Data Warehouse サーバーとして構成するときにも使用できます。

### **Network Deployment 環境における SQL Server を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルの作成:**

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイルおよびデータベース・スクリプトを生成できます。

IBM Business Process Manager がインストール済みであることを確認します。データベース設計ツールは、インストール・バイナリー・ファイルからのみ使用可能です。

データベース設計ツールを実行する前に、以下の情報を準備します。

- 設計するデータベース構成に関する情報。この情報としては、データベース管理者やソリューション・アーキテクトが提供する、データベース構成の一般的な目的を説明する文書が考えられます。または、必須のパラメーターやプロパティーの説明であることもあります。この情報には以下が含まれている必要があります。
  - データベース表のロケーション。
  - サーバー・プロファイルが作成されるシステム上の JDBC ドライバーのロケーション。
  - データベースに対する認証用のユーザー ID とパスワード。
- IBM Business Process Manager とそのコンポーネントがインストールされた方法、使用されているデータベース・ソフトウェア、およびそのタイプのデータベースに必要なプロパティーに関する情報。
- 作成するプロファイル (特にプロファイル・タイプとデータベースの間の機能面の関係) の理解。
- 実装するトポロジー・パターンに関する情報、および使用するパターンにデータベース設計を適合させる方法に関する理解。

データベース設計ツールを対話モードで実行して、データベース構成値を定義し、定義した値を新しいデータベース設計ファイルや既存のファイルに保存することができます。必要に応じて、使用するデータベース・タイプ用のデータベース・オブジェクトを作成するためのデータベース・スクリプトを生成することもできます。ツールの実行時には、構成する環境とデータベース・タイプに応じて、使用できるオプションが変わります。

コマンド行パラメーターを指定してデータベース設計ツールを実行し、既存のデータベース設計ファイルを編集または検査したり、既存のデータベース設計ファイル内で定義された構成用に、データベース・スクリプトを生成したりすることもできます。 **DbDesignGenerator** コマンドのコマンド行パラメーターは以下のとおりです。

-? , -help  
ヘルプ情報を表示します。

-e db\_design\_file\_name  
指定したデータベース設計ファイル (\*.dbDesign、\*.properties など) を編集します。

-v db\_design\_file | db\_scripts\_output\_directory  
db\_design\_file が指定されている場合は、データベースの仕様に基づいて、指定されたデータベース設計ファイルに対して検証が行われます。  
db\_scripts\_output\_directory が指定されている場合は、指定されたディレクトリ内のデータベース・スクリプトが検証されます。現在のところ、検証が可能なのは、テンプレート ddl 生成プログラムから生成されたスクリプトのみです。

-g db\_design\_file [-d output\_directory] [db\_design\_file2] [-d output\_directory2] ... [db\_design\_fileN] [-d output\_directoryN]  
指定された設計ファイルからデータベース・スクリプトをバッチ・モードで生成します。生成されたスクリプトは、対応する出力ディレクトリに格納されるか、出力ディレクトリがない場合はデフォルトのロケーションに格納されます。

**重要:** サービス統合パスのメッセージング・エンジンに対するデータベース・スクリプトを生成する場合は、以下の手順のすべてのステップを繰り返し実行して、必要とするメッセージング・エンジンごとにデータベース構成を定義し、スクリプトを生成する必要があります。例えば、6 つのメッセージング・エンジン用のスクリプトが必要な場合は、この手順を 6 回実行してください。

1. **DbDesignGenerator.sh** コマンドを `install_root%util%dbUtils` ディレクトリから実行します。以下に例を示します。

```
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils> DbDesignGenerator.bat
```

**ヒント:** 「システムは指定されたパスを検出できません。(The system cannot find the specified path.)」というメッセージが表示された場合は、誤ったパス名を入力した可能性があります。パスを再入力してください。

データベース設計ツールが正常に起動すると、以下の例のような情報が表示されます。

[通知] 対話モードで DbDesignGenerator を実行中...

[通知] 保存しないで終了する場合は「q」、直前のメニューに戻るには「-」、ヘルプを随時表示するには「?」を入力してください。

([info] Enter 'q' to quit without saving; '-' for back to previous menu; '?' for help at any time.)

[通知] 提供されたデフォルト値を受け入れるには、単に「Enter」キーを押します。

[通知] 以下のいずれかの [設計オプション] を選んでください:

([info] Please pick one of the following [design option(s)] :)

- (1) Create a database design for Standalone profile or Deployment Environment
- (2) Create a database design for a single component
- (3) 既存のデータベース設計を編集する
- (4) データベース設計からデータベース・スクリプトを生成する
- (5) exit [q]

Please enter the number for the design option :

2. オプション「**(2)Create a database design for a single component**」を選択するには、番号 2 を入力して Enter キーを押します。

コンポーネントを選択するよう求める、以下の例に示すようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [コンポーネント] を選んでください  
(Please pick one of the following [component(s)]):

- (1)bpc
- (2)bpcreporting
- (3)bpm\_performancedw
- (4)bpm\_processserver
- (5)bspace
- (6)cei
- (7)sca
- (8)sibme
- (9>wbi\_commondb

3. 構成するコンポーネントのデータベース設計を作成するには、該当するオプションの番号を入力して Enter を押します。

例えば、IBM Process Server データベース・コンポーネントを構成するには、番号 4 を入力してオプション **(4)bpm\_processserver** を選択し、Enter キーを押します。

データベース設計ツールで生成することができ、データベース・オブジェクトの作成に使用できる SQL スクリプトのための出力ディレクトリーの指定を求めるプロンプトが表示されます。SQL スクリプトをこの手順の後のステップで生成するように選択した場合、スクリプトは自動的にこのディレクトリーに保存されます。

Please enter the output directory of the SQL files to be generated for  
BPM\_ProcessServer [default=] :

4. SQL スクリプトの出力ディレクトリーを入力して、Enter キーを押します。完全修飾ディレクトリー・パス、またはデータベース設計ツールを実行している現行ディレクトリーからの相対パスを指定することができます。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、SQL スクリプトの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、その内容を上書きするか、別のディレクトリーを指定するかを選択できます。

**ヒント:** 指定した値は、このファイルが生成されるときに、データベース設計ファイルに参照として保存されます。

構成するデータベース・タイプを選択するよう求める、次のようなプロンプトが表示されます。

[通知] 以下のいずれかの [データベース・タイプ] を選んでください  
(Please pick one of the following [database type(s)]):

- (1)DB2-distributed
- (2)DB2-zOS
- (3)Oracle
- (4)SQL Server

5. 4 と入力して **(4)SQL Server** を選択し、Enter キーを押します。データベース・プロパティーの一連のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、データベース・タイプによって異なります。

例えば、共通データベースの構成用にこのデータベース・タイプを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

[通知] データベース・オブジェクト・セクションに  
プロパティーの値を入力してください。  
([info] Please enter the values for the properties in  
the database objects section.)  
Database name[default=CMNDB] :  
データベース・サーバー・ホスト [デフォルト=]:  
(Database server host[default=] :)  
データベース・ユーザー名 [デフォルト=]:  
(Database User name[default=] :)



Database schema[default=] :  
System user name(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[デフォルト=] :  
System password(this is required ONLY for creating the database as a part of standalone profile creation.)[default=] :

6. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。

管理セキュリティのプロンプトが表示された場合、これは管理コンソールのユーザー名とパスワードを意味します。

データベース・プロパティの最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
[通知] データベース・スクリプトの生成に必要なデータベース・
オブジェクト・セクションのプロパティが入力されました。
([info] You have completed database objects
section properties needed for database
scripts generation.)
```

データ・ソース・プロパティをスキップする場合は「s」を入力し、  
続行するにはそれ以外のキーを入力してください :

7. データ・ソース・プロパティ・コンポーネントを構成するには、s 以外の任意の文字を入力して Enter を押します。この構成をスキップしてデフォルトを受け入れるには、s を入力して Enter を押します。

**ヒント:** データベース設計ツールを使用して、プロファイル作成またはトポロジー構成の入力として使用するデータベース設計ファイルを生成する場合は、データ・ソースを構成する必要があります。データベース設計ツールを使用して SQL を生成する場合、このステップはオプションです。

選択したデータベース・タイプのデータ・ソースを構成するように選択した場合、そのデータ・ソースのデータベース・プロバイダーのリストが表示されます。例えば、**SQL Server** データベース・タイプの場合は、以下のデータベース・プロバイダーが表示される場合があります。

```
[通知] 以下のいずれかの [データベース・プロバイダー] を選んでください
(Please pick one of the following [database provider(s)]):
```

```
(1)Microsoft SQL Server JDBC Driver #
XA data source # Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)
```

- a. 該当する番号を入力して、データ・ソースのデータベース・プロバイダーを選択し、Enter キーを押します。このデータベース・プロバイダーを選択すると、以下の例のような一連のプロンプトが表示されます。

```
[通知] データ・ソース・プロパティ・セクションに
プロパティの値を入力してください。
([info] Please enter the values for the properties in
the data source properties section.)
Database server port[default=1433] :
```

```
[info] Please pick one of the following {Do you want to use windows authentication for the
databases ? (s)} :
```

```
(1) false
(2) true
```

```
Data source user name[default=] :
Data source password[default=] :
MS SqlServer JDBC driver path[default=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer] :
```

注: 生成される出力ファイルでは、パスワードが暗号化されています。

- b. 各プロンプトで、Enter キーを押して表示されたデフォルト値を受け入れるか、または望ましい値を入力してから Enter キーを押します。構成中にデータベース表を作成するかどうかを尋ねられたら、データベース設計ファイルをプロファイル作成のための入力として使用する場合は「false」を指定してください。このオプションはプロファイル管理ツールでも選択可能であり、競合の原因となるためです。管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成する場合は、表を自動的に作成させるかどうかによって決定できます。

最後のプロンプトに値を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ディレクトリーを入力してください
[デフォルト=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils]:
(Please enter the output directory
[default=C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils] :)
```

8. Enter キーを押してデータベース設計ファイルのデフォルトのディレクトリーを受け入れるか、またはファイルを保存する別のディレクトリーを入力してから Enter キーを押します。このディレクトリーがまだファイル・システム内に作成されていない場合は、ファイルの生成時にデータベース設計ツールにより自動的に作成されます。プロンプトでロケーションを入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
出力ファイル名を入力してください
[デフォルト=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign] :
(Please enter the output filename
[default=bpm.advanced.nd.topology.dbDesign
] :)
```

9. Enter キーを押してデフォルトのファイル名を受け入れるか、または別のファイル名を入力してから Enter キーを押します。ファイル名を入力すると、以下の例のような情報が表示されます。

```
データベース・スクリプトを生成しますか?(y/n) [default=y] :
```

10. オプション: データベース設計ツールに提供した情報に基づいてデータベース・スクリプトも生成する場合は、y を入力して Enter を押します。以下の例のような情報が表示されます。

```
[info] The script(s) have been generated in
C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥util¥dbUtils¥SQLServer-CommonDB for WBI_CommonDB
[通知] 終了しています...
```

データベース設計ファイルが作成され、オプションで、指定した場所にデータベース・スクリプトが作成されています。

データベース設計ツールを使用して特定のコンポーネントを構成すると、生成された SQL スクリプトはデータベース表を作成するために使用できます。生成されたデータベース設計ファイルには、この構成されたコンポーネント用の値のみが含まれ、以下の方法で使用するには十分ではありません。

- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するとき
- **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するとき
- デプロイメント環境ウィザードを使用して環境を作成するとき

#### データベース設計ツールのトラブルシューティング:

データベース・スクリプトにエラーがある場合は、データベース設計ツールが提供する診断および妥当性検査情報を使用して、問題を診断できます。

#### 必須プロパティーが空であることを示すエラー

必須の **userName** および **password** のプロパティーが設定されていない場合には、出力に以下のタイプのメッセージが出されることがあります。

[状況] 以下のように残り項目が 2 つあるため、  
WBI\_BSPACE は未完了です  
(WBI\_BSPACE is not complete with 2 remaining item(s)):  
[ 1 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    userId の必須プロパティ「userName」が空です。  
    (required property 'userName' for userId is empty.)  
[ 2 ] BSpace.WBI\_BSPACE : authAlias :  
    DB\_PASSWORD の必須プロパティ「password」が空です。  
    (required property 'password' for DB\_PASSWORD is empty.)

### 既存のデータベース設計の妥当性検査を実行した場合の出力例

既存のデータベース設計の妥当性検査を実行するときには、出力に以下のタイプの警告が出されることがあります。

```
DbDesignGenerator.bat -v SQL Server-
```

```
...  
[警告] 2 潜在的な問題がスクリプトで検出されました。問題の内容:  
DB_USER @ line 46 in file configCommonDB.bat  
DB_USER @ line 80 in file configCommonDB.sh
```

### データベース設計ツール・ログ・ファイルの内容

データベース設計ツールを実行すると、データベース設計ツール・コマンドを実行した場所に dbDesignGenerator.log ファイルが作成されます。ログにはすべてのプロンプトおよび入力した値が含まれています。ログ・ファイルにその他のトレース出力は含まれていません。

### configureNode コマンドを使用した Network Deployment 環境の構成:

標準的な Network Deployment 環境を構成する場合は、プロファイル管理ツールとデプロイメント環境ウィザード、または **manageprofiles** コマンドと **wsadmin** コマンドを使用する代わりに、**configureNode** コマンドを使用できます。このコマンドでは、プロパティ・ファイルを使用して限られたカスタマイズを行い、すぐに使用できる環境を作成します。**configureNode** は、後からデプロイメント環境を拡張する場合にも使用できます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

**重要:** 最初に作成されたプロファイルを削除しないと、1 台のマシンで **configureNode** を 2 回実行することはできません。2 回目の **configureNode** コマンドを実行するには、まずプロファイルを削除してください。

### configureNode コマンドを使用したデプロイメント環境の作成:

**configureNode** コマンドを使用して、標準的な Network Deployment 環境を作成することができます。このコマンドの目標は、すぐに使用できる環境を提供することです。プロパティ・ファイルには、カスタマイズ可能なパラメーターのみが提供されます。

**制約事項:** データベース・タイプが DB2 for z/OS である場合、このコマンドはサポートされません。

製品をインストールし、プロパティ・ファイルに指定されているすべてのデータベースを作成しておく必要があります。

**重要:** データベース・ソフトウェアをインストールして、データベースを作成しておく必要があります (ただし、テーブルは作成しないでください)。また、プロパティ・ファイルで指定したユーザーも、すべて作成しておく必要があります。『データベース特権』にリストされたインストール特権をユーザーが持っていることを確認してください。

SQL Server データベース・サーバーの場合:

- 構成を行う前に、ユーザー名とスキーマが存在していることを確認します。スキーマの値は、選択されたユーザーのデフォルト・スキーマでなければなりません。
- サーバーを実行中の現行の Windows ユーザーによってデータベースへの接続が行われる場合は、SQL Server で「**Windows 認証モード**」または「**SQL Server 認証モードと Windows 認証モード**」が有効になっている必要があります (これらは Microsoft SQL Server Management Studio を通して指定されます)。

**制約事項:** `configureNode` コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

**configureNode** コマンドは、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーを作成します。このコマンドを使用してポートをカスタマイズすることはできません。サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。デフォルト・ポートで構成された他のプロファイルが同じマシン上で開始されていないことを確認してください。

**configureNode** コマンドにより、以下の Network Deployment トポロジーが作成されます。

- 単一セル環境
- この環境には、プロパティ・ファイルで指定した数のクラスター・メンバーが含まれます。
- この環境では、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンが使用されます。このトポロジー・パターンには、以下の 4 つのクラスターが含まれます。
  - メッセージング・インフラストラクチャー・クラスター
  - サポート・インフラストラクチャー・クラスター
  - アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター
  - Web アプリケーション・クラスター

このコマンドは、以下のタスクを実行します。

- デプロイメント・マネージャー・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてデプロイメント・マネージャー・ノードを作成し、デプロイメント・マネージャーを始動する。
- デプロイメント環境の定義を作成する。
- カスタム・ノード・プロパティ・ファイルに指定された値を基にしてカスタム・ノードを作成する。
- ノードをフェデレートしてデプロイメント環境に追加する。
- デプロイメント環境を生成する。
- データベース表を作成する (データベースは、あらかじめ作成しておく必要があります。手順については、『始める前に』を参照してください)。
- ブートストラップ・ユーティリティを実行し、システム情報と共に Process Server データベースをロードする。
- Web アプリケーション・クラスターで Business Space および Process Portal を構成する。

プロパティ・ファイルでオプション・ポートが指定されていない場合は、デフォルト・ポートを使用してデプロイメント・マネージャーが作成されます。**configureNode** を実行した時点で、デプロイメント・マネージャーが既にマシン上で稼働している場合は、デプロイメント環境の作成が失敗します。デプロイメント・マネージャーが既に作成されているが、まだ稼働していない場合は、いずれかのデプロイメント・マネージャーのポートを変更する必要があります。変更しないと、別のデプロイメント・マネージャーを始動したときに、ポートの競合エラーが発生する可能性があります。

初めてデプロイメント環境を作成する場合は、以下のステップを実行します。

1. デプロイメント環境を作成するマシン上で、サンプルのプロパティ・ファイル `install_root\util\ndUtils\samples` を探します。
2. サンプル・ファイルをコピーして、現在の環境を反映するように変更します。例えば、Process Server の IBM BPM Standard のデプロイメント・マネージャーの場合は、`sample_std_pc_dmgr.properties` ファイルを選択します。

作成したい各データベースについて、データベース・パラメーターのセクションをコピーし、データベース名、ユーザー名、パスワード、スキーマ名を指定します。Process Server データベース、Performance Data Warehouse データベース、および共通データベースが必要です。これらのデータベースには、それぞれ異なる名前を指定する必要があります。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. 上記手順で作成した 2 つのファイルの名前を **configureNode** コマンドに渡して実行します。カスタム・ノード・ファイルはオプションですが、カスタム・ノード・ファイルを指定しなかった場合、デプロイメント・マネージャーだけが作成されます。例:

```
install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -dmgr_response my_dmgr_response_file.properties  
-response node01_response_file.properties
```

**注:** **Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**


これで、リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターンを使用するデプロイメント・マネージャー、カスタム・ノード、およびデプロイメント環境が作成されました。

メッセージは、ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` に記録されます。


**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで) テスト接続の操作が例外 `com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT` で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。


## 関連概念:

 仮想ホスト

## 関連タスク:

 仮想ホストの構成

## 関連資料:

 テスト接続サービス

## *configureNode* コマンドを使用したデプロイメント環境の拡張:

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成した後、そのデプロイメント環境をこのコマンドで後から拡張することができます。

**configureNode** コマンドを実行するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- デプロイメント環境の拡張を行うマシンに製品をインストールしておく必要があります。
- デプロイメント・マネージャーは稼働している必要があります。
- **configureNode** コマンドを実行してデプロイメント環境を作成しておく必要があります。

**制約事項:** **configureNode** コマンドを順番に実行します。複数のマシンで同時にこのコマンドを実行しないでください。

1. デプロイメント環境の拡張を行うマシンで、サンプルのカスタム・ノード・ファイルを見つけます。  
`install_root\util\ndUtils\samples¥`
2. 必要とするプロパティ・ファイルに最も近いサンプル・ファイルをコピーします。例えば、Process Server 用 IBM BPM Standard のデプロイメント環境を拡張するには、`sample_std_ps_node.properties` ファイルを選択します。

デプロイメント・マネージャーの詳細を含む、ご使用の環境を反映させるために、新規カスタム・ノード・ファイルを変更します。

使用可能なプロパティについて詳しくは、サンプル・ファイル内のコメントを参照するか、**configureNode** コマンドの解説と例を参照してください。

**制約事項:** サンプル・ファイルにリストされているパラメーターは、カスタマイズ可能なパラメーターのみです。

3. サンプル・ファイルの名前を渡して **configureNode** コマンドを実行します。例:

```
install_root\util\ndUtils\configureNode.bat -response node01_response_file.properties
```

**注:** **Failed to perform Security setting update** エラーが返された場合は、ホスト・ファイルでグローバル IP アドレスが **127.0.0.1 localhost** に付加されていないことを確認してください。例: **127.0.0.1 localhost example.ibm.com**

デプロイメント環境を拡張しました。

メッセージは、ファイル `install_root/logs/config/configureNode.log` に記録されます。

**ヒント:** Network Deployment 環境を構成した後にデータ・ストア接続をテストすると (例えば管理コンソールの「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」ページで) テスト接続の操作が例外

`com.ibm.wsspi.runtime.variable.UndefinedVariableException: Undefined Variable WAS_INSTALL_ROOT`


で失敗したことを通知するメッセージが表示されます。これは、必ずしも実行時にデータ・ソースへのアクセスに問題が生じることを示すわけではありません。データ・ソースを使用しなければならないすべてのクライアントが JDBC ドライバー・ファイルのロケーションにアクセスできることを確認してから、そのロケーションの絶対パスで変数を構成してください。実行時にデータ・ストアへの接続に問題が発生しなければ、テスト接続エラーは無視してください。追加情報については、テスト接続サービスに関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

**重要:** 固有のポートを持つ追加のサーバーを使用する場合、WebSphere Application Server ではそのサーバーの仮想ホストが自動的に構成されません。具体的には、WebSphere Application Server は、ホスト別名ポートを自動的に仮想ホストに追加しません。ただし、管理コンソールを使用して、新しいサーバーが使用するポートごとに新しいホスト別名を追加することは可能です。詳しくは、仮想ホストの構成に関する WebSphere Application Server の資料を参照してください。

関連概念:

 仮想ホスト

関連タスク:

 仮想ホストの構成

関連資料:

 テスト接続サービス

**プロファイルの構成および Network Deployment 環境の作成:**

製品をインストールした後に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張して、ランタイム環境を定義する必要があります。デプロイメント・マネージャーを開始する前に、IBM Business Process Manager で使用することになるデータベースを構成しておく必要があります。

**Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

**configureNode** コマンドを使用してデプロイメント環境を作成および構成する場合は、これ以上の構成は不要です。それ以外の場合は、デプロイメント環境を作成する前に、1 つのデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよび 1 つ以上のカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。プロファイルを使用することにより、IBM Business Process Manager の複数のコピーをインストールする必要なく、システムに複数のランタイム環境を持つことができます。

**DB2 データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

**デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。

## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項: Vista Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。



- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root¥properties¥portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** コマンドを実行します。
  - 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  - 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティ・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
    - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
  8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12`

ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカ



ル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** `manageprofiles` コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、`runas` コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず `manageprofiles` コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
  - プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。
1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- dmgr.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - dmgr.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
```

```

# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true

```

```

#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:

```



```

# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their

```

```

# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#

```

```

# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile

```

```

#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true

```

```

#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる *Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。



拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## プロファイル管理ツールを使用した DB2 データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
- プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー

には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリは、`install_root%profiles%profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルがデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメータは WebSphere Application Server パラメータです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリ・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。



- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

16. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

Windows ドメイン・コントローラー環境で BPM をインストールし、DB2 Express をインストールの一部としてインストールした場合は、ドメイン・ユーザー ID を使用して新規のデータベースおよび表を作成できないため、プロファイルの作成が失敗します。プロファイルを作成する前に、以下のいずれかの解決方法を使用します。

- Windows システムにローカル・システム・ユーザーとしてログインして、プロファイルを作成する。
  - プロファイルを作成する前に、『DB2 ログ・ファイル・エラー: SQL1092N 「USERID には要求されたコマンドまたは操作を実行する権限がありません。」』にリストされたステップを実行する。
1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root%properties%profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
  2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。 **augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョン

ョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install\_dir/profileTemplates/BPM* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root%BPM%samples%manageprofiles* ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。-profilePath パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、-response パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java  
-Duser.language=locale install_root  
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de  
install_root%  
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、

com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクターが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示され

て、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。



- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root*¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- managed.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - managed.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを実作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or

```

```

# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword

```

```

#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#

```



```

# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```

```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#

```

```

# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the

```

```

# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:

```

```

# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:

```

```

# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be

```



```

# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root\bin\ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
- a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。
- プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。
- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:



既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root\bin` ディレクトリから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、

`install_root\properties\profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。

2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root\profileTemplates\BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root%bin%startManager.bat
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。



- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root%bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-  
usernameuser_ID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### **DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:**

DB2 Universal Database for z/OS データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

#### **デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:**

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。

#### **プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java
-Duser.language=locale install_root
¥bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=de
install_root¥
bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root¥bin¥ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
- 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。
- 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
- 「プロファイル作成オプション」ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。
- 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
- 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

- b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル（コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど）が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならぬため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」 をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」 をクリックして 「**ポート値の割り当て**」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」 をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」 をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### Linux におけるプロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
- 2. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

- 4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
- 5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。
- 6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
- 7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
- 8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。



これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

## プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

- 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  - 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- dmgr.procctr:** IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

- dmgr.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。 以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db2user -dbPassword db2secret
-dbType DB2_DATASERVER -procSvrDbName BPMDB -perfDWDName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMGr_DB2zOS.response
```

```

#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```

profileName=Dmgr01

```
#####  
# Parameter:  cellName  
#  
# Description:  
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each  
#   profile.  
#   The default value for this parameter is based on a combination of the  
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:  
#   if (DMgr)  
#     shortHostNameCellCellNumber  
#   else  
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell  
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is  
#   the node number that you used to define the node name.  
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters  
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   Varies  
#  
# Parameter:  nodeName  
#  
# Description:  
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.  
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile  
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.  
#   This parameter is required for profile creation only with the  
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.  
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.  
#   The default value for this parameter is based on the short host name,  
#   profile type, and a trailing number, for example:  
#   if (DMgr)  
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber  
#   else  
#     shortHostNameNodeNodeNumber  
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.  
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters  
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   Varies  
#####  
cellName=cell_name  
nodeName=node_name  
  
#####  
# Parameter:  enableAdminSecurity  
#  
# Description:  
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative  
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.  
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword  
#   along with the values for these parameters.  
#  
# Valid Values:  
#   true  
# Default Values:  
#   true  
#####  
enableAdminSecurity=true  
adminUserName=adminUser_ID
```

adminPassword=adminPassword

```
#####  
# Parameter: signingCertDN  
#  
# Description:  
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you  
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in  
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the  
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root  
#   signing certificate, one is created by default. See the  
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter: signingCertValidityPeriod  
#  
# Description:  
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the  
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter  
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid  
#   for 20 years.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter: keyStorePassword  
#  
# Description:  
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile  
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate  
#   and the root signing certificate.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#####  
#signingCertDN =distinguished_name  
#signingCertValidityPeriod =validity_period  
#keyStorePassword =keyStore_password  
#####  
# Parameter: defaultPorts  
#  
# Description:  
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this  
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.  
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an  
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the  
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile  
#   parameter. The recommended port values can be different than the default  
#   port values based on the availability of the default ports.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   None  
#  
# Parameter: startingPort  
#  
# Description:
```

```

# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:

```



```

# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:

```

```

# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample

```

```

# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses DB2z0S.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_DB2z0S.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####
#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.
# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation
# root directory. Within the profileTemplates directory are various

```

```

# directories that correspond to different profile types and that vary with
# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the

```

```

#    root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#    with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#    for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port

```

```

# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:

```

```

# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID

```



```

#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「**詳細プロファイル作成**」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

- 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** コマンドを実行します。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。

6. 「プロファイル拡張オプション」 ページで、「**拡張**」を選択して「**次へ**」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  8. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは `WebSphere Application Server` パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
9. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。
11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。
12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

14. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、**Windows** サービスを使用して **IBM Business Process Manager** を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが **Windows** サービスとして構成されている場合、**IBM Business Process Manager** は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する **Windows** サービスを開始します。例えば、サーバーを **Windows** サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した DB2 for z/OS データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「管理者とし

て実行」を選択します。代わりの方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

DB2 for z/OS データベースを使用するには、「詳細プロファイル作成」を選択し、データベース設計ファイルを指定する必要があります。

1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。
2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「拡張」を選択して「次へ」をクリックします。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
  8. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。

- a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
9. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

10. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。
11. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。



- 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
- 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

13. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

14. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
  - デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root%properties%profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文チェックが適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- スクリプトを実行して DB2 for z/OS データベースを作成および構成します。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java  
-Duser.language=locale install_root  
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de  
install_root%  
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファ

イル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - 「Linux\_operating\_system\_menus\_to\_access\_programs」 > 「IBM」 > 「your\_product」 > 「プロファイル管理ツール」 をクリックします。
    - コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行します。
  3. 「ようこそ」 ページで、「プロファイル管理ツールの起動」 をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」 タブを選択します。
  4. 「プロファイル」 タブで、「作成」 をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」 をクリックします。
6. 「標準」 プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」 を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示され

て、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。



- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root*¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- managed.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - managed.procsrvr: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNameewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```

```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or

```

```

# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword

```

```

#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#

```



```

# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a

```

```

# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#

```

```

# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the

```

```

# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:

```

```

# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the

```

```

# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is

```

```

#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck
#
# Description:
#     The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#     service for the server process that is created within the profile. Specify
#     false to not create the Windows service. The default value for this
#     parameter is false.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#     The following values for Windows service startup can be used:
#     manual
#     automatic
#     disabled
#     The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#     manual
#     automatic
#     disabled
# Default Values:
#     manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  federateLaterBPM
#
# Description:
#     Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#     profileTemplates/managed.esbserver or the
#     profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#     or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#     -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#     parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#     WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#     true.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     true
#
# Parameter:  dmgrHost
#
# Description:

```

```

# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be

```



```

# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

**制約事項:****Vista****Windows 7**

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`pmt.bat` ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で `runas` コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「**標準**」または「**拡張**」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
- a. 「プロファイル名」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。

- 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
- 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
- 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、`WebAS` です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、`DataPower` 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「**戻る**」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「**ポート値の割り当て**」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「**次へ**」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「**ポート値の割り当て**」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。

- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:



既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して拡張することはできません。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、

`install_root\properties\profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。

2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root\profileTemplates\BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
- `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root%bin%startManager.bat
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。



- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイ그레이ション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root%bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-  
usernameuser_ID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### **Network Deployment** プロファイル作成後の DB2 for z/OS データベースの作成および構成:

プロファイルを作成または拡張した後、ユーザーまたはデータベース管理者は、データベースとその表を手動で作成する必要があり、さらにユーザーは、IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要もあります。

#### **DB2 for z/OS** の許可に関する前提条件:

IBM Business Process Manager データベースを作成する前に、ご使用の DB2 for z/OS バージョンに必要な許可が付与されていることを確認する必要があります。また、適切なストレージ・グループとバッファークラス・プールが割り当てられていることを確認し、必要に応じてクラスタリングを構成してください。

#### **DB2 for z/OS** のユーザー許可要件

付与されている権限を調べ、どのユーザー ID にも必要以上の権限を付与していないことを確認するように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。構成時に発生する可能性がある DB2 のセキュリティに関する問題を回避するために、JCA 認証別名に DB2 の SYSADM 権限を付与していることがよくあります。WebSphere 管理者 ID は、IBM Business Process Manager データベースを定義するための DBADM 権限より高い権限は必要ありません。

#DB\_USER# として識別される WebSphere 管理者には、デフォルトにより以下のストレージ・グループ、データベース、およびバッファ・プールの GRANT 許可が与えられます。これらの許可は、データベース設計ツールによって生成された createDatabase.sql データベース・スクリプトで使用できます。

```
GRANT USE OF STOGROUP #STOGRP# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;  
GRANT DBADM ON DATABASE #DB_NAME# TO #DB_USER#;  
GRANT USE OF ALL BUFFERPOOLS TO #DB_USER#;
```

#SCHEMA# のスキーマ修飾子を使用してシーケンスとストアド・プロシージャを作成する許可を #DB\_USER# ユーザーに与えるには、以下の GRANT 許可が必要になる場合があります。

```
GRANT CREATEIN,ALTERIN,DROPIN ON SCHEMA #SCHEMA# TO #DB_USER# WITH GRANT OPTION;
```

また、以下のアクセス権も必要です。

```
GRANT CREATE ON COLLECTION #SCHEMA# TO #DB_USER#;  
GRANT BINDADD TO #DB_USER#;
```

## DB2 for z/OS V10 上のビューに対する許可要件

DB2 for z/OS V10 を使用する場合は、データベース内のビューに対する追加の許可が必要です。

- SQL を実行してビューを定義する前に、必要に応じて DBACRVW サブシステム・パラメーターを YES に設定してください。

この設定により、データベース #DB\_NAME# に対する DBADM 権限を持つ WebSphere 管理者 ID が、他のユーザー ID 用のビューを作成できるようになります。

- DB2 for z/OS V10 では、データベースに対する DBADM 権限を持つユーザーにアクセス権限が暗黙的に付与されないため、WebSphere 管理者 ID にビューへのアクセス権限を具体的に付与する必要があります。DB2 for z/OS V10 内のビューへのアクセス権限を付与するには、個別の GRANT ステートメントまたはリソース・アクセス管理機能 (RACF) グループを使用します。以下のいずれかの方法でこのアクセス権限を付与するように、DB2 for z/OS 管理者に依頼してください。
  - ビューごとに、明示的な GRANT ステートメントを発行します。例えば、以下のサンプルの GRANT ステートメントをユーザー ID WSADMIN に対して発行できます。

```
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ACTIVITY_SERVICE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.APPLICATION_COMP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.AUDIT_LOG_B TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.BUSINESS_CATEGORY_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESCALATION_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.ESC_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.EVENT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.MIGRATION_FRONT TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_ATTRIBUTE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_INSTANCE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPLATE TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.PROCESS_TEMPL_ATTR TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROPERTY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.QUERY_PROP_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.SHARED_WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_AUDIT_LOG TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;  
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE SICELL.TASK_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
```

```

GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_HISTORY TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL_CPROP TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.TASK_TEMPL_DESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET_DIST_TARGET TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_BASKET_LDESC TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;
GRANT DELETE,INSERT,SELECT,UPDATE ON TABLE S1CELL.WORK_ITEM TO WSADMIN WITH GRANT OPTION;

```

- ビューのスキーマ名に対応する RACF グループを定義し、WebSphere 管理者 ID を RACF グループに接続します。例えば、S1CELL という名前の RACF グループを定義し、ユーザー WSADMIN をこのグループに接続するには、以下のようにします。

```

INFORMATION FOR GROUP S1CELL
SUPERIOR GROUP=ZWPS OWNER=ZWPS CREATED=07.144
INSTALLATION DATA=OWNED BY EMP SERIAL 009179, SITE ABCUK
NO MODEL DATA SET
TERMUACC
NO SUBGROUPS
USER(S)= ACCESS= ACCESS COUNT= UNIVERSAL ACCESS=
WSADMIN CONNECT 000000 NONE
CONNECT ATTRIBUTES=NONE
REVOKE DATE=NONE RESUME DATE=NONE

```

### 構成計画スプレッドシートを使用した許可の定義

使用する構成計画スプレッドシートをダウンロードした場合は、代替手段としてこのスプレッドシートを使用して、ユーザーおよび DB2 for z/OS V10 ビュー (このトピックの前述のセクションで特定したもの) に必要な GRANT 許可を生成することもできます。構成計画スプレッドシートは、IBM Support Portal の Techdoc WP102075 から使用できます。

スプレッドシートの Database ワークシートには、データベースおよびストレージ・グループの作成に使用できるサンプルの SQL ステートメント一式がリストされています。さらに、WebSphere 管理者の許可と DB2 for z/OS V10 データベース表へのアクセス権限の付与に必要な GRANT 許可も付与されます。スプレッドシートの BPMVariables ワークシートでユーザー名とデータベース・オブジェクト名を指定すると、これらの値が Database ワークシートに伝搬され、これらの値と適切な値を使用して CREATE および GRANT ステートメントが入力されます。

DB2 for z/OS システム管理者に、関連する CREATE ステートメントを使用したデータベースおよびストレージ・グループの作成と、GRANT ステートメントを使用した WebSphere 管理者の権限付与を依頼してください。スプレッドシートから生成された成果物の使用について詳しくは、Techdoc に付属する PDF 文書を参照してください。

### ストレージ・グループの割り当ておよびバッファ・プールの使用量

ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量を調べるように、DB2 for z/OS システム管理者に依頼してください。ストレージ・グループの割り当てとバッファ・プールの使用量が不適切であっても、ログにエラー・メッセージとして表示されない場合がありますが、後で問題の原因になる可能性があります。このような問題は、システムをユーザーに提供した後ではなく、今すぐに解決することを推奨します。例えば、ストレージ・グループや VCAT の修正は、表と索引の使用が開始された後では容易ではありません。

### クラスタリング要件

クラスタリングを構成する場合は、DB2 for z/OS システムがデータ共用モードで稼働している必要があります。

## 関連タスク:

838 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1058 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (AIX Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

211 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

433 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Linux Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1459 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

1682 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Solaris Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2100 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows スタンドアロン)』

データベース設計ツールを使用すると、スタンドアロン・プロファイルを作成するときに使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 for z/OS サブシステムでのデータベースの作成:

データベース設計ツール (DbDesignGenerator) を使用してデータベース構成を定義する場合、IBM Business Process Manager コンポーネント用のデータベースを作成するために必要なデータベース・スクリプトを生成できます。

これらのデータベース・スクリプトを実行するために、さまざまなツールを使用できます。

- データベース設計ツールを実行してデータベース・スクリプトを生成すると、**createDB2.sh** スクリプトも生成されます。**createDB2.sh** を使用して、データベース・スクリプトを実行できます。
- DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTEP2 などのツールを使用してデータベース・スクリプトを実行することもできます。

### 使用するツールの選択

使用するツールは、経験や慣れ、または個人的な好みに基づいて選択できます。組織によっては (実稼働環境では特に)、DB2 for z/OS オブジェクトの作成に使用するツールについて標準や規則が定められている場合もあります。

#### createDB2.sh スクリプトの選択に関する考慮事項

- **createDB2.sh** を使用すると、ツールを 1 回実行するだけですべてのデータベース・オブジェクトを作成できます。サーバーを初めて実装する場合は、これを選択することをお勧めします。
- **createDB2.sh** は、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) が生成するデータベース・スクリプトを実行します。
- **createDB2.sh** は、各コンポーネントの SQL を正しい順序で実行します。
- **createDB2.sh** は、定義する命名規則に従ってデータベース・オブジェクトを作成します。
- **createDB2.sh** は、DB2 for z/OS データベース間でデータベース・オブジェクトのレイアウトを編成します。
- **createDB2.sh** は、データベース、ストレージ・グループ、およびバッファ・プール・オブジェクトに対して GRANT 権限を発行します。
- **createDB2.sh** は、サービス統合バスのデータ定義言語 (DDL) のカスタマイズを自動的に完了します。
- **createDB2.sh** は、UNIX システム・サービス環境で実行されます。
- **createDB2.sh** は、作成したオブジェクトの監査証跡を生成します。

#### 他のツールの選択に関する考慮事項

- UNIX システム・サービス環境で SQL ステートメントを実行する場合、DB2 コマンド・ライン・プロセッサの使用を選択することがあります。まず、SQL ステートメントの実行をバイパスするモードで **createDB2.sh** スクリプトを実行し、SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合する必要があります。そうすると、コマンド・ライン・プロセッサを使用して、これらのファイルを実行できるようになります。
- データベース・サブシステムの標準の制限以外、データベース・オブジェクトに適用される命名規則や編成規則についての制限はありません。
- 一部のツールは、z/OS 環境から実行される場合があります。
- 各ツールによって、発行された DB2 データベース・コマンドの監査証跡が生成される場合があります。

## 関連タスク:

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサの構成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

DB2 コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイル (`clp.properties` など) が存在していることを確認してください。必要であれば、コマンド行プロセッサがインストールされているディレクトリー内にあるサンプル・プロパティ・ファイルを使用して、独自のプロパティ・ファイルを作成することができます。詳細については、DB2 for z/OS の資料を参照してください。

**createDB2.sh** スクリプトの実行元となる z/OS UNIX System Services 環境で、以下の構成ステップを実行します。

1. DB2 for z/OS でコマンド行から作業を行う各ユーザー ID 用に、DB2 コマンド行プロセッサを構成します。個人用のプロファイルまたは共有ユーザー・プロファイルを以下のように更新することができます。
  - CLASSPATH 環境変数を、`clp.jar` ファイルを含むように変更します。
  - CLPPROPERTIESFILE 環境変数を使用して、コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルの完全修飾名を定義します。
  - **db2** コマンドを、コマンド行プロセッサを開始するコマンドの別名として定義します。
  - コマンド行プロセッサに適用する JDBC プロパティを定義した `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを指定します。

`.profile` または `/etc/profile` ファイルに必要な項目を追加する際には、以下の構文を使用できます。

```
export CLPHOME=clp_install_dir
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=clp_properties_file_path
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

例:

```
export CLPHOME=/shared/db2910_base
export CLASSPATH=$CLASSPATH:$CLPHOME/lib/clp.jar
export CLPPROPERTIESFILE=/wasv8config/clp.properties
alias db2="java -Ddb2.jcc.propertiesFile=file_path/DB2JccConfiguration.properties com.ibm.db2.clp.db2"
```

2. コマンド行プロセッサのプロパティ・ファイルで、DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名を定義します。別名定義には、以下のエンティティーを含めることができます。
  - データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス、サーバーが `listen` するポート、およびインストール時に定義された DB2 のロケーション名が指定された URL。URL は次の形式をとります：  
`:server:port/database` `port` はオプションです。DB2 のロケーション名は大文字で指定する必要があります。

- DB2 サーバーへの接続に使用できるユーザー ID とそれに対応するパスワード。このユーザー ID は、DB2 システム管理者が **createDB2.sh** スクリプトを実行する場合に使用する (SYSADM 権限のある) ユーザー ID に対応している必要があります。

以下の構文を使用して、プロパティ・ファイルに別名の必要な項目を追加することができます。

```
DB2ALIASNAME=URL,user_ID,password
```

以下に例を示します。

```
DSNXWBD=localhost:9446/DSNXWBD,SYSADM1,SYSPWRD1
```

**ヒント:** プロパティ・ファイルに *DB2ALIASNAME* 値を定義するときは、誤ったデータベースに接続して意図せずにその内容を上書きしてしまうことを防ぐために、正しい接続の詳細が指定されていることを確認してください。

3. データベース上の DBADM 権限を持つユーザー ID が、他のユーザー ID に対して、データベース内の表のビューの作成、表の別名の作成、マテリアライズ照会表の作成の各タスクを実行できるように、DB2 DBACRVW サブシステム・パラメーターを構成します。インストール・コマンド・リスト (CLIST) を使用して DSNTIPP ISPF パネルにアクセスし、DBADM CREATE AUTH フィールドを更新して DB2 ZPARM DBACRVW=YES を設定することができます。

**createDB2.sh** スクリプトを使用して、指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成する SQL を実行するか、または SQL ステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します (これらのファイルは、後で他のデータベース・ツールを使用して実行することができます)。

#### 関連タスク:

『createDB2.sh スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

2516 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### **createDB2.sh** スクリプトを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・スクリプトを作成した後、**createDB2.sh** スクリプトを実行して、DB2 for z/OS サブシステムに 1 つ以上のデータベースを作成し、各データベースにオブジェクトを取り込むことができます。

また、DB2 コマンド行プロセッサ、SPUFI、または DSNTPE2 などのツールを使用してデータベースを作成して取り込むこともできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファー・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。

- 必要なバッファロー・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

IBM Business Process Manager のインストール済み環境のために作成するデータベースの数は、トポロジー、および DB2 for z/OS サブシステム内でデータベース・オブジェクトをどのように配布するかによって異なる場合があります。データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。例:

- 単一のデータベースを作成する場合は、IBM Business Process Manager の全コンポーネント用に生成されたすべてのデータベース・スクリプトが含まれているディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度実行することができます。
- セル・レベルおよびクラスター・レベルで複数のデータベースを作成する場合は、セルおよびクラスター用のデータベース・オブジェクトの作成に必要なデータベース・スクリプトが含まれている各ディレクトリーから、**createDB2.sh** を一度ずつ実行することができます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCcreate
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID -RunSQL
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは



DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**-RunSQL**

データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントを実行します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBSTO -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN -RunSQL
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『**createDB2.sh** スクリプト』を参照してください。

3. コンソールに表示されたメッセージを調べて、エラー・メッセージが表示されていないことを確認してください。

**ヒント:** 初めて **createDB2.sh** を実行してデータベースを作成するときには、スクリプトがまずその段階ではまだ存在していないデータベースを除去しようとするため、いくつかのメッセージが表示されます。これらのメッセージは無視することができます。それ以降同じデータベースに対して **createDB2.sh** を呼び出したときには、このようなメッセージは生成されません。

スクリプトの実行が終了したら、**z\_output.txt** ファイルを確認することもできます。このファイルは、完了した操作と状況メッセージの監査証跡を提供します。このファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリー内に格納されます。

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

## 関連タスク:

2512 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

## DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

また、これらの .sql ファイルは、他の任意のデータベース・ツール (SPUFI または DSNTEP2 など) を使用して実行することもできます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えば、Network Deployment 環境では、2 つの DB2 for z/OS データベースを定義して、1 つを共通データベース・コンポーネント (セル・スコープ) に使用し、もう 1 つをそれ以外のすべてのコンポーネント (クラスター・スコープ) に使用します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールを使用して、作成するデータベースごとに 1 つの出力ディレクトリーを作成するように、およびそのディレクトリー内に、関連のあるすべてのデータベース・スクリプト (データベースの作成に必要な **createDB2.sh** スクリプトを含む) を生成するように、データベース構成のセットアップを行います。
- FTP を使用して、**createDB2.sh** スクリプトなどのデータベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。**createDB2.sh** スクリプトは ASCII テキスト・ファイルとして転送し、データベース・スキーマ・ファイルはバイナリー・モードで転送します。また、ファイルの転送時に、ディレクトリー構造を保持するようにしてください。
- **createDB2.sh** スクリプトに実行権限を付与します。
- プロファイルを作成または拡張します。
- DB2 コマンド行プロセッサを構成します。

データベース設計ツールを実行したときに指定された出力ディレクトリーで、データベース・スクリプトが適切にグループ化されていれば、作成されるデータベースのインスタンスごとに **createDB2.sh** スクリプトを 1 回実行できます。

**重要:** DB2 for z/OS システム管理者は、SYSADM 権限を持つユーザー ID で **createDB2.sh** スクリプトを実行して、データベースおよびストレージ・グループを作成することが想定されています。それが完了した後、システム管理者は、IBM Business Process Manager データベースに対する DBADM 権限を WebSphere 管理者に付与できます。

作成したいデータベースごとに、以下のステップを実行します。

1. DB2 のインストール済み環境が含まれている z/OS システムで、UNIX System Services コマンド・シェルにアクセスしてから、作成するデータベース・オブジェクト用のデータベース・スクリプトを転送したディレクトリーに移動します。 例:

```
cd /u/work/S4CELLDB
```

2. 以下の構文を使用して、**createDB2.sh** スクリプトを実行します。

```
createDB2.sh -DBAlias alias_name -DBName database_name -DBSto storage_group_name -DBCreate  
-DBVCat volume_catalog -DBUser DB_user_ID
```

ここで、

**-DBAlias**

DB2 サーバー URL、ユーザー ID、およびパスワードにマップされる別名を指定します。これは DB2 に接続するために使用されます。このパラメーターを指定しない場合、**createDB2.sh** スクリプトを実行するときに、値の入力を求めるプロンプトが表出されます。

**-DBName**

作成するデータベースの名前を指定します。

**-DBSto**

表と索引が保管されるデータ・セットが置かれたボリュームのストレージ・グループ名を指定します。

**-DBCreate**

データベースを作成します。

**-DBVCat**

データ・セットの情報を記録する DB2 Virtual Storage Access Method (VSAM) カタログの名前を指定します。

**-DBUser**

作成される IBM Business Process Manager データベースに対するデータベース管理権限を持つ WebSphere 管理者のユーザー ID を指定します。

**ヒント:** **-RunSQL** パラメーターを省略して、データベース・オブジェクトを作成する SQL ステートメントの実行をバイパスし、それらのステートメントを 2 つの .sql ファイルに統合します。

例:

```
createDB2.sh -DBAlias DSNXWBD -DBName S4CELLDB -DBSto S4DBST0 -DBCreate -DBVCat DSNV10PP  
-DBUser S4ADMIN
```

**createDB2.sh** スクリプトで使用可能なすべてのパラメーターおよび使用例については、『createDB2.sh スクリプト』を参照してください。

統合された SQL ステートメントを保持する `z_schema.sql` ファイルおよび `z_schemaProc.sql` ファイルは、**createDB2.sh** スクリプトを実行したディレクトリーに生成されます。`z_schemaProc.sql` ファイル

ルには、ストアード・プロシージャの SQL ステートメントが含まれます。z\_schema.sql ファイルだけでなく、このファイルも生成されるのは、コマンド行プロセッサの実行時に、ストアード・プロシージャによりステートメント終了文字として「アット」マーク (@) が必要となるためです。

3. DB2 コマンド行プロセッサをバッチ・モードで実行して、z\_schema.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。

```
db2 -f /createDB2.sh_path/z_schema.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -f /u/work/S4CELLDB/z_schema.sql
```

コマンド行プロセッサは、ファイル内のデータを読み取り、ファイル内のコマンドを連続して処理します。

4. DB2 コマンド行プロセッサをもう一度実行して、z\_schemaProc.sql ファイル内の SQL コマンドを実行します。さらに、**-td** パラメーターを使用して @ をステートメント終了文字として定義します。

```
db2 -td@ -f /createDB2.sh_path/z_schemaProc.sql
```

以下に例を示します。

```
db2 -td@ -f /u/work/S4CELLDB/z_schemaProc.sql
```

各データベースが作成され、必要なデータベース・オブジェクトが取り込まれます。

#### 関連タスク:

2512 ページの『DB2 コマンド行プロセッサの構成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する前に、一連の環境変数と **db2** コマンドの別名を定義することによって、DB2 コマンド行プロセッサを構成する必要があります。DB2 for z/OS サーバーへの接続に使用できる別名も定義する必要があります。

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

#### **SPUFI または DSNTEP2 を使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成:**

SPUFI または DSNTEP2 などのツールを使用して、構成のための DB2 for z/OS データベース・オブジェクトを作成するために使用するデータベース・スクリプトを実行することができます。

- DB2 for z/OS データベースの設計と構成を決定します。これには、IBM Business Process Manager コンポーネントに必要なデータベースの数が含まれます。例えばスタンドアロン・サーバー環境では、すべてのコンポーネント・データベースを 1 つの DB2 for z/OS データベース内でセットアップすることを決定します。
- DB2 for z/OS オブジェクト (データベース、ストレージ・グループ、VSAM カタログ名 (VCAT)、スキーマ接頭部、バッファ・プール、セキュリティ ID など) の命名規則を決定します。
- 必要なバッファ・プールを作成します。詳細については、『サンプル DB2 コマンドおよび SQL』を参照してください。
- データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行して、IBM Business Process Manager コンポーネントのデータベース・オブジェクトを作成するために使用できるデータベース・スクリプトを生成します。データベース設計ツールによって、作成される各データベースごとに 1 つの出力ディレクトリーが

作成され、データベースの作成に必要なすべての関連データベース・スクリプトがそのディレクトリー内に生成されるように、データベース構成をセットアップします。

**ヒント:** 生成されるスクリプト (データベース・オブジェクトの作成に使用されるもの) のフォーマットは、ASCII でも EBCDIC でもかまいません。一般的に、生成された .sql ファイルは ASCII フォーマット、生成された .ddl ファイルは EBCDIC フォーマットになっています。

- FTP を使用して、データベース・スクリプトを、DB2 for z/OS のインストール済み環境が含まれる z/OS システムに転送します。
- プロファイルを作成または拡張します。

任意のツールを使用してデータベース・オブジェクトを作成することができます。例:

**SPUFI** z/OS から SQL スクリプトを実行するユーティリティーです。SPUFI は EBCDIC 入力を使用します。

## DSNTEP2

DB2 for z/OS 製品に付属の、サンプルの動的 SQL プログラムです。

1. SQL スクリプトに対して適切な読み取り権限を割り当てます。例えば、以下のようにします。

```
chmod 644 createTable_AppScheduler.sql
```

2. スクリプトの表示、編集、および実行に使用するツールにおいて、スクリプトのフォーマットが ASCII ではなく EBCDIC である必要がある場合は、**iconv** コマンドを使用してファイルを EBCDIC フォーマットに変換します。例:

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createTable_AppScheduler.sql >  
createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql
```

**重要:** ASCII から EBCDIC に変換した後に、SQL ステートメントの長さが 71 文字を超えていないことを確認してください。このような長さのステートメントがあると、固定幅の MVS データ・セットにコピーするときに行が切り捨てられ、ステートメントが無効になります。

**ヒント:** ASCII フォーマットから EBCDIC フォーマットに変換したファイルを ASCII フォーマットで実行する必要がある場合は、**iconv** を使用してファイルを ASCII フォーマットに戻すこともできます。例:

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createTable_AppScheduler_EBCDIC.sql >  
createTable_AppScheduler.sql
```

3. 必要に応じて createDatabase.sql ファイルおよび dropDatabase.sql ファイル内の値を編集します。以下のシンボリック変数は、更新する必要があります。

```
@STOGRP@    = DB2 Storage group name  
@DB_NAME@   = DB2 Database name  
@SCHEMA@    = DB2 SQLID (Schema Qualifier)  
@BPTABLE4K@ = Buffer Pool of 4k Size  
@BPINDEX@   = Buffer Pool Index  
@VOLUMES@   = DB2 comma separated list of volume-ids  
@VCAT@      = DB2 integrated catalog facility name  
@DB_USER@   = The user ID which will be used to create the database objects
```

4. z/OS UNIX 環境外で SPUFI または DSNTEP2 を使用してデータベース・オブジェクトを作成するには、z/OS UNIX のカスタマイズ済みのデータベース・スクリプトを区分データ・セットにコピーします。
5. 任意のツールを使用して、カスタマイズ済みのスクリプトを実行します。

**ヒント:** 以前に **createDB2.sh** スクリプトを実行していて、SQL スクリプトの実行をバイパスする場合は、生成された統合 SQL ファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) を実行することもできます。

- 出力を調べることによって、エラーが発生せずに正常にデータベース表が作成されたことを確認します。

#### 関連タスク:

2330 ページの『データベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成 (Windows Network Deployment)』

データベース設計ツールを使用して、データベース構成の設計を指定できます。この設計は、特定のコンポーネント用にも、IBM Business Process Manager の全機能をサポートするエンタープライズ・レベルのデータベース構成用にもなります。

2516 ページの『DB2 コマンド行プロセッサを使用した DB2 for z/OS データベース・オブジェクトの作成』

**createDB2.sh** スクリプトを実行する際、SQL を直ちに実行して指定したデータベースのデータベース・オブジェクトを作成するか、または SQL スクリプトの実行をバイパスして後でそれらのスクリプトを実行することができます。SQL の実行をバイパスすると、**createDB2.sh** スクリプトによって SQL ステートメントが 2 つのファイル (z\_schema.sql および z\_schemaProc.sql) に統合されます。これらのファイルは、DB2 コマンド行プロセッサを使用して後で実行することができます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストアの作成:

まだメッセージング・エンジンのデータ・ストアを作成していない場合は、データベース設計ツールを使用して、メッセージング・エンジンのデータ・ストアのテーブルを作成するためにデータベース管理者が使用するデータベース・スクリプトを生成します。

データベース・スクリプトを作成して実行する前に、以下を行います。

- クラスタを作成します。
- Network Deployment 構成で作成するサービス統合バス・コンポーネントを決定します。

構成する以下のコンポーネントごとにメッセージング・エンジンのデータ・ソースを作成し、設定します。

- Service Component Architecture システム・バス
- Service Component Architecture アプリケーション・バス
- Process Server
- パフォーマンス・データウェアハウス
- Common Event Infrastructure

すべてのデータベース・オブジェクトを DB2 for z/OS サブシステムの 1 つ以上のデータベース内に作成することができます。以下の考慮事項に注意してください。

- すべてのメッセージング・エンジンは、同じ表名を使用します。このため、各メッセージング・エンジンのテーブルには、固有のスキーマ修飾子が必要です。
- データベース設計ツールを使用して各メッセージング・エンジンのデータベース構成を定義するときに、表スペース名に接頭部を指定できます。
  - すべてのメッセージング・エンジンに対して 1 つのデータベースを使用する予定である場合は、各メッセージング・エンジンに固有の表スペース接頭部を指定して、データベース内でその表スペース名が固有であるようにします。

- メッセージング・エンジンごとに別々のデータベースを使用する予定である場合は、メッセージング・エンジンに同一の表スペース接頭部を指定することも、固有の接頭部を指定することもできます。
1. 各メッセージング・エンジンについて、以下の手順を実行して、必要なデータベース・スクリプトを生成します。
    - a. `install_root/util/dbUtils` ディレクトリーから、データベース設計ツール (**DbDesignGenerator**) を実行します。
    - b. 「**(2)単一コンポーネントのデータベース設計の作成**」オプションを選択してから、そのメッセージング・エンジンに該当するオプションを選択します。
    - c. ツールの残りのプロンプトで入力を行って、データベース構成を定義し、スクリプトを生成します。

**ヒント:** それぞれのメッセージング・エンジン用のスクリプトを生成するために、データベース設計ツールを何度も実行する代わりに、「**(1)スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント環境のデータベース設計の作成**」オプションを使用して、ツールを一度だけ実行する方法があります。このオプションでは、共通データベース、Business Process Choreographer、Performance Data Warehouse、Process Server、Business Space、および 6 個のメッセージング・エンジンのすべてのコンポーネントに対して、ツールを 1 回実行するだけで、データベース構成の定義とデータベース・スクリプトの生成を実行することができます。

2. お好みのツールを使用して、生成された DDL スクリプトを実行します。

メッセージング・エンジンのデータ・ストアが作成されます。

#### 関連タスク:

2337 ページの『Network Deployment 環境における DB2 for z/OS を使用した特定コンポーネント用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用して、特定の IBM Business Process Manager コンポーネントが必要とするデータベース表の設計ファイル、およびオプションのデータベース・スクリプトを生成することができます。

2330 ページの『DB2 for z/OS を使用したデプロイメント環境用のデータベース設計ファイルおよびデータベース・スクリプトの作成』

データベース設計ツールを使用すると、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時またはデプロイメント環境ウィザードの使用時にデータベースを構成するために使用する設計ファイルを生成できます。データベース設計ツールでは、データベース表の作成に使用できるデータベース・スクリプトも生成されます。

#### JCA 認証別名ユーザー ID への表の特権の付与:

使用しているスキーマ名が JCA 認証別名ユーザー ID と同じものでない場合は、DB2 for z/OS 特権のサブセットを JCA 認証別名ユーザー ID に付与する必要があります。

サービス統合バス (SIB) 用のデータベース・スクリプトには、コメント化された GRANT コマンドが含まれています。これをベースとして使用して、SIB 表へのアクセス権限を付与することができます。ただし、他の IBM Business Process Manager コンポーネントは GRANT ステートメントを提供しません。

JCA 認証別名とは異なるスキーマ名を使用して、別名ユーザー ID に表を除去する権限を与えないようにしてください。(テーブルを除去する権限は、作成者、つまりスキーマには暗黙的に付与されます。)

DBADM のような特権を JCA 認証別名ユーザー ID に付与することには意味がありません。これは、DBADM 特権でもテーブルを除去することができるからです。

別名ユーザー ID で DROP を実行できないようにすると同時に、IBM Business Process Manager を機能させるには、いくつかの GRANT ステートメントを作成します。そのためには、データベース・スクリプトをコピーし、それを編集して、CREATE コマンドから GRANT ステートメントを作成します。以下の例に示すような GRANT コマンドを作成できます。

```
GRANT ALL PRIVILEGES ON TABLE  
cell.tablename TO userid/sqlid
```

ここで、*userid/sqlid* は JCA 認証別名ユーザー ID です。

注: 通常、データベース・オブジェクトの作成者は、追加の GRANT 権限を必要とすることなく、暗黙的にそのオブジェクトを使用できます。ただし、DB2 for z/OS バージョン 10 の場合、ビューへのアクセス権は作成者に暗黙的に付与されないため、ビューに対する追加の GRANT 権限が必要になる場合があります。

### メッセージング・エンジンの正しいスキーマ名の設定:

サービス統合バス (SIB) メッセージング・エンジンが適切な DB2 for z/OS 表に確実にアクセスできるようにするために、メッセージング・エンジンに対して正しいスキーマ名を設定する必要があります。管理コンソールを使用してスキーマ名を変更できます。

サーバーを始動します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」にナビゲートします。
3. 各メッセージング・エンジンに対して、次のようにします。
  - a. 「メッセージング・エンジン」を選択し、表示される名前をクリックします。
  - b. 「メッセージ・ストア」をクリックします。
  - c. 「スキーマ名」の値を、このメッセージング・エンジン用の DB2 for z/OS 表を作成したときに使用した名前に変更します。
  - d. 「適用」をクリックします。
  - e. 構成変更を保存します。
4. メッセージング・エンジンを始動できることを確認します。
  - a. 管理コンソールからログアウトします。
  - b. サーバーを停止し、再始動します。
  - c. サーバー・ログの出力を参照して、SIB メッセージング・エンジンが正常に始動したことを示すメッセージを確認します。 例:

```
BB000222I: "BusName"  
CWSID0016I: Messaging engine MessagingEngineName is in state Started.
```

### Oracle データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:

Oracle データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、プロファイルを作成できます。



## プロファイル管理ツールを使用した *Process Center* デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、*Process Center* のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java
-Duser.language=locale install_root
¥bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=de
install_root¥
bin¥ProfileManagement¥startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root¥bin¥ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。

2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**標準**」または「**拡張**」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。 指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。 このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。 このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、`Windows` サービスを使用して `IBM Business Process Manager` を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが `Windows` サービスとして構成されている場合、`IBM Business Process Manager` は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する `Windows` サービスを開始します。例えば、サーバーを `Windows` サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー

ー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

- 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  - 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成 :

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項: Vista Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「管理者とし

て実行」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用  
のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理  
するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロフ  
ァイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから  
発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ  
しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロ  
ファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必  
要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベ  
ルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページ  
が再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを  
実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノ  
ード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなけれ  
ばなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確  
認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および  
tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パー  
ト 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をイン  
ポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の  
新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の  
新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an  
existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import  
an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプ  
を選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択し  
ます。

– 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。



「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」 をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」 をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** `manageprofiles` コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、`runas` コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず `manageprofiles` コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root\bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root\profileTemplates\BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『`manageprofiles`』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`

- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId db7user -dbPassword db7secret
-dbType ORACLE -procSvrDbName BPMDB -perfDWDbName PDWDB
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

## Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMgr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
```

```

#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:

```

```

# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#    settings for the new profile.
#    Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#    parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the

```

```

# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:

```



```

# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####

```

```

# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN
#####

# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####

# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false
```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
```

```

# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.

```

```

# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you

```

```

# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType

```



```

#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
- 2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
- 6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから

発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 必須: 「**管理セキュリティー**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「**次へ**」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「**セキュリティー証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティー証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root%properties%portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## プロファイル管理ツールを使用した Oracle データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。

- `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
- 2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- 3. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
- 4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
- 5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
- 6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
7. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
  8. 拡張: 「**オプションのアプリケーション・デプロイメント**」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**」を**デフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから



発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

11. 必須: 「**管理セキュリティ**」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 1)**」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「**パス**」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「**パスワード**」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「**次へ**」をクリックすると、「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「**セキュリティ証明書 (パート 2)**」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「**次へ**」をクリックして「**ポート値の割り当て**」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root*¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、*install\_root*¥properties¥profileRegistry.xml ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- dmgr.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - dmgr.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

**注:** *install\_dir*/profileTemplates/BPM ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。

- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- 1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
- 2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
  - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
- 3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
- 4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

- 5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
- 6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
- 7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
- 8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
  - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

- 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「**OK**」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。



- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。
- ltpa.jceks: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が key.p12 ファイルまたは root-key.p12 ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しな

いことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root¥properties¥portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、**install\_root¥bin** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- managed.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - managed.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PS\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PS\_Std\_Standalone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
```

```

# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true

```

```
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
```

```

# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows

```



```

# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
# The following values for Windows service startup can be used:
# manual
# automatic
# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false

```

```

# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#

```

```

# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to

```

```

# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,

```

```

# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

```

```

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:

```

```

# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
#   The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
#   databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
#   server operating system. Server installations on all operating systems use
#   type 4.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbDriverType=ORACLE_THIN

```



```

#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

## プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。

- ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
  - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  5. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  7. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「**プロファイル名およびロケーション**」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
    - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「次へ」をクリックします。
11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
  - デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

関連情報:

 既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、既存の **WebSphere Application Server V8.0** プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root*¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。カスタム・プロファイルを増やす必要があります。テンプレートは、*install\_root*¥properties¥profileRegistry.xml ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- managed.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - managed.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

**注:** *install\_dir*/profileTemplates/BPM ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、**'personalCertValidityPeriod=1 '** や **'winserviceCheck=false '**) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response



- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

## カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用し) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root%bin%startManager.bat
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
  - デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
  - デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
  - このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root%bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティーが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -  
username userID_for_authentication -password password_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

## 関連情報:

 管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

### SQL Server データベース・サーバーによる Network Deployment プロファイルの作成または拡張:

Microsoft SQL Server データベース・サーバーを使用して、IBM Business Process Manager の Network Deployment 環境を構成することができます。

### デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成を開始するには、デプロイメント・マネージャーを作成または拡張します。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、プロファイルを作成できます。

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、**com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException**、つまりアクセス拒否メッセージが **install\_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat** ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファ

イル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」ページで、「標準」または「拡張」プロファイル作成を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティ」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページが表示されます。
- 個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティ証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

`profile_root/properties/portdef.prop`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発生した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

14. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  15. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

## プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  - 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。



2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「環境の選択」 ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」 ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プロファイル作成オプション」 ページで、「**標準**」または「**拡張**」プロファイル作成を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。「**標準**」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
6. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「**次へ**」をクリックします。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」 フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」 フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「**参照**」 ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイルをデフォルトに設定する**」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」 リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」 フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」 フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」 フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」 フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「**次へ**」をクリックします。

9. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。
- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
  - 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
    - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
    - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
    - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
    - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
    - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そうしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。

- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の `WebSphere` 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する `WebSphere` アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、`WebSphere Application Server` インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、`Windows` サービスを使用して `IBM Business Process Manager` を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが `Windows` サービスとして構成されている場合、`IBM Business Process Manager` は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する `Windows` サービスを開始します。例えば、サーバーを `Windows` サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー

ー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

- 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  - 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、新規プロファイルを作成します。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- dmgr.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
  - dmgr.procsvr: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

注: 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbType MSSQLSERVER_MICROSOFT
-dbHostName dbHost.com -procSvrDbName BPMDB -dbProcSvrUserId procadm -dbProcSvrPassword procpwd
-perfDWDbName PERFDW -dbPerfDWUserId perfadm -dbPerfDWPassword perfpwd -dbName CMNDB
-dbCommonUserId commonadmin -dbCommonPassword commonpwd
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

#### デプロイメント・マネージャー・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PC Std profile that uses SQLServer.
#
```

```

# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_DMgr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true

```



```

# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
# Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
# for the profile.
# Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
# omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
# settings for the new profile.
# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceUserName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.

```

```

# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

**Standard Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルのサンプル応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンドを使用してデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# DMgr PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#

```

```

# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_DMGr_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/dmgr.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#####
profileName=Dmgr01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true

```

```
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
```

```
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
```



```

# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```

# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#

```

```

# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
  - ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  6. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。

- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root%profiles%profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12`

ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root%properties%portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、`startServer` または `startManager` コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、`startServer` コマンドを実行すると、`wasservice` コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカ



ル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### プロファイル管理ツールを使用した SQL Server データベース・サーバーによる Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することができます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

#### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- データベース構成に使用するデータベース設計ファイルを指定します。
- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  2. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  3. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動**」をクリックするか、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。
  4. 「**プロファイル**」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「**拡張**」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。
  5. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。
  6. 「**プロファイル拡張オプション**」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

7. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、管理セキュリティー・ステップにスキップしてください。
8. 拡張: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで、サーバー管理用の管理コンソール (推奨) をデプロイするかどうかを選択します。「次へ」をクリックします。
9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」 ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root¥profiles¥profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルがデフォルト・プロファイルにするには、「**このプロファイル**をデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」 ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
    - 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
    - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
    - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 必須: 「管理セキュリティー」 ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、`tw_admin` および `tw_user` を含むすべての内部ユーザーに使用されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルは管理セキュリティーが有効でなければならないため、「次へ」は、値が入力されて初めて使用可能になります。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、データベース構成 - パート 1 ステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。 プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている **ws\_ant** スクリプトを使用して **updatePorts.ant** ファイルを実行します。

15. 拡張: 管理特権を持っていない場合は、次のステップに進みます。管理特権を持っている場合は、「サービスの定義」 ページで、Windows サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、IBM Business Process Manager は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

**プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) に関する考慮事項**

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・シ

システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

16. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
  17. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。
- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** `manageprofiles` コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、`runas` コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず `manageprofiles` コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張する必要があります。テンプレートは、`install_root%properties%profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `dmgr.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。
- `dmgr.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のデプロイメント・マネージャー・プロファイル用です。

3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. `-responseFile` パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- `PC_Std_DMGr_DB2.response`
- `PC_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PC_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PC_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PC_Std_Managed_DB2.response`
- `PC_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Managed_Oracle.response`
- `PC_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2.response`
- `PC_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PC_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PC_Std_Standalone_SQLServer.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2.response`
- `PS_Std_DMGr_DB2zOS.response`
- `PS_Std_DMGr_Oracle.response`
- `PS_Std_DMGr_SQLServer.response`
- `PS_Std_Managed_DB2.response`
- `PS_Std_Managed_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Managed_Oracle.response`
- `PS_Std_Managed_SQLServer.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2.response`
- `PS_Std_Standalone_DB2zOS.response`
- `PS_Std_Standalone_Oracle.response`
- `PS_Std_Standalone_SQLServer.response`

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/dmgr.procctr
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

- デプロイメント・マネージャーで管理するカスタム (管理対象ノード) プロファイルを追加したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・プロファイルの作成または拡張:

Network Deployment 構成の一環として、少なくとも 1 つのカスタム・プロファイルを作成または拡張する必要があります。カスタム・プロファイルには、稼働状態にするにはデプロイメント・マネージャー・セルにフェデレートする必要がある空のノードがあります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、カスタム・プロファイルを作成および統合できます。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar
```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar
```

### 制約事項:

Vista

Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、**pmt.bat** ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、**install\_root%bin%ProfileManagement** ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。



- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat` コマンドを実行します。
  3. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  4. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

5. 「環境の選択」ページで、IBM Business Process Manager Standard 構成を探し、そのセクションを展開します。作成するプロファイルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
7. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
  - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリーは、`install_root\profiles\profile_name` です。
  - c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つ

しか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「**サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)**」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
  - e. 「**次へ**」をクリックします。「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
8. 拡張: 「**ノード名、ホスト名、セル名**」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「**ノード名**」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「**サーバー名**」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**ホスト名**」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「**セル名**」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「**次へ**」をクリックします。
9. 「**フェデレーション**」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

#### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「**後でこのノードを統合する**」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアルライズする必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「**システム管理**」 > 「**デプロイメント・マネージャー**」 > 「**管理サービス**」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。

- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

10. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)」および「ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)」および「既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「鍵ストア・タイプ (Keystore type)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「鍵ストア別名 (Keystore alias)」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

11. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- root-key.p12: ルート署名証明書が入っています。
- default-signers.p12: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- deleted.p12: 必要に応じて復旧できるように、deleteKeyStore タスクで削除された証明書を保持します。

- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの **Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)** 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

12. 拡張: 「ポート値の割り当て」 ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の **WebSphere** 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する **WebSphere** アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」 ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」 ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」 ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」 ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root\properties\portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、**WebSphere Application Server** インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

13. 「プロファイル・サマリー」 ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。
14. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### **manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールを使用する代わりに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを使用して、カスタム・プロファイルを作成します。

同じプロファイルで `manageprofiles` コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root*¥bin ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、プロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root*¥profileTemplates¥BPM ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- managed.procctr: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - managed.procsrvr: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
2. プロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルにどのパラメーターが必要であるかを判断します。『**manageprofiles**』パラメーターのトピックでデフォルト値を確認することにより、プロファイルに対して指定する値を決定します。
  3. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは *install\_root*¥BPM¥samples¥manageprofiles ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できます。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2.response
- PC\_Std\_Standalone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Standalone\_Oracle.response
- PC\_Std\_Standalone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response

- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2z0S.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

4. このファイルをコマンド行から実行します。以下に例を示します。

**注:** 以下は単なる例であり、オプション・パラメーターと必須パラメーターを示しています。変更可能なパラメーターの詳細なセットについては、カスタム・プロファイルの作成用の応答ファイルを参照してください。

```
manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr
-adminUserName bpmadmin -adminPassword bpmsecret -dbUserId dbuser -dbPassword dbsecret
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、**-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### カスタム・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルと **manageprofiles** コマンドを使用して、カスタム・プロファイルを作成することができます。

#### Standard Process Center カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
```

```

# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On

```

```

# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name

#####

```



```

# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or

```

```

# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword

```

```

#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
#####

```

```

# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
# Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
# profileTemplates/managed.esbserver or the
# profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
# or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
# -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
# parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
# WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
# true.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# true
#
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
# Identifies the workstation where the deployment manager is running.
# Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
# profile as it is created or augmented. This parameter is available with
# the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
# host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
# deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
# the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
# node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
# This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
# stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
# deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
# is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
# profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
# profile repository (the profile's installation root directory) before
# creating another custom profile with the same profile name. If you have
# changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
# manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
# the node is created instead. The default value for this parameter is
# localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
# name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
# the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
# deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
# parameter. Required if you are creating a managed profile with the
# -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
# on the local machine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dmgrPort
#
# Description:
# Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
# and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
# or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
# you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
# the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
# after the node is created instead. The default value for this parameter is
# 8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
# connection to the deployment manager must be available in conjunction with
# the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
# the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
# manager was configured with a port that was not a default port.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
#isDeveloperServer=false

```

## Standard Process Server カスタム・プロファイルのサンプル応答ファイル:

**manageprofiles** コマンドを使用してカスタム・プロファイルを作成するには、この応答ファイルを変更して使用します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Managed PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Managed_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/managed.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=Custom01

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.

```

```

# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: keyStorePassword
#

```



```

# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```
#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true
```

```
#####
# Parameter: federateLaterBPM
#
# Description:
#   Indicates if the managed profile is to be federated later using either the
#   profileTemplates/managed.esbserver or the
#   profileTemplates/BPM/managed.templateName template. Valid values are true
#   or false. If the -dmgrHost, -dmgrPort, -dmgrAdminUserName and
#   -dmgrAdminPassword parameters are not set, the default value for this
#   parameter is true. If you use -federateLaterBPM, you must either omit the
#   WebSphere Application Server-based parameter -federateLater or set it to
#   true.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
```

```
# Parameter: dmgrHost
#
# Description:
#   Identifies the workstation where the deployment manager is running.
#   Specify this parameter and the dmgrPort parameter to federate a custom
#   profile as it is created or augmented. This parameter is available with
#   the managed.templateName and managed.esbserver profile templates. The
#   host name can be the long or short DNS name or the IP address of the
#   deployment manager workstation. Specifying this optional parameter directs
#   the manageprofiles command-line utility to attempt to federate the custom
#   node into the deployment manager cell as it creates the custom profile.
#   This parameter is ignored when creating a deployment manager profile or
#   stand-alone server profile. If you federate a custom node when the
#   deployment manager is not running, the installation indicator in the logs
#   is INSTCONFFAILED to indicate a complete failure. The resulting custom
#   profile is unusable. You must move the custom profile directory out of the
#   profile repository (the profile's installation root directory) before
#   creating another custom profile with the same profile name. If you have
#   changed the default JMX connector type, you cannot federate with the
#   manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later after
#   the node is created instead. The default value for this parameter is
#   localhost. The value for this parameter must be a properly formed host
#   name and must not contain spaces or characters that are not valid such as
#   the following: *, ?, ", <, >, , , /, \, and |. A connection to the
#   deployment manager must also be available in conjunction with the dmgrPort
#   parameter. Required if you are creating a managed profile with the
#   -federateLaterBPM parameter set to false and the deployment manager is not
#   on the local machine.
#
# Valid Values:
```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dmgrPort
#
# Description:
#   Identifies the SOAP port of the deployment manager. Specify this parameter
#   and the dmgrHost parameter to federate a custom profile as it is created
#   or augmented. The deployment manager must be running and accessible. If
#   you have changed the default JMX connector type, you cannot federate with
#   the manageprofiles command-line utility. Use the addNode command later
#   after the node is created instead. The default value for this parameter is
#   8879. The port that you indicate must be a positive integer and a
#   connection to the deployment manager must be available in conjunction with
#   the dmgrHost parameter. Required if you are creating a managed profile,
#   the -federateLaterBPM parameter is set to false, and the deployment
#   manager was configured with a port that was not a default port.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
federateLaterBPM=true
#dmgrHost=dmgr_host_name
#dmgrPort=dmgr_port_number
#dmgrAdminUserName=dmgr_admin_user_name
#dmgrAdminPassword=dmgr_admin_password
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a

```

```

# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

```

### プロファイル管理ツールを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

既存の WebSphere Application Server V8.0 カスタム・プロファイルがある場合には、プロファイル管理ツールを使用して既存のプロファイルを拡張し、IBM Business Process Manager のサポートを追加できます。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、**java user.language** 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java
-Duser.language=locale install_root
%bin%ProfileManagement%startup.jar

```

例えば、ドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```

install_root%java%bin%java -Duser.language=de
install_root%
bin%ProfileManagement%startup.jar

```

### 制約事項: Vista Windows 7

- プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、pmt.bat ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、`install_root%bin%ProfileManagement` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得る必要があります。

プロファイル管理ツールを開始した後で、「標準」または「拡張」のどちらのプロファイル作成を選択するかを決める必要があります。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
  1. カスタム・プロファイルの作成時にカスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーに統合したい場合は、デプロイメント・マネージャーを開始してください。
  2. 以下のいずれかの方法で、プロファイル管理ツールを開始します。
    - ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。
    - `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。
  3. 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
  4. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」をクリックするか、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。
  5. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを選択し、「拡張」をクリックします。 WebSphere Application Server プロファイルを拡張する場合、そのプロファイルは、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンのものでなければなりません。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「拡張」ボタンは選択できません。「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。
  6. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「次へ」をクリックします。
  7. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「標準的」または「拡張」プロファイル拡張を実行するように選択し、「次へ」をクリックします。

「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合プロファイルは拡張できません。「戻る」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「戻る」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
8. 「標準」プロファイル作成を選択した場合は、フェデレーション・ステップにスキップしてください。
  9. 拡張: 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
    - a. 「プロファイル名」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。
    - b. 「プロファイル・ディレクトリー」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。指定したディレクトリー

には、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトのディレクトリは、`install_root%profiles%profile_name` です。

- c. オプション: 作成中のプロファイルがデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトに設定する」を選択します。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

プロファイルがデフォルト・プロファイルの場合は、コマンドが自動的にこのプロファイル进行处理するようになります。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリから発行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。このパラメーターは WebSphere Application Server パラメーターです。
- e. 「次へ」をクリックします。「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。
10. 拡張: 「ノード名、ホスト名、セル名」ページで、作成中のプロファイルに対して以下のアクションを実行します。
- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。
  - 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
  - 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックします。

11. 「フェデレーション」ページで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成とは別に後で実行するかを選択します。プロファイル作成の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャーでの認証で使用する場合) を指定します。

### 重要:

以下の状況のいずれかに該当する場合は、「後でこのノードを統合する」を選択します。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている (ノードの統合はシリアル化する必要があります)。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でない、またはそれが確実に実行中であるかどうか不明である。
- デプロイメント・マネージャーで SOAP コネクタが使用不可である。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。

- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして、デフォルトでないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を使用するように再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」 > 「デプロイメント・マネージャー」 > 「管理サービス」を選択します。)

#### カスタム・プロファイル作成の一部としてのノード統合に関連する処理

- プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在していて通信可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーで有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティーで保護されている場合) が検査されます。
- デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できないときに、カスタム・ノードを統合しようとする、警告ボックスが表示されて、続行できなくなります。この警告ボックスが表示されたら、「OK」をクリックして、「フェデレーション」ページで別の選択を行ってください。

「次へ」をクリックします。「標準」プロファイル作成を選択した場合は、プロファイルの要約のステップにスキップしてください。

12. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

- デフォルト個人証明書およびルート署名証明書を新規作成するには、「**デフォルト個人証明書の新規作成 (Create a new default personal certificate)**」および「**ルート署名証明書の新規作成 (Create a new root signing certificate)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポート (Import an existing default personal certificate)**」および「**既存のルート署名個人証明書をインポート (Import an existing root signing personal certificate)**」を選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

13. 拡張: 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するかまたは変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。



いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの `Lightweight Third-Party Authentication (LTPA)` 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。インポートした証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

14. 拡張:「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

```
profile_root¥properties¥portdef.prop
```

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

15. 「プロファイル・サマリー」ページで、情報を確認します。「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

16. 「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページで、情報を確認します。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」が選択されていることを確認して「終了」をクリックします。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

#### 関連情報:

 既存プロファイル内のポートの更新 (WebSphere Application Server)

#### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したカスタム・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用する代わりに **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、既存の WebSphere Application Server V8.0 プロファイルを拡張します。

拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーを必ずシャットダウンしてください。

同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを確認してください。コマンドを実行してエラー・メッセージが表示された場合は、進行中のプロファイル作成または拡張アクションが他にないかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。

**制約事項:** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 で実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、`install_root%bin` ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles.bat -response myResponseFile"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

1. 拡張したい既存のプロファイルを作成する際に使用されたテンプレートを特定します。 カスタム・プロファイルを拡張する必要があります。 テンプレートは、`install_root%properties%profileRegistry.xml` ファイルのプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張に使用する適切なテンプレートを見つけます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root%profileTemplates%BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。 カスタム・プロファイルでは、以下のテンプレートを使用できます。

- `managed.procctr`: IBM BPM Standard の Process Center のカスタム・プロファイル用です。
  - `managed.procsvr`: IBM BPM Standard の Process Server のカスタム・プロファイル用です。
3. 拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。 `augment` パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。 **-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

4. **-responseFile** パラメーターを使用するには、提供されているサンプル応答ファイルを参考にして、ご使用の環境に固有の応答ファイルを作成します。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

サンプルは `install_root\BPM\samples\manageprofiles` ディレクトリーにあります。データベースおよびプロファイルのタイプ (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に基づいて、適切な応答ファイルを選択してください。以下のサンプル・ファイルを使用できません。

- PC\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PC\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PC\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2.response
- PC\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PC\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PC\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PC\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PC\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2.response
- PS\_Std\_DMGr\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_DMGr\_Oracle.response
- PS\_Std\_DMGr\_SQLServer.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2.response
- PS\_Std\_Managed\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_Managed\_Oracle.response
- PS\_Std\_Managed\_SQLServer.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2.response
- PS\_Std\_StandAlone\_DB2zOS.response
- PS\_Std\_StandAlone\_Oracle.response
- PS\_Std\_StandAlone\_SQLServer.response

サンプル応答ファイルのいずれかを作業ディレクトリーにコピーします。ご使用の構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを編集し、編集された応答ファイルを保存します。**templatePath** プロパティのパスが特定のインストール・ディレクトリーと一致していることを確認してください。

5. このファイルをコマンド行から実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

```
manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root/profileTemplates/BPM/managed.procctr  
-profileName MyProfileName
```

応答ファイルを作成した場合は、他のパラメーターを一切指定せずに、 **-response** パラメーターを指定します。例:

```
manageprofiles.sh -response myResponseFile
```

コマンドの実行が完了すると、コンソール・ウィンドウに状況が書き込まれます。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

カスタム・プロファイルの追加が完了したら、デプロイメント環境を構成します。

### カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合:

カスタム・ノードを作成した後、**addNode** コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合することができます。デプロイメント・マネージャーからすべての統合ノードを管理できます。

この手順を実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- IBM Business Process Manager をインストール済みであり、デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルを作成済みであること。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが実行されている。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile\_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
profile_root¥bin¥startManager.bat
```

- デプロイメント・マネージャーは作成済みであるか、IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーに拡張済みである。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

1. 統合するカスタム・プロファイルの *bin* ディレクトリーに移動します。コマンド・ウィンドウを開き、(コマンド行から) 以下のディレクトリーに移動します (ここで *profile\_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。

```
profile_root¥bin
```

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティが有効になっていない場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port
```

セキュリティが有効になっている場合は、コマンド行から以下のコマンドを実行します。

```
addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port-  
usernameuserID_for_authentication-passwordpassword_for_authentication
```

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルは正常に統合されています。

ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して空のノードをカスタマイズするか、新規のサーバーを作成します。

#### 関連情報:



管理対象ノード設定の追加 (WebSphere Application Server)

#### Network Deployment 環境におけるデータベースへのシステム情報のロード:

Network Deployment 環境を作成する場合、Process Server または Process Center の始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**重要:** bootstrap コマンドを実行する前に、必須の暫定修正 JR44669 を適用済みであることを確認してください。詳しくは、「Required interim fix for APAR JR44669」を参照してください。この修正をダウンロードする場合は、「Required interim fixes for IBM Business Process Manager」を参照します。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データが Process Server データベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターの場合は、クラスター名を指定する必要があります。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。
- 1 つの WebSphere セルに複数のアプリケーション・ターゲット・クラスターが含まれている場合は、各クラスターでこのコマンドを実行する必要があります。

コマンド行からブートストラップ・ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリーにあります。以下に例を示します。

```
Linux      UNIX      install_root/profiles/Dmgr01/bin
```

```
Windows   install_root¥profiles¥Dmgr01¥bin
```

以下のいずれかのコマンドを使用してブートストラップ・ユーティリティを実行します。

- **bootstrapProcessServerData.sh -clusterName cluster\_name**
- **bootstrapProcessServerData.sh -nodeName node\_name -serverName server\_name**

ここで、

- **-clusterName** はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ブートストラップ・データをクラスター上で実行する場合は、このパラメーターを指定する必要があります。
- **-nodeName** はノードの名前です。ネットワーク・デプロイメント環境に含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-serverName** パラメーターを指定する必要があります。
- **-serverName** はサーバーの名前です。ネットワーク・デプロイメントに含まれ、クラスターには含まれないサーバー上でブートストラップ・データを実行する場合は、このパラメーターと **-nodeName** パラメーターの両方を指定する必要があります。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

**重要: SQL Server の場合のみ:** Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache'
defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is
org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class
[com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception;
nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback;
bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

IBM Business Process Manager サーバーを正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。ブートストラップ操作のログ情報は、**USER\_INSTALL\_ROOT/logs/** ディレクトリーの **bootstrapProcessServerData.clusterName.timestamp.log** または **bootstrapProcessServerData.nodeName.serverName.timestamp.log** というファイル内 (指定したターゲットによって異なる) に保存されます。コンソールには、ログに記録された情報の一部が表示されます。

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

Process Server または Process Center をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

#### 既存のインストール済み環境の変更:

IBM Business Process Manager でシステム上にランタイム環境をインストールして構成した後、構成のカスタマイズが必要になる場合があります。例えば、設定のカスタマイズ、追加のセキュリティ・プロバイダーのセットアップ、ユーザー・アカウントのセットアップ、パスワードの変更と暗号化などが必要になる場合があります。

